

佐 堂

(その2) — I

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

佐 堂

(その2) — I

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

堂

式

I - (505)

日本書紀卷之六十四 天孫降臨
天孫降臨 天孫降臨 天孫降臨

大日本書紀卷之六十四 天孫降臨

序 文

佐堂遺跡は、河内平野の低湿地帯に広がる瓜生堂遺跡、山賀遺跡、亀井遺跡等の中央部に位置し、昭和49年に実施した範囲確認調査によって、現地表下3.5 m 附近まで遺構・遺物包含層が存在することが確認された遺跡である。また今回の調査では、この遺跡は旧大和川水系（長瀬川）の岸近くであったために護岸のための杭列、堤等が検出され、流路の安定に多大な労力使用等が費された状況を明らかにすることができた。その他弥生時代から歴史時代にかけての資料を得ることが出来た。

この佐堂遺跡の発掘調査は、日本道路公団が計画された近畿自動車道天理～吹田線にかかる埋蔵文化財の調査として昭和56年6月から昭和58年1月にかけて実施したものである。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに一般多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和59年2月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 藪内盛雄

序 文

古大和川は、古代より、その沿岸に生活する人々たちに、川魚・貝などの川の幸、肥沃な土壌や河内平野の舟による交通など多くの恩恵を与えてきました。一方、常に古大和川は沿岸に生活する人々のうえに、猛威を振り、自然の偉大さを誇示してきました。河内平野に生活を営む人々の歴史は、この大自然を慰撫し、また、それに立ち向かい克服していった歴史ともいえます。

当大阪文化財センターでは、昭和51年より、日本道路公団が建設する近畿自動車道天理～吹田線にかかる河内平野の13遺跡の発掘調査を大阪府教育委員会とともに継続的に実施しております。現在、13遺跡の発掘調査に着手し、既に、長原遺跡・瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・新家遺跡・西岩田遺跡・山賀遺跡・若江北遺跡・友井東遺跡の大部分の発掘調査は終了しております。

本書は、昭和58年3月にトレンチ部の発掘調査を終了いたしました東大阪市金岡町から八尾市佐堂町にかけて所在する佐堂遺跡（その2）の発掘調査の概要を収録したもので、今回の発掘調査によって、古代から中世にかけての古大和川における水の制御方法が明らかになり、古代の技術史のうえに新たな資料を提供し、本書が、河内平野の歴史解明により一層貢献できるものと確信いたしております。

これらは偏に、大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所を始めとして調査関係者各位並びに多数の方々の御尽力の賜物と深く感謝いたしております。今後とも、温かい御支援を賜わるよう切望してやみません。

昭和58年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

9. 本書の遺構実測図の方位はすべて国土座標軸の北を示す。
10. 遺構実測図の縮尺は $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{30}$ 、 $\frac{1}{50}$ 、 $\frac{1}{100}$ を基本とした。
11. 遺物実測図の縮尺は、土器… $\frac{1}{3}$ 、石製品・土製品・墨書土器… $\frac{2}{3}$ である。
12. 生駒西麓産の土器についてのみ断面図で表示した。

また、高杯脚台部内面にみられる布目瓦痕についても表示した。

13. 本調査及び本書作成にあたっては以下の諸氏の御指導、御協力をうけた。

宇野隆夫（京都大学文学部助手）、大野 薫（大阪府教育委員会）、大山喬平（京都大学文学部助教授）、岡内三眞（京都大学文学部助手）、神吉和夫（神戸大学工学部助手）、鬼頭清明（奈良国立文化財研究所）、日下雅義（立命館大学教授）、佐藤 信（奈良国立文化財研究所）、下村晴文（東大阪市教育委員会）、西山良平（京都大学文学部助手）、林野全孝（京都府立大学教授）、久野修義（京都大学文学部助手）、室田 明（大阪大学工学部教授）、山本昭（八尾市教育委員会）、米田敏幸（八尾市教育委員会）大嶋廣喜（築留土地改良区）

記して厚く感謝の意を表したい。（敬称略）

14. B地区堤防基礎杭の放射性炭素による年代測定は、京都産業大学 山田 治氏に依頼した。

花粉・珪藻微化石の分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した。

15. 調査にあたっては以下の学生諸君の協力を得た。

（近畿大学） 速水敏郎、松永典丈、横山俊之、三原浩之、荻田展一、大西克明、石山満夫、松田 隆、中島正巳、山本秀樹、島田幹士、石川勝之、来馬直子、大政 直、山本良一、高山一敏、光田邦夫、井上佳子 （大阪樟蔭女子大学） 天野景子、明田千晶、奥田裕美子、植田富美、荻美絵子 （大阪工業大学） 藤林正則、三宅康弘、松下清之 （関西大学） 川辺 薫、萬谷幸美 （関西学院大学） 浅田善久、植松久明 （大阪商業大学） 須山 充 （甲南女子大学） 藤木裕美 （京都外国語大学） 村田哲次（金蘭女子短期大学） 後藤悦子 （武庫川女子短期大学） 柳生治佐子 （四天王寺国際仏教大学） 奥野広子 （大谷女子大学） 神沢一美 （同志社女子大学） 吉川由希子 （京都女子大学） 松井秀子 （大阪府立大学） 西畑徳二 （立命館大学） 池上ちか子 （関西外国語短期大学） 村元利恵 （京都芸術大学） 矢追紀子（大阪電気通信大学） 山下秀夫 （神戸大学） 恒田和徳 （大阪府立女子大学） 中野有美子 （奈良大学） 太田正康

16. 本調査にあたっては、写真、カラースライド、実測図などの記録を作成した。本書記載以外の資料については、財団法人大阪文化財センターが保管している。広く利用されることを希望したい。

佐 堂

(その2) — I

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

序文	
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経過	中井貞夫 1
第Ⅱ章 調査の目的及び調査方法	阪田育功 2
第Ⅲ章 地理的・歴史的環境	阪田育功 8
第Ⅳ章 基本層序	阪田育功 11
第Ⅴ章 調査成果	井藤暁子・阪田育功・森屋直樹 19
第1節 縄文時代晩期～弥生時代前期	19
第2節 弥生時代中期	19
第3節 古墳時代前期	——集落の時代—— 27
第4節 古代	——水田の時代—— 95
第5節 中世	——長瀬川の時代—— 102
第6節 近世・大和川付替以後	——新田と集落の時代—— 118
第Ⅵ章 遺構・遺物の検討	阪田育功 122
第1節 河内における布留式土器の様相	122
第2節 河内平野における古墳時代前期集落の成立と変遷	133
第3節 河内平野の形成と河川の変遷	——長瀬川流域を中心に—— 146
第4節 中世長瀬川の築堤工事	158
第Ⅶ章 自然科学的方法による分析	
第1節 古墳時代土坑出土の多孔質黒色物質の化学的調査	山口誠治 168
第2節 花粉・珪藻分析	(株)パリノ・サーヴェイ、阪田育功 171
第3節 ¹⁴ C年代測定結果	山田 治 189
第Ⅷ章 課題と展望	阪田育功・森屋直樹 190

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡分布高度写真	3
第 2 図	トレンチ配置図	5
第 3 図	国土座標位置図	6
第 4 図	B～Fトレンチ土層断面図	9・10
第 5 図	遺構変遷図	15・16
第 6 図	B～Fトレンチ土層断面模式図	17・18
第 7 図	S D8004・8005・8006・8007・S K8004土層断面図	21
第 8 図	方形周溝墓状遺構 (S X8001) 遺構平面図・土層断面図	23
第 9 図	S X8001出土土器	24
第 10 図	S X8002遺構平面図・土層断面図	24
第 11 図	Eトレンチ黒色粘土層出土石器	24
第 12 図	C'トレンチ土層断面図	25
第 13 図	弥生時代中期第 2 面出土土器	25
第 14 図	S B6002出土土器	32
第 15 図	S B6002遺構平面図・断面図	33
第 16 図	S B6003遺構平面図・断面図	34
第 17 図	S B6004遺構平面図・断面図	34
第 18 図	S B6005遺構平面図・断面図	35
第 19 図	S D6002出土土器	36
第 20 図	S D6003遺構平面図・土層断面図 (1)	37・38
第 21 図	S D6003遺構平面図・土層断面図 (2)	39・40
第 22 図	S D6003遺構平面図・土層断面図 (3)	41・42
第 23 図	S D6003遺構平面図・土層断面図 (4)	43・44
第 24 図	S D6003上層・中層出土土器 (1)	45・46
第 25 図	S D6003中層出土土器 (2)	48
第 26 図	S D6003中層出土土器 (3)	49
第 27 図	S D6003下層出土土器 (1)	49
第 28 図	S D6003下層出土土器 (2)	50
第 29 図	S D6003下層出土土器 (3)	51
第 30 図	S D6003下層出土土器 (4)	52
第 31 図	S D6009出土土器	54
第 32 図	C'トレンチ古墳時代前期遺構面	55
第 33 図	S D6013出土土器	56
第 34 図	S D6014出土土器	57
第 35 図	S D6015出土土器	57
第 36 図	S D6019出土土器	58
第 37 図	S E6001遺構平面図・土層断面図	59
第 38 図	S E6001出土土器	60

第 39 回	S E 6003出土土器	60
第 40 回	S E 6002遺構平面図・土層断面図	60
第 41 回	S E 6003遺構平面図・土層断面図	60
第 42 回	S K 6002遺構平面図・土層断面図	61
第 43 回	S K 6002出土土器	62
第 44 回	S K 6003出土土器	62
第 45 回	S K 6007出土土器	63
第 46 回	S K 6006遺構平面図・土層断面図	63
第 47 回	S K 6007遺構平面図・土層断面図	63
第 48 回	S K 6008出土土製品	65
第 49 回	S K 6009出土土器	65
第 50 回	S K 6008出土土器	65
第 51 回	S K 6008遺構平面図・土層断面図	65
第 52 回	S K 6009遺構平面図・土層断面図	65
第 53 回	S K 6010出土土器 (1)	66
第 54 回	S K 6010遺物出土状況・土層断面図	67・68
第 55 回	S K 6010出土土器 (2)	69
第 56 回	S K 6010出土土器 (3)	70
第 57 回	S K 6013出土土器	71
第 58 回	S K 6011出土土器	71
第 59 回	S K 6012出土土器	71
第 60 回	S K 6014出土土器	72
第 61 回	S K 6011・6012・6013・6014遺構平面図・土層断面図	73
第 62 回	S K 6017・P. 6106遺構平面図・土層断面図	74
第 63 回	S K 6015出土土器	74
第 64 回	S K 6020遺物出土状況・断面図	75
第 65 回	S K 6022遺構平面図・断面図	75
第 66 回	S K 6020出土土器	75
第 67 回	S K 6024遺構平面図・土層断面図	76
第 68 回	S K 6026出土土器	76
第 69 回	S K 6028出土土器	76
第 70 回	S A 6001・6002遺構平面図・断面図	77
第 71 回	P. 6003遺構平面図・断面図	78
第 72 回	P. 6015遺構平面図・断面図	78
第 73 回	P. 6003出土土器	78
第 74 回	P. 6105出土土器	78
第 75 回	S K 6017・P. 6106出土土器	79
第 76 回	S D 6018・S X 6004・6005遺構平面図・土層断面図	80
第 77 回	S X 6005出土土器	81
第 78 回	S X 6001出土異形土製品	81
第 79 回	S X 6001出土土器	82
第 80 回	S X 6003出土土器	83

第 81 図	Cトレンチ包含層中土器溜遺物出土状況・土層断面図	84
第 82 図	Cトレンチ包含層中土器溜出土土器 (1)	85
第 83 図	Cトレンチ包含層中土器溜出土土器 (2)	86
第 84 図	C'トレンチ包含層中土器溜出土土器 (1)	87
第 85 図	C'トレンチ包含層中土器溜出土土器 (2)	88
第 86 図	包含層出土土器 (1)	89
第 87 図	包含層出土土器 (2)	90
第 88 図	包含層出土土器 (3)	91
第 89 図	包含層出土土器 (4)	92
第 90 図	包含層出土土器 (5)	93・94
第 91 図	水田面 1 小径状遺構出土土器	95
第 92 図	Cトレンチ水田面 1 大畦畔・鋤跡	96
第 93 図	C'トレンチ中世長瀬川河床面足跡	97
第 94 図	水田面 2 相当面出土土器	97
第 95 図	水田面 2 出土土器	97
第 96 図	Dトレンチ水田面 2 相当面	98
第 97 図	水田面 4 畦畔	99
第 98 図	水田面 4 上面出土銅銭	100
第 99 図	S D 3001 出土土器	100
第 100 図	Fトレンチ南壁土層断面	100
第 101 図	Bトレンチ長瀬川右岸堤防横断土層断面図	104
第 102 図	Bトレンチ長瀬川右岸堤防縦断土層断面図 (部分)	105
第 103 図	Bトレンチ長瀬川右岸堤防基礎杭列立面図・堤盛土縦断面図	106
第 104 図	長瀬川右岸堤防盛土内出土土器	107
第 105 図	護岸杭列平面図・立面図	109・110
第 106 図	護岸杭列横断面図	111
第 107 図	長瀬川左岸護岸杭列内出土墨書土器 (1)	113
第 108 図	長瀬川左岸護岸杭列内出土墨書土器 (2)	114
第 109 図	長瀬川左岸護岸杭列内出土墨書土器 (3)	115
第 110 図	長瀬川堆積粗砂出土土器 (1)	116
第 111 図	長瀬川堆積粗砂出土土器 (2)	117
第 112 図	S E 1002 側面図	118
第 113 図	S E 1003 断面図	119
第 114 図	S E 1005・1006 平面図・側面図	119
第 115 図	S E 1006 出土染付茶椀	120
第 116 図	Dトレンチ出土井戸椀瓦拓影	120
第 117 図	萱振遺跡出土土器	124
第 118 図	古墳時代前期遺跡分布図	137
第 119 図	調査区周辺における旧流路及び自然堤防	147
第 120 図	地割からみた旧長瀬川流路	148
第 121 図	河内平野における粗砂堆積の広がり	151
第 122 図	河州図	154

第 123 図	河内国絵図（部分）寛文12年（1672年）卯月……………	155
第 124 図	元禄16年大和川河内国志紀郡字築留ヨリ末流泉川堺浦江川遶図（1703）……………	155
第 125 図	杭柵……………	159
第 126 図	長瀬川右岸堤防横断面推定模式図……………	160
第 127 図	長瀬川中世堤防（左）、新大和川堤防（右）規模比較図……………	160
第 128 図	花粉・珪藻分析試料採取層位・分析結果による分帯と各帯の特徴……………	186

表 目 次

第 1 表	佐堂遺跡出土布留式土器分類表（1）……………	29
第 2 表	佐堂遺跡出土布留式土器分類表（2）……………	31
第 3 表	布留式土器の器種の消長……………	131
第 4 表	古墳時代遺構方位表……………	135
第 5 表	古墳時代前期遺跡の消長……………	142
第 6 表	試料表……………	172
第 7 表	花粉帯及び古環境……………	175
第 8 表	珪藻群集帯と堆積環境……………	179
第 9 表	佐堂遺跡花粉分析結果(1)……………	181
第 10 表	佐堂遺跡花粉分析結果(2)……………	182
第 11 表	佐堂遺跡花粉分析結果（樹木）(3)……………	183
第 12 表	佐堂遺跡珪藻分析結果(1)……………	184
第 13 表	佐堂遺跡珪藻分析結果(2)……………	185
第 14 表	佐堂遺跡主要花粉・珪藻ダイアグラム……………	187・188

図版目次

- 図版 1 現代長瀬川風景
- 図版 2 弥生時代中期遺構面 Eトレンチ S D8001・S D8002
- 図版 3 弥生時代中期遺構面 Fトレンチ北 Fトレンチ南
- 図版 4 弥生時代中期遺構面 Fトレンチ S D8004・S D8006・S X8001・S X8002(南から)
S D8004 (北から)
- 図版 5 弥生時代中期遺構面 Fトレンチ S D8004・S X8001 S X8002
- 図版 6 弥生時代中期遺構面 Fトレンチ S D8004・S D8006・S D8007土層断面
- 図版 7 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ北 Cトレンチ中央
- 図版 8 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ南 C'トレンチ
- 図版 9 古墳時代前期遺構面 Dトレンチ S D6015・S E6022
- 図版 10 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ中央(南から) 同(北から)
- 図版 11 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S B6002(南から) Cトレンチ S K6007・S K6008・S K6009・S E6001
- 図版 12 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S B6004(南から) Eトレンチ S B6005(東から)
- 図版 13 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S B6001・S D6001・S D6002(北から) Cトレンチ S B6002遺物出土状況
- 図版 14 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S D6003遺物出土状況(南から) S D6003全景(北から)
- 図版 15 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S D6003遺物出土状況 同(部分)
- 図版 16 古墳時代前期遺構面 Dトレンチ S D6015土層断面 S D6016土層断面
- 図版 17 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S E6001 S E6001遺物出土状況 Dトレンチ S E6002 Eトレンチ S E6003
- 図版 18 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S K6010遺物出土状況 同(部分)
- 図版 19 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S K6011・S K6012・S K6013 S K6013遺物出土状況 S K6014遺物出土状況
- 図版 20 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ S K6006 S K6007 S K6008 S K6009遺物出土状況 S K6009 S K6014
- 図版 21 古墳時代前期遺構面 Dトレンチ S K6020遺物出土状況 S K6022滑石出土状況
- 図版 22 古墳時代前期遺構面 Cトレンチ P. 6003遺物出土状況 P. 6092遺物出土状況 P. 6105遺物出土状況 P. 6106遺物出土状況(上層)同(下層) S K6017
- 図版 23 古墳時代前期遺構面 Dトレンチ S X6004・S X6005 Cトレンチ包含層中土器溜
- 図版 24 水田面 1 Cトレンチ足跡・鋤跡
- 図版 25 水田面 2 C'トレンチ足跡 Dトレンチ
- 図版 26 水田面 4 Eトレンチ畦畔 Fトレンチ畦畔
- 図版 27 水田面 4 Eトレンチ足跡 S D3001 足跡
- 図版 28 水田面 4 Fトレンチ足跡 護岸杭列
- 図版 29 中世長瀬川堤防 Bトレンチ右岸堤防土層断面
- 図版 30 中世長瀬川堤防 Bトレンチ右岸堤防土層断面
- 図版 31 中世長瀬川堤防 Bトレンチ右岸堤防基礎杭列 同(部分)

- 図版 32 中世長瀬川及び河床面 Bトレンチ右岸堤防盛土内瓦器椀出土状況 盛土内植物遺体検出状況 基礎杭列及び古墳時代遺物包含層検出状況 Cトレンチ河床面 S D2001・S D2002
 図版 33 中世長瀬川河床面 Cトレンチ河床下畝状遺構 足跡
 図版 34 中世長瀬川河床面 Cトレンチ Dトレンチ
 図版 35 中世長瀬川河床面 Dトレンチ Eトレンチ河床面上微砂堆積
 図版 36 中世長瀬川河床面 Fトレンチ護岸杭列
 図版 37 中世長瀬川河床面 Fトレンチ護岸杭列(部分)
 図版 38 中世長瀬川河床面 Fトレンチ護岸杭列横断面 護岸杭列基部
 図版 39 中世長瀬川河床面 Fトレンチ護岸杭列隣群 護岸杭列竹束
 図版 40 近世～近代井戸 Fトレンチ S E1005・S E1006
 図版 41 近世～近代井戸 Fトレンチ S E1006 Dトレンチ S E1002
 図版 42 近世～近代井戸 Dトレンチ S E1002 S E1002井戸構造
 図版 43 弥生時代中期土器・石器
 図版 44 弥生時代中期土器
 図版 45 布留式土器(1)
 図版 46 布留式土器(2)
 図版 47 布留式土器(3)
 図版 48 布留式土器(4)
 図版 49 布留式土器(5)
 図版 50 布留式土器(6)
 図版 51 布留式土器(7)
 図版 52 布留式土器(8)
 図版 53 布留式土器(9)
 図版 54 布留式土器(10)
 図版 55 布留式土器(11)
 図版 56 布留式土器(12)
 図版 57 布留式土器(13)
 図版 58 布留式土器(14)
 図版 59 布留式土器(15)
 図版 60 布留式土器(16)
 図版 61 布留式土器(17)
 図版 62 布留式土器(18)
 図版 63 布留式土器(19)
 図版 64 布留式土器(20)
 図版 65 布留式土器(21)
 図版 66 布留式土器(22)
 図版 67 布留式土器(23)
 図版 68 布留式土器(24)
 図版 69 布留式土器(25)
 図版 70 古代～中世土器・金属器
 図版 71 中世土器

- 図版 72 中世土器
- 図版 73 弥生・古代・中世土器
- 図版 74 古墳時代前期土坑出土滑石 Dトレンチ SK6022
- 図版 75 多孔質黒色物質の走査電子顕微鏡写真

Explanation of Plates

- 図版 76 花粉遺体(1)
- 図版 77 花粉遺体(2)
- 図版 78 珪藻遺体(1)
- 図版 79 珪藻遺体(2)

付 図 目 次

- 付図 1 E・Fトレンチ弥生時代中期遺構平面図
- 付図 2 C・C'トレンチ古墳時代前期遺構平面図
- 付図 3 D・Eトレンチ古墳時代前期遺構平面図
- 付図 4 B・Cトレンチ中世長瀬川堤防・河床面平面図・断面図
- 付図 5 C'・D・Eトレンチ中世長瀬川河床面平面図・断面図
- 付図 6 友井東遺跡～久宝寺遺跡南北断面模式図

第 I 章 調査に至る経過

佐堂遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内東大阪～松原 13.5 Km 区間に存在する新家、西岩田、瓜生堂、巨摩廃寺、若江北、山賀、友井東、美園、佐堂、久宝寺、亀井、城山、長原の13遺跡の内の1つであり、発掘調査の便宜上、佐堂遺跡（その1）と佐堂遺跡（その2）に分割した。佐堂遺跡（その1）（その2）は、大阪府東大阪市金岡4丁目から八尾市佐堂町3丁目にかけて所在する。

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内13遺跡の取扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として地元協議を重ねてきたが、昭和48年と49年に財団法人大阪文化財センターが受託実施した試掘調査の結果に基づき、基本的には発掘調査を実施し、その結果を尊重した建築工法を検討しながら橋脚位置を決定し、高架道路の建設と調整していくということで協議が整い、昭和50年9月29日付で日本道路公団大阪建設局から文化庁へ文化財保護法に基づく協議文書が提出された。

文化庁からは、昭和50年11月13日付で事前の発掘調査の徹底と遺構保存に十分配慮すべき旨の回答があった。

大阪府教育委員会は、これを受けて財団法人大阪文化財センターに現地調査の協力を求めて、昭和51年4月、日本道路公団大阪建設局との3者で調査についての協定書を締結した。そして、現在は、上記の13遺跡すべての発掘調査に着手し、このうち新家、西岩田、瓜生堂、巨摩廃寺、若江北、山賀、友井東、長原の8遺跡の本線部分の発掘調査は終了し、残りの美園、佐堂、久宝寺、亀井、城山の5遺跡の発掘調査を実施している。

佐堂遺跡は、昭和49年に財団法人大阪文化財センターが日本道路公団大阪建設局より委託実施した試掘調査により、須恵器・土師器・瓦器・皇朝十二銭の和同開珎などを含む遺物包含層を検出・確認したことによって、古墳時代から中世に至る複合集落跡であり、その範囲は南北約300m以上であることが確認された。

佐堂遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線にかかる他の12遺跡と同様に、河内平野の地表下深く埋没していたため、今まで調査は行なわれたことがなく、今回の調査で佐堂遺跡（その1）からは「□田伍十戸奈……」と記された7世紀末～8世紀初頭の木簡が出土するなど、その調査成果に大いに期待がもたれるところである。

佐堂遺跡（その2）の調査は、昭和56年3月に調査についての3者契約を締結し、同年3月現地調査に着手し、再度にわたる契約変更を重ねながら昭和58年3月にトレンチ部の発掘調査を終了した。

第Ⅱ章 調査の目的及び調査方法

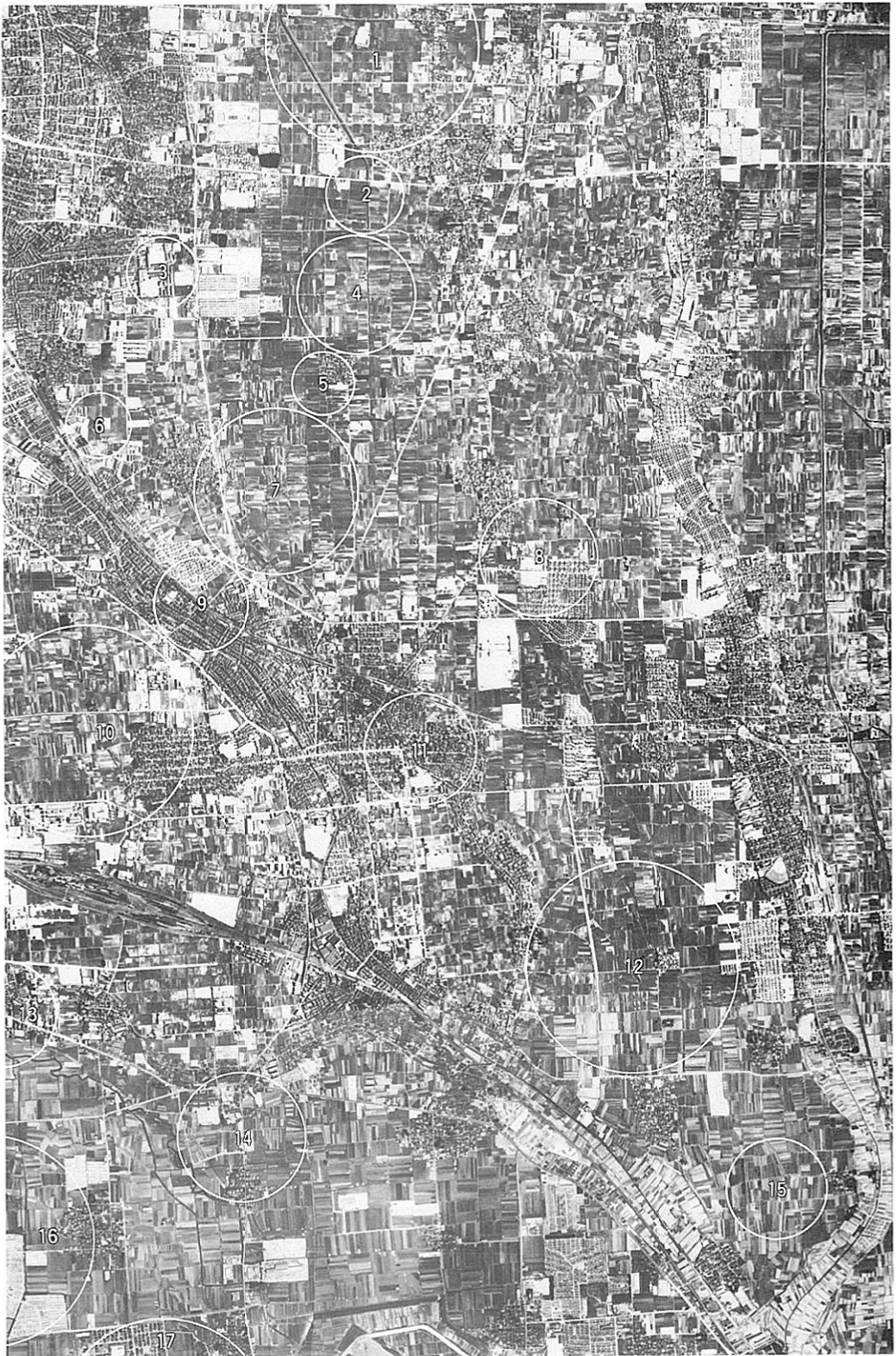
佐堂遺跡が周知の遺跡として認識されるようになったのはごく最近のことである。大阪文化財センターは、昭和48年、49年に日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線予定路線内の遺跡の試掘調査を行なった。その際に設定したNo.23トレンチ（佐堂No.1—佐堂遺跡A地区北端）、No.24トレンチ（佐堂No.2—佐堂遺跡C地区）において、古墳時代から鎌倉時代の遺物包含層の存在が確認された。そして、「地表下3.5mにも及ぶ層に和同開珎をはじめ奈良時代遺物が包含され」ることは、「北の友井東遺跡で地表下1.5mで古墳時代遺構面が、南の久宝寺遺跡で地表下2mで弥生時代遺構面が確認されていることを考えあわせて注目される」と指摘し、「旧大和川の支流長瀬川との関連が考えられる」としている⁽¹⁾。この調査の時点では佐堂遺跡は周知の遺跡としては全く認識されていなかったのであるが、その周辺についても試掘を実施し遺物包含層の存在を確認したのは現在の認識からいえば当然とはいえ、当時の試掘調査に至る経過から考えれば重要なことであったといえる。ただ、この試掘調査では調査方法上の制約から今回調査した弥生時代中期の水田面（A地区）や古墳時代前期の集落跡の存在は明らかにされなかった。そして、遺構の範囲を府道大阪中央環状線佐堂交差点以南、現長瀬川以北と推定し、今回の調査に至った。従って佐堂遺跡の時期・性格については今回報告する調査成果が最初のものといえる。

発掘調査にあたっては、以下の諸点を重視し、調査の目的とした。

1. 調査区が旧大和川である長瀬川の流路内に含まれるため、堤を検出し、川の変遷を明らかにすること。
2. 大和川付替後の新田開発の実態を明らかにすること。
3. 和同開珎の出土から予想される奈良時代の遺構面を検出すること。
4. 下層遺構の有無、その性格を明らかにすること。

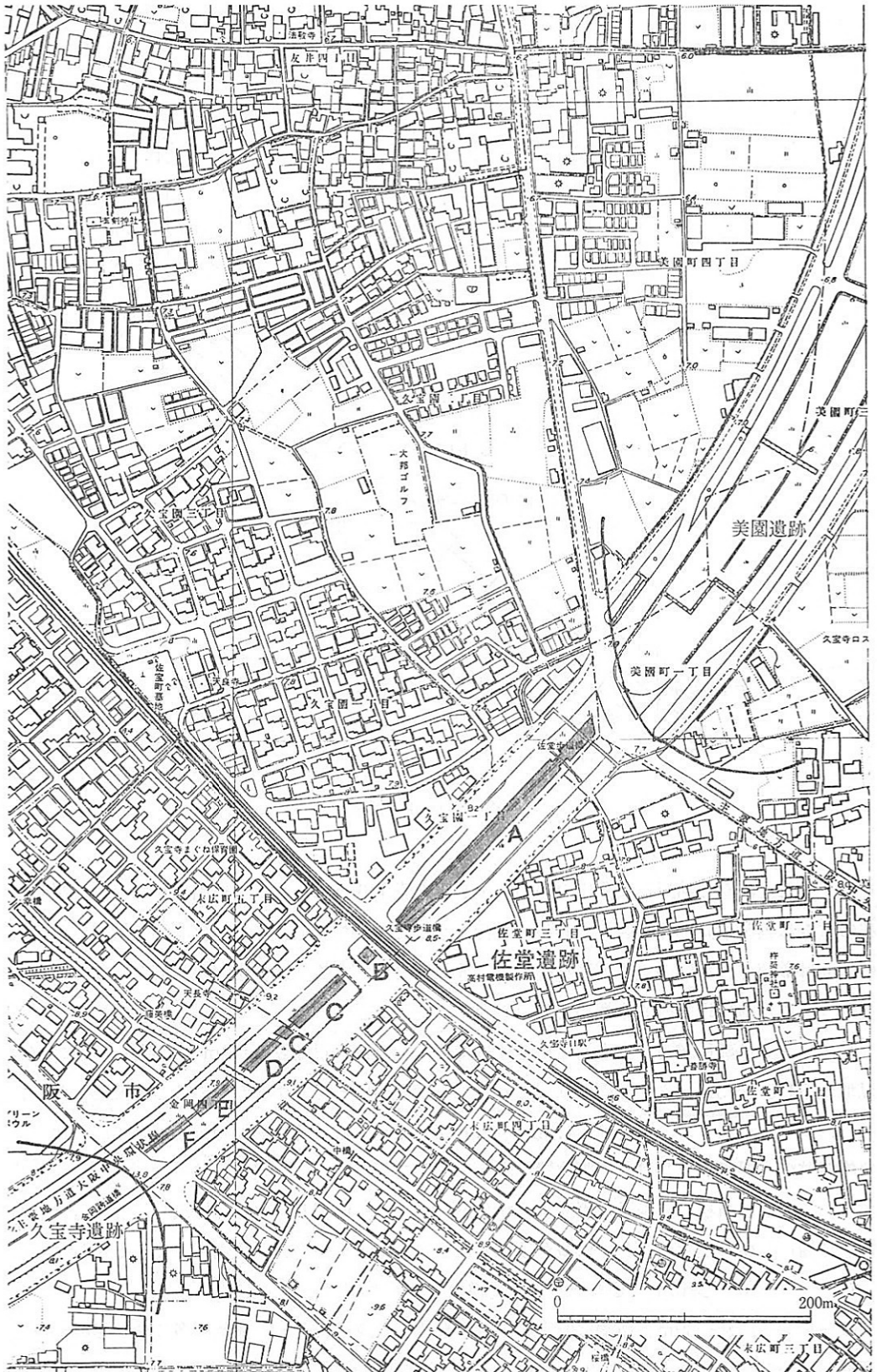
佐堂遺跡の発掘調査は昭和56年3月より準備工事を開始し、B・C・C'・Dトレンチは昭和56年6月に調査開始、57年3月に古墳時代前期遺構面までの調査を終了した。B～Dトレンチの調査によって現地地表下4.3mにおいて、古墳時代の良好な遺構面を検出した。さらにC～Dトレンチでは現地地表下約5mにおいて弥生時代前期～中期の遺物包含層を検出し、それがDトレンチ以南に拡がっていることが確認された。このため、B～Dトレンチにおける弥生時代遺構の調査は、道路の橋脚位置の調査時に再び行うこととした。そして長瀬川以南にE・Fトレンチを設定し、この部分の調査を引き続き行なった。E・Fトレンチの調査は57年6月に開始し、57年12月に終了した。

Bトレンチは延長10m。表土層を深さ1m、機械によって除去し、以下現地地表下4.6mまで調査を行い、さらにセンターライン上で幅2m、深さ1.5mの筋掘りを行なってトレンチ部の調査

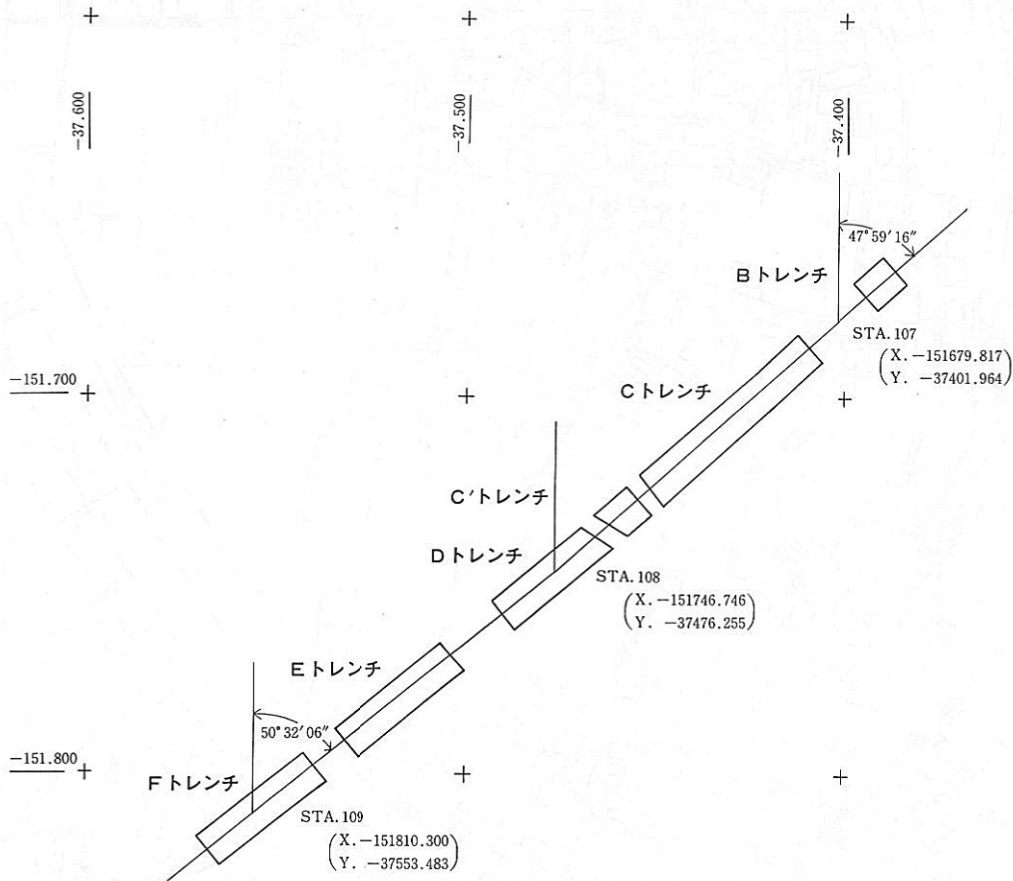


- | | | | | | | | | |
|----------|--------|-------|------|--------|-------|--------|--------|--------|
| 1 瓜生堂・巨摩 | 3 小若江北 | 5 友井東 | 7 美園 | 9 佐堂 | 11 東郷 | 13 亀井 | 15 東弓削 | 17 八尾南 |
| 2 若江北 | 4 山賀 | 6 弥刀 | 8 萱振 | 10 久宝寺 | 12 中田 | 14 太子堂 | 16 城山 | |

第1図 遺跡分布高度写真



第2図 トレンチ配置図



第3図 国土座標位置図

を終了した。調査の結果、長瀬川の堤の盛土が現地表下6mにわたって検出されたため、堤の基部の調査は橋脚位置部分の調査にあわせて行なうことにした。又、トレンチ北端で検出した杭列は当面は破壊されないで構築法を確かめ、放射性炭素による年代測定用の資料として、杭3本を取りあげた他は現状のまま埋め戻した。

Cトレンチは延長56m。表土約1mを機械で除去した後、現地表下1.8mまで調査を行なった。現地表下1.8m~3.3mまでは筋掘りにより遺構・遺物がほとんど含まれないことを確認した後、機械によって掘削した。現地表下4.3m (T.P.4.3m)で古墳時代前期の集落跡を検出した。この集落跡の主要遺構を避けて橋脚位置を決める協議を行ない、この遺構面は砂で埋め戻して保護した。この面は当初の調査予定深度より0.5m深いため、筋掘りによって検出した弥生時代の遺物包含層は、橋脚建設により、破壊が不可避な所のみトレンチ部分も再調査することにした。

C'トレンチは延長10mでCトレンチと同様の方法により調査を行なった。

Dトレンチは延長30m、南端は旧大和川(長瀬川)の流心に近く、遺物を多く含む粗砂が厚く堆積していたため、表土を深さ1.5mまで機械で除去した後、現地表下3.8mまで調査を行なっ

た。筋掘りによって現地表下4.4m～4.9mで弥生時代前期～中期の遺物包含層が検出されたが、この部分は、C、C'トレンチと同様、橋脚位置の調査の際に再調査することとした。

Eトレンチは延長36.5m、上層の盛土、及び攪乱層を深さ1.2～2.0mまで機械によって除去し、以下現地表下4.3mまで調査を行ない、さらに中央部に幅2m、深さ2mの筋掘りを行ない、下層に遺構が存在しないことを確かめて調査を終了した。

FトレンチはEトレンチと同様の方法で調査を行なった。最終面現地表下3.4mで弥生時代中期の方形周溝墓状遺構を含む遺構が検出されたため、筋掘りは北半部のみ行ない、遺構面は砂で埋めもどして調査を終了した。

図面作成にあたっては日本道路公団の基準杭を援用した。B～DトレンチではSTA.107とSTA.108を直線とした中心線を基準とし、E・FトレンチではSTA.108とSTA.109を直線とした中心線を基準とした。E・Fトレンチでの中心線はB～Dトレンチにおける中心線と $2^{\circ}32'50''$ ずれており、国土座標との差はB～Dでは $N47^{\circ}59'16''E$ 、E～Fでは $N50^{\circ}32'06''E$ である。なお国土座標は、

STA.107 X = -151679.817 Y = -37401.964

STA.108 X = -151746.746 Y = -37476.255

STA.109 X = -151810.300 Y = -37553.484

である。また、この地点での真北は、国土座標のY軸より東へ約 $0^{\circ}17'$ 、磁北は同西へ $6^{\circ}30'$ のズレがある。

注 (1) (財)大阪文化財センター「近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第一次発掘調査報告書(現地調査総括編)」1974

(財)大阪文化財センター「近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第一次発掘調査報告書」1975

第Ⅲ章 地理的・歴史的環境

河内平野における遺跡分布により、旧石器時代・縄文時代以来の地理的・歴史的環境については諸先学の数多くの論考があり、再度述べる必要はないであろう。ここでは佐堂遺跡の位置と周辺の遺跡についてごく簡単に記述する。

佐堂遺跡は大阪府八尾市佐堂町・東大阪市金岡町に所在し、西を上町台地、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵に囲まれた沖積低地＝河内平野の中央部に位置する。調査区南半部（B～F地区）は旧大和川の本流である長瀬川の河川敷内に含まれ、A地区はその北に接する。遺跡の範囲は北東―南西方向で400m以上に及ぶ。現地表の標高は、長瀬川の河川敷内が自然堤防を形成するため周辺よりやや高くT.P.8.0～8.5m程度、北接するA地区ではT.P.7.9m程度である。佐堂遺跡に北接する美園遺跡では南端7.0mで佐堂遺跡とは段差がある。全体としての地形は北へ向かって徐々に下がり美園遺跡北端では5.6m程度となる。佐堂遺跡の南に続く久宝寺遺跡の北端では7.0m前後でやはり佐堂遺跡とは1m程度の段差をもつ。

佐堂遺跡の南西に接する久宝寺遺跡は、縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が同一層から出土しており注目される。また、同遺跡は古墳時代前期～中期にかけては、八尾市中田遺跡、八尾南遺跡等と並ぶ低地部の大規模集落と考えられ、その内容は近年の発掘調査で明らかになりつつある。

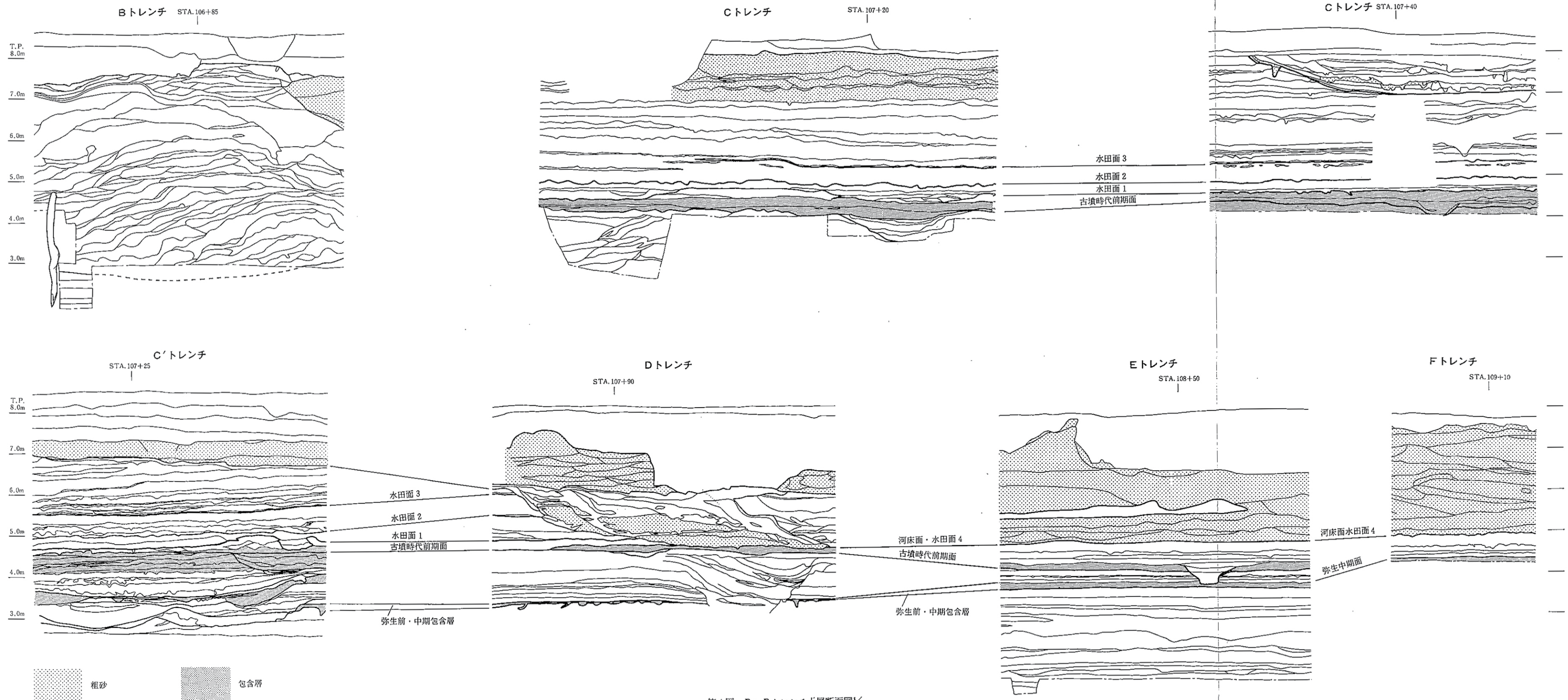
北接する美園遺跡は北の山賀遺跡よりも少し遅れるとはいえ、低地部における弥生時代前期の集落跡として注目され、また佐堂遺跡の集落より先行する古墳時代前期の集落が、さらに、佐堂遺跡の集落とはほぼ同時期には家形埴輪、壺形埴輪が多く出土した美園古墳が築造される。

長瀬川と玉串川に挟まれた地域では、上述の遺跡の他に東弓削遺跡、中田遺跡、東郷遺跡、萱振遺跡、小若江遺跡、山賀遺跡、西岩田遺跡等が古墳時代の遺跡としてあげられよう。

長瀬川以西では久宝寺遺跡、八尾南遺跡といった大集落の他、加美遺跡、瓜破北遺跡、大正橋遺跡等が古墳時代の遺跡としてあげられよう。

生駒西麓では縄文時代から続く縄手、馬場川、恩智等の遺跡が、また、羽曳野丘陵より派生する台地縁辺には国府遺跡、船橋遺跡、川北遺跡、西大井遺跡等が分布している。

河内平野の沖積低地といえ、我々は川、沼、沢地、湿地、草原等の風景を思いうかべがちであるが近年の花粉分析等による環境復原では、森林がかなり広がっていたと推定されている。弥生時代以来の河内平野における耕地の開拓は、水との闘いは当然ながら、森林の伐採が一つの重要な要素となっていたことも確実であろう。しかし、後章で述べるように、安定した生産を維持するためには大和川をはじめとした河川をいかにコントロールするかという問題が最も根本的な課題であったことは言うまでもなく、その営為の一端は佐堂遺跡の発掘調査においても検証することができたと考えている。



第4図 B~Fトレンチ土層断面図%

第Ⅳ章 基本層序

本調査区での基本層序は以下のように9層に大別できる。

- 第1層—盛土
- 第2層—黄灰色～灰色礫混り粗砂（長瀬川河流による堆積）
- 第3層—暗緑灰色粘土及び微砂（湿地性自然堆積）
- 第4層—暗緑灰色粘土（水田耕作土）
- 第5層—黒色粘質微砂（古墳時代前期遺物包含層）
- 第6層—暗緑灰色微砂及び粘質微砂（古墳時代前期遺構面）
- 第7層—黒色粘土（弥生時代前期～中期遺物包含層）
- 第8層—緑灰色粘土～微砂（弥生時代中期遺構面）
- 第9層—暗緑灰色粘土・微砂・粗砂等の自然堆積

第2層 第2層の黄灰色～灰色礫混り粗砂は旧長瀬川によって運ばれた堆積である。堆積層の厚さは0.7m～4.0mである。Bトレンチ南端に堤防に接して厚さ2m以上の粗砂堆積があり、右岸堤のすぐ内側に一つの流路があったことがわかる。南のCトレンチ北端ではこの砂は検出されていないことからこの流路は、幅20m以内の河川敷内の小流路であろう。Cトレンチ中央部（STA.107+40）付近からCトレンチ南端には厚さ約0.7mの粗砂堆積があり、ほぼ水平に続く。STA.107+40～50付近ではこの粗砂上に粘土の堆積がみられ交錯した足跡が検出された。この粘土は河川敷内で水溜り状を呈していた部分である。粗砂の下面はCトレンチ北端から南（現長瀬川）に向って数カ所に小さな段をつくりながらゆるやかに下がり、Dトレンチ北半部（STA.107+95付近）で、高さ約1.5mの崖状をなして落ち込んでいる。Dトレンチ南半部が最も深く、現地表下4.2mまで粗砂が堆積していた。E・Fトレンチ間ではEトレンチ南端付近が最も深く現地表下3.4m、Eトレンチ北端で同3.0m、Fトレンチ南端でも同3.0mである。粗砂中には弥生式土器・土師器・須恵器・埴輪・瓦器・陶磁器等の遺物が多く含まれていたが、最下層からは10世紀後半及び12～13世紀頃の瓦器椀・土師器小皿等が出土しており、この粗砂層は10世紀後半以後の堆積である。すなわち、長瀬川がこの位置を流れはじめたのが10世紀後半頃であり、河流が最も深くそれまでの堆積層を浸食したのが場所によっては12～13世紀頃と考えられる。この頃の川の流路はDトレンチ中央部から南、E、Fトレンチにかけてである。粗砂中にはマンガンや鉄分が沈着した黒褐色や褐色を呈する粗砂層がほぼ水平に厚さ10cm程度みられたが、一時期の河床面を示すものであるかどうかは不明である。一部では同時堆積の粗砂中にこの沈着がみられることから、堆積後の沈着である可能性もある。

粗砂の堆積状況は、Dトレンチでみると、トレンチ縦断（川横断）方向の断面では、現地表下2.7m（T.P.5.5m）付近までは幅約1.5m、深さ0.5m程度のレンズ状の堆積を示し、それ以下

の厚さ約0.4mでは南から北に下がる砂粒堆積がトレンチ全面に続いている。このことは河床のかなり深い部分では、小礫を極めて多く含む粗砂が一気に堆積するような、かなり激しい流れがあったと考えられる。その後は徐々に粗砂を堆積しながら河床を上げ、天井川となっていったと思われる。なおトレンチ横断（川縦断）方向の断面では何回かにわたり、上流から下流へ下がる連続する砂粒堆積がみられる。

Cトレンチ中央部より北側では粗砂、細砂が堆積している。また、上述の13世紀以後の長瀬川河床による粗砂に切られていることから、それ以前の堆積であることがわかる。この層中より青磁小片が出土している。

第3層 第3層の暗緑灰色粘土及び微砂はCトレンチからC'トレンチにかけて堆積した層で、Dトレンチ以南では存在していない。Cトレンチ北半部では現地表下1.5m～3.5mまで厚さ約2mにわたり堆積しており、粘土中に厚さ1～5cmの微砂の薄層が挟在し、一部には幅2m深さ0.5mの微砂が堆積した自然流路があるという状況である。花粉分析の結果からは、この層は二分できそうであり、上層ではシダ類の花粉が極めて多く検出されており、逆に樹木花粉が非常に少ない。イネ科の花粉は下層に比べやや少ない。このことから、この第3層はシダ類が繁茂する湿地性の特殊な環境であったと推定される。Cトレンチでは北から南に向かってゆるく傾斜しており、この層の下層に厚さ10cm程度の粗砂の堆積がみられ、小さな流れのあったことがわかる。この層は長瀬川がD、E、Fトレンチ部分を流れる際に彎曲部の内側の滞水状態の部分に堆積したものと考えられる。

この第3層中からは遺物の出土が皆無であり時期決定が困難であるが、第2層・第4層の所見から11世紀以後12～13世紀頃までの堆積と考えられる。

第4層 第4層の暗緑灰色粘土層はC・C'・E・Fトレンチにおいて検出した層であり、水田の耕作土である。上面は現地表下約3.3m（T.P.5.4～5.5m）で層厚は0.8～0.9mである。

Cトレンチ北半部においては下層の中間に厚さ5～10cmの微砂～細砂を挟んで3層に、南半部では4層に分層可能である。上層は面として広がりとはとらえられなかったが、断面では分層可能であり、花粉分析結果によればイネ科花粉の優占する最上層にあたる。中層は上面に少し起伏をもち、厚さ0.15～0.25mでC・C'トレンチに続く。C'トレンチでは上面に厚さ0.1mの粗砂が堆積し、足跡が検出された（水田面2）。また、この砂層から黒色土器の底部が出土している。Eトレンチではほぼ南北方向の2条の畦畔とそれに直角につながる1条の畦畔が、Fトレンチの南端では東西方向の畦畔が検出されている。また、Eトレンチではこの水田面を切って小さな溝が掘られており、埋土中より10世紀初頭の土師器碗が出土している（水田面4）。下層は挟在する粗砂を取り除いた面から約15cmの厚さで堆積している。Cトレンチでは北端に幅約3.5mの北西、南東方向の高まりがみられ、その北では粗砂が、その南には耕土であるこの粘土が堆積している。この面にはほぼ全面に足跡が検出された。畦畔は検出されなかったが、花粉分析結果によれば、この層がイネ科花粉のピークを示し、逆に、第3層でみられたシダ類や、ヨモギ、カヤツリ

グサなどの雑草が減少しており、この層が、かなり管理のゆき届いた水田であったことがうかがえる(水田面1)。

Cトレンチ南半部では上述の2層の間に粗砂を含む暗緑灰色粘質微砂が厚さ0.2mにわたり堆積している。この層もおそらく水田耕作土と思われる。

C'トレンチの南半部では粗砂の高まりがあり、第4層はこの高まりの北側に堆積したものである。

出土遺物より下層は6～7世紀、上層は10世紀頃と考えられる。

第5層 第5層の黒色粘質微砂は古墳時代前期の遺物包含層である。Bトレンチで一部、Cトレンチ～C'トレンチにかけては厚さ0.2～0.4mで多量の遺物を含む。Dトレンチ北半部では遺物量は少なくなり、厚さ0.1m、Dトレンチ南半部は中世長瀬川により削られて遺存しない。Eトレンチでは北端で少し遺物を含み、厚さ0.1mである。南に向かって徐々に層厚も薄くなり、遺物量も少なくなる。この層の上面はC・C'トレンチではT.P.4.5mではほぼ水平、DトレンチではT.P.4.8mとやや高い。Eトレンチ北端ではT.P.4.4m、南端では4.0mで、E、Fトレンチ間で途切れてしまう。この遺物包含層中には炭が堆積した浅い窪みがあり、炭とともに多量の遺物が出土した(包含層中土器溜)。

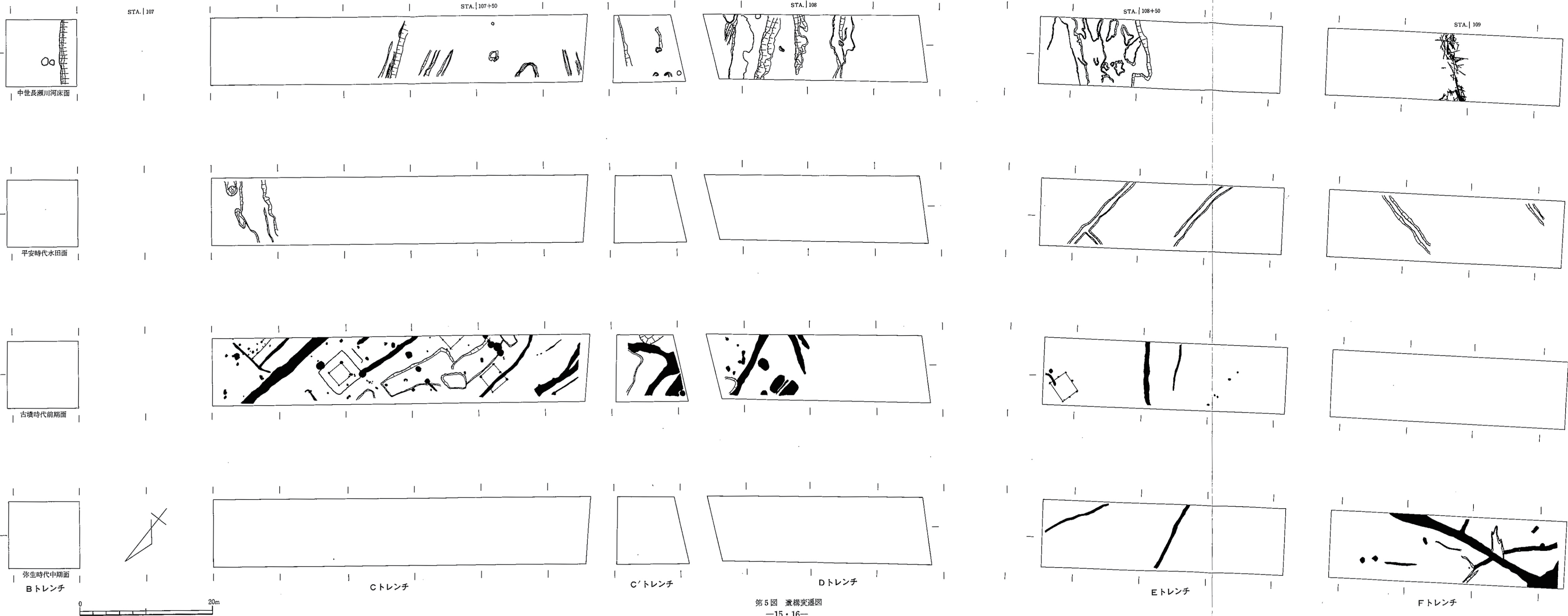
第6層 第6層は暗緑灰色～灰色の微砂及び粘質微砂であり、上面が古墳時代前期の遺構面である。この遺構面はCトレンチではT.P.4.2～4.3m、C'トレンチでT.P.4.5m、DトレンチではT.P.4.6m、Eトレンチ北端でT.P.4.2m、南端で3.9mであり、Dトレンチ付近が最も高い。Cトレンチでは遺構面保存のため、この層は部分的にしか掘り下げていないが、Cトレンチ北端、C'・Dトレンチの筋掘りで見える限り、この堆積層の厚さは0.1～0.2mで、これより下層には数条の小流路が認められる。従ってこの堆積は、ゆるやかな流れによって運ばれた後、水位の低下によって乾燥し、集落が営まれるようになったと考えられる。

第7層 第7層はBトレンチからFトレンチにかけて堆積する炭化した植物遺体を極めて多く含む黒色粘土で、部分的に後の自然流路によって削られている。弥生時代前期～中期の遺物を含んでいる。上面はC'トレンチ～Dトレンチ北半部でT.P.3.3～3.4m、南に向って徐々に高くなる。Dトレンチ中央部ではさらに段状に高まり、T.P.3.8mをはかる。EトレンチからFトレンチにかけては南に向って徐々に高まり、Fトレンチ南端ではT.P.4.4mである。Fトレンチで検出した方形周溝墓状遺構を含む遺構は、この層の上面から掘り込まれている。

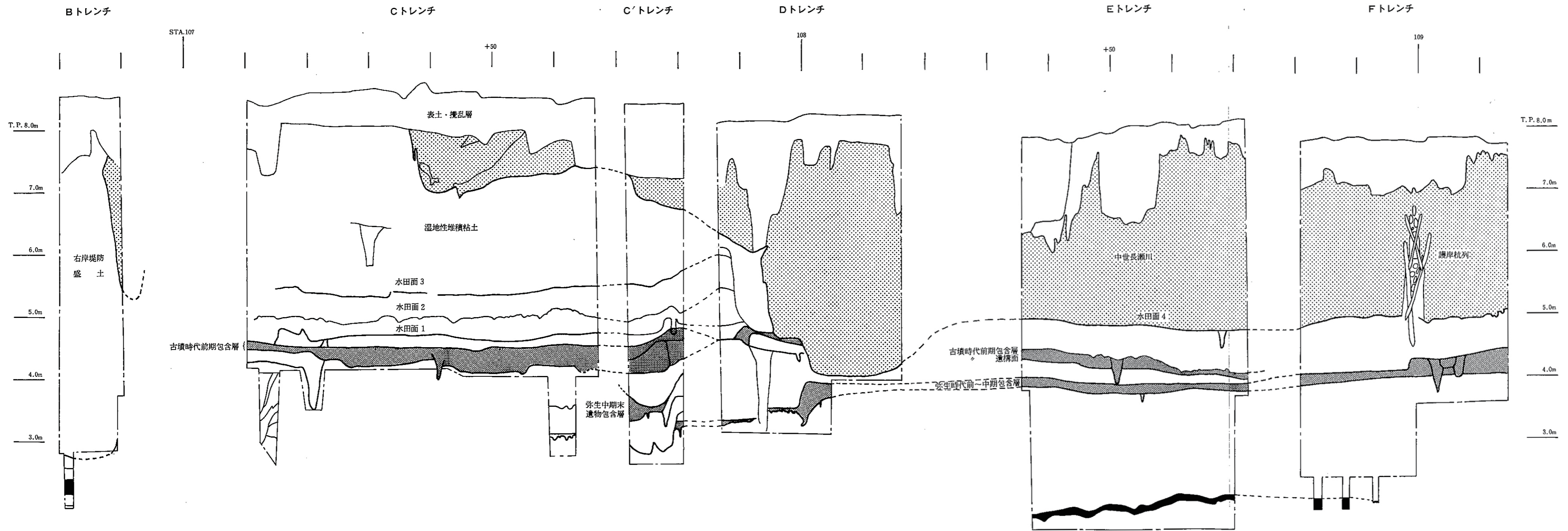
第8層 第8層の緑灰色粘土～微砂は第7層の遺物包含層を除去した面で検出された。第7層と同様弥生時代中期の遺構が検出されている。B～Dトレンチで確認していない。E～Fトレンチでは層厚0.4～0.6m、上面の高さはEトレンチ～Fトレンチ中央部まで水平でT.P.3.8m、Fトレンチ南端ではT.P.4.1mとやや高くなる。この層自体は遺物をまったく含んでいない。

第9層 第8層以下はE・Fトレンチでの筋掘りで確認したもので、EトレンチではT.P.1.6mまで、Fトレンチでは北半部のみT.P.2.4(部分的に1.8)mまで確認した。T.P.2.5mま

では暗緑灰色～暗オリーブ灰色の粘土ないし微砂質粘土の水平堆積で、それぞれ層厚0.1～0.3mであるが、Eトレンチでは各層の厚さが比較的厚く、南に行くにしたがって細かく分層可能であった。EトレンチではT.P.2.1～2.6mまで暗緑灰色粗砂のレンズ状の堆積があったが、流路としては扱えない。河内湖の堆積とみられる黒色粘土が下層で確認された。層厚は0.1～0.15mで上面の高さはEトレンチ北端でT.P.1.8m、Fトレンチ中央部でT.P.2.0mである。さらにT.P.1.35～1.45mで同様の黒色粘土を確認した。この第9層からは自然遺物（木片等）が出土したのみである。



第5図 遺構変遷図
-15・16-



第6図 B~Fトレンチ土層断面模式図

第Ⅴ章 調査成果

第1節 縄文時代晩期～弥生時代前期

弥生時代前期の遺構は佐堂遺跡においては検出されていない。後述する弥生時代中期の遺物の包含層である黒色粘土がDトレンチでも確認されており、この層中から弥生時代前期の土器片が出土しているのみである。E、Fトレンチでは確実に中期の遺物を含んでいるから、この黒色粘土の形成が弥生時代前期から中期にわたるもので、地域によって含む遺物の時期を異にするものと考えられる。佐堂遺跡に南接する久室寺遺跡のAトレンチでは弥生時代前期と縄文時代晩期最終末(長原式)⁽¹⁾の土器が同一層から出土していることから考えれば、この付近も稲作をもつ弥生文化が縄文文化と接触した舞台の一つであったのかもしれない。B～Dトレンチにかけてはこの時期の層まで掘れなかったため、今後の調査の課題の一つとしたい。

第2節 弥生時代中期

弥生時代中期の遺構は2面検出された。第1面は、D～Fトレンチにかけて検出した第Ⅰ～第Ⅲ様式の遺物包含層とFトレンチで検出した溝及び方形周溝墓状遺構である。第2面はC'トレンチの筋掘りによって遺構の存在を確認するにとどまった。第Ⅳ様式の新しい段階に属する遺構(おそらく溝かと思われる)である。

第1面

第Ⅲ様式の遺構はE・Fトレンチにおいて検出された。遺構はトレンチ全体に堆積した黒色粘土(第7層。厚さ0.1～0.2m)の上面から掘り込まれたものと、黒色粘土を除去した暗緑灰色微砂(第8層)上面で検出したものがある。ただし、黒色粘土上面における検出状況は、遺構埋土が他遺構面よりわずかに粘質を帯びる程度であったため、遺構の輪郭を確定するのが非常に困難であった。従って、Eトレンチの暗緑灰色微砂上面で検出した遺構も黒色粘土上面からの掘り込みであった可能性がある。また、各遺構とも出土遺物がほとんどなく、時期を決定したのはFトレンチの方形周溝墓状遺構(SX8001)の上面から出土した水差形土器によるものである。ここでは、この2面で検出した遺構をともに弥生時代中期(第Ⅲ様式)と考えて記述し各遺構の検出面は個々に記す。

第Ⅲ様式の遺物を含む黒色粘土はC'トレンチ～Fトレンチにかけてほぼ全面に堆積している。C'トレンチ～Dトレンチ北半部では上面がT.P.3.4m、層厚0.1m。Dトレンチ中央部から南では段状に高くなり上面T.P.3.9m、層厚0.3m。南に向かって上面のレベルは徐々に高くなり、Fトレンチ北端でT.P.4.0m、層厚0.2m、南端ではT.P.4.4m、層厚0.3mとなる。Fトレンチ南半部で方形周溝墓状遺構が検出された。この部分の包含層黒色粘土は細砂を多く含んでいる。

溝

S D8001 Eトレンチ北東隅、暗緑灰色微砂上面で検出した。幅0.25～0.35m、深さ0.1m。溝は、ほぼまっすぐN30°Eの方向にのびる。溝底は丸みをもち北が低い。埋土は上面を覆う包含層と同じ黒色粘土である。遺物は1点も出土しなかった。

S D8002 Eトレンチ中央部、暗緑灰色微砂上面で検出した。幅0.45～0.5m、深さ0.1m、断面逆台形で底は平坦である。溝底は高低の差がない。埋土は黒色粘土、遺物は出土しなかった。

S D8003 Fトレンチ北西、黒色粘土上面で検出した。長さ4.9m、幅0.25～0.3m、深さ0.1m。溝底は丸みをもつ。埋土は緑灰色粘土で遺物は出土していない。後述のS D8004がS D8005と接する部分の最上層埋土と同じである。方位はN53°Eである。

S D8004 Fトレンチ南半部でトレンチを斜めに横切る形で検出された。掘り込み面は黒色粘土上面である。幅1.3m、深さ0.5～0.55m。西は南北方向の溝S D8007につながり、東は調査区外にのびる。やや南にふくらむ弧状を呈す。方向はおよそN80°Eである。溝底は高低の差がない。S D8007の溝底の方が、0.2m低く、両溝の切り合いが認められないことにより、S D8007に流れ込んでいたと思われる。埋土は6層～7層に分かれるが、下層は微砂質、上層は粘質である。遺物は出土していない。

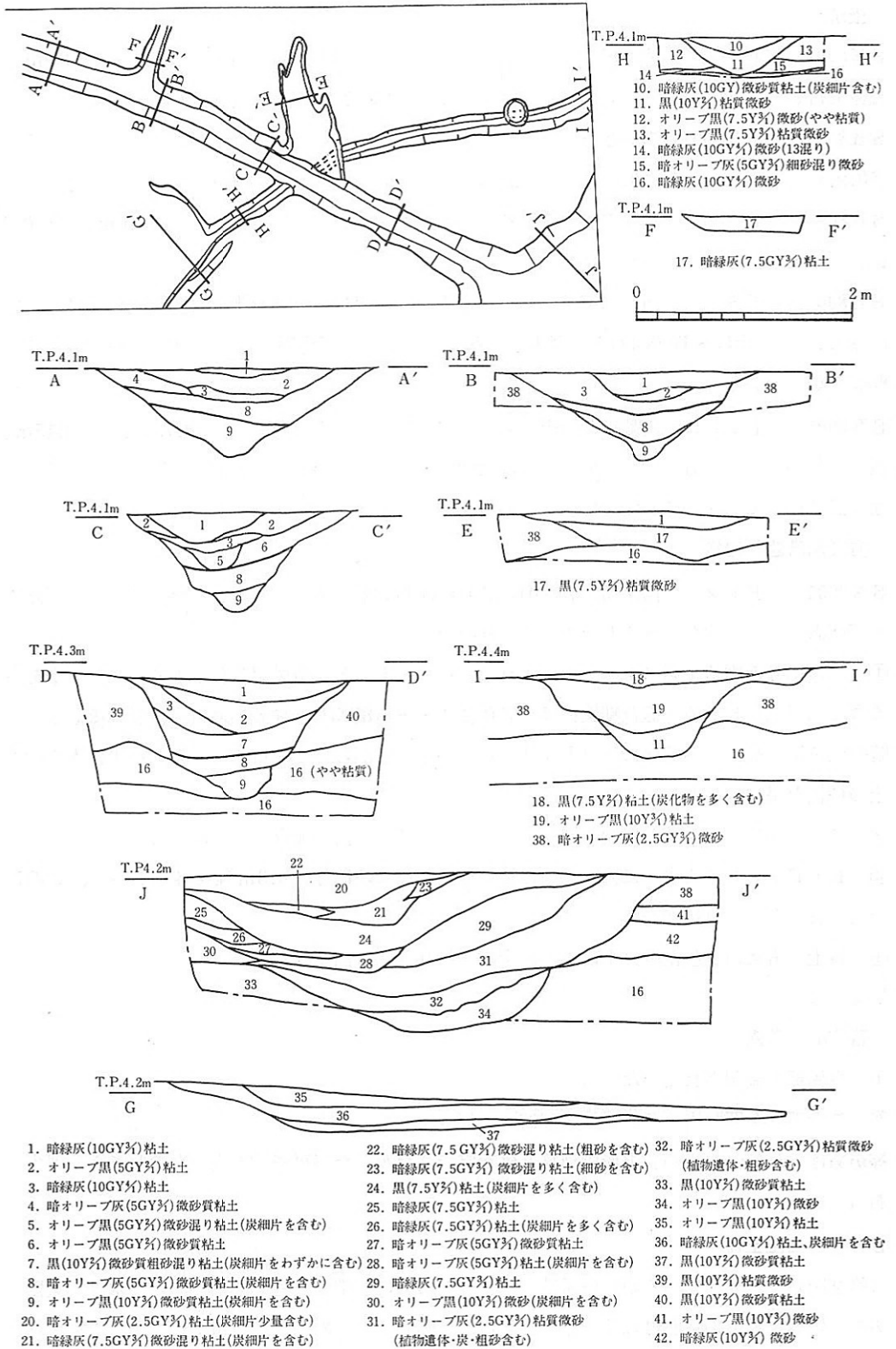
S D8005 Fトレンチ南半部東寄り、黒色粘土上面で検出した小溝である。幅0.5m、深さ0.1m、埋土は粘性の強い黒色粘土。北端はS D8004につながる。両溝の切り合いは認められず、並存していたと思われる。S D8004の埋土の中でこのS D8005が接する部分のみ北側のS D8003・S K8001・S K8003の埋土と同じ緑灰色粘土が堆積していた。

S D8006 Fトレンチ南端から北に向ってのび、途中でS D8004と交差する。北端では東の肩が北に広がり不明瞭で、西側の肩のみ残る。南端で幅0.7m、深さ0.4m。S D8004と交差する付近では、幅0.6m、深さ0.2m。溝底はT.P.3.9mで、高低差はない。埋土はS D8004以南では、上層が黒色粘土、中層がオリーブ黒色粘土、下層が黒色微砂質粘土である。S D8004以北では上層が暗緑灰色粘土、下層が黒色粘質微砂である。遺物は出土していない。S K8004・8005に切られている。検出時点ではS D8004との切り合いは認められず、S D8004より北側ではS D8004の最上層の埋土と同じオリーブ黒色粘土で埋っていたことから、S D8004とS D8006の少なくとも北半部は一定期間並存し同時に埋ったものと考えられる。ただ掘削された時期には差があり、このS D8006が先行していたかもしれない。

S D8007 Fトレンチ南西端で検出した南北方向の大溝である。検出面は黒色粘土上面。東側の肩を検出しただけで幅は不明であるが、検出した部分は幅2.4m以上、埋土の断面でみれば幅3m以上と推定される。埋土の観察よりこの溝は東側から埋っていった様子がうかがえる。

小穴

P. 8001～8004 Eトレンチの暗緑灰色微砂上面で検出した径0.5m程度の小穴である。いずれも0.05～0.1mと浅く、遺構としてとらえ難い。埋土は黒色粘土。



第7図 S D 8004・8005・8006・8007・S K 8004土層断面図

土坑

S K 8001 Fトレンチ北西黒色粘土上面で検出した。平面楕円形の土坑である。長径0.9m、短径0.7m、深さ0.25m。断面は搦鉢状を呈す。埋土は緑灰色粘土で遺物は出土していない。

S K 8002 S K 8001の南約2mの黒色粘土上面で検出した。平面形はやや角ばった楕円形で長径0.9m、短径0.8m、深さ0.1mの浅い皿状の土坑である。埋土は緑灰色粘土。

S K 8003 Fトレンチ中央部やや東寄りて検出した楕円形の土坑である。長径1.0m、短径0.6m、深さ0.1mの浅い皿状を呈す。埋土は緑灰色粘土。

S K 8004 Fトレンチ南半部東寄り黒色粘土上面で検出した不整形土坑である。底面は平坦で深さ0.1m。埋土はS D 8004の上層埋土と区別できず、ほぼ同時期に埋没したと思われる。S D 8006を切っている。

S K 8005 Fトレンチ南端黒色粘土上面で検出した円形の土坑である。径0.75m、深さ0.15m、皿状の浅いもので、遺構面の黒色粘土には細砂が混っていたのに対し、土坑の埋土は砂を混じえない黒色粘土である。S D 8006を切っている。

方形周溝墓状遺構

S X 8001 Fトレンチ南西隅S D 8004とS D 8006の北半部によって囲まれた方形の台状部分に方形周溝墓の可能性を考えるものである。その理由は、

① この部分の堆積土層の断面観察によれば、ベース土である暗緑灰色微砂上に、ベース土を多く含んだ黒色粘質微砂・黒色粘質微砂・黒色微砂・黒色粗砂混り微砂が堆積し、黒色微砂中には暗緑灰色微砂や粗砂が塊状に不規則に含まれていることから自然堆積とは考えられず、人工的盛土の様相を呈すること。

② 方形の部分の囲む溝の埋土が同じことから考えて、両溝が並存していたこと。

③ E・Fトレンチで水平に続いていた黒色粘土層がこの部分で0.3m程度盛り上がり、この部分で粘質から微砂質に変わること。

④ 盛土と考えた黒色微砂直上に水差形土器（第9図）が出土したこと。
等である。

否定的な要素としては、

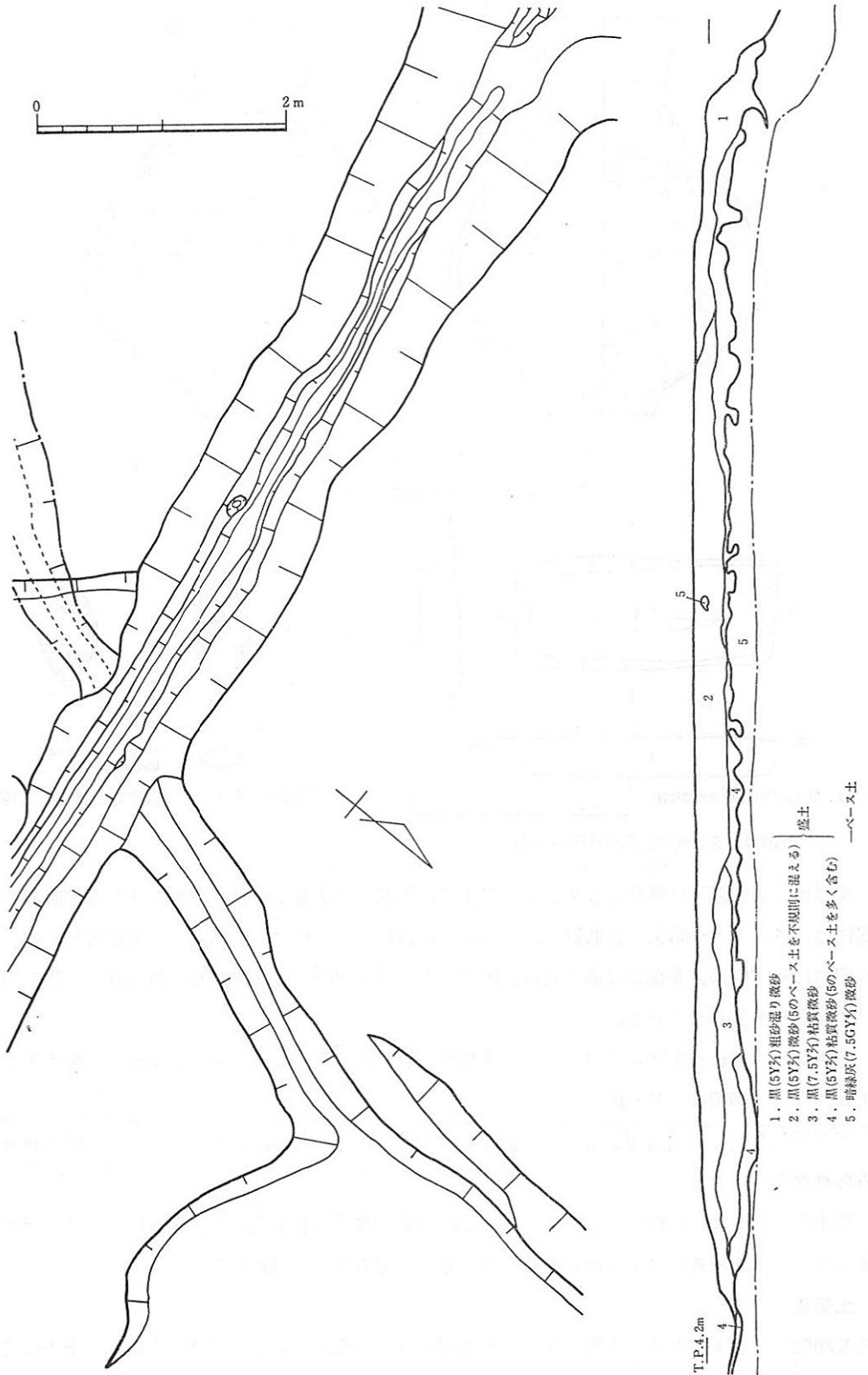
① 主体部が確認されていないこと。

② この部分を囲む溝（S D 8004・8006）の掘削時点での時間差が考えられること。

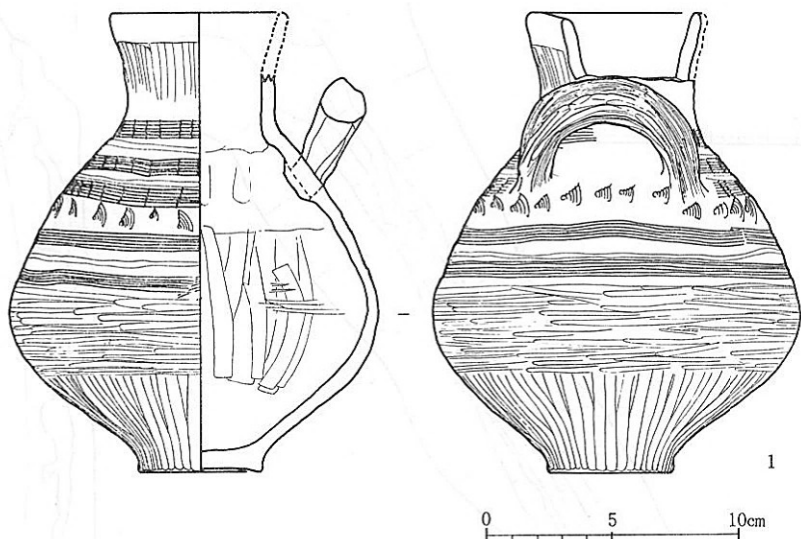
等があげられる。以上が、方形周溝墓とは断定できなかったが可能性の高いものと考えた理由である。

S X 8001出土土器

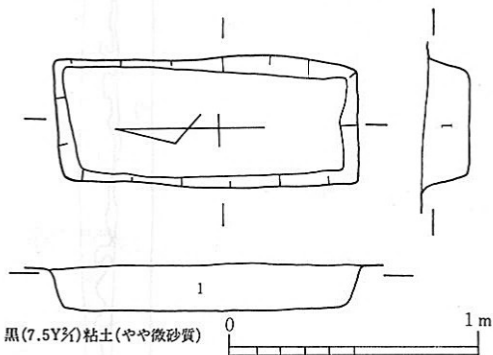
（第9図） 少し広がる短い口縁部から、なだらかに体部へと続く曲線をもった水差形土器である。器体としての重心は低く、体部の膨らみも弱い。口縁の一部が当初より二次的に割られているために（第9図一右）、指掛け部分の形状は不明である。



第8図 方形周溝墓状遺構(S X 8001) 遺構平面図・土層断面図

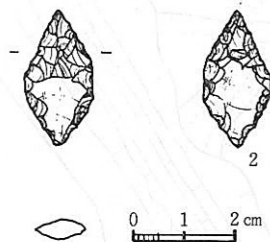


第9図 S X 8001出土土器



1. 黒(7.5Y3)粘土(やや微砂質)

第10図 S X 8002遺構平面図・土層断面図



第11図 E トレンチ黒色粘土層出土石器

文様は、頸部以下に籐状文3条、扇形文1条、楯描直線文2条が続く。籐状文と楯描直線文の間には、各々1本の暗文(鏡磨研線)が巡る。口縁部には文様はみられない。文様帯以外は、口縁部には縦方向の、腹部には横方向の、体部下半には縦方向の鏡磨き調整がみられる。体部内面はナデ調整が施されている。

把手は、体部に孔を穿ってつきさし、裏で粘土板をあて固定するという、調ゆる「挿入法」によっている(図版43-1'・1'')。

明茶褐色を呈し、生駒西麓産以外の胎土を有する。体部の一部に欠失がみられる。煤の付着はみられない。

以上の形態および文様から、この水差形土器は弥生時代第Ⅲ様式前半、場合によっては後半、少なくとも第Ⅳ様式には下らない範囲に属するものであろうと思われる。

土壌墓

S X 8002 F トレンチ南東隅で検出した平面長方形の土壌である。黒色微砂混り粘土上面で検出した。長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.2m、埋土は黒色粘土。壁面はほぼ垂直であるが、掘り方

や墳底にも木棺等の痕跡は認められなかった。

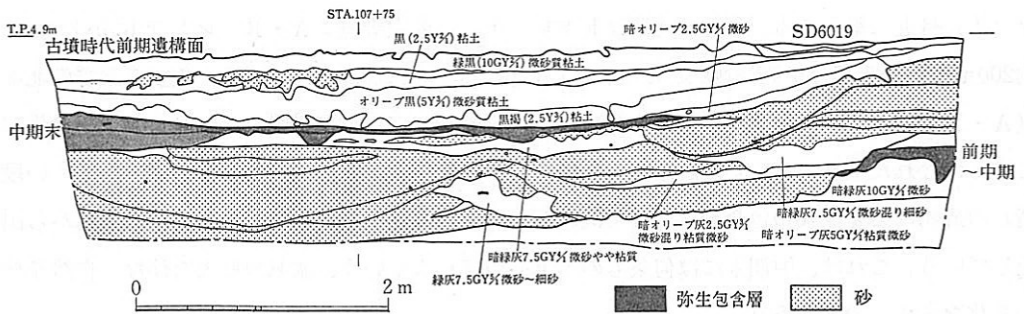
E トレンチ黒色粘土層出土石器 (第11図) 尖基無茎式のサヌカイト製打製石鏃である。最大長2.6cm、最大幅1.3cm、最大厚0.4cm、重量1.0gを測る。

この形態の石鏃は、例えば和泉市池上遺跡では、第Ⅲ様式後半の溝(SF074)に集中してみられたように第Ⅲ様式に属する可能性が大きいものであり、少なくとも第9図の水差形土器が属する時期幅とは矛盾しない段階のものであろう。

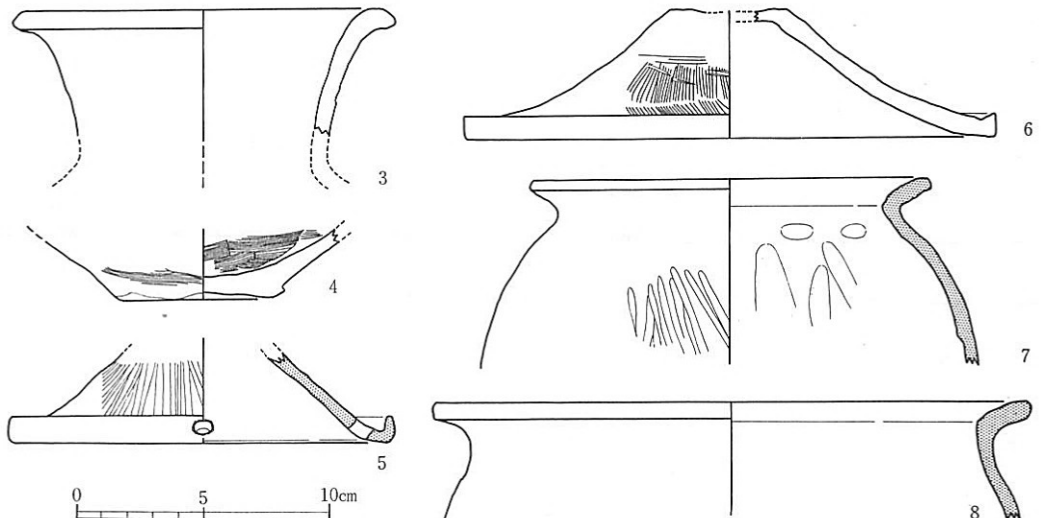
第2面

C'トレンチの筋掘りでその存在を確認したにとどまった。断面観察によれば、水平に堆積した第Ⅰ～第Ⅲ様式の遺物包含層を切っかなり大きな自然流路があったことがわかる。この流路内の堆積は自然木や植物遺体を多く含む粗砂や細砂である。この流れがやや安定してなだらかな落ち込みとなった時点で堆積した粗砂・細砂を切っ溝が掘り込まれたものと思われる。土器はこの溝から多く出土した。流路はほぼ南北方向と推定される。

第2面出土土器 (第13図) 壺、高杯、甕蓋、甕などの破片が20点位出土している。これらの



第12図 C' トレンチ土層断面図



第13図 弥生時代中期第2面出土土器

うち作図可能なものは、以下の如くである。

壺は、短く立ち上がったのち外反し、口縁端が下方に小さく突出するものである（第13図—3）。内外面ともにナデ調整を施す。高杯脚部は、脚端部が上方に突出し、外面篋磨き調整、内面ナデ調整を施す（第13図—5）。突出部の際に装飾としての孔がある。一孔が残る。全体で3～4孔しか施していないものであろう。甕は2点を抽出した（第13図—7、8）。口縁部が「く」の字に短く外反するものである。外面、肩部以外を篋磨きあるいはナデ調整、内面はいずれもナデ調整を施す。甕蓋は他に比して明確な稜線をもつ端部をつくり出す（第13図—6）。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整である。

高杯、甕2点は、生駒西麓産である。甕蓋以外は同時期のものと比べ形態が不明瞭なものであり、装飾もほとんどみられない。したがって、すべて弥生時代中期末に比定できる一群の土器であると思われる。

小結

弥生時代中期は第1面（第Ⅲ様式）と第2面（第Ⅳ様式後半）とではかなり様相を異にしている。第Ⅲ様式の包含層はほぼ調査区全体に水平に広がっており、遺構としては調査区南端（Fトレンチ）付近に集中する。付近の地形はFトレンチから久宝寺遺跡A・Bトレンチにかけての約200mにわたる部分が微高地状となり、次第に南に向かって低くなっている。久宝寺遺跡の北端（A・Bトレンチ）では遺構が検出されるなど、比較的安定した様相を示す。Fトレンチは集落と少しはなれた墓域であったのかもしれない。これに比べ、第Ⅳ様式（第Ⅳ様式でも新しい段階）の遺物は第Ⅲ様式の包含層を切って流れた自然流路の堆積の過程でできた溝状の遺構から出土している。これは、中期末には何条もの小流路が流れるという、水域の拡大を伴う自然条件の変化を示すものであろう。

第3節 古墳時代前期 —集落の時代—

古墳時代前期の遺構はCトレンチからEトレンチにかけて、現地表下約4.3m (T.P.4.2~4.6m) 付近で検出された。遺構は暗緑灰色微砂・粘質微砂上に掘り込まれており、遺構面を覆って厚さ0.2~0.3mの遺物包含層が形成されていた。遺構面はCトレンチ北端では暗緑灰色シルト上に堆積した黒色粗砂混り粘質微砂、Cトレンチ北端より約10m南から、Cトレンチ南端にかけては暗緑灰色微砂、C'トレンチでは暗緑灰色粘土、Dトレンチ、Eトレンチでは暗緑灰色微砂である。遺構面の高さは、Cトレンチ中央部でT.P.4.2m、Cトレンチ南端で4.3m、C'トレンチ中央部で4.5m、Dトレンチで4.6m、Eトレンチで4.1mとなり、中央のDトレンチがわずかに高く、南と北の両側へ下がっている。Fトレンチではこの遺構面に相当する層が途切れている。

この遺構面上には厚さ0.2~0.3mの遺物包含層が堆積しており、特にCトレンチ中央部から南半部にかけては炭に混じって多量の遺物が出土した。BトレンチやDトレンチでは遺物の量も少なく、Eトレンチでは北端でわずかに出土したのみである。

遺構はCトレンチからDトレンチにかけて多く検出されており、Eトレンチでは北半部に掘立柱建物(倉庫)・溝・井戸などが検出されたのみである。Bトレンチでは、中世堤の築造時に遺構面より1.5m以上も深く掘り込んでいるため、遺構の有無は不明である。北接するAトレンチの南寄り、この時期の土坑が一基検出されたのみである。従ってこの時期の集落の範囲を調査区(北東~南西方向)にそって言えば、現近鉄大阪線の北30mから現長瀬川南30mまでの間の約250m程度と推定される。その中心はC・C'・Dトレンチ付近であろう。また建物・溝などの方向が北から東へ15度以内に収まるものが多く、集落はほぼ南北方向の中心軸をもったものであったと推定される。

布留式土器の分類

C・C'・D・E地区の古墳時代遺構面および包含層からコンテナ(55×34×15cm)約90杯分の布留式土器が出土した。これらのうち本書では、遺物検出32遺構分のもの大半と包含層出土の優品の合計約60コンテナ分について実測を終了したものを掲載する。これら土器は、遺構の数次の切り合い関係は認められるようであるが、すべて、ほとんど変らない時期に属するものと思われる。形態、製作技法について以下のような分類を行った上で、本遺跡出土の布留式土器を出土遺構別に記述する。なお、「布留式土器」とは須恵器出現以前のものを指している。

<小型丸底壺>

分類は、本来、形態を含めて行うのが当然である。しかし、本遺跡出土品については口縁部や体部の形状についてかなりの違いが認められ、出土点数が少ない現状では分類のための細分に陥りそうである。ただし、口径と体部最大径の差はあまりない。したがって、ここでは主として体部

外面調整についてのみ分類を行う。

- A. 外面全体、および口縁部内面を横方向に磨くもの。体部外面下半に下地の筥削り調整が残るものがある。
 - B. 体部外面、筥削り調整のもの。
 - C. 外面全体や口縁部内面などに刷毛目調整が残るもの。体部内面はナデ調整が一般的であるが、筥削りが残る場合がある。
 - D. 内外面ともにナデ調整のもの。
- その他、二重口縁のもの、台付のもの、ミニチュアなど、調整とは関係なく形態が特殊なものを一括する。

<壺>

ここでは主として口縁部など形態の違いによってのみ分類する。しかし、出土品が少なく、分類に価するものであるか疑問な点も多い。

- A. 二重口縁をもつものをすべて集める。各種のものが含まれ、なかには甕に分類した方がよいかもしれないものもある。
- B. 外反して立ち上がるが口縁部は少し長く伸びて端部は内彎ぎみに納め、丸みのある肩部、丸底の体部をもつもの。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目ののち、肩部以下を横方向に筥削り調整、内面はナデ調整のものが一般的である。口縁部、体部ともに煤が付着する例が多い。
- C. 口縁部が長く、直線的に外上方に伸びるもの。口縁端部は丸みをもって終るものと、面をもって終るものがある。体部外面の筥磨き調整が共通するようである。
- D. 外斜上方に立ち上がり、端部が平坦で内面に肥厚する口縁部をもつものを集める。口縁部内外面のヨコナデ調整、体部外部は縦方向の刷毛目ののち横方向の刷毛目を加えること、内面は筥削り調整であることなどが共通する。

その他、A～Dに属さないものを含める。

以上、壺は、いずれも丸底のものが一般的であるが、平底のものもある。ただし、1点には底面に二重に重なった木の葉圧痕がみられる。弥生式土器であるかもしれない。

<鉢>

一応、口縁部や底部の形態によって分類する。

- A. 二重口縁をもつものをすべて含める。浅鉢に対して深鉢のものもある。これは、現状では煤の付着がなくここに含めたが、形態上は甕に含めた方がよいかもしれない。
 - B. 外斜上方に立ち上がる口縁部と平底をもつもの。いずれも浅鉢である。
 - C. Bと同じく直口の口縁をもつが、丸底のものである。一部の筥削り調整が共通する。
- その他、斜上方に短かく立ち上がる口縁部と、口径の割に浅い体部をもった大型鉢、他にミニチュアなどがある。

第1表 佐堂遺跡出土布留式土器分類表(1)

小型丸底壺		鉢		甕		
A	篋磨き調整	A		A		
B	篋削り調整		B			
C	刷毛目調整		C			
D	ナデ調整		その他			
その他						
壺						
A		高 杯		B		
		杯部				
B		A ₁	篋磨き調整	C		
		A ₂	横撫で調整			
		A ₃	刷毛目調整			
C		脚部		C ₁		
		A ₁	篋磨き調整			
		A ₂	ヘラナデ調整			
D		A ₃	刷毛目調整	C ₂	口縁部 外反	
		B ₁	孔 なし	D		
		B ₂	有 孔			
器 台						
その他		A ₁	篋磨き調整	B		
		A ₂	篋削り調整			
		A ₃	刷毛目調整			

間、すなわち頸部は丸みをもって曲折し、肩部の膨らむ体部へと続く。外面は、口縁部から頸部にかけてヨコナデ調整。頸部以下、縦方向の刷毛目の上を上半部は横方向の刷毛目を加える。内面は、口縁部はヨコナデ、頸部の曲折以下を篋削り調整する。肩部に×印や斜め段状の篋記号文をもつものが見受けられる。

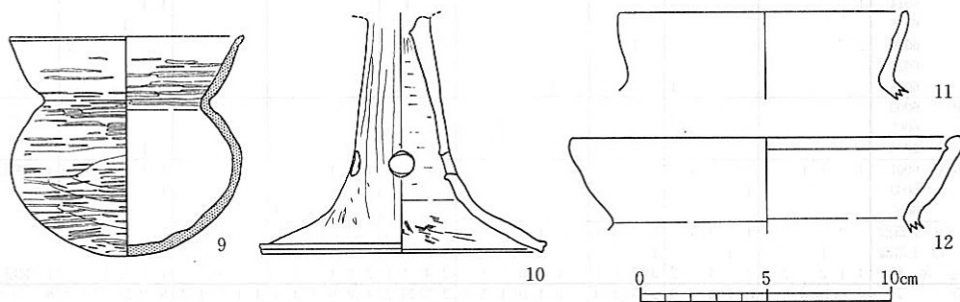
- C. 本遺跡に一般的なもので、A、Bに属さない丸底のものを含める。口縁部の形状によってさらにC₁₋₃までに分類する。
- C₁ Bと同じように口縁部が内彎ぎみに立ち上がるが、端部は肥厚しないもの。
- C₂ 口縁部が外反するもの。
- C₃ C₁、C₂に属さないものを含める。短く直立したのち内彎ぎみに立ち上がる口縁部をもつものなどである。
- D. 倒鐘形の体部から短く「く」の字に外反する口縁部をもち、平底であるもの。口縁部の先端は突出するものと面をもつものがある。他のものに比べ特殊な形態のものである。

住居跡

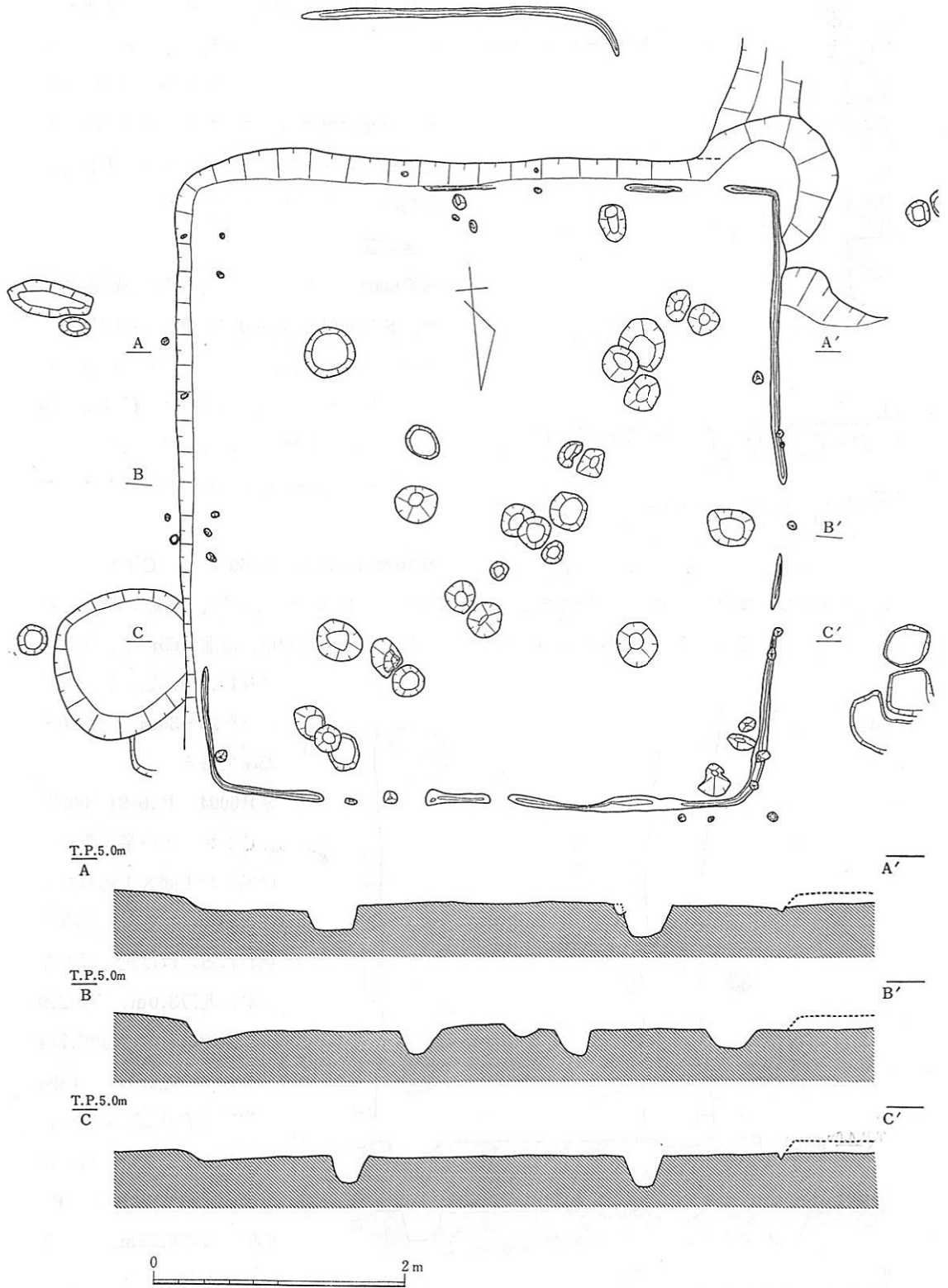
S B 6002 (P. 6037~6043) Cトレンチ北寄りで検出した竪穴式住居跡である。平面は方形で北辺長4.4m、南辺4.7m、東・西辺5.0mである。残存壁高18~20cm、壁の内側には幅3~10cm、深さ3~5cmの小溝が一部途切れながらほぼ全周している。支柱穴は2.4m間隔で正方形に4本検出された。各柱穴はほぼ円形で直径30~50cm、深さ約20cmである。この支柱穴とともに、東西方向に1.25m間隔で並ぶ3個の柱穴も、支柱穴の埋土と同じであり、この住居跡に伴うものと思われる。住居跡内には焼土・炭・灰など火を使用した痕跡はなく、住居跡とは離れた所で日常の炊事が行われていることがわかる。S K 6002、S K 6003に切られている。

S B 6002出土土器 (第14図) 壺など土器片、約100点が出土。小型丸底壺A、高杯脚部B₂、甕C₁、甕Bを抽出する。

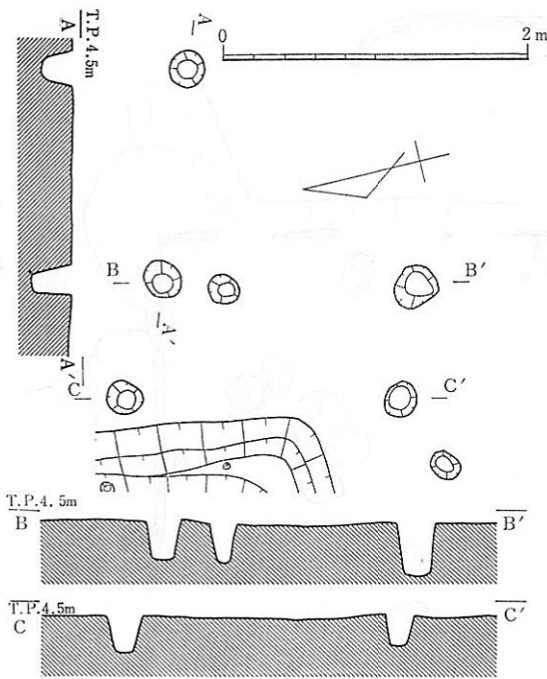
小型丸底壺Aは体部外面肩部以下篋削りののち、横方向の篋磨き調整、口縁部内外面も篋磨き、体部内面はナデ調整を施す(第14図-9)。高杯脚部B₂は、脚柱頭頂部を塞がず、筒状のまま杯部に接合するものである(第14図-10)。



第14図 S B 6002出土土器

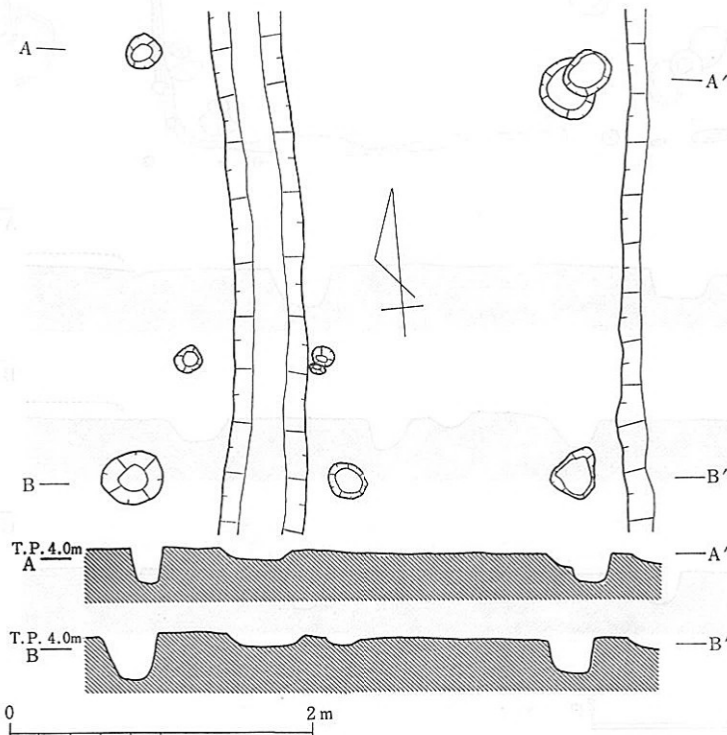


第15図 S B 6002遺構平面図・断面図



第16図 S B 6003遺構平面図・断面図

中央やや北寄りで検出した掘立柱建物である。北西隅の柱穴（P. 6080）と北辺、東辺の柱穴をそれぞれ一カ所確認したのみで、規模は明らかでない。柱間は東西1.42m、南北1.65mで、南北側



第17図 S B 6004遺構平面図・断面図

以上検出の4点は、小型丸底壺を除き破損品である。いずれも煤が付着し、中には高温燃焼による色調変化を生じているものがある。本来住居に伴っていたものか不明である。小型丸底壺には、灰状のもの（未分析）が強い高さまでつまっていた。

建物跡

S B 6001 Cトレンチ北東隅で検出された。S D 6001とS D 6002に囲まれた部分に南北方向の落ち込みがみられ、柱穴と思われる小穴が集中する。落ち込みの深さは5cm～10cm程度で、支柱穴も確定できないため、竪穴式住居跡の可能性のあるものとしてあげておく。

S B 6003 (P. 6079～6081) Cトレンチ中

央はN11.5°Eである。柱穴は直径25～30cm、深さ20～25cmである。

S B 6004 (P. 6094～6098)

Cトレンチ南半部西側で検出した1間×1間の掘立柱建物で、おそらく倉庫と思われる。ほぼ正方形をなすが、北辺3.0m、南辺2.9m、西辺2.8m、東辺2.7mと少しずつ差がある。四隅の柱穴は径0.25～0.4m、深さ25cm程あるが、南辺の中央に位置する柱穴（P. 6098）は径0.25m、深さ5cm程度と浅いことから、この小穴は高床倉庫にかけた

梯子架設に伴うものと思われる。建物の南北軸は $N7^{\circ}E$ である。

S B 6005 (P. 6115~6121) Eトレンチ北端で検出した掘立柱建物で、やはり倉庫と考えられる。東西1間、南北2間であるが、南北方向の2間は柱間が東辺では1.6m、1.3m、西辺では1.25m、1.3mと短かく、平面はやや歪んだ方形を呈す。柱穴は径0.3~0.4m、深さは0.3m程度である。南辺の中間にある柱穴(P. 6121)は径0.35m、深さ5cm程度でS B 6004と同様に梯子架設に伴うと推定される。

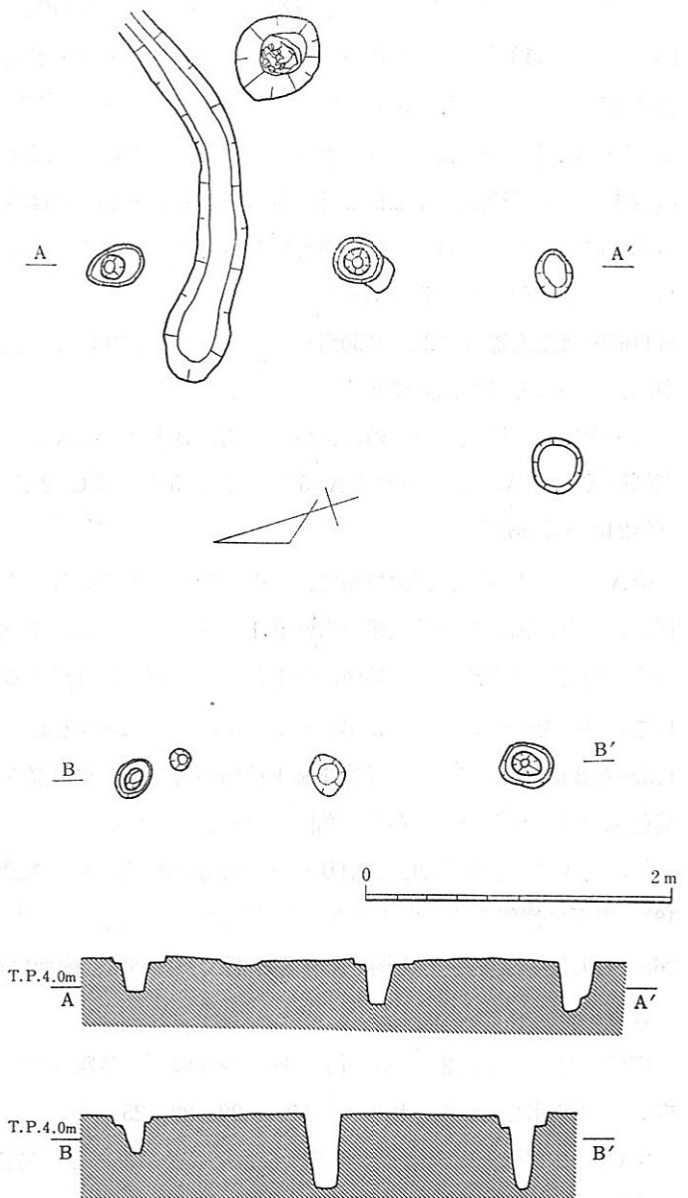
溝

S D 6001 Cトレンチ北端を東から西へ流れる幅0.3~0.5m、深さ0.15~0.2mの溝である。

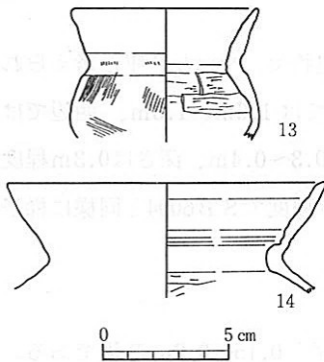
南端から1m付近でやや東に方向を変えてS D 6003に流れ込んでいる。埋土は上層が粗砂を含むオリブ黒色の粘質細砂で、下層は暗緑灰色の粘質微砂である。この埋土と同じ土がS D 6003内に流れ込む部分にも堆積しており、これと同時に存在していたことがわかる。土師器小片約30点が出土した。方位は $N89^{\circ}W$ である。

S D 6001出土土器 土器片約30点が出土。甕Bの一部と思われる綾杉状の記号文がついた土器片1点を抽出した(図版45-364)。

S D 6002 Cトレンチ北端でS D 6001からほぼ直角に南にのびる南北方向の溝である。幅0.25~0.5m、深さ0.1m程度、埋土はオリブ黒色粘質細砂で遺物は出土していない。方位は $N9^{\circ}E$ である。S D 6003とほぼ平行であることから、S D 6001とともにS D 6003と同時に存在したものと思われる。



第18図 S B 6005遺構平面図・断面図



第19図 SD 6002出土土器

SD 6002出土土器 (第19図) 小型丸底壺C、甕C₃の2点が検出された。

小型丸底壺の体部内面には明確な篋削り調整がみられる。甕は頸部内面が曲折し、体部との間に明瞭な稜線をみせる。しかし、口縁部端部の内面への肥厚は認められない。2点ともに破損品である。

SD 6003 Cトレンチ北半部をほぼ南北方向に走る、幅1.4～1.8mの溝である。検出面からの深さは0.7mであるが、掘削当初の掘り込み面からの深さは約0.45mである。埋土は第20～

23図のように13層に分かれるが、遺物を多く含む上・中・下層(①層～⑧層)と遺物をほとんど含まない最下層(⑨層～⑮層)に分けることができる。最下層は溝が掘り込まれた後、溝が機能していた段階での堆積であり、上層～下層は溝の周辺での遺物包含層の形成に伴って溝が徐々に埋まっていく段階での堆積と考えられる。中層・下層には多量の土器・木片が出土した。溝底の高低はほとんどないが、全体の地形から考えて、おそらく南から北へ向って流れていたものと思われる。方位はN7°Eである。

SD 6003出土土器 (第24～第30図) コンテナ約8杯分の土器が出土。出土土器は一応、上・中層、下層に分けて記述する。

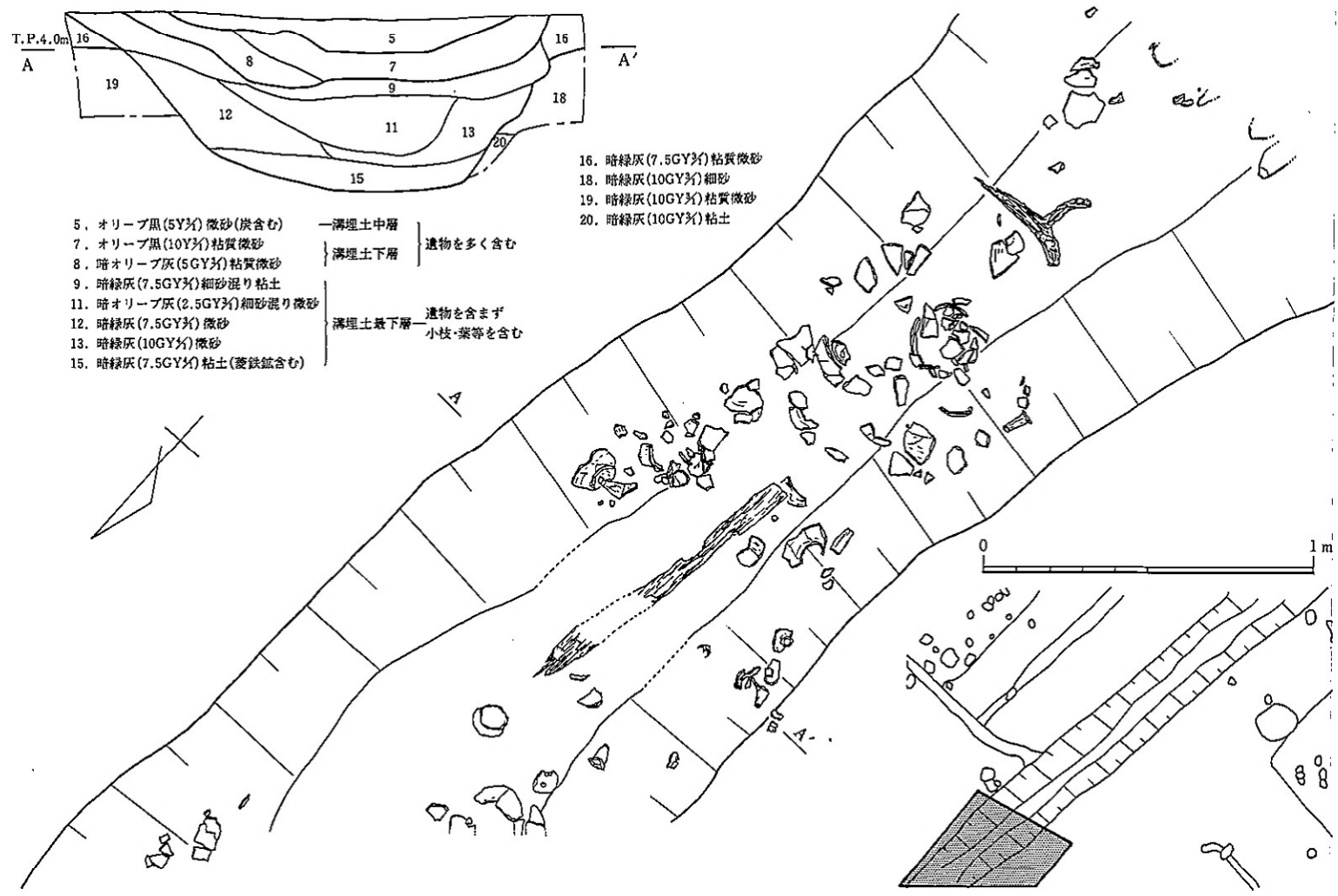
上・中層から出土したものは、小型丸底壺B 1点、壺A 2点、壺B 1点、壺(その他) 1点、高杯杯A₂+脚A₂ 2点、高杯脚A₂ 5点、甕B 5点、甕C₁ 2点、甕C₂ 1点、合計20点を数える(第24図～第26図)。

壺Aのうち1点は、超大型品で、肩部の張った体部から「く」の字に立ち上がった口縁部の上部に、さらに幅のある粘土紐を内傾ぎみに継ぎたしたものである(第24図-15)。変化部には、籠状の突帯が一本めぐる。外面は刷毛目調整を施し、肩部の横方向の刷毛目調整が布留式土器としての特徴を示す。内面、頸部より少し下端以下は篋削り調整である。口縁部には直径1.0cm、1.5cmの2種類、肩部には直径1.5cm 1種類の竹管圧痕文が巡る。この壺は生駒西麓産と同じ暗茶褐色系の色調をもつ。しかし、角閃石は確認できない。

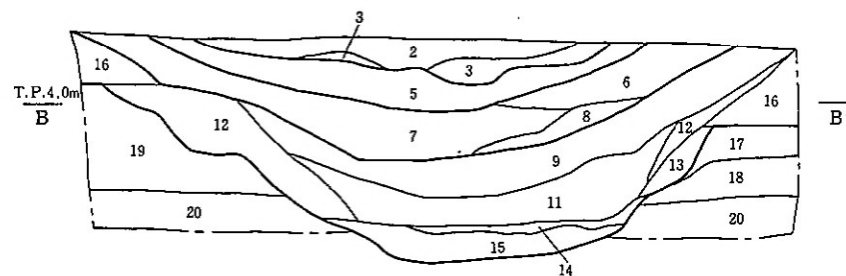
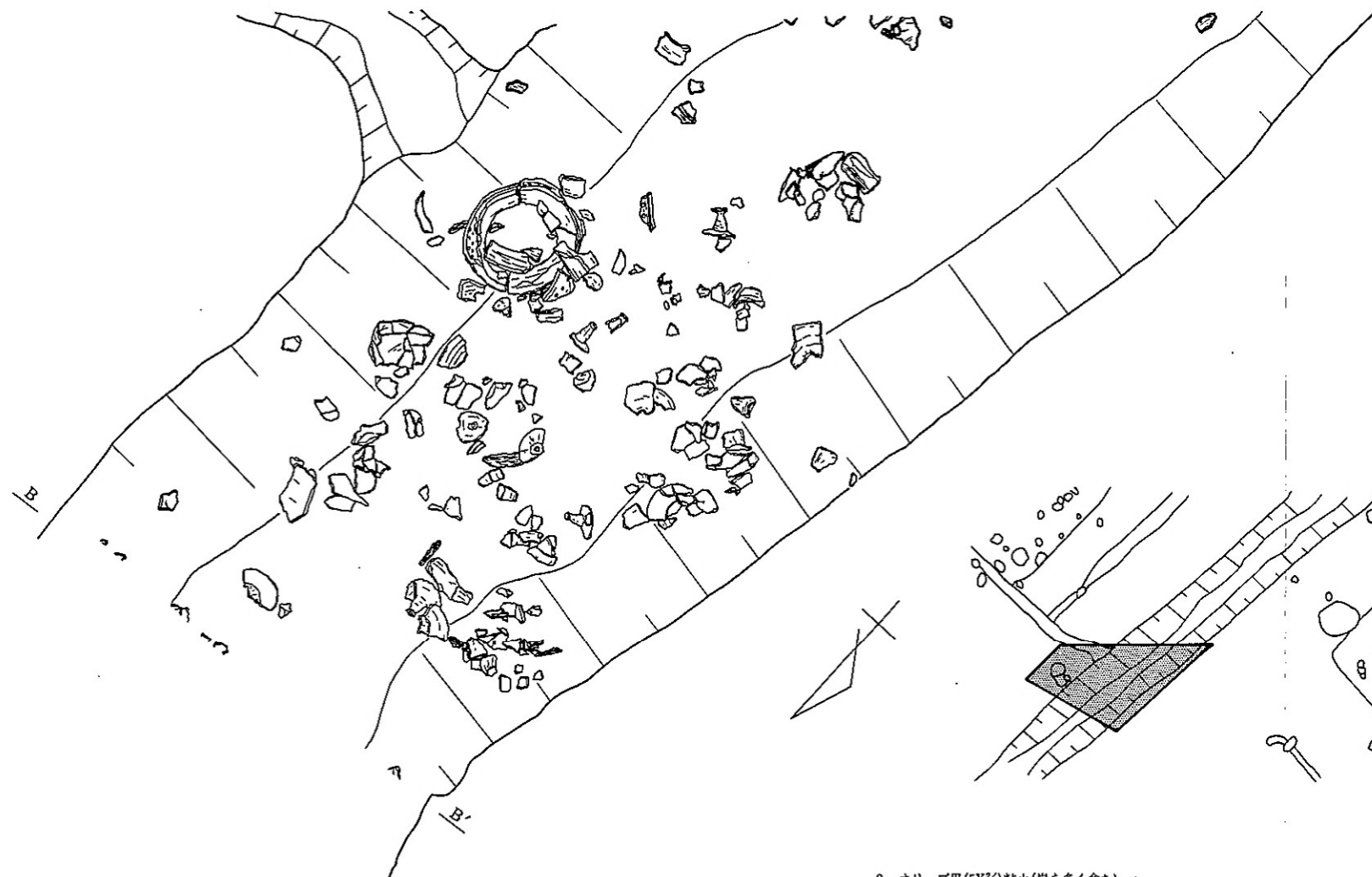
他の壺Aは、体部外面、篋削りの上に横方向の粗い篋磨き調整をかけたものである(第24図-18)。内面は篋削りの上をナデる。壺(その他)の1点は口縁部が短く外反するものである(第26図-34)。肩部の張りも弱い。体部外面はナデ調整、内面は篋削り調整である。外面全体に煤が付着する。

高杯脚台部のうち2点の頭頂部に杯接合時の刻みが残っている(図版69-22)。また、脚台部内面には布目圧痕がみられる(第24図-20、22、25)。

甕C₂の体部外面肩部に叩き目調整らしきものがみえる(第25図-32)。なお、甕Bの体部外面上半部の調整で横方向の上に斜方向の刷毛目を加えたものもある(第25図-33)。また、体部内



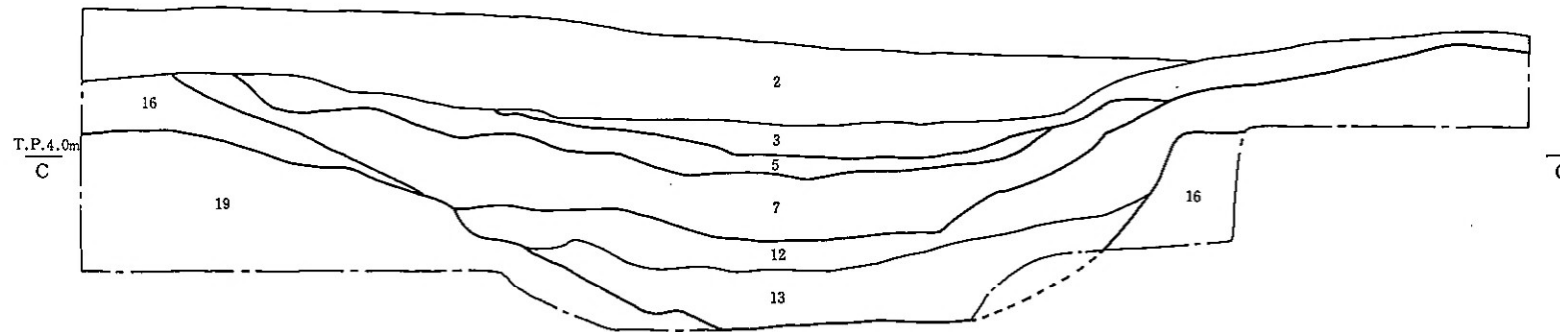
第20図 S D 6003遺構平面図・土層断面図(1)



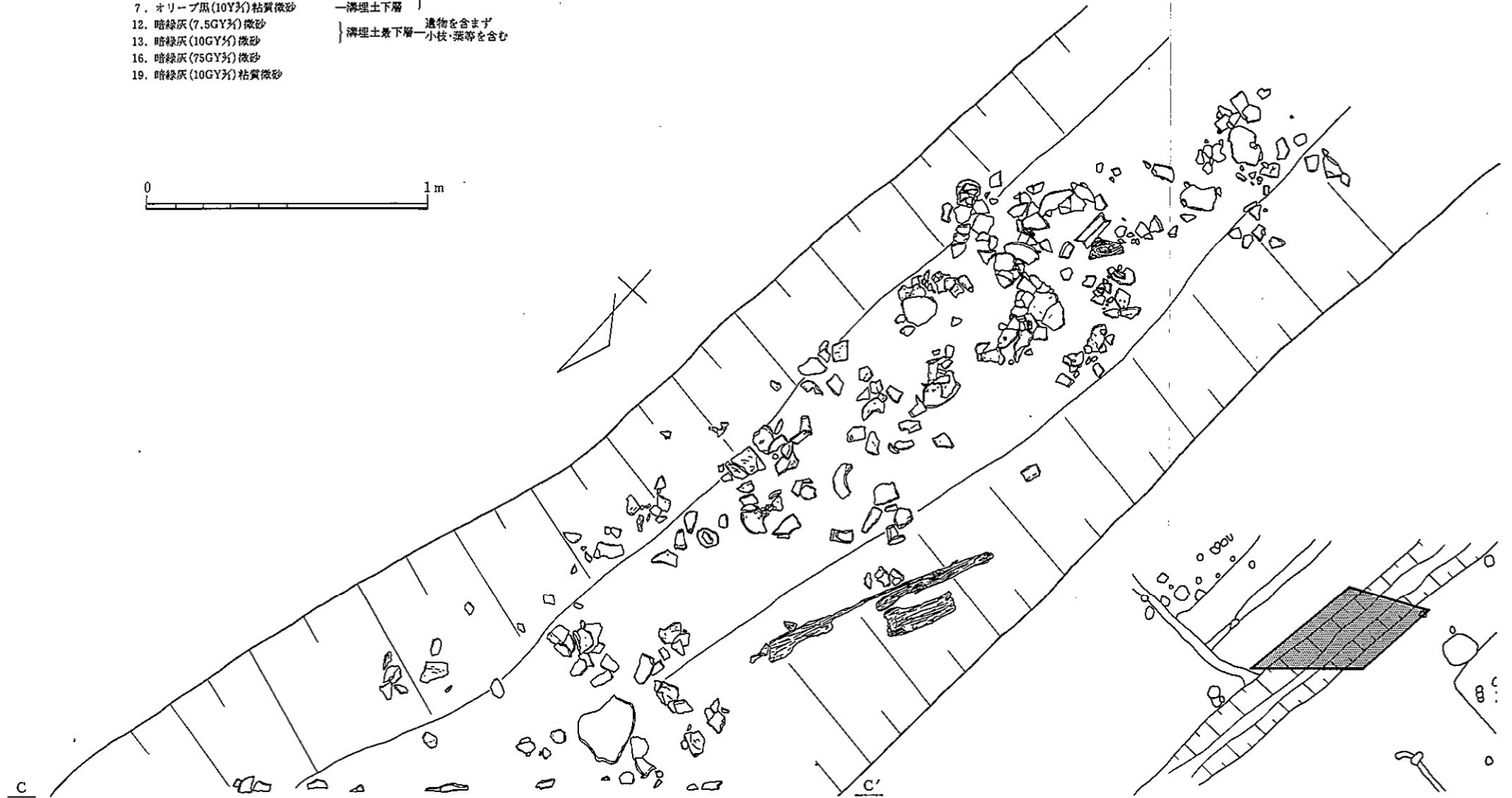
- | | | |
|--|-------|--------------------|
| 2. オリーブ黒(5Y $\frac{2}{2}$)粘土(炭を多く含む) | 溝埋土上層 | 遺物を多く含む |
| 3. 灰オリーブ(5Y $\frac{2}{2}$)微砂 | 溝埋土中層 | |
| 5. オリーブ黒(5Y $\frac{2}{2}$)微砂(炭含む) | 溝埋土中層 | |
| 6. オリーブ黒(5Y $\frac{2}{2}$)微砂 | 溝埋土下層 | 遺物を多く含む |
| 7. オリーブ黒(10Y $\frac{2}{2}$)粘質微砂 | 溝埋土下層 | |
| 8. 暗オリーブ灰(5GY $\frac{2}{2}$)細砂混り粘質微砂 | | 遺物を含まず
小枝・葉等を含む |
| 9. 暗緑灰(7.5GY $\frac{2}{2}$)細砂混り粘質微砂 | | |
| 11. 暗オリーブ灰(2.5GY $\frac{2}{2}$)細砂混り微砂 | | |
| 12. 暗緑灰(7.5GY $\frac{2}{2}$)微砂 | | |
| 13. 暗緑灰(10GY $\frac{2}{2}$)微砂 | | |
| 14. 灰オリーブ(7.5Y $\frac{2}{2}$)粗砂 | | |
| 15. 暗緑灰(7.5GY $\frac{2}{2}$)粘土 | | |
| 16. 暗緑灰(7.5GY $\frac{2}{2}$)粘質微砂 | | |
| 17. 暗緑灰(7.5GY $\frac{2}{2}$)微砂混り粘質微砂 | | |
| 18. 暗緑灰(10GY $\frac{2}{2}$)細砂 | | |
| 19. 暗緑灰(10GY $\frac{2}{2}$)粘質微砂 | | |
| 20. 暗緑灰(10GY $\frac{2}{2}$)粘土 | | |



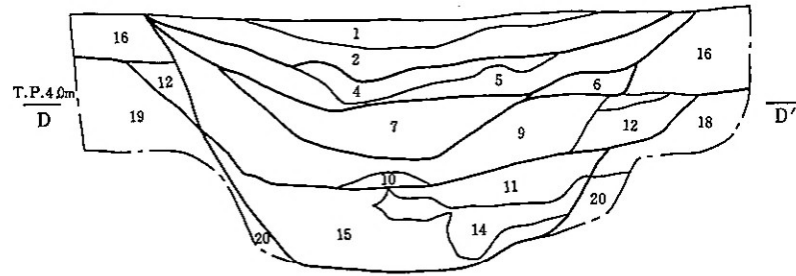
第21図 S D 6003遺構平面図・土層断面図(2)



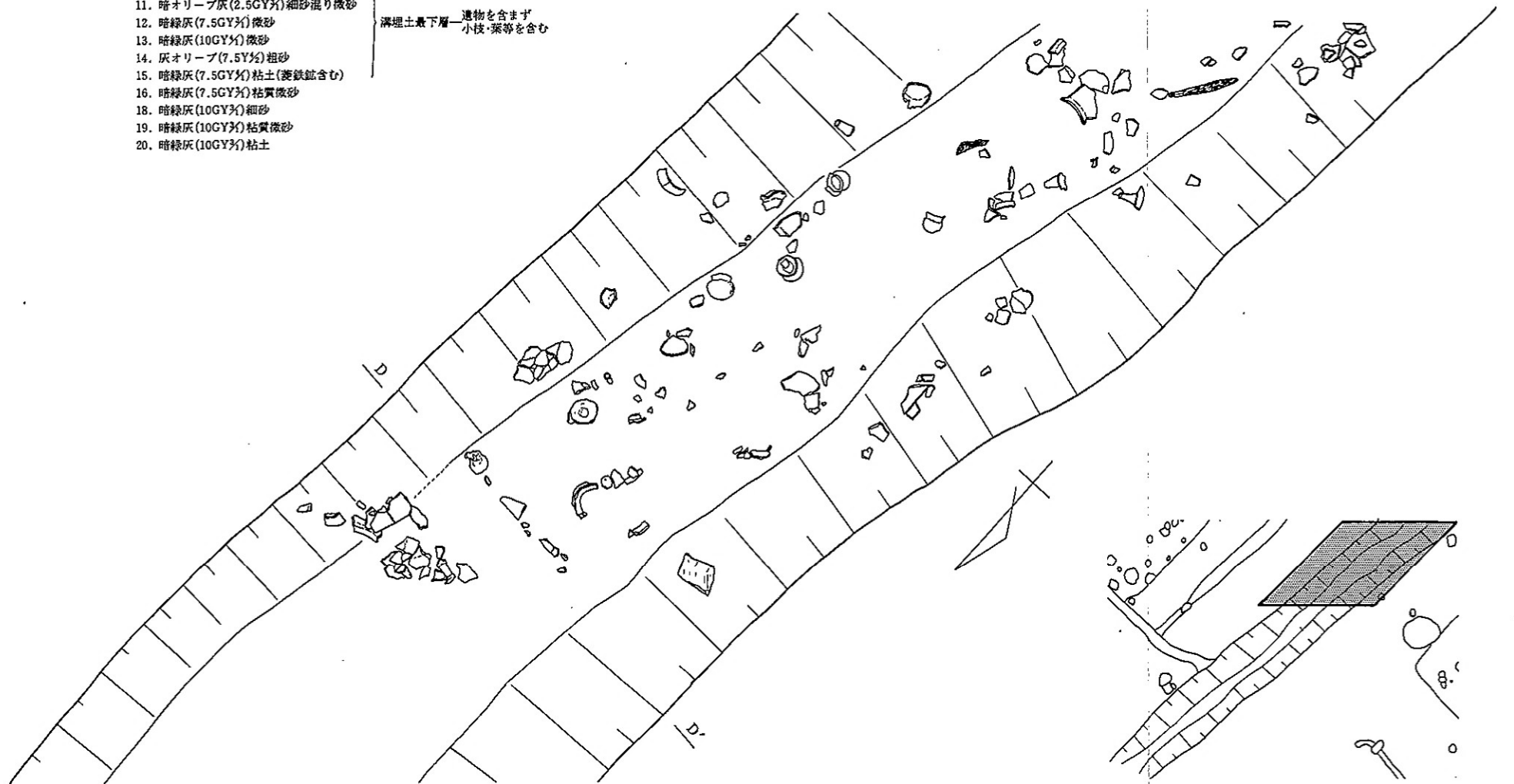
- | | | |
|------------------------|-------|------------|
| 2. オリーブ黒(5Y%)粘土(炭多く含む) | 溝埋土上層 | } 遺物を多く含む |
| 3. 灰オリーブ(5Y%)微砂 | | |
| 5. オリーブ黒(5Y%)微砂(炭含む) | 溝埋土中層 | |
| 7. オリーブ黒(10Y%)粘質微砂 | 溝埋土下層 | } 遺物を含まず |
| 12. 暗緑灰(7.5GY%)微砂 | 溝埋土下層 | |
| 13. 暗緑灰(10GY%)微砂 | | } 小枝・葉等を含む |
| 16. 暗緑灰(75GY%)微砂 | | |
| 19. 暗緑灰(10GY%)粘質微砂 | | |



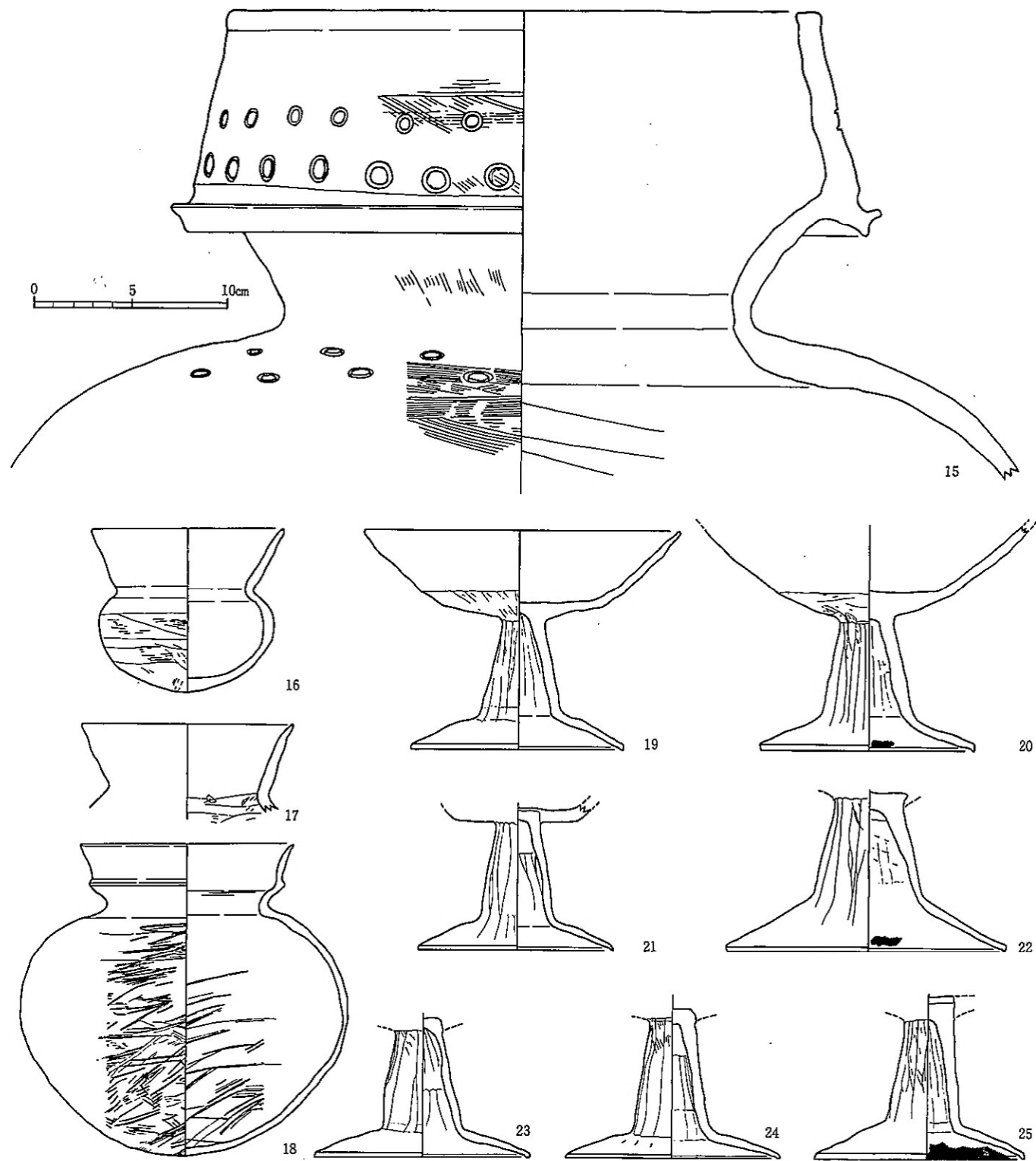
第22図 S D 6003遺構平面図・土層断面図(3)



- | | | |
|---|--------|--------------------|
| 1. オリーブ黒(5Y ₂)粘土(炭を少し含む) | 溝埋土上層 | 遺物を多く含む |
| 2. オリーブ黒(5Y ₂)粘土(炭を多く含む) | | |
| 4. オリーブ黒(5Y ₂)微砂質粘土(炭含む) | | |
| 5. オリーブ黒(5Y ₂)微砂(炭含む) | 溝埋土中層 | 遺物を多く含む |
| 6. オリーブ黒(5Y ₂)微砂 | 溝埋土下層 | |
| 7. オリーブ黒(10Y ₂)粘質微砂 | | |
| 9. 暗緑灰(7.5GY ₂)細砂混り粘質微砂 | 溝埋土最下層 | 遺物を含まず
小枝・葉等を含む |
| 10. 暗緑灰(7.5GY ₂)粘質微砂(菱鉄鉱含む) | | |
| 11. 暗オリーブ灰(2.5GY ₂)細砂混り微砂 | | |
| 12. 暗緑灰(7.5GY ₂)微砂 | | |
| 13. 暗緑灰(10GY ₂)微砂 | | |
| 14. 灰オリーブ(7.5Y ₂)粗砂 | | |
| 15. 暗緑灰(7.5GY ₂)粘土(菱鉄鉱含む) | | |
| 16. 暗緑灰(7.5GY ₂)粘質微砂 | | |
| 18. 暗緑灰(10GY ₂)細砂 | | |
| 19. 暗緑灰(10GY ₂)粘質微砂 | | |
| 20. 暗緑灰(10GY ₂)粘土 | | |



第23図 S D 6003遺構平面図・土層断面図(4)



第24图 S D 6003上層・中層出土土器(1)

面の篋削り調整が底部から体部中半までにしか及んでいないものもある(第25図—26)。

下層から出土したのは、小型丸底壺B 8点、同C 1点、壺B 1点、同体部 1点、鉢A 1点、同C 2点、高杯25点、器台A₂ 1点、甕B 2点、同C₁ 6点、C₂ 2点、計50点を数える(第27図～第30図)。

小型丸底壺は大半がBに属し、Aがない。B 1点の体部に二次的な穿孔が認められる(第27図—43)。鉢Aは小型品である(第27図—48)。口縁部と底部との間に不明瞭な押えがあり、Aと分類した。鉢Cの2点は口縁端部の形状が異なる。このうち1点は高杯A₁かもしれない(第27図—46)。

高杯25点は杯部A₂ 7点、A₃ 2点、脚部A₂ 12点、A₃ 1点、杯、脚が接合する3点はすべて杯A₂+脚A₂というように細分される。杯A₂+脚A₂が典型的形態と認められる。口縁部内外面ともにヨコナデ、脚柱部外面は縦方向の篋ナデ、その上半に杯部接合時の篋削り調整が加えられる。下層出土高杯のうち脚部が遺存した14点中13点の脚台部内面に布目尻痕がみられる。脚柱部内面は横方向の篋削りで綾り目を消したものもある(第29図—64、72)。高杯には、煤が付着したり、二次的な高温のために色調に変化を生じたもの、すなわち加熱された痕跡をもつ例が半数弱を占める。出土遺構によって生じた特徴であろうか。

器台A₂は二重口縁のものである(第27図—44)。受部下半と脚台部篋ナデ調整の上半に、高杯の場合と同じように受部、脚台部の接合部に生じた篋削り調整がみられる。

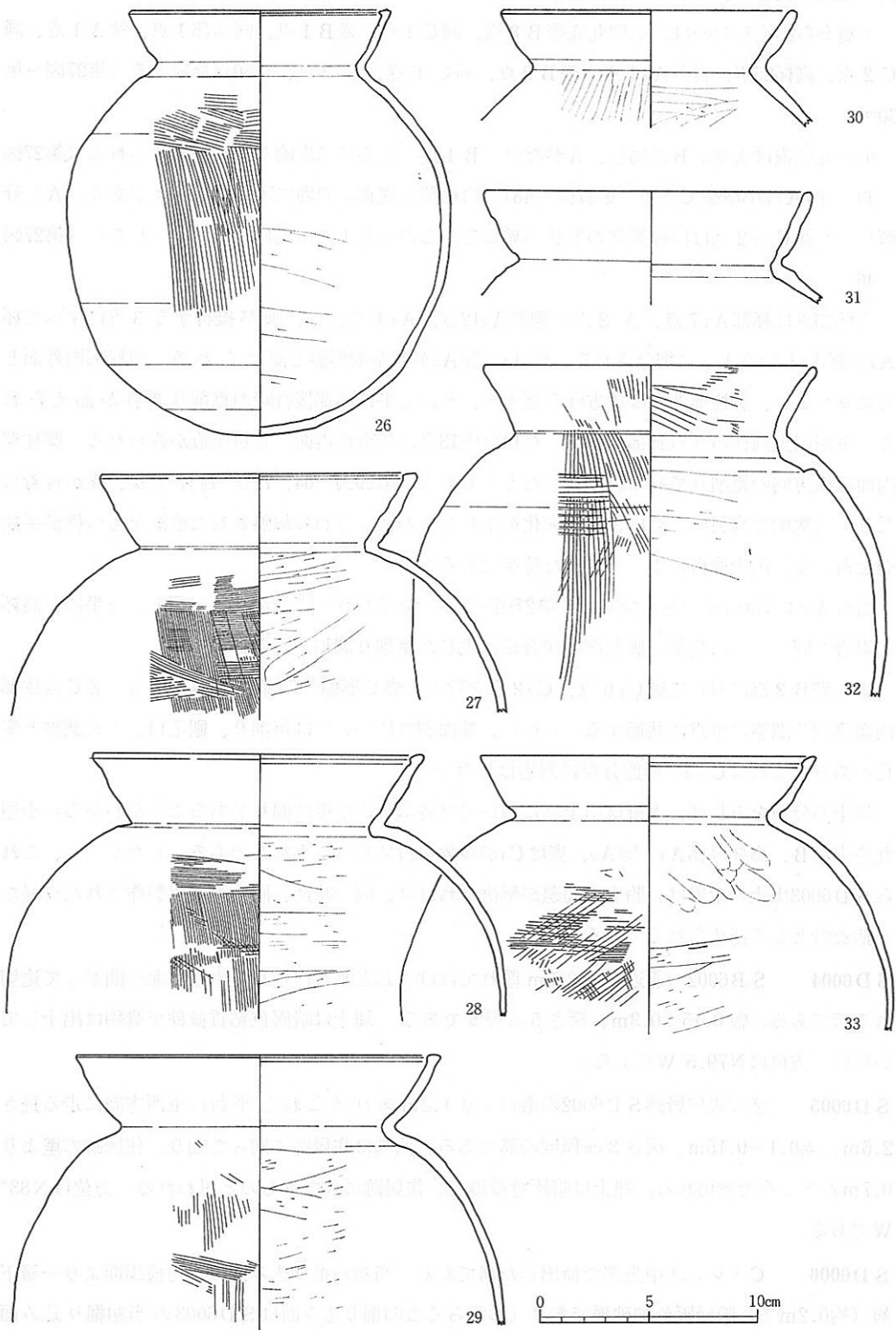
甕も甕B 2点に対して甕C₁ 6点、C₂ 2点を数え、甕C形態への集中がみられる。甕Cは体部内面篋削り調整は全点に共通する。しかし、外面調整については篋削り、刷毛目、ナデ調整と変化があり、これはC₁～₃の形態分類に対応はしない。

以上の分類をみれば、本遺構出土品においては各器種の形態に偏りがあることがわかる。小型丸底壺はB、高杯は杯A₂+脚A₂、甕はC₁が多数を占めるということである。したがって、これらS D 6003出土の土器は、胎土の問題が解決されれば、同一時期、同一地域で製作された良好な一括資料として認められるであろう。

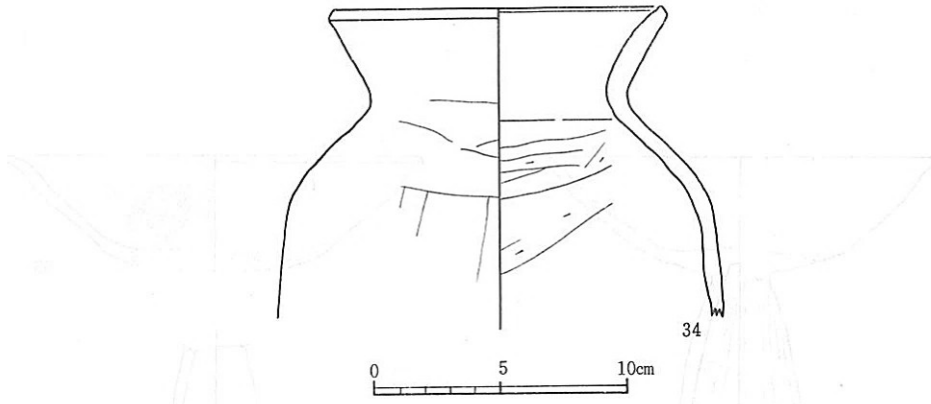
S D 6004 S B 6002の北辺から2.5m 離れてほぼこれと平行に走り、東端で北へ曲がって途切れる溝である。幅0.15～0.3m、深さ5 cm程度である。埋土は暗灰色粘質微砂で遺物は出土していない。方位はN79.5°Wである。

S D 6005 竪穴式住居跡S B 6002の南辺より1.2m 離れてこれと平行に東西方向に走る長さ2.6m、幅0.1～0.15m、深さ3 cm程度の溝である。西端は住居跡に向かって曲り、住居跡の壁より0.7mのところまで途切れる。埋土は暗灰色微砂で、住居跡に伴うものと思われる。方位はN83°Wである。

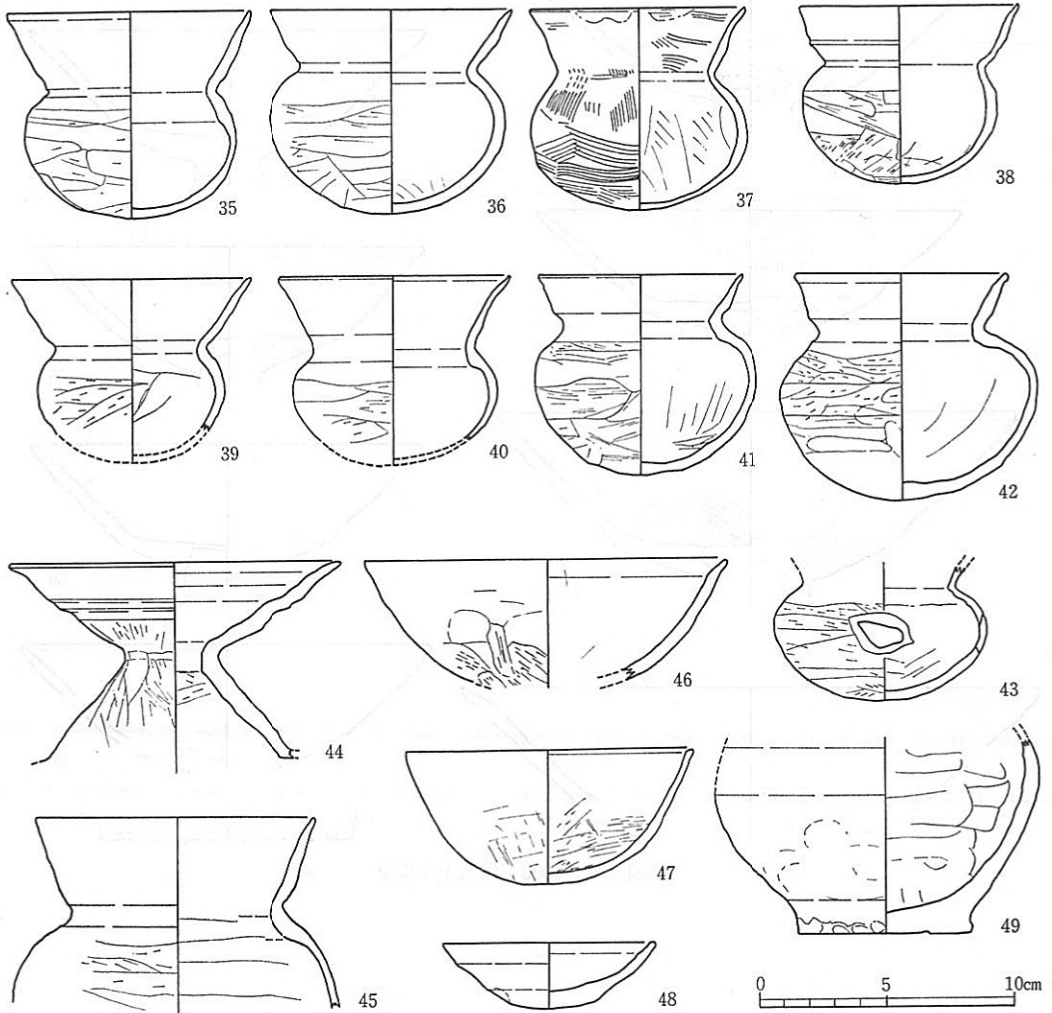
S D 6006 C トレンチ中央部で検出した溝である。当初の掘り込み面は遺構検出面より一層下層(約0.2m下)暗緑灰色細砂層であり(おそらくこの掘り込み面はS D 6003の当初掘り込み面と同一面と思われる。)、図示した溝の平面は最終堆積を掘り上げた際の線であるが、断面観察に



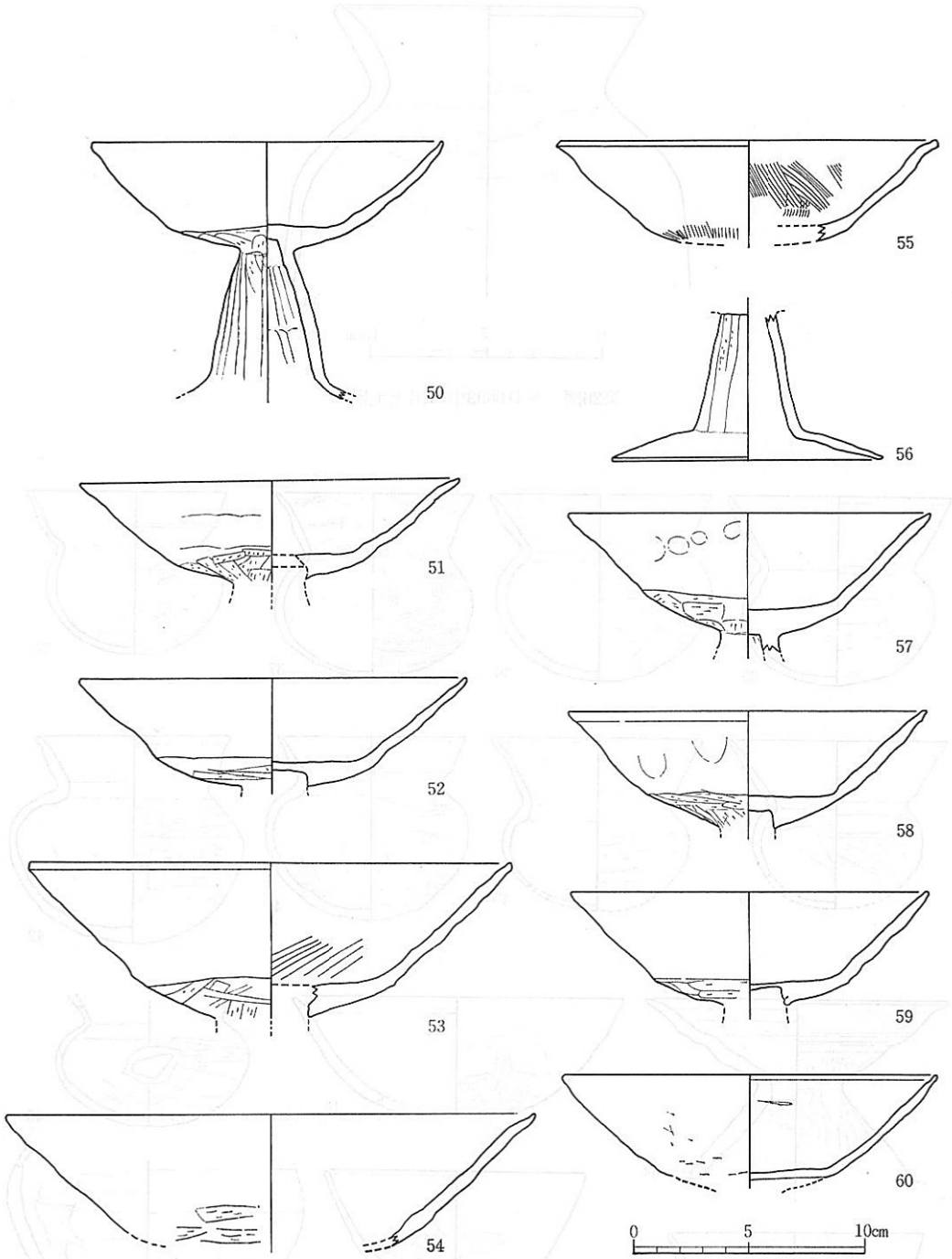
第25图 S D 6003中層出土土器(2)



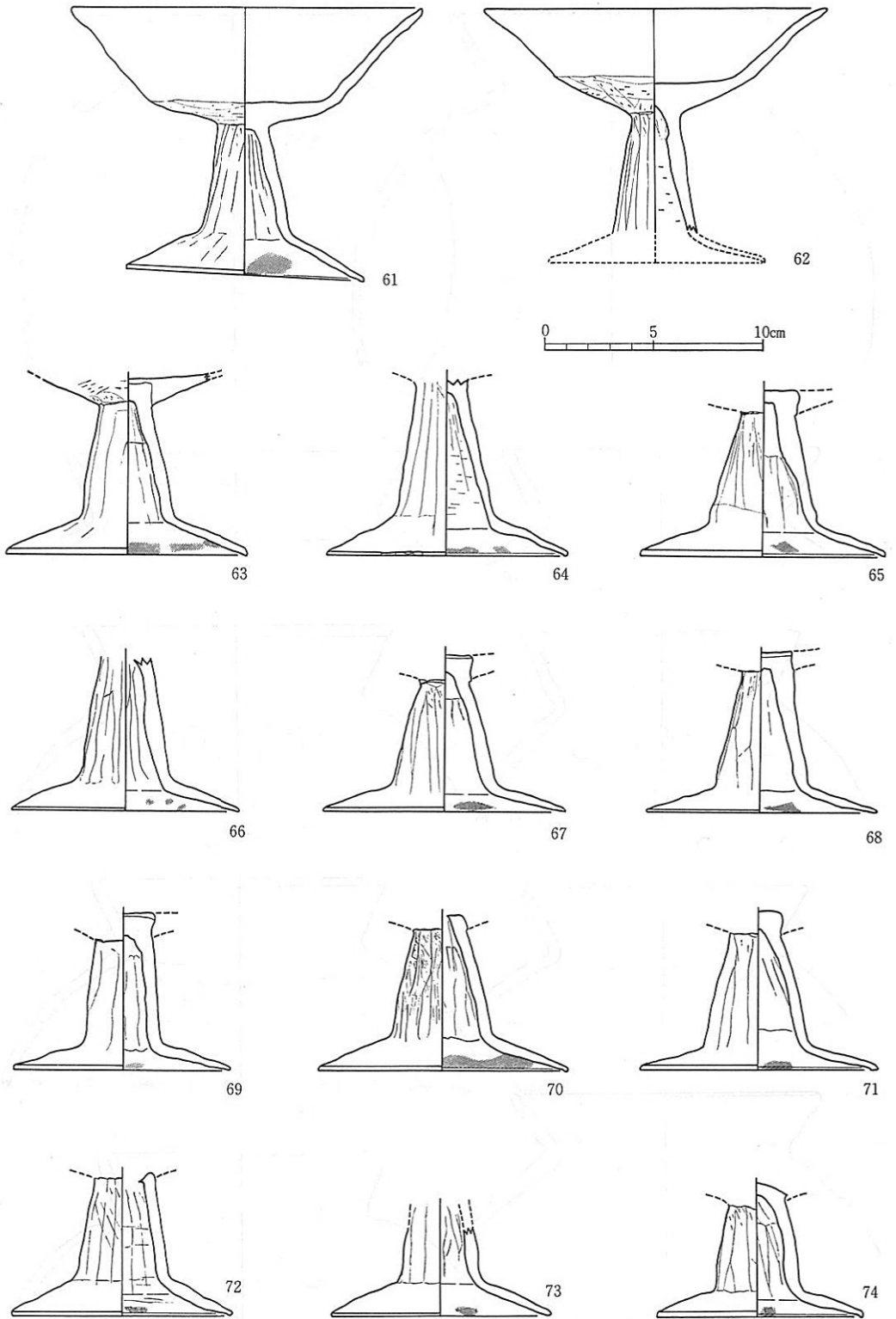
第26図 S D 6003中層出土土器(3)



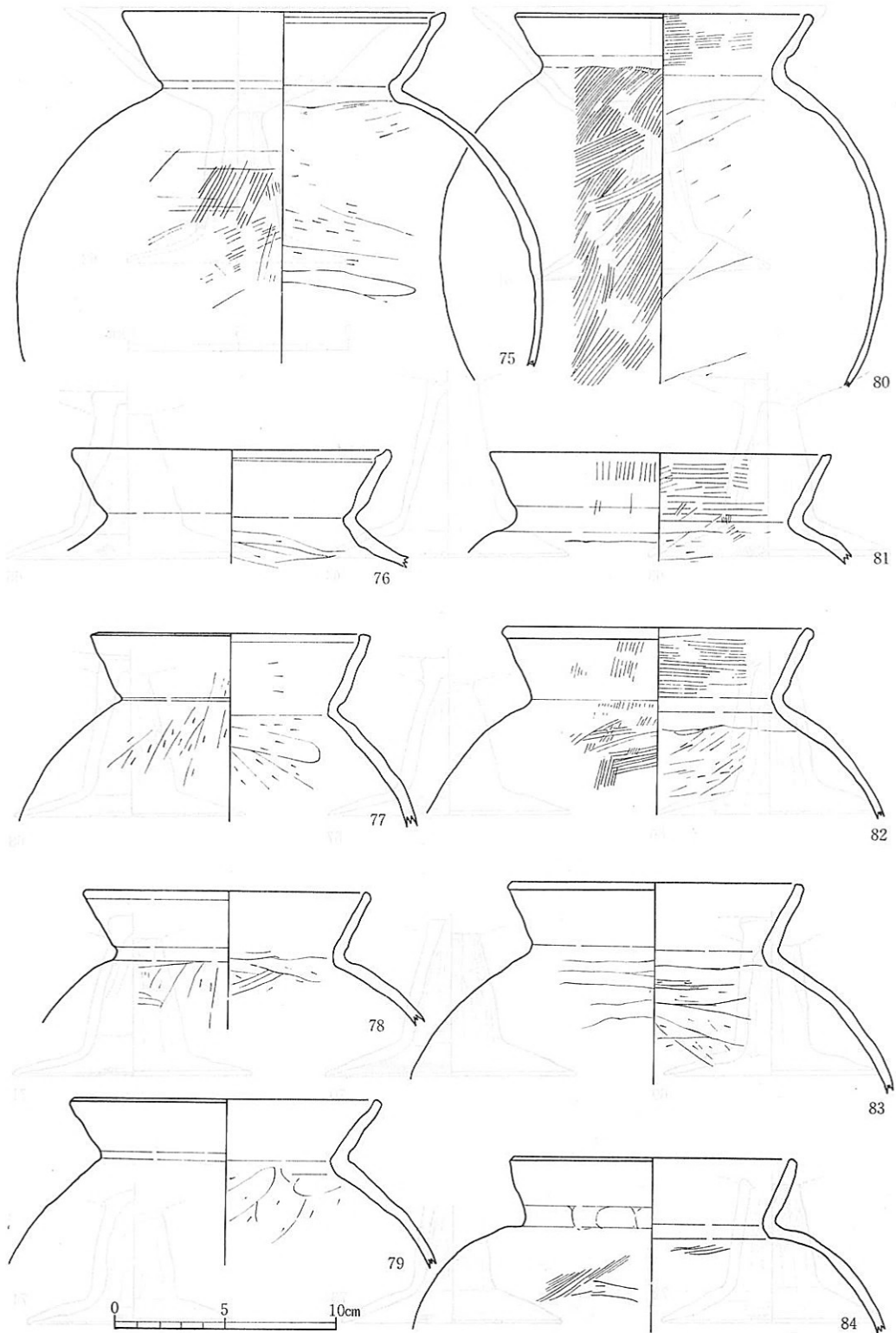
第27図 S D 6003下層出土土器(1)



第28図 S D 6003下層出土土器(2)



第29図 S D 6003下層出土土器(3)



第30图 S D 6003下層出土土器(4)

よれば、掘削当初の溝は幅0.5m、深さ0.15m程度のもと思われる。北側は住居跡S B6002に切られているが、住居跡の底面で溝の輪郭が表われており、北に向ってさらに伸るものである。方位はN17°Eである。

S D6007 Cトレンチほぼ中央部S K6007から西に向って伸びる幅0.35m、長さ1.9m、深さ0.1mの断面皿状の浅い溝である。埋土は暗オリーブ灰色微砂である。遺物は出土しなかった。S K6007に切られている。

S D6008 Cトレンチ南半部で検出した、西にやや膨む弧状を呈しながら北へ伸びる溝である。幅0.3~0.4m、深さ0.1m、埋土は暗灰色粘質微砂、遺物は土器小片2点が出土したのみである。S B6004を横断するが、同時に存在したかどうかは不明である。この溝を挟んで小柱穴(P.6100・6101)が掘られている。

S D6009 Cトレンチ南半部をほぼ南北に伸びる溝である。幅0.7~1.1m、S D6010と接した部分より北でやや幅が広がる。深さは0.1~0.2mである。埋土は上層がオリーブ黒色細砂混粘土、下層がオリーブ黒色粘土で、上層及び溝を覆う包含層中から遺物が多く出土した。また、溝内下層より長さ1.7m、太さ0.1m、先端を削ったと思われる丸太状の木杭が出土した。方位はN13°Eである。

S D6009出土土器 (第31図) 土器片約100点が出土。

高杯の杯A₂1点、脚A₂2点、脚B₁1点、器台A₃1点、甕B3点、甕C₁1点、甕C₂2点、計11点を抽出する。

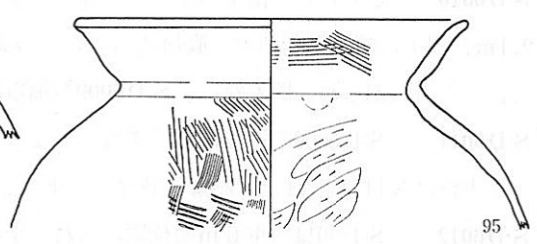
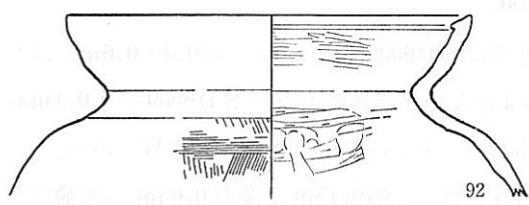
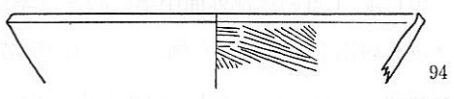
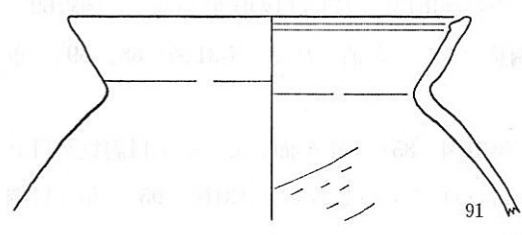
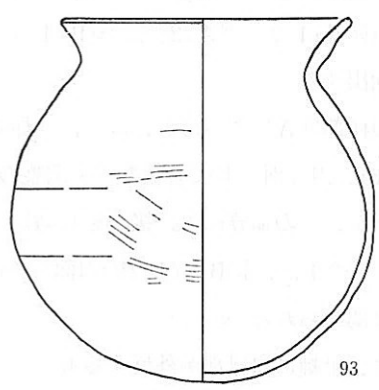
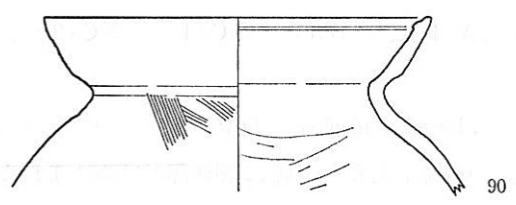
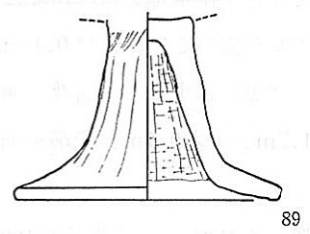
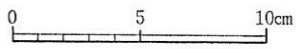
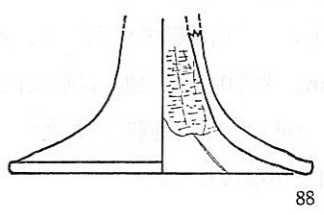
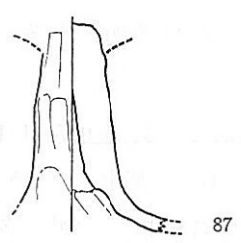
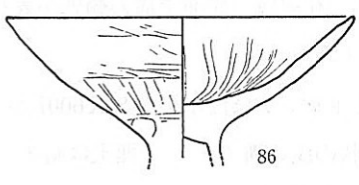
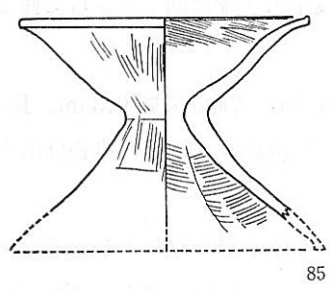
高杯の杯部はAに含めたが、ほとんど杯底部と口縁部の屈曲部が目立たないものである(第31図—86)。内外面ともに筋状のナデ調整の原体の痕跡が残る。杯底に脚柱部がはめ込まれるものであるが、この部分には、接合を有効にするための脚頂部への刻み目の圧痕が残る(図版69—86)。脚A₂の1点、脚B₁の1点の内面は篋削り調整で絞りが消される(第31図—88、89)。布目圧痕は認められない。

器台は、単純に口縁部が外反するものである(第31図—85)。内外面ともに刷毛目調整が目立つ。甕C₂の1点の体部外面中半に叩き目調整かと思われるものがある(第31図—95)。叩き目調整は包含層出土の1点にも例がある(図版67—366)。

S D6010 Cトレンチ南東隅より北へ伸び、北端はS D6009につながる。幅0.4~0.6m、深さ0.1m、埋土は暗緑灰色粘土で遺物はほとんど含まれない。溝底の高さはS D6009より0.1m高く、この溝が掘られて間もなく、S D6009が掘られたと考えられる。方位はN16°Wである。

S D6011 S D6009の西側にはほぼ平行してまっすぐ伸びる幅0.15m、深さ0.05mの小溝である。方位はN14°E。埋土は暗緑灰色粘土であり、遺物はまったく出土しなかった。

S D6012 S D6011の東6mの位置にこれと平行に掘られた幅0.1m、深さ0.05m、長さ2.7mの小溝である。埋土もS D6011と同じ暗緑灰色粘土であり、遺物も出土していない。方位はN13°Eである。



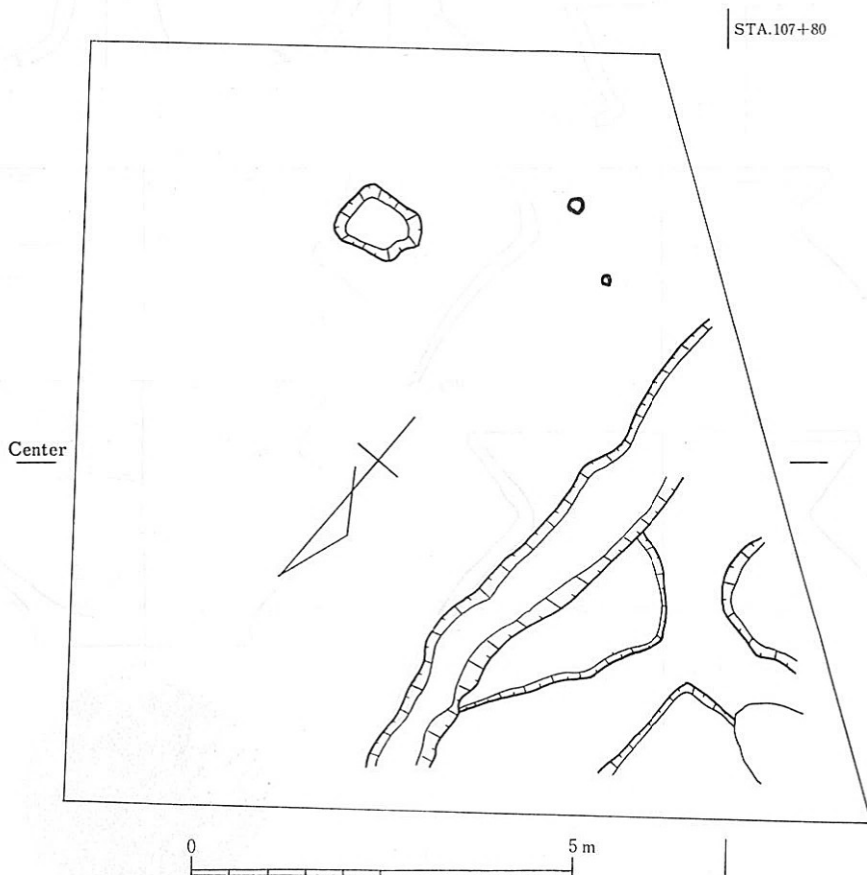
第31图 SD6009出土土器

S D6013 C'トレンチで検出したL形の溝である。検出時点では切り合いが確認できなかったために同一番号を付したが、東西が別の溝である可能性がある。トレンチ南端から東へのびる溝をS D6013(E)、北へのびる方をS D6013(N)と仮称しておく。

S D6013(N)は断面観察によって検出面よりさらに上層からの掘り込みであることが確認されたため、図示した溝幅については不正確である。おそらく2m以上の幅をもつもので、深さ0.4m、溝底の高低から考えて南から北へ流れたものと思われる。埋土はオリーブ灰色～オリーブ黒色粘土である。

S D6013(E)はやや東に弧状を呈し、北東にのびる溝である。南寄りでは幅0.6m、深さ0.15m、北へ向って広がり幅1.2～1.4m、深さ0.15mをはかる。埋土は上層が炭細片を含むオリーブ黒色微砂質粘土、下層が灰オリーブ色細砂である。この細砂は南端では検出されていないことから、S D6013(E)はS D6013(N)に切られている可能性が高いと考えられる。S D6013(E)は流れの方向から考えて、Cトレンチ南端で検出した溝S D6009につながるものであるかもしれない。

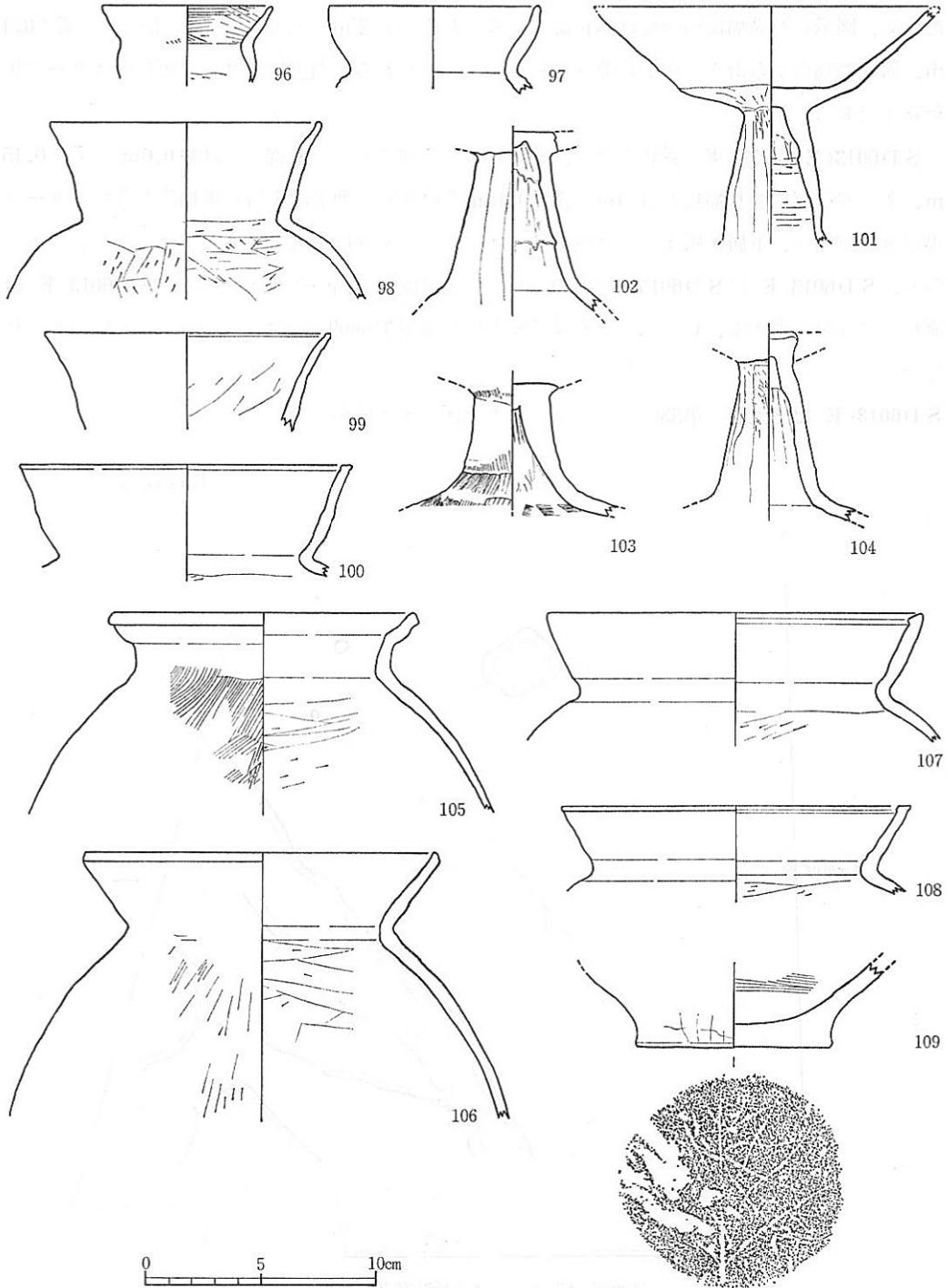
S D6013(E)出土土器 (第33図) コンテナ一杯の土器片が出土。



第32図 C'トレンチ古墳時代前期遺構面

小型丸底壺C 1点、壺B 2点、同D 1点、同（その他） 1点、高杯杯A₂+脚A₂ 1点、脚A₂ 2点、同脚A₃ 1点、甕B 2点、同C₁ 1点、同C₃ 1点、底部 1点、計14点を抽出する。

小型丸底壺の体部外面調整は不明である（第33図—96）。壺Bは外面に煤の付着する例が多い。この壺Bも典型例である（第33図—98）。



第33図 S D6013出土土器

高杯脚A₂の1点の柱部内面に横方向の篋削り調整がみえる(第33図-101)。他に、柱部内面が調整されずに粘土紐の接合痕が残るものがある(第33図-102)。

甕については、壺のように短く直立したのち外反する口縁部をもち、しかも体部に煤の付着が認められない1点も含めている(第33図-105)。甕C₁の1点の体部外面は篋削り調整である(第33図-106)。削り方が高杯脚柱部外面にみられる杯脚接合時の再調整に似る。なお、平底底部の遺存品については、底面に二重の木の葉圧痕がみられる(第33図-109)。弥生時代の混入品の可能性がある。

S D 6013(N)出土土器 非常に小片ではあるが、須恵器が1点出土する。口縁部の一部であり、したがって器種、時期ともに特定できない。本遺跡出土の布留式土器はこれ以外に須恵器を伴っていない。あるいは、混在の可能性もある。

S D 6014 Cトレンチ南西隅で検出した幅1.9m、深さ0.2mの溝である。方位はN13°E、埋土はオリブ黒色粘質微砂である。

S D 6014出土土器(第34図) 土器片8点が出土。甕C₂1点のみ抽出する。

外面、口縁部から体部にかけて縦方向の刷毛目調整を施す。内面の「く」の字に屈折した頸部以下を篋削り調整することは、甕Aの手法と共通する。

S D 6015 Dトレンチ北端をはしる幅0.7~2.0m、深さ0.2~0.3m、2段に掘り込まれた溝で北端はS K 6019に切られている。埋土は暗緑灰色細砂混粘質微砂である。

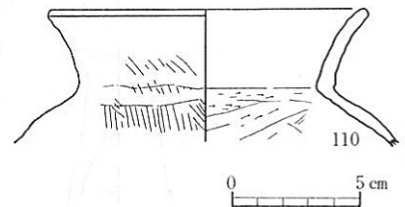
S D 6015出土土器(第35図) 土器片10点が出土。壺Aの口縁部破片1点のみ抽出する。他は甕である。口径は、小破片のために推定復原による。煤の付着は認められない。あるいは甕に分類した方がよいかもしれない。

S D 6016 Dトレンチ中央部で検出した幅0.8~0.9m、深さ0.3m、2段に掘り込まれた溝である。埋土は上層が黒色微砂混粘土、下層は黒色粘質微砂である。方位は他の遺構と異なりN 58.5°Wである。先端は中世長瀬川河流によって削られているが、南西方向に続いていったと思われる。

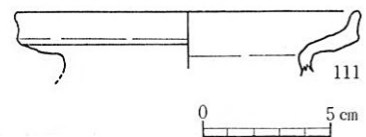
S D 6017 S D 6016の南に平行して走る溝である。検出時は0.5m程離れていると考えたが、断面観察ではほぼ接して切り込まれていたようである。幅1.2m、深さ0.2mで埋土は黒色粘質微砂である。

S D 6018 Dトレンチ西寄り、土壙墓S X 6004、S X 6005間に掘り込まれた長さ2.8m、幅0.2m、深さ0.1mの小溝である。埋土は黒色細砂混粘質微砂で、遺物は出土していない。両墓壙を画する機能を果していたと考えられる。

S D 6019 Cトレンチで、前述のS D 6013等の遺構を検出した面より0.2m下層より検出された溝である。方向は



第34図 S D 6014出土土器



第35図 S D 6015出土土器

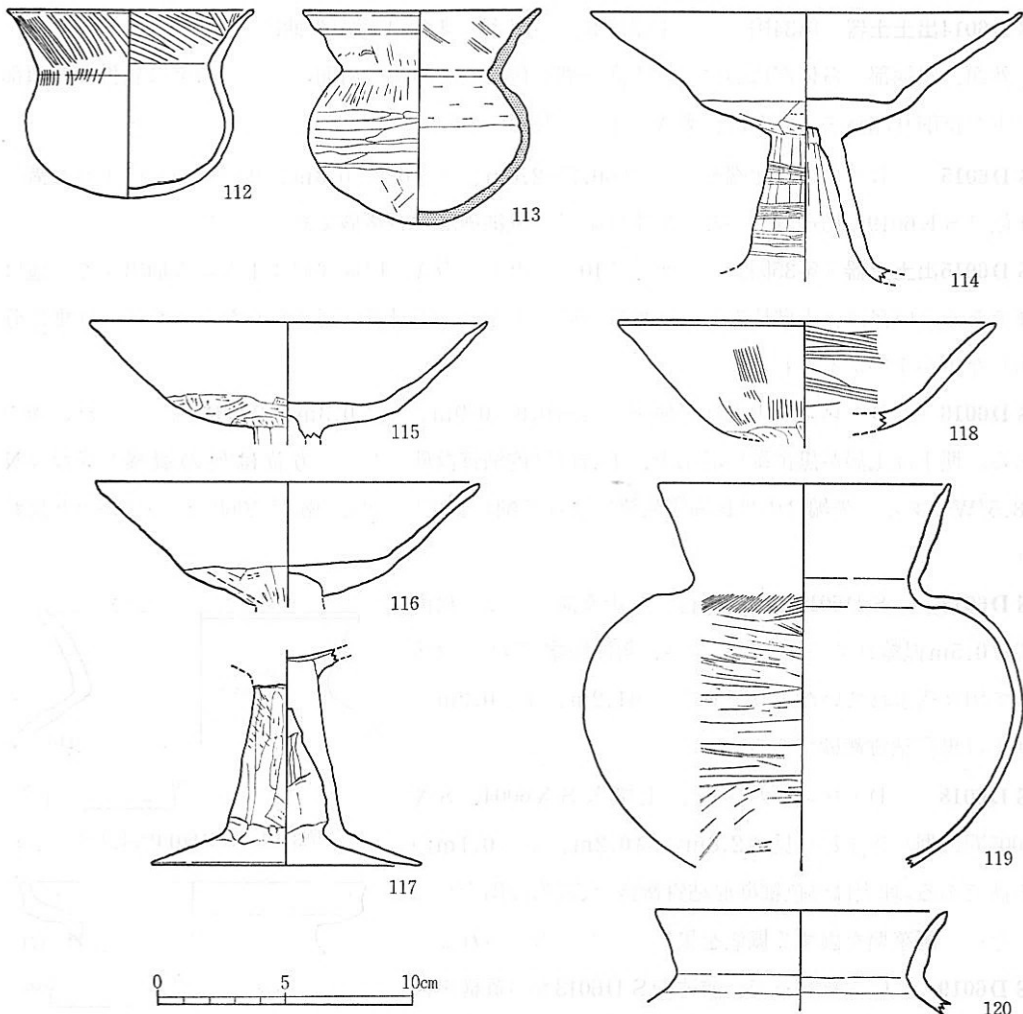
S D 6013(N)とはほぼ一致するが、断面観察によって別個の溝であることが確認された。幅0.6～1.0m、深さ0.2m、埋土は上層が土器・木片を含む黒色粘土、下層は灰色粘土である。

S D 6019出土土器 (第36図) 土器破片約100点が出土。

小型丸底壺C 1点、同(その他) 1点、壺B 1点、高杯杯B+脚A₁ 1点、杯A₂ 2点、A₃ 1点、脚A₂ 1点、甕C₂ 1点、計9点を抽出する。

小型丸底壺Cは、頸部の屈折が目立たない。口縁部から体部へとなだらかに続くものである(第36図-112)。小型丸底壺(その他)は二重口縁をもつ(第36図-113)。本遺跡出土小型丸底壺の中で二重口縁をもつのは、この1点だけである。外面、頸部以下は縦方向の篋削り調整を施し、体部中半にはその上に横方向の篋削りあるいは篋ナデ調整が加わる。底部がかすかに作られ、正立に有効である。生駒西麓産の胎土をもつ。

壺Bは頸部の屈曲が大きく、肩部が張り、丸底へと続く体部をもっている(第36図-119)。外



第36図 S D 6019出土土器

面には煤の付着がみられる。

高杯杯Bは、脚A₁と接合できる（第36図-114）。杯部の屈折部は外面ではあまり目立っていない。脚A₂の1点は脚柱部内面に粘土紐接合痕が残る（第36図-117）。

S D 6020 Eトレンチ北端 S B 6005の北東隅から彎曲しながら東へ伸びる溝である。幅0.2～0.3m、深さ0.05m、埋土は灰色粘土である。

S D 6021 Eトレンチ中央部で検出した。掘り込み面は包含層上面である。掘り込み面での幅1.3m、掘り込み面からの深さ0.4m、底面は幅0.4mの平坦面となる。埋土は上層が灰色粗砂混粘土、下層が暗灰色粘土である。方位はN40.5°Wで、古墳時代前期遺構面で検出した溝と大きくずれている。

S D 6022 S D 6021の南で検出した南東～北西方向の小溝である。幅0.2～0.3m、深さ0.1m、埋土は暗灰色粘質微砂である。

井戸

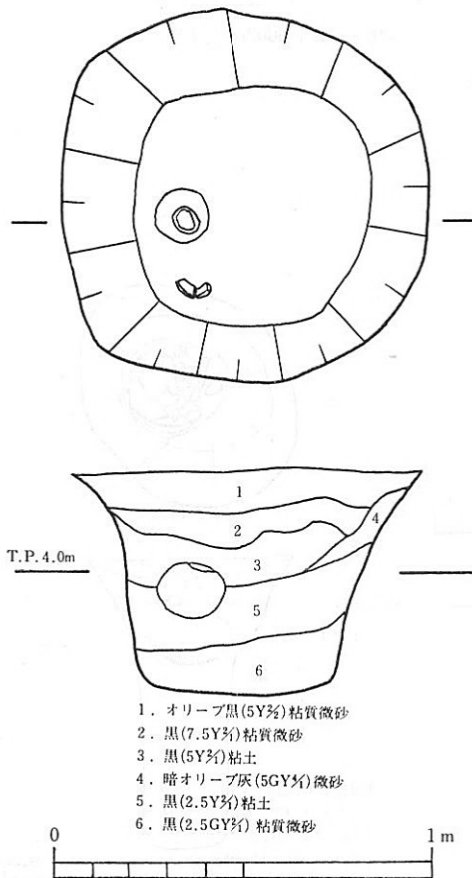
S E 6001 Cトレンチ中央部で検出した平面は円形で、直径0.95m、深さ0.6mの素掘り井戸である。埋土は4層に分かれる。底より0.2m浮いた状態で口縁部だけが欠けた壺1点が出土した。

この井戸からはこの土器の他には1片も出土していない。

S E 6001出土土器（第38図） 壺C 1点が出土する。かすかに平底が認められる。しかし正立はできない。口縁部内外面、体部内面ともにヨコナデ調整。体部外面、頸部近くについては横方向の粗い篋磨き、以下底部まで縦方向の粗い篋磨き調整を施す。内底には細かい刷毛目調整がみられる。

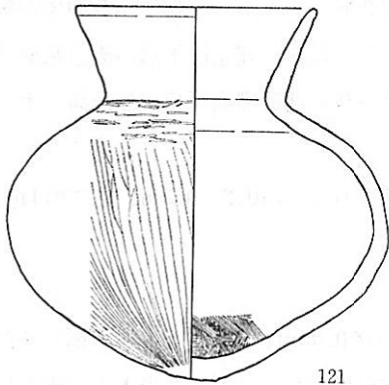
S E 6002 Dトレンチ中央部やや北寄りで検出した素掘り井戸である。平面楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.4m、深さ0.65m。遺物は1片も出土しなかった。この位置の下層には小さな自然流路があるため、発掘時においても湧水が多かった。

S E 6003 Eトレンチ北端で検出した素掘り井戸である。平面は楕円形で、長径0.65m、短径0.55m、深さ0.75m。底から0.5mは垂直に掘り込まれ、上部で漏斗状に開く。底から0.5m浮いた位置に甕体部が斜めに割れた

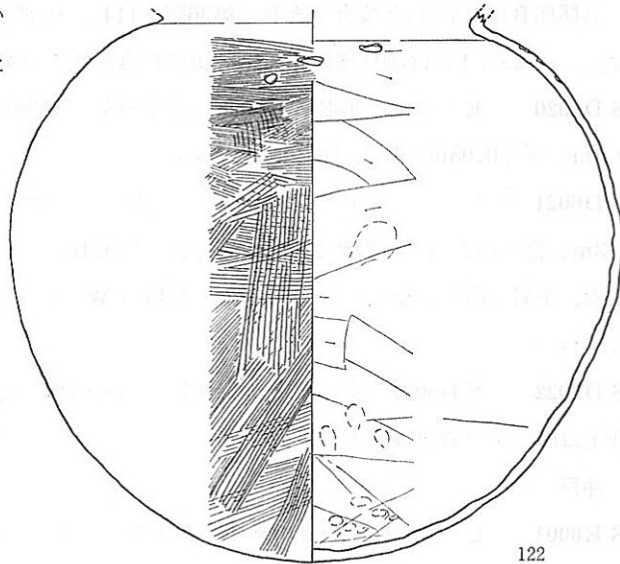


第37図 S E 6001遺構平面図・土層断面図

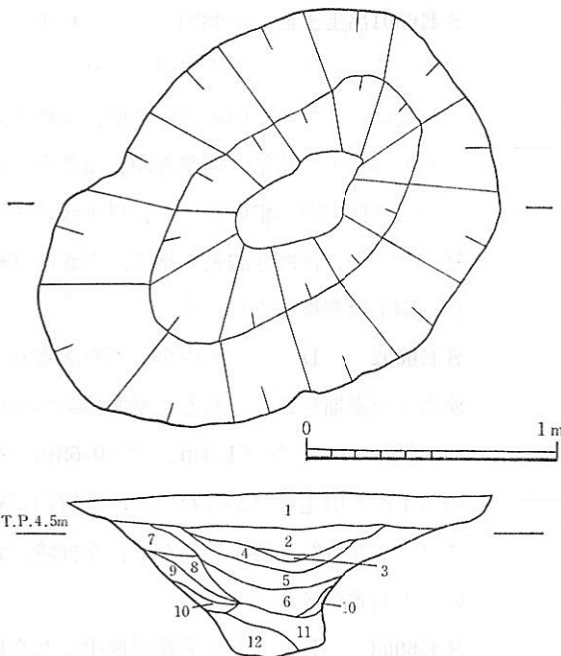
状態で出土した。この甕の上下で埋土が異なり、下層はよごれのない細砂、上層は黒色粘土である。従って、この井戸は甕を底に敷いて使用し、使用当時のままで埋没したものと考えられる。



第38図 S E 6001出土土器



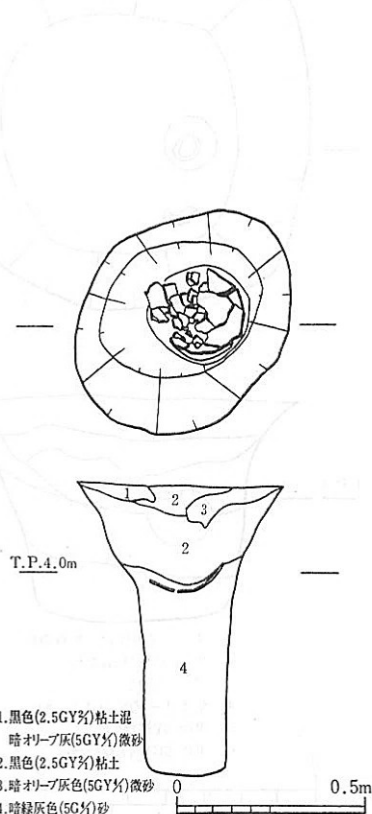
第39図 S E 6003出土土器



T.P.4.5m

1. 黒(5Y²/)微砂質粘土
2. 灰オリーブ(7.5Y²/)微砂
3. 黒(5Y²/)細砂混り微砂質粘土 (2を混える)
4. 黒(5Y²/)細砂混り微砂質粘土
5. 黒(2.5GY²/)粘土(炭化物を多く含む)
6. 黒(2.5GY²/)粘土(炭化物を少量含む)
7. オリーブ黒(7.5Y²/)粘質細砂
8. オリーブ黒(7.5Y²/)細砂
9. 灰(10Y²/)細砂
10. 暗オリーブ灰(2.5GY²/)微砂
11. 暗緑灰(7.5GY²/)微砂混り黒(7.5Y²/)粘質微砂(炭化物を含む)
12. オリーブ黒(10Y²/)細砂

第40図 S E 6002遺構平面図・土層断面図



T.P.4.0m

1. 黒色(2.5GY²/)粘土混り暗オリーブ灰(5GY²/)微砂
2. 黒色(2.5GY²/)粘土
3. 暗オリーブ灰色(5GY²/)微砂
4. 暗緑灰色(5G²/)砂

第41図 S E 6003遺構平面図・土層断面図

S E 6003出土土器 (第39図) 甕B 1点が出土する。口縁部は欠失する。頸部の屈曲部、肩の張る丸底の体部、体部外面上半部の横方向の刷毛目などから甕Bと同定できる。体部中半には横方向の上にさらに部分的に縦方向の刷毛目調整が施される。体部内面は篋削り調整である。しかし下半以下に粘土紐接合時に生じた指跡圧痕が目立つ。頸部の一ヶ所に横方向の刷毛目調整原体を左下り斜方向に3回押し当てたような記号文が確認できる(図版56—122)。

土坑

S K 6001 Cトレンチ北端S B 6001の北辺から0.5m離れた位置で検出した一辺のみ丸く膨らむ方形の土坑である。長辺1.0m、短辺0.7m、深さ0.15m。遺物は出土していない。

S K 6002 CトレンチS B 6002の北東隅を一部切って掘り込まれた浅い皿状の土坑である。平面楕円形で、長径1.2m、短径1.0m、深さ0.1m。埋土は炭化木片、土器小片を多く含む炭混り黒色粘土で、底面はわずかながら焼土が認められた。屋外炉と考えられる。

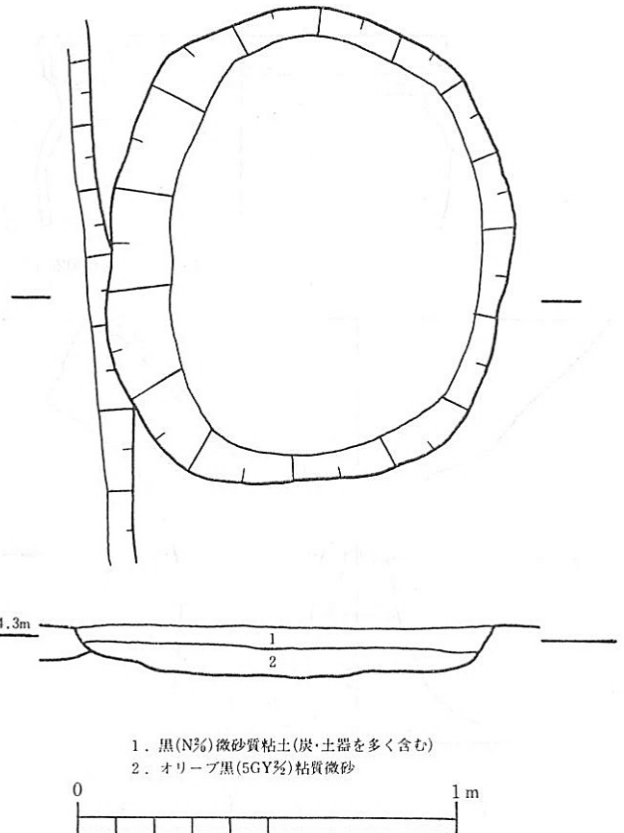
S K 6002出土土器 (第43図) 土器片約300点が出土。鉢A、または甕に分類できるもの2点、高杯脚A₂1点、器台A₁1点、計4点を抽出する。

二重口縁のものは2点ともに煤が付着しない。したがって鉢Aとしたが、あるいは甕かもしれない。うち1点の内面にかすかな黒変がみられる。使用時のものかもしれない(第43図—123)。

器台A₁は、受部の形状からみれば第31図—85のように少し外反する口縁部をもつものであろう(第43図—125)。外面、横方向の篋磨き調整が著しい。

S K 6003 S B 6002の南西隅を切って掘り込まれた皿状の浅い土坑である。掘り込み面はS B 6002の掘り込み面より0.2m上である。平面円形で、径1.0m、深さ0.3m。埋土はS K 6002と同様に炭を多く含む粘土で、やはり屋外炉と考えられる。

S K 6003出土土器 (第44図) 土器片約10点が出土。高杯杯A₂1点、脚B₂1点、甕B 1点、計3点を抽出する。杯部は杯A₂と分類したが、口縁部が深く、比較的口縁部と底部の屈曲部が目立つ



第42図 S K 6002遺構平面図・土層断面図

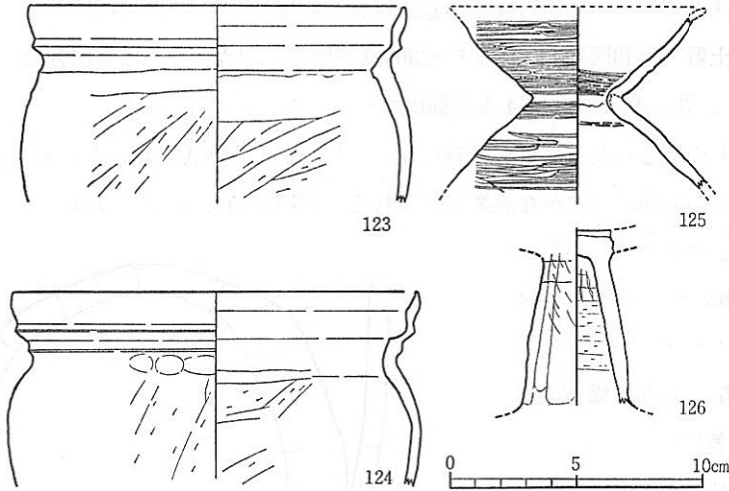
ものである。甕Bの肩部に凹線で×印を描く記号文がみられる。

SK6004 SK6003の西側で一部分を検出した深さ0.1m程度の浅い土坑である。東辺はほぼ直線であるが南側は丸くふくらんでいる。掘り込み面からゆるやかに下がり底面は凹凸がある。埋土は上層が黒色粘質微砂、下層は暗緑灰色微砂である。

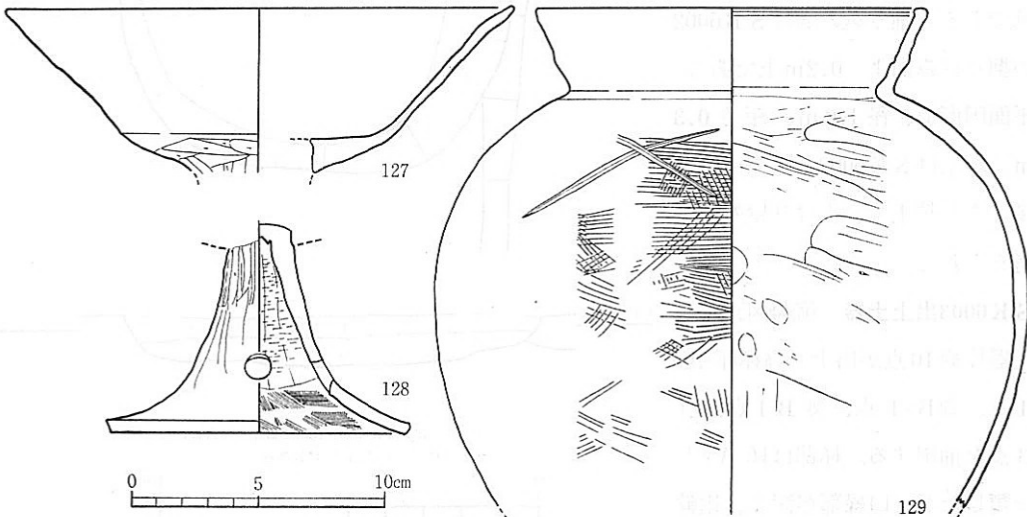
SK6005 SB6002の南に約2m隔て掘り込まれた南北方向の浅い溝状土坑である。北端近くで膨らんで、幅0.7m、深さは0.1m、埋土は炭を極めて多く含む黒色微砂である。

SK6006 Cトレンチ中央西寄りで見出した円形土坑である。径0.7m、深さ0.4m、埋土は上層がオリブ黒色微砂質粘土、下層は暗緑灰色粘土である。層界に幅14cm、長さ30cm、厚さ1cmの板状木片が出土した。SK6001に切られている。

SK6007 SK6006の南2.5mで見出した円形土坑である。径0.6m、深さ0.8m、埋土は暗オ



第43図 SK6002出土土器



第44図 SK6003出土土器

リーブ灰色～オリーブ黒色粘質微砂である。S X 6007が埋った後に掘り込まれている。

S K 6007出土土器 (第45図) 土器片、約80点が出土。甕の破片が多い。このうち鉢B 1点を抽出した。

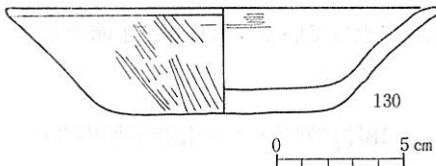
鉢は浅鉢で口縁部がなだらかに外反するものである。外面の刷毛目調整が目立つ。

S K 6008 S K 6007の東約2 mにて検出したほぼ円形の土坑である。径0.8m、深さ0.7mで、上層は、炭化木片、炭、焼土を含む微砂で埋まっており、勾玉形土製品が出土した。

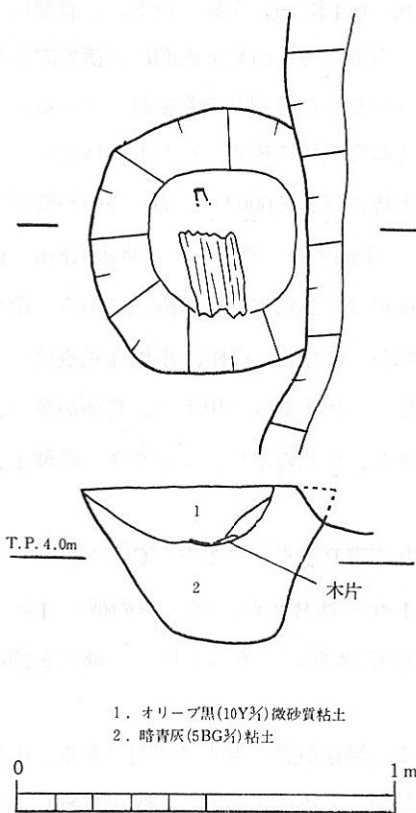
S K 6008出土遺物

土器 (第50図) 高杯杯 A₃、脚 A₃など土器片約100点が出土。焼成を受けてはいない小粘土塊も出土した。このうち小型丸底壺1点、壺Aかと思われるもの1点、甕B 1点、甕C₁ 1点の計4点を抽出する。

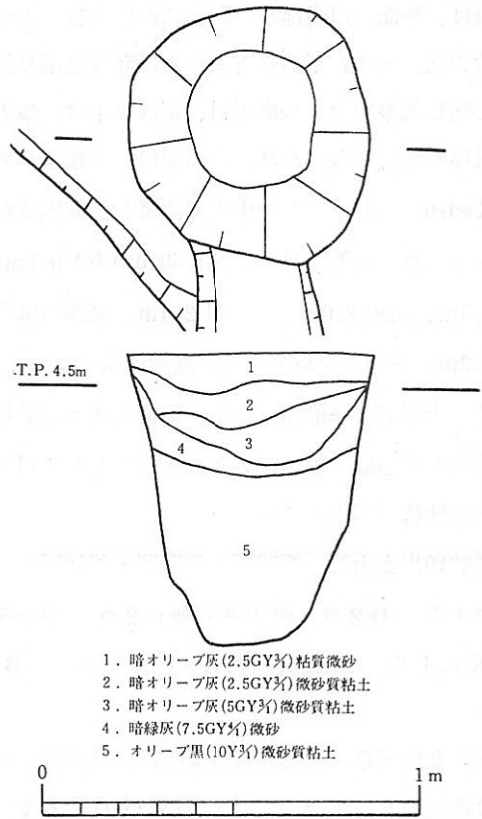
小型丸底壺は、途中で屈曲した二重口縁のような口縁部をもつ。むしろ壺と考えた方がよいかもしれない (第50図-133)。134の口縁部とともに小破片のために器種は確定しがたい。甕は口縁部から体部にかけての縦方向の刷毛目調整が特徴的である (第50図-136)。



第45図 S K 6007出土土器



第46図 S K 6006遺構平面図・土層断面図



第47図 S K 6007遺構平面図・土層断面図

勾玉形土製品 (第48図) 平面は半月形、断面は円形を呈する勾玉形土製品である。一方の頭部に両平面を貫く一孔を穿つ。孔をもつ頭部端は突出せず直に裁ち切られる。他の頭部端は丸みのある稜線をもって突出する。最大長 2.5cm、最大径 0.9 cm、最大孔径 1.2 cm、重量 2.85 g を測る。

器面全体はナデ調整が施される。灰黒色を呈し、胎土は粒径 0.1cm 位までの微砂粒が混和されてはいるが、比較的緻密な粘土を使用している。背面に朱色の顔料が認められる。全体が赤色に彩色されていたようである。

S K 6009 C トレンチ中央東寄りで見出した円形土坑である。径 0.8m、深さ 0.75m、底面は平坦である。埋土は、底から 0.1m 程度は暗緑灰色粘質微砂で、層中及び層上面に木葉がうすく堆積していた。その上層は黒色粘土、暗緑灰色微砂で両層界には、径 10cm 程の火をうけた花崗岩塊が 3 個出土している。その上層は、炭化木片、炭を多く含む厚さ 0.3m 程の黒色粘土層である。この層から、二次的加熱をうけたような多孔質の炭化物が出土している (第Ⅶ章第 1 節参照)。最上層は暗緑灰色粘土、オリーブ黒色粘質微砂である。

S K 6009 出土遺物 (第49図) 壺 B の口縁部破片 1 点と、18 片に破碎した炭化物が検出された (図版 57—365)。炭化物については第Ⅶ章第 1 節を参照されたい。

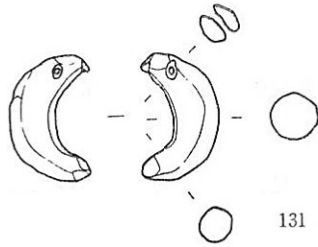
壺は、外面、口縁部から体部にかけて細かい刷毛目調整 (14本/cm) を施した上に、肩部以下を横方向、多少右下がり方向に軽く篋削り調整したものである。口縁部内面は、横方向の外面と同じ調整幅をもつ刷毛目、頸部以下は、横方向のはっきりした篋削り調整を行っている。

保存の状態からみれば、この壺は、当初より破片としてこの土坑に放棄されたものらしい。

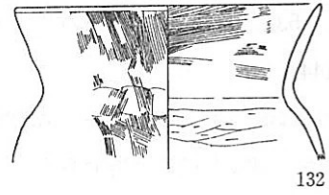
S K 6010 C トレンチ中央部西寄りで見出された。検出時には S X 6002 との切り合いが確認できなかった。底面の高さは S K 6010 の方が 0.1m 程度低い。平面形は不整形で、東辺 3.8m、西辺 2.5m、南辺 2.0m、北辺は 2.4m、東西辺は平行し、南辺はこれに対しほぼ直角である。深さは 0.2m、底面は平坦である。埋土は暗オリーブ灰色微砂混り粘土で、高杯、小型丸底壺をはじめ多くの土器が、完形に近いか、比較的大きな破片で出土した。出土遺物の中では、高杯が多く、煮沸用の甕の破片数が極めて少ないことが注目される。また、棒状の木片、ヒョウタンの種子、モモの種核が出土している。

S K 6010 出土土器 (第53図・第55図・第56図) 小型丸底壺 B 1 点、C 1 点、C かと思われるもの 1 点、D 2 点、同 (その他) 2 点、壺 (その他) 1 点、鉢 B 2 点、同 (その他) 1 点、高杯 A₂ 4 点、A₃ 5 点、脚 A₂ 8 点、A₃ 5 点、B₁ 2 点、甕 C₂ 2 点、壺底部 1 点、計 38 点を抽出する。

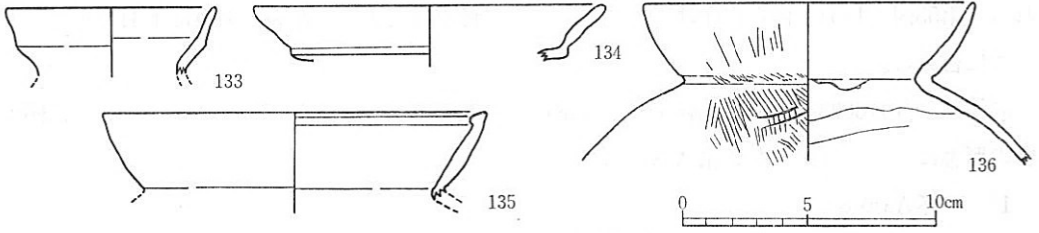
小型丸底壺 C かと思われるものは、第 53 図—138 である。保存が悪く調整は不明である。小型壺は各種のものを含んでいる。小型丸底壺 B で、口縁部が短く、体部が膨らみ、煤が付着し、むしろ小型甕といってもよいものがある (第 53 図—141)。体部外面に煤が付着したものは、他にも



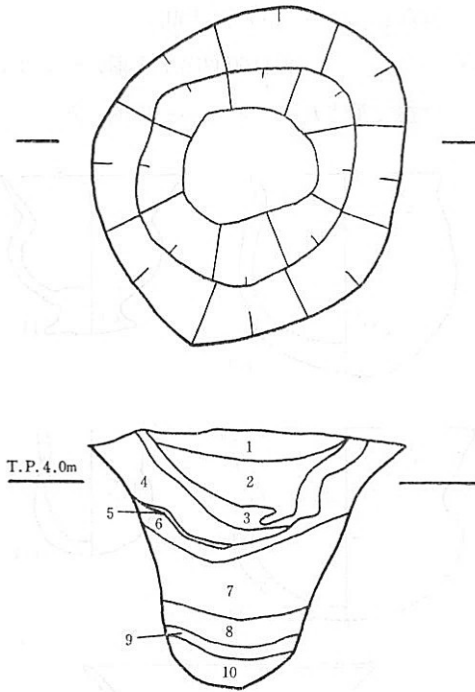
第48図 S K 6008出土土製品



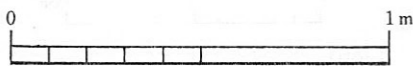
第49図 S K 6009出土土器



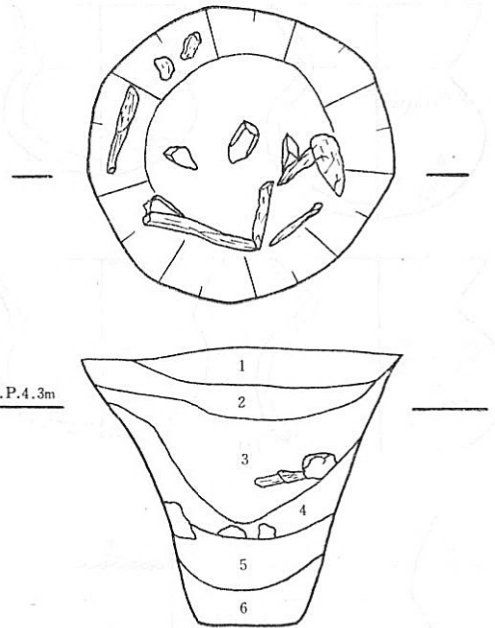
第50図 S K 6008出土土器



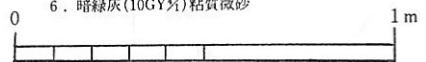
1. オリーブ黒(10Y3)微砂質粘土
2. オリーブ黒(10Y3)細砂混粘土(炭化物を含む)
3. 焼土・黒褐(10YR3)(炭混合)
4. 暗オリーブ灰(2.5GY3)細砂粗砂混粘土(炭含)
5. オリーブ黒(10Y3)微砂質粘土
6. 浅黄(5Y3)灰
7. 黒(7.5Y3)粘土
8. 黒(7.5Y3)粘土(上層より粘性が高い)
9. 暗緑灰(7.5GY3)微砂
10. 暗緑灰(10GY3)粘土



第51図 S K 6008遺構平面図・土層断面図



1. オリーブ黒(10Y3)粘質微砂
2. 暗緑灰(7.5GY3)微砂混粘土
3. 黒色(5Y3)粘土(灰を含む)
4. 黒(7.5Y3)粘土
5. 暗緑灰(7.5GY3)微砂
6. 暗緑灰(10GY3)粘質微砂



第52図 S K 6009遺構平面図・土層断面図

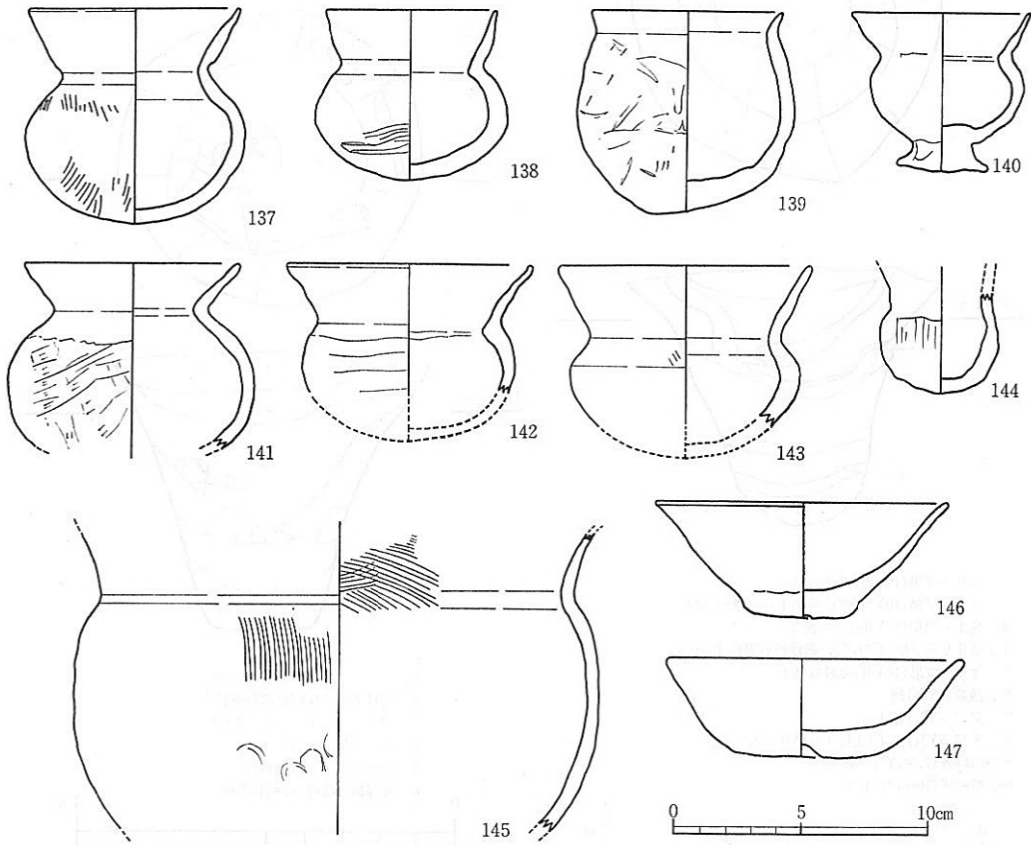
1点ある(53図-143)。手捏ねのミニチュア2点は、小型丸底壺(その他)にまとめた(第53図-140、144)。

本遺構には壺が1点しかない(第53図-139)。しかも、一見、小型丸底壺のようなもので、体部外面はナデ調整の粗製土器である。

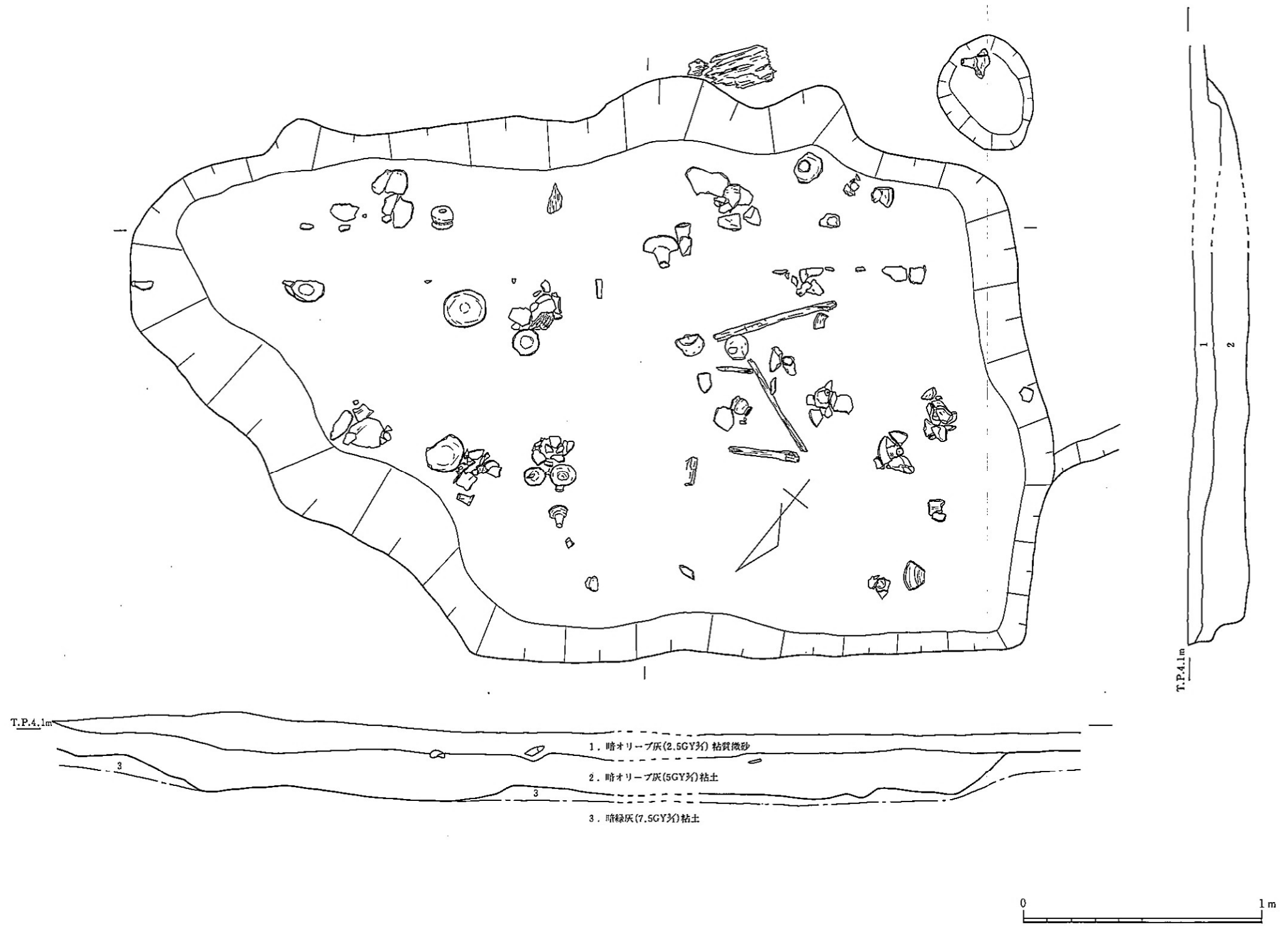
鉢Bに分類した1点は高杯かもしれない(第53図-147)。底部に脚部を差し込むためのような窪みがある。鉢(その他)の1点は口縁部や体部に刷毛目調整、体部下半は指押さえ調整が施される(第53図-145)。体部内面はナデである。煤の付着は認められない。実像は不明であり一応ここに含める。

高杯は、S D 6003出土品と比較すると調整などに次のような差違が認められる。しかし、杯・脚の形態については大きな変化はみられない。

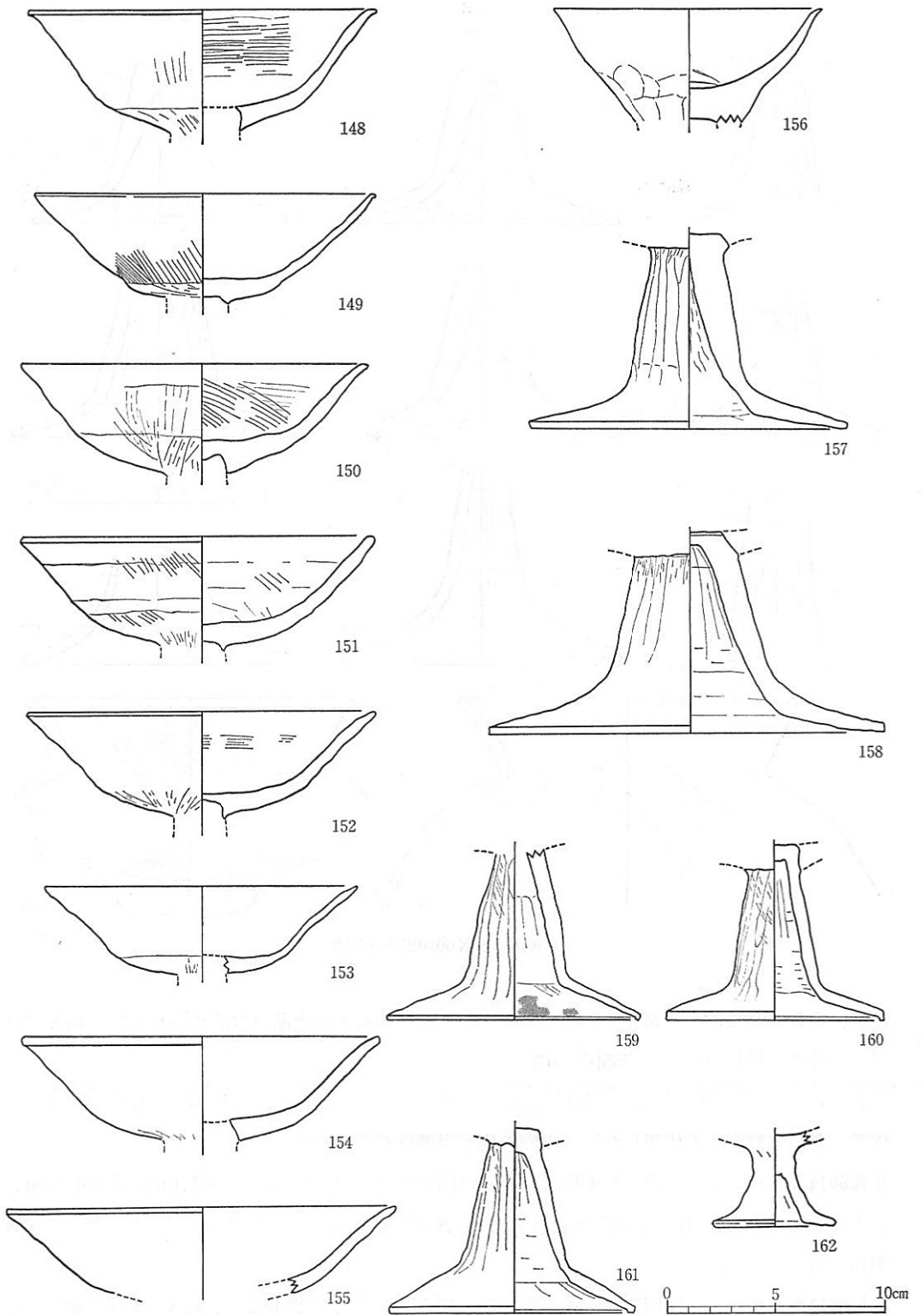
- 1) 杯A₃が多い。
- 2) 脚A₃も多い。
- 3) 脚台部内面に布目圧痕をもつものは1点しかみられない(第55図-159)。ただし、この例は布目圧痕の付着範囲が広く、脚台部全体についている。S D 6003出土土器については脚台の端部ぎわに付着し、脚柱部ぎわについては撫で消されているのが一般的である。



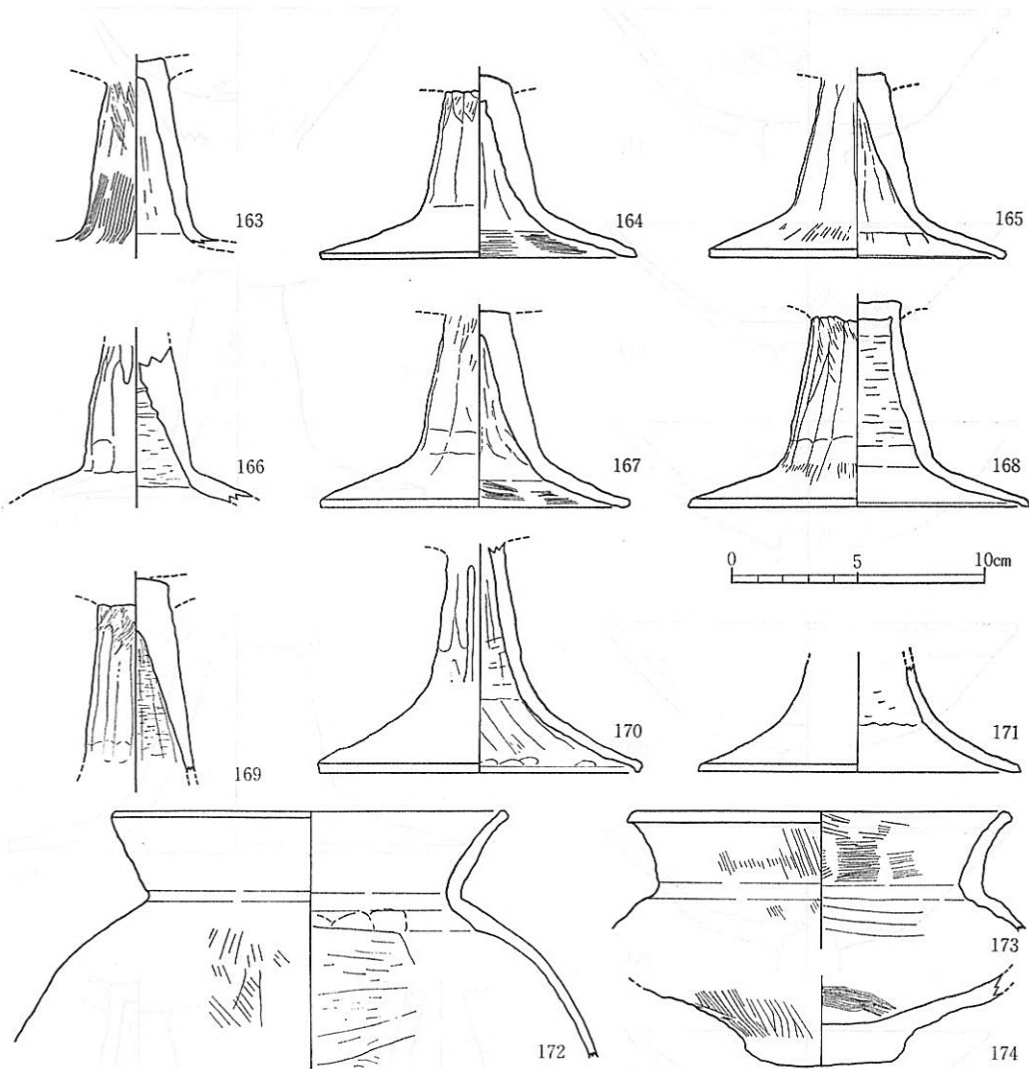
第53図 S K 6010出土土器(1)



第54図 S K 6010遺物出土状況・土層断面図



第55図 S K 6010出土土器(2)



第56図 S K 6010出土土器(3)

なお、S D 6003で述べた高杯の煤の付着については、本遺構出土品では認められない。高杯には以上の他に小型品がある（第55図-162）。

甕はC₂の2点が見られる。底部の遺存品は突出ぎみの平底である（第56図-174）。底面にも体部と同じ調整原体を使用した同一方向の刷毛目調整がみられる。

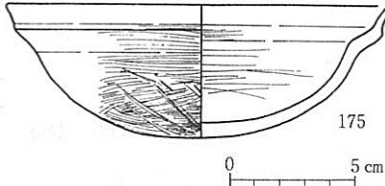
S K 6011 Cトレンチ南寄り東側で検出した円形の浅い土坑である。径1.0m、深さ0.15m、埋土は下層が炭を含む緑黒～暗緑灰色粘土、上層は炭化木片、土器を含む炭の層である。S K 6013を切っている。

S K 6011出土土器（第58図） 甕の破片など約60点が出土。甕B 2点、同C₂ 2点を抽出したが、他に小型丸底壺口縁部の破片もある。

SK6012 SK6011の東に1m離れて掘り込まれた円形の浅い土坑である。径1.0m、深さ0.1m。埋土は炭混微砂質粘土で、形状、埋土ともSK6011と同じである。SK6013を切っている。

SK6012出土土器 (第59図) 土器片、約50点の出土をみている。

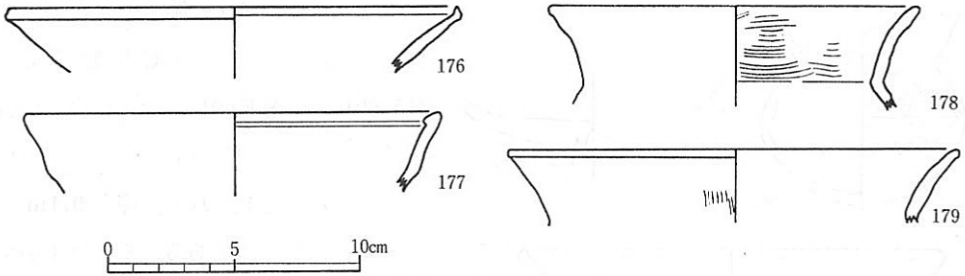
壺C 1点、高杯脚B₁ 1点、器台(不明) 1点、甕A 1点の計4点を抽出した。



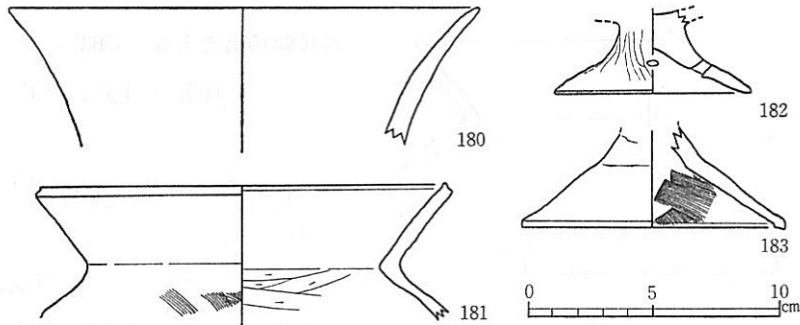
第57図 SK6013出土土器

高杯脚B₂の1点は脚台径のわりに器高が低いものである(第59図-182)。途中に裝飾孔をもつ。一応高杯に含めたが、器台や台付鉢などの可能性がある。

甕Aは「く」の字に屈曲した頸部以下を篋削り調整するものである(第59図-181)。体部外面は細かい刷毛目調整



第58図 SK6011出土土器



第59図 SK6012出土土器

が施される。色調は薄茶褐色であり、胎土は生駒西麓産以外のものである。

SK6013 SK6011・6012の間にこれらに切られた円形の土坑である。径1.3m、深さ0.9m、埋土は下層が黒色粘土、上層は暗オリーブ灰色粘土。底には木葉が堆積し、底より0.5m浮いた状態で完形の小型鉢が1点出土した。

SK6013出土土器 (第57図) 鉢A 1点が出土した。外面全体を細かい篋磨き調整する。体部肩部から底部にかけて下地の篋削り調整がみえる。器壁も薄く、精製の土器である。ただし、砂粒は多く含まれている。外面に煤が付着し、内面にもこれに対応する黒変がみられる。

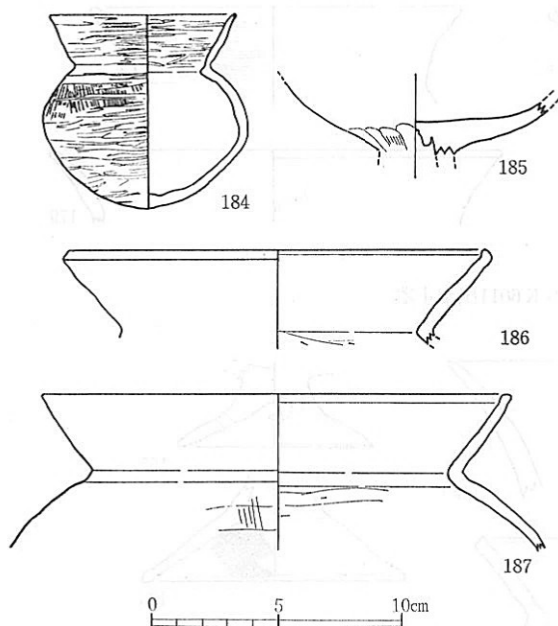
SK6014 SK6013の東に2m離れて掘り込まれた円形の土坑である。復原径1.0m、深さ0.8

m、埋土は下層がオリブ黒色粘土、上層が灰オリブ色微砂質粘土。底より10cm上で木葉が厚さ約1cmの層をなして堆積しており、この中にはイガのついたままのクリの実も含まれていた。又、この位置より完形の小型丸底壺が出土した。貯蔵穴である可能性が強い。

S K 6014出土土器 (第60図) 甕、小型丸底壺、高杯の破片約80点が出土。小型丸底壺A 1点、高杯杯A₃ 1点、甕A 1点、甕B 1点を抽出する。

小型丸底壺Aは、体部上半刷毛目、下半篋削り調整の下地がみえるが、体部内面を除き全体を篋磨き調整した精製のものである(第60図-184)。

高杯杯A₃の杯底には脚柱内部調整時の原体である篋のあたり痕が残る(参考、図版69-185)。本遺構出土品に一般的な脚頂部を塞いだ脚柱部ではなく、筒形の脚柱部をとりつけたものらしい。



第60図 S K 6014出土土器

甕Aは生駒西麓産の胎土ではない。他に図示はしなかったが、甕Cの破片がある。

S K 6015 S K 6013の南で検出した浅い土坑である。平面形はおそらくやや不整な長方形になると見られる。深さ0.1m、底面はほとんど平坦である。埋土は下層が暗緑灰色粘土、中層が炭まじりの黒色粘土、上層は炭の層である。

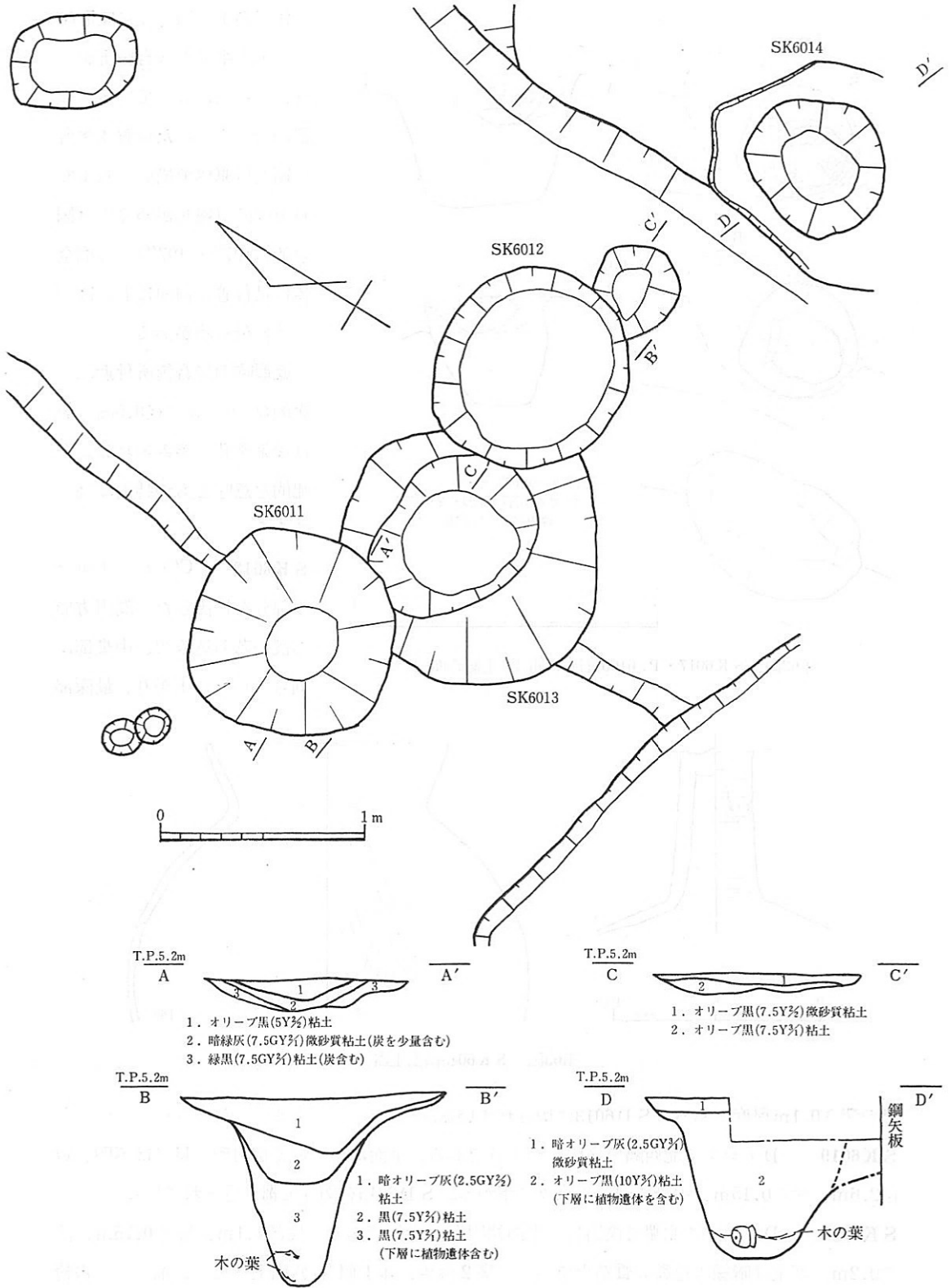
S K 6015出土土器 (第63図) 甕の破片が多い。高杯脚A₁ 1点、甕C₁ 1点を抽出する。

高杯脚A₁は筒状に脚柱部を作ったのち、頂部に粘土をつめて塞ぐものである。甕には、図示できなかったが、外面に叩き目調整を施した生駒西麓産の破片もある。

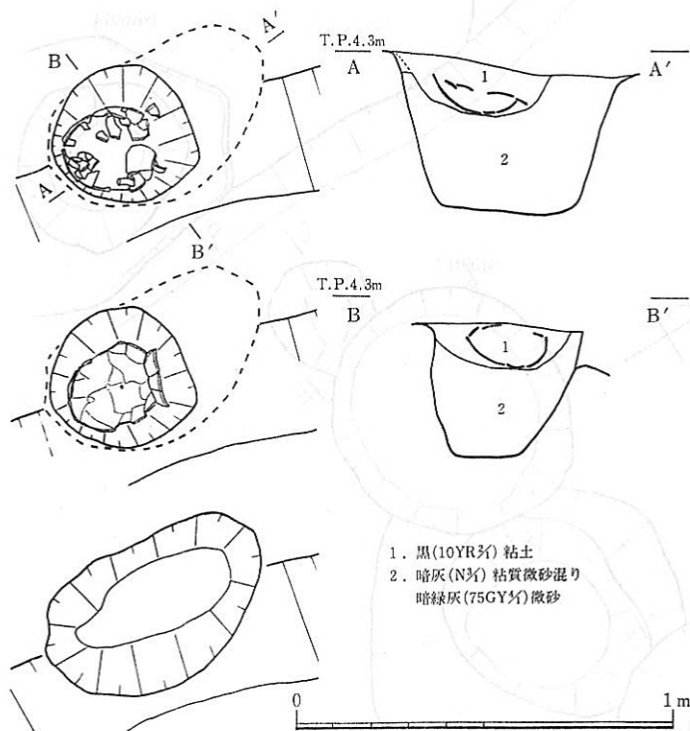
S K 6016 Cトレンチ南半部西寄りで検出した浅い溝状の土坑である。北端での幅0.15m、南端で0.35m、長さ1.3m、深さ0.05mである。

S K 6017 Cトレンチ南端、S D 6009を切って掘り込まれた楕円形の土坑である。長径0.65m、短径0.4m、深さ0.4mで、底は平坦である。埋土は暗灰色粘質微砂を混えた暗緑灰色微砂。この土坑の真上から柱穴(P. 6101)が掘り込まれており、胴部に小さく穿孔した甕1個体が、小孔を下にして出土した。埋土は黒色粘土。このP. 6106はS K 6017と一体の遺構と思われる。出土遺物は甕の他には1点もないが、嬰兒あるいは乳児の墓塚であるかもしれない。

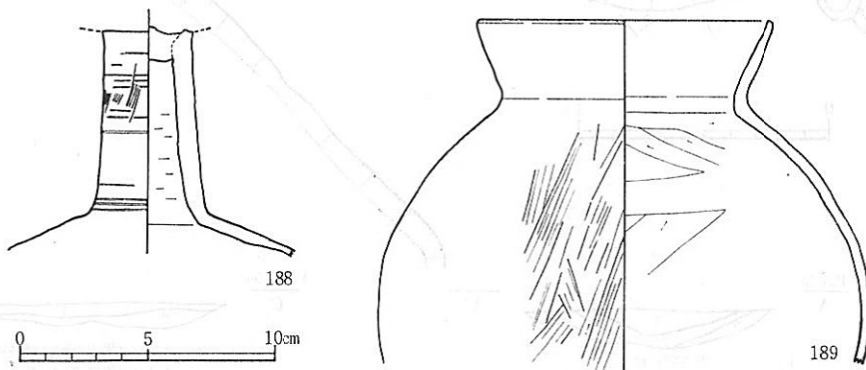
S K 6017・P. 6106 出土土器 (第75図) 甕B 1点を検出。長胴の甕である。縦半分、全形の約1/2のみ遺存する。



第61図 SK6011・6012・6013・6014遺構平面図・土層断面図



第62図 SK 6017・P. 6106遺構平面図・土層断面図



第63図 SK 6015出土土器

での深さ0.1m程度である。S D6013に切られている。

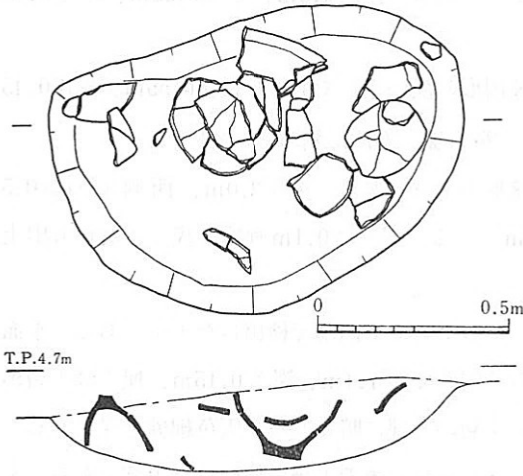
SK 6019 Dトレンチ北西隅で検出した土坑である。平面はおそらく楕円形で長径は不明、短径2.6m、深さ0.15m、中央に向かって徐々に下がる。S D6015を切って掘り込まれている。

SK 6020 Dトレンチ北端で検出した平面楕円形の土坑である。長径1.1m、短径0.75m、深さ0.2m。埋土は暗緑灰色微砂質粘土である。甕2個体、鉢1個体が出土したが、掘り込みの輪郭を検出する以前から土器が姿を見せていた。このことから、浅い土坑内に納めてはいたもの

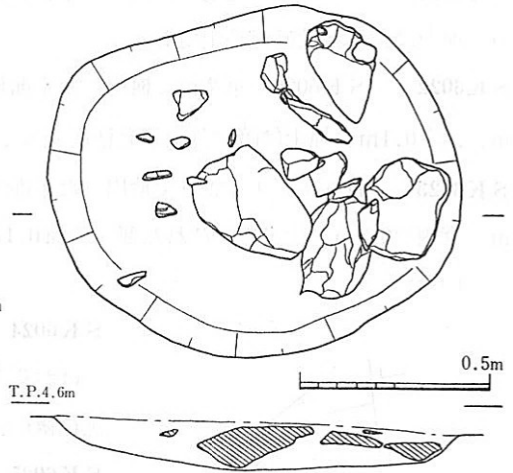
体部の上半分近くに成形時の上・下半部の接合箇所があり、少し歪になっている。頸部の少し下がった位置4ヶ所に刷毛目原体で描いた右下り斜方向の斜線文がめぐる(図版59—197'・197'')。外面全体に煤付着。内面にもこげつき状の付着物がある。

成形時の接合箇所付近に二次的な一穿孔(径0.5cm。敲打後錐穿孔)がみられる。祭祀的な意味をもつ特別な甕であろう。

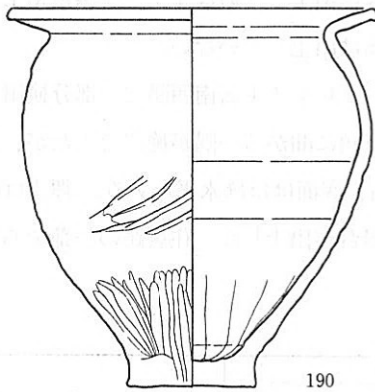
SK 6018 C'トレンチ東で一部分を検出した。隅円方形の浅い落ち込みで、中央部に向かって徐々に下がり、最深部



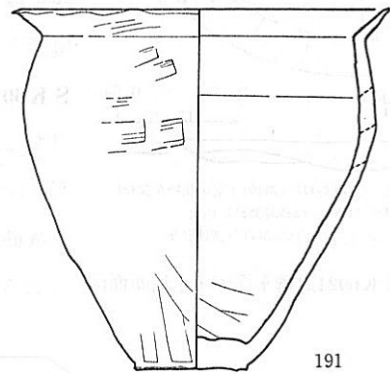
第64図 S K 6020遺物出土状況・断面図



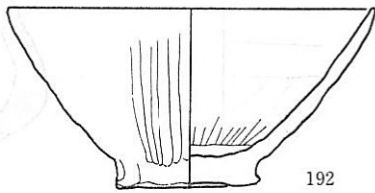
第65図 S K 6022遺構平面図・断面図



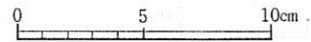
190



191



192



第66図 S K 6020出土土器

の、土器自体は当時の地表面に表われていたと推測される。

S K 6020出土土器（第66図） 鉢B 1点、甕D 2点が出土した。

鉢は明確な平底をつくりだしたものである。体部外面は筵磨き調整。口縁端部は擬似口縁の可能性はある。

甕Dは、本遺構出土の布留式土器の甕とはまったく様相を異にするものである。

これら2点の甕は、各々、口縁部や底部に形態などの違いが認められている。いずれの肩部や腹部にも叩き目調整かどうか確認できない痕跡がある。

S K 6021 Dトレンチ北端で検出した不整形土坑である。長径0.8m、短径0.55m、深さ0.15m。埋土は、黒色微砂混粘土である。

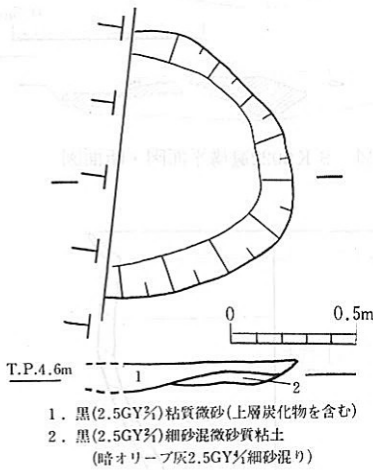
S K 6022 S K 6020の東2mで検出した平面楕円形の浅い土坑である。長径0.55m、短径0.45m、深さ0.1m。埋土は暗灰色微砂混粘土である。滑石塊、剝片が納められていた。

S K 6023 Dトレンチ北寄りで検出した平面瓢形の土坑である。長さ2.0m、西側での幅0.5m、東側で0.4m、中央のくびれた部分で幅0.1mである。深さは0.1m程度と浅く、遺物も出土していない。

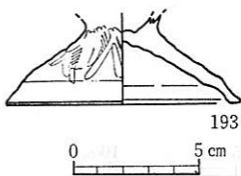
S K 6024 Dトレンチ西端で検出した土坑である。平面形はおそらく円形で径1.1m、深さ0.15m、埋土は上層が黒色微砂、下層の一部に暗オリーブ灰色細砂を混じえる。

S K 6025 C'トレンチの下層で検出した土坑である。平面はやや歪んだ隅円方形を呈す。一辺1.0m、深さ0.1m、埋土は上層が灰色粘土、下層はオリーブ黒色粘土。底は平坦である。遺物は出土していない。

S K 6026 C'トレンチ下層南西隅で一部分検出した土坑である。ほぼ直角に曲がる一隅が確認できたが、規模は不明。深さ0.1m、底面はほぼ水平である。埋土は暗灰色粘質微砂。小型器台が出土した。住居跡の一部である可能性もある。



第67図 S K 6024遺構平面図・土層断面図



第68図 S K 6026出土土器



第69図 S K 6028出土土器

S K 6026出土土器 (第68図) 器台脚台部B 1点を検出。裾部に強い押えがあり、二重口縁に対応するものであろう。外面に篋磨き調整を施した小型精製品である。

S K 6027 C'トレンチ下層南西隅で検出した浅い土坑である。おそらく円形になると思われる。深さ0.1m、埋土は暗灰色粘質微砂である。

S K 6028 C'トレンチ下層で検出した土坑である。S D 6019に切られているため形状は不明であるが、おそらく長方形に近い形であろう。深さ0.1m、長辺2.8m以上、短辺1.4m以上。埋土

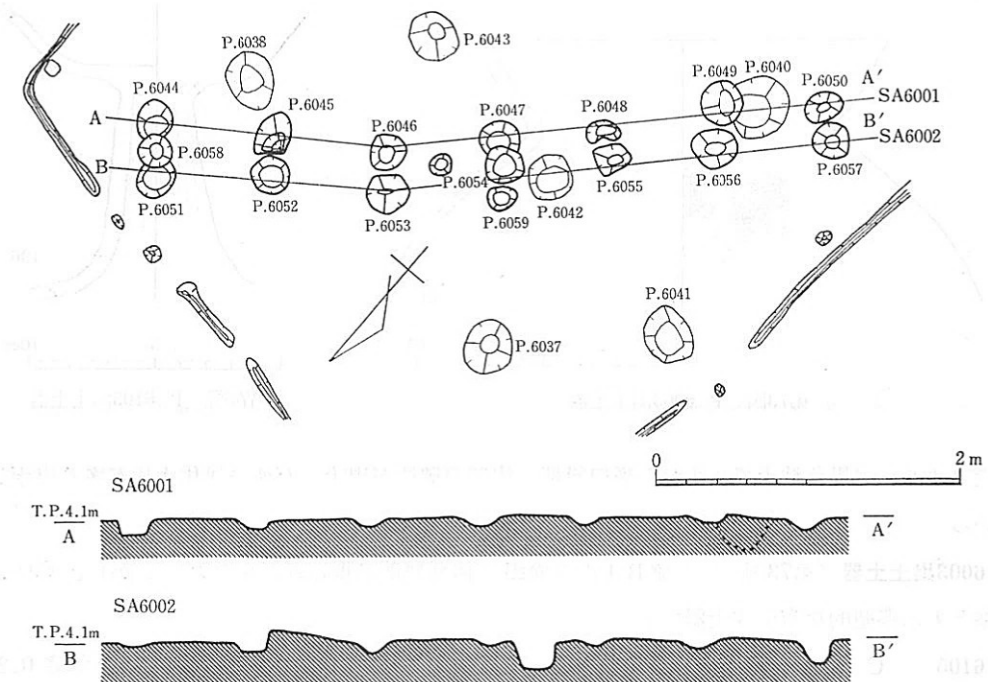
は上層から暗オリーブ灰色微砂質粘土・緑黒色微砂混粘土・暗緑灰色粘質微砂がほぼ水平に堆積している。壺の口縁部が出土している。

S K 6028出土土器 (第69図) 壺(その他) 1点を検出。

外傾する口縁部の先端外方に粘土を貼り足し、斜下方に突出ぎみの端部をつくりだしたものである。端部上面は強く撫で、面をつくる。口縁部は内外ともにヨコナデ調整である。外面、頸部および体部にかけて縦方向の筥磨き調整が加わる。器壁は他に比較して非常に厚い。角閃石の他に大粒の長石が大量に混入された、謂ゆる生駒西麓産の胎土をもつものである。

S A 6001 (P. 6044~6050) ・ S A 6002 (P. 6051~6057) Cトレンチ中央部S B 6002の柱穴を切って掘り込まれた柱穴群である。柱穴の規模も小さく径0.2~0.3mで深さ0.1m程度しか残存しない。埋土も他の古墳時代の柱穴と異なり粗砂を多く含んだ暗緑灰色微砂・オリーブ黒色微砂で、検出面より上層からの掘り込みであるかもしれない。これらの柱穴は途中で「く」字形にゆるく折れる柵状のものであると考えられる。S A 6001は柱間0.76m、方位は北半部がN55.5° E、南半部がN44.5° Eである。S A 6002は柱間0.72~0.76m、方位は北半部がN55° E、南半部N44° Eである。S A 6001はS A 6002に切られている。

S A 6003 (P. 6023~6027) Eトレンチ南端近くで検出した柱穴である。この時期の包含層が南に向って徐々に途切れる付近にあり、ここより南では包含層も遺構も検出されない。P. 6123・6125及び6126・6127がそれぞれ柱間1.8m、方位もN9.5° Eと同一方位である。両者は直線にはつながらず、柵とはいいい難いが、集落の範囲を限る何らかの標示的な施設と考えられる。各柱穴



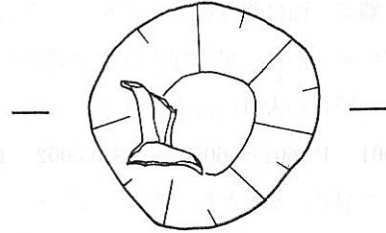
第70図 S A 6001・6002遺構平面図・断面図

は径0.2~0.35m、深さ0.2m。埋土は黒色粘土である。

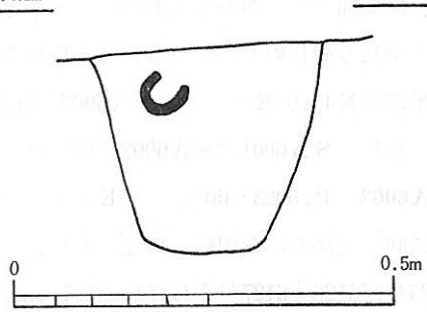
小穴

この古墳時代遺構面では多数の小穴が検出されており、建物の柱穴として扱えるものについては先に記述した。ここで述べるのは、主に土器片が、それもかなり大きな破片が出土した小穴である。

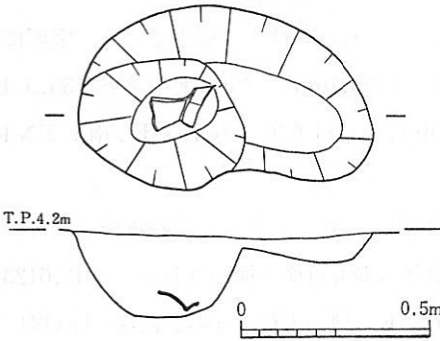
P.6003 Cトレンチ北端で検出したやや歪んだ楕円形の小穴である。検出時には確認できなかったが、2小穴が切り合っているものかもしれない。長径0.8m、短径0.5m、西半部が深く0.25m。



T.P.4.2m

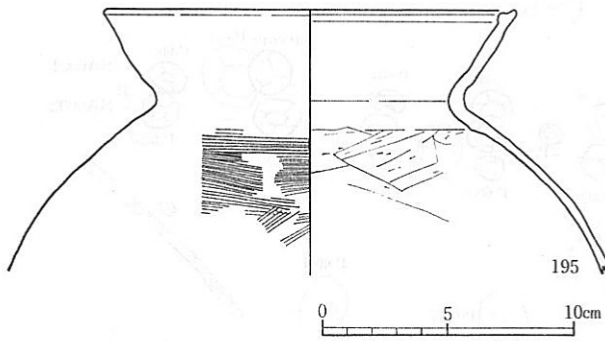


第72図 P.6015遺構平面図・断面図

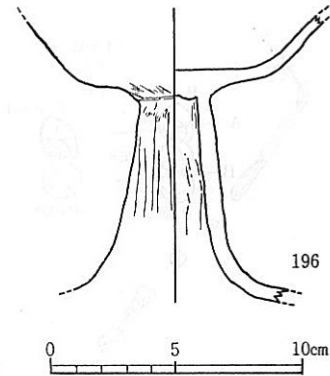


T.P.4.2m

第71図 P.6003遺構平面図・断面図



第73図 P.6003出土土器

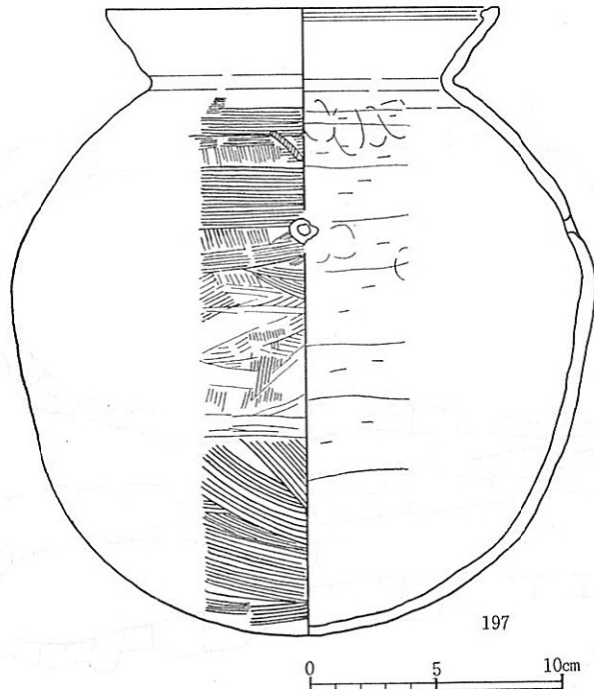


第74図 P.6105出土土器

埋土はオリーブ黒色粘土で、底から甕口縁部、体部の破片が出土した他、炭化木片が多く出土している。

P.6003出土土器 (第73図) 甕B1点を検出。体部肩部の脹らみが少ない。しかし、形態、調整ともに典型的な布留式土器である。

P.6105 Cトレンチ南西、SD6009を切って掘り込まれた小穴である。径0.3m、深さ0.25m、埋土は黒色粘土。底から0.2m浮いた状態で、高杯脚柱部が出土した。裾部と杯部上半を欠



第75図 S K 6017・P. 6106出土土器

いている。出土状況からみて、小穴が埋められる時に意識的に納めたようである。

P. 6105出土土器（第74図） 高杯杯A₂+脚A₃1点を抽出。

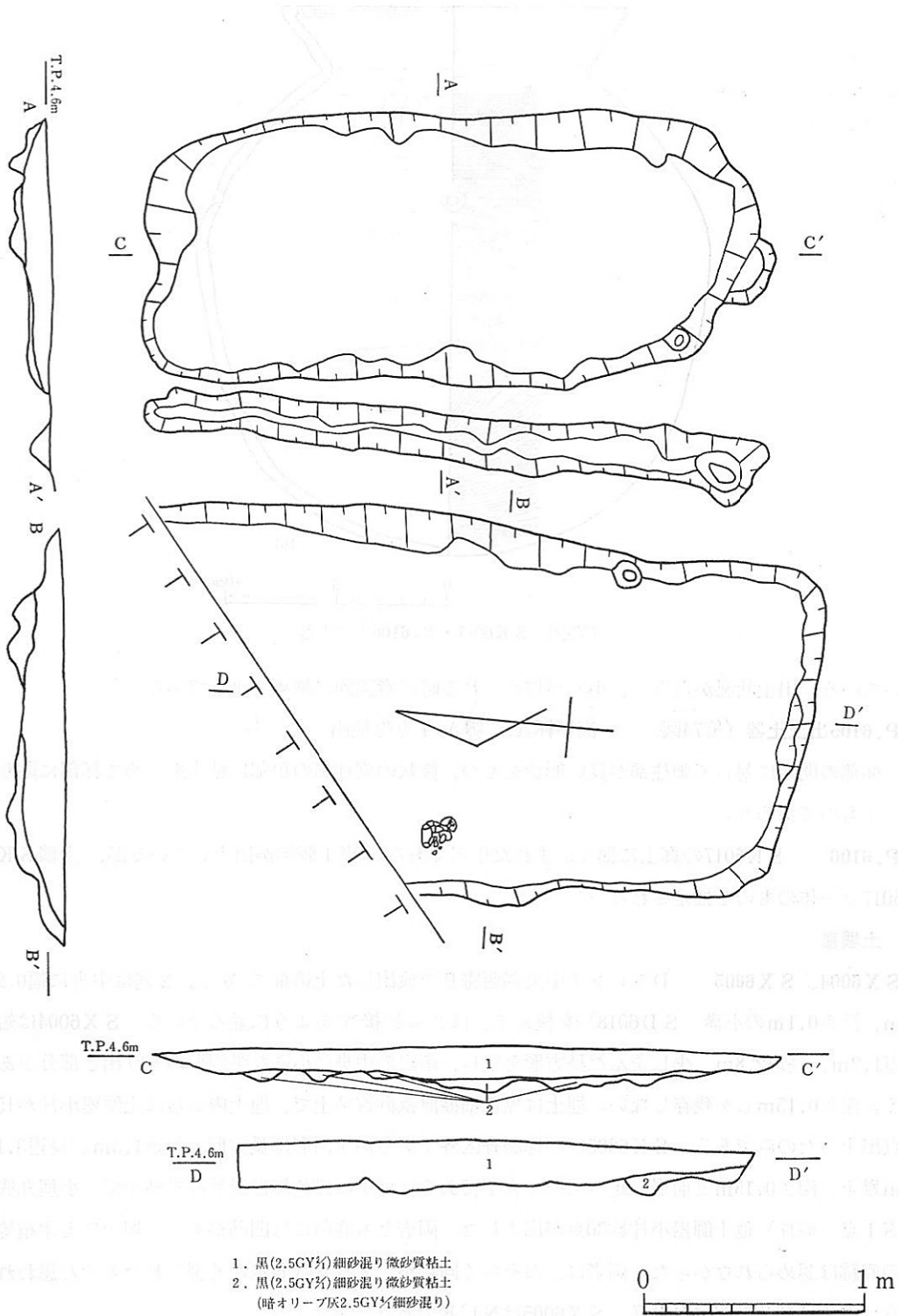
杯部の開きに対して脚柱部が長い形状をもつ。筒状の脚柱部の頂部に粘土をつめて杯部に貼りたすものであろう。

P. 6106 S K 6017の真上に掘り込まれた小穴である。甕1個体が出土しているが、土壙S K 6017と一体のものと推定される。

土壙墓

S X 6004、S X 6005 Dトレンチ中央部西寄りで検出した土壙墓である。2基は中央に幅0.2 m、深さ0.1 mの小溝（S D 6018）を挟んで、ほとんど接するように並んでいる。S X 6004は短辺1.2 m、長辺2.8 m、少し歪んだ長方形を呈し、南辺の中央に小さな半円形の張り出し部分がある。深さ0.15 mしか残存しない。埋土は黒色細砂混微砂質粘土で、埋土内からは土師器小片が15点出土したのみである。S X 6005は一部調査区外であるが平面形は長方形。短辺1.5 m、長辺3.1 m以上、深さ0.15 mと前者に比べてやや大型である。埋土は黒色細砂混微砂質粘土で、小型丸底壺1点（破片）他土師器小片約30点が出土した。両者とも底面には凹凸があり、埋土にも木棺等の痕跡は認められなかった。両者は、おそらく同時か、大きな時間差なく掘られたものと思われる。方位はS X 6004はN6° E、S X 6005はN1° Eである。

S X 6005出土土器（第77図） 甕など土器片約30点が出土。うち小型丸底壺1点、脚台部1点を抽出する。



第76図 S D 6018・S X 6004・6005遺構平面図・土層断面図

小型丸底壺は保存が悪く調整不明である。外面、高热による赤変がある。脚台部は短かく直立した筒状の柱部から大きく広がる裾部へと続くもので、脚柱部の頭頂をふさがずに筒状のまま体部に接合する。器種は不明である。

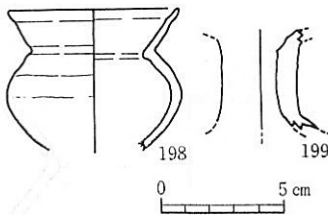
不明遺構

S X 6001 Cトレンチ中央部で検出した平面長方形、幅約3m、長さ4.4m、深さ0.1~0.25mの浅い落ち込みである。埋土中には炭、焼土等を含むことから、検出時には堅穴式住居跡を想定していたが、内部に柱穴は検出されなかった。土壙S K 6009、6008は、これが埋ったあとに掘り込まれている。西辺の南側は西に広がり、S K 6010の落ち込みへと続くが、これとの切り合い関係は不明である。S K 6010の上層の埋土とS X 6001の埋土がほとんど同じことから、両者が同時に存在した可能性もある。南西隅はS X 6002に切られており、底面はS X 6002の方が5cm程度低い。多量の土器とともに異形土製品が出土した。

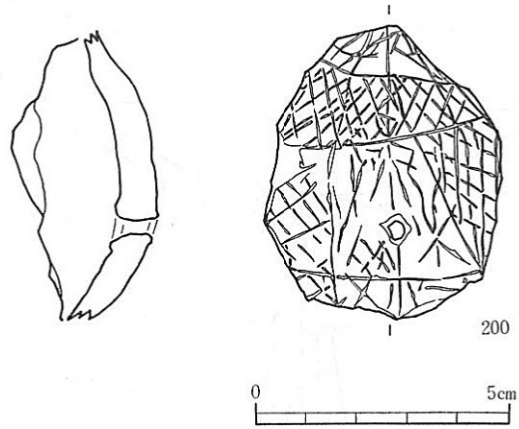
S X 6001出土遺物

出土土器 (第79図)

土器破片約40点が出土。



第77図 S X 6005出土土器



第78図 S X 6001出土異形土製品

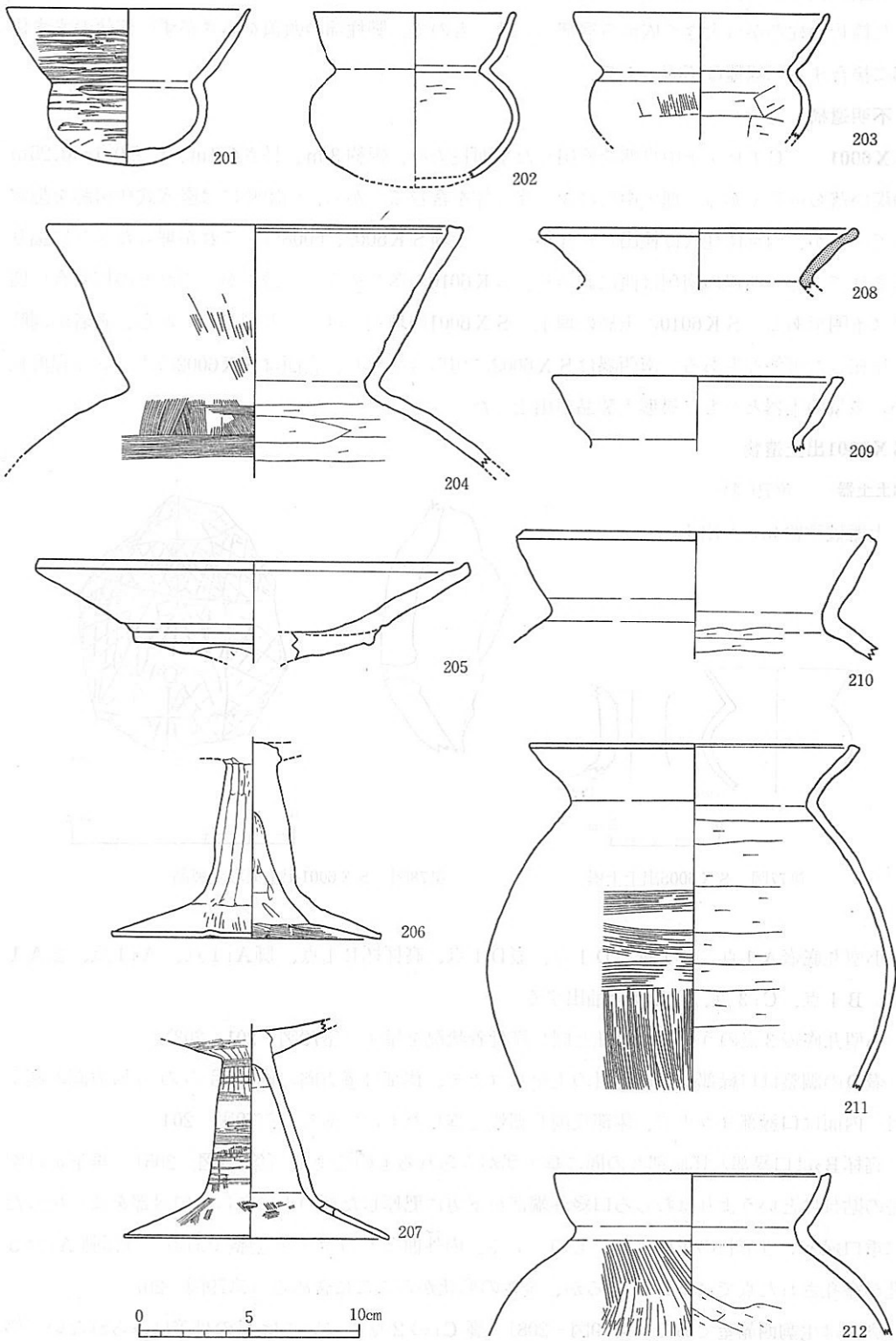
小型丸底壺A 1点、C 1点、D 1点、壺D 1点、高杯杯B 1点、脚A₁ 1点、A₃ 1点、甕A 1点、B 1点、C₁ 3点、計12点を抽出する。

小型丸底壺3点のうち2点は甕と同じ煤付着状況を呈す(第79図—201、203)。

壺Dの調整は口縁部外面刷毛目の上をヨコナデ、体部は縦方向の刷毛目のち横方向の刷毛目、内面は口縁部ヨコナデ、体部筧削り調整を施したものである(第79図—204)。

高杯B₂は口縁部と杯底部との間に垂下部がみられるものである(第79図—205)。垂下部は突帯の貼付けというよりはむしろ口縁外端部が下方に肥厚した杯の上にさらに口縁部を積み足した二重口縁という形状の上に生じたものである。内外面ともヨコナデ調整である。高杯脚A₁は3孔が穿孔された点では脚B₂となるが、全体の形状からここに含める(第79図—207)。

甕Aは生駒西麓産である(第79図—208)。甕C₁の2点については煤の付着はみられない(第79図—210、212)。



第79图 S X 6001出土土器

異形土製品（第78図）（図版57—200）

一方は丸く、他方の口は突出するように絞った、全体的には長楕円体を呈するであろう不明土製品で、本品はその半截体である。中腹部に短径0.4cmの焼成前穿孔がある。表面全体に篋描き文様をもつ。一見、銅鐸の袈裟襷文様に似る。すなわち、3本の横線の上に3本ないし4本の縦線をひき、全体を16区画程度に分け、斜格子を埋め、中央部の2区画と突出部の2区画、あるいは底側の一区画に記号状の文様を描き加える。周縁はすべて破損するために、瓢箪形土製品、匙形土製品、陶埴、銅鐸形土製品などの各種のものが推定できようが断定するには至らない。現存最大長5.9cm、最大幅4.7cmを測る。

S X 6002 S X 6001の南西に、これを一部切って掘り込まれた平面長方形の浅い落ち込みである。幅3.5~3.0m、南端では2.2m、深さは北寄りでは0.2m程度、南では0.1mに満たない。南端はS K 6011~6015などに切られている。落ち込み内の埋土は下層から暗青灰色粘土、オリブ黒色微砂質粘土、黒色粘土の薄層がほぼ水平に堆積していた。また、P. 6093の南1mでは埋土中に、焼土、灰、炭が検出されたが、これに伴う落ち込み等はなく、底面上に堆積したものである。埋土を除去した段階でP. 6092、6093を検出した。両柱穴は、このS X 6002の長軸中心線上にあり、両者の間隔は中心間3.1m。P. 6092は平面楕円形で長径0.5m、短径0.4m、深さ0.35m。埋土は黒色粘土で、底面近くから高杯脚部が出土した。P. 6093は平面隅円長方形で短辺0.4m、長辺0.6m、深さ0.2mである。これら2つの柱穴はこのS X 6002に伴うものであることは確実で、その中軸線上に位置することから、簡単な上屋の支柱穴かもしれない。方位はN10°Eである。

S X 6003 C'トレンチで検出したが、遺構面を覆う傾斜した堆積土の一部であることが断面で確認された。

S X 6003出土土器（第80図） 土器片約60数点が出土した。このうち壺A1点、甕A1点、計2点を抽出した。

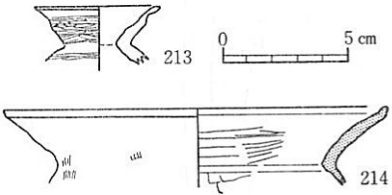
壺は小型の精製品であり、横方向の篋磨き調整が丁寧にかけている。内外面ともに黒色物質が塗布されていたようである。甕は生駒西麓産である。

遺物包含層中の土器溜

遺物包含層の中でも特に遺物が多量に出土する部分が数カ所あった。Cトレンチ南半部（Cトレンチ包含層中土器溜）に一カ所、C'トレンチ西半部に一カ所（C'トレンチ包含層中土器溜）がその中でも特に多く遺物が出土した。

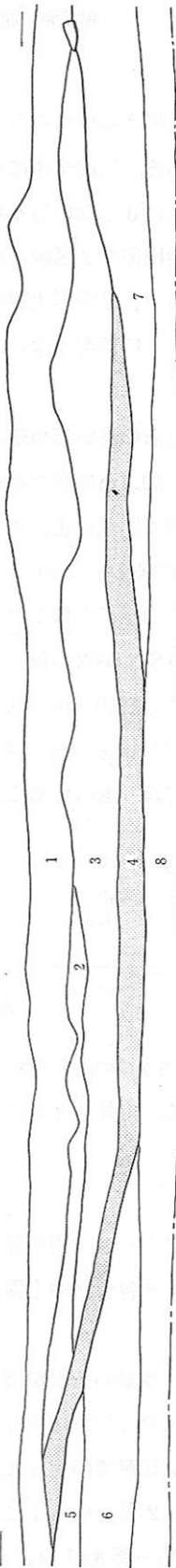
Cトレンチ包含層中土器溜は、径約4mの浅い皿状の窪みに炭とともに多量の土器が出土したものである。土器は部分毎にまとまった出土状況を示すが、完形に復原できる個体は少ない。

C'トレンチ包含層中土器溜は炭を伴わず、遺物のみ比較的完形に近い状況で出土した。

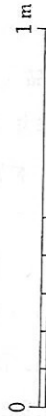
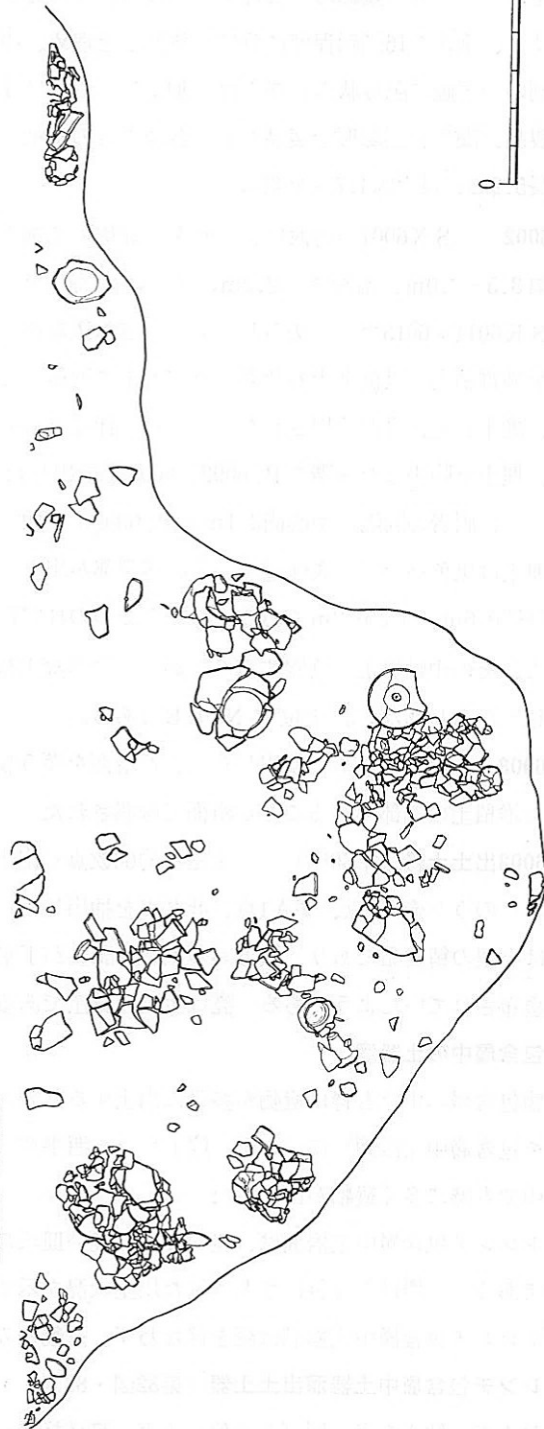
Cトレンチ包含層中土器溜出土土器（第82図・83図） 小型丸底壺B2点、壺A1点、C1点、D1点、鉢A1点、同（その他）1点、高杯杯A₁+脚A₁1点、杯A₁+脚A₃1点、杯A₂+


第80図 S X 6003出土土器

T.P.4, 6m



1. 暗緑灰(7.5GY3)粘土
2. 暗緑灰(10GY3)粘土(炭多く含む)
3. 暗緑灰(10GY3)粘土(炭少し含む)
4. 炭層(土器を含む)
5. 暗緑灰(7.5GY3)粘土
6. 黒(7.5Y3)粘土
7. 灰(10Y3)粘土(炭を少し含む)
8. 暗緑灰(10GY3)粘質微砂



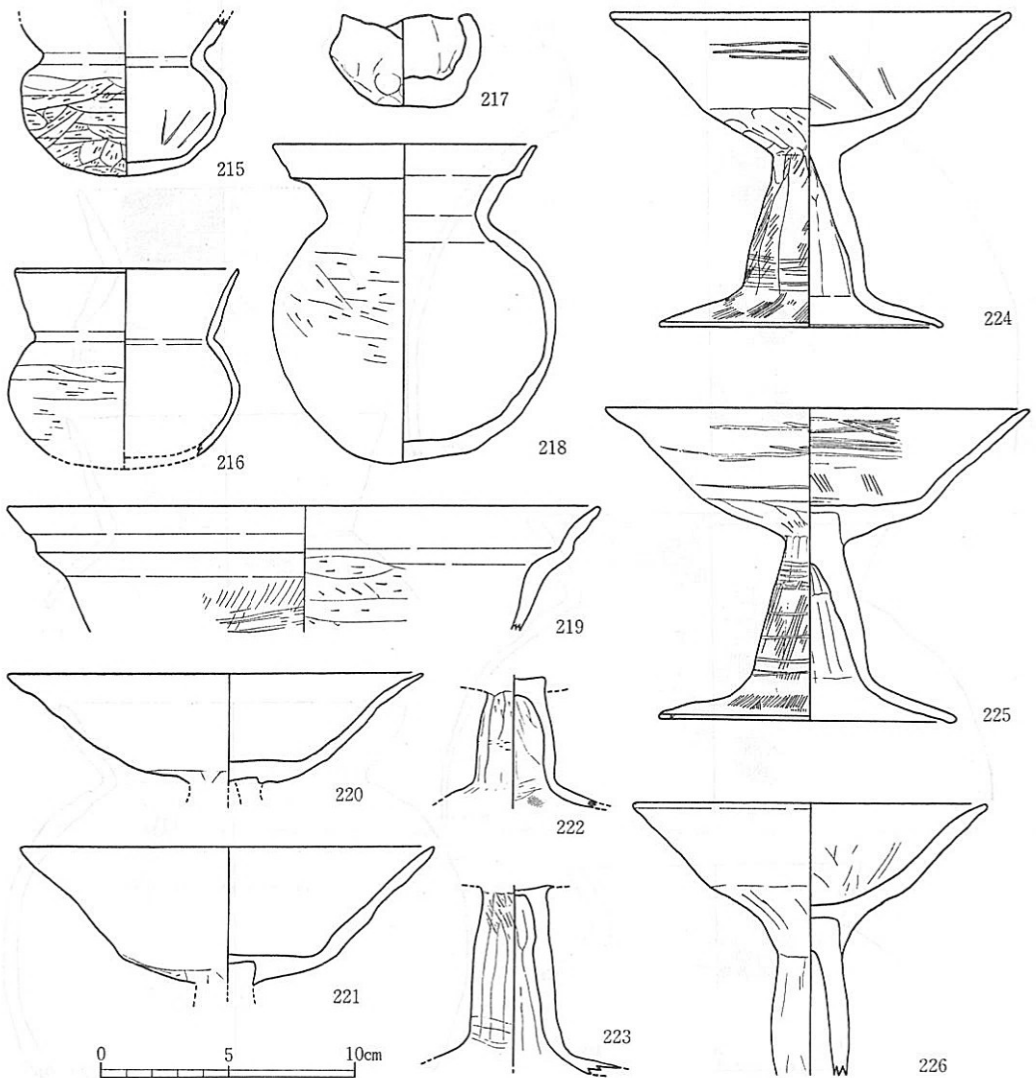
第81図 Cトレンチ包含層中土器溜遺物出土状況・土層断面図

脚A₂1点、杯A₂2点、脚A₂2点、甕C₁2点、C₂3点、計19点を抽出する。

小型丸底壺Bのうち1点は外面に煤が付着し、内面にも黒変がみられ、煮沸に使用した状況を示す(第82図-215)。高杯の杯部が残存した2点も同様に、外面に煤、内面にも黒変がみられる(第82図-220、221)。脚A₂1点の脚台部内面に布目圧痕が残る(第82図-222)。甕の体部外面調整は刷毛目調整の他に叩き目調整のもの(第83図-231)、ナデ調整のもの(第83図-233)がある。

C' トレンチ包含層中土器溜出土土器

(第84図・第85図) 小型丸底壺C 1点、壺B 1点、鉢A 1点、高杯杯A₂2点、脚A₂2点、



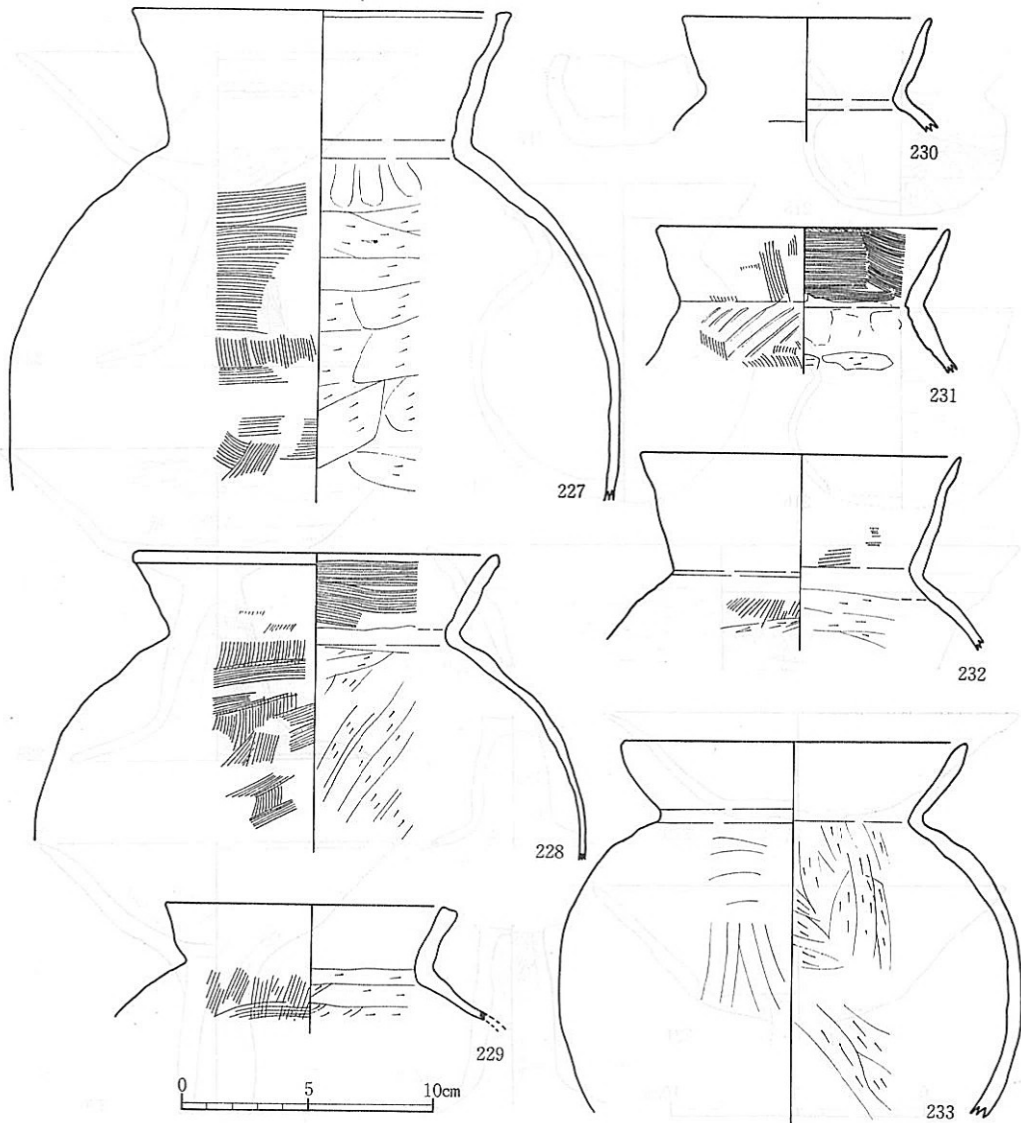
第82図 C トレンチ包含層中土器溜出土土器(1)

甕B 1点、C₁ 3点、C₂ 3点、計14点を抽出する。

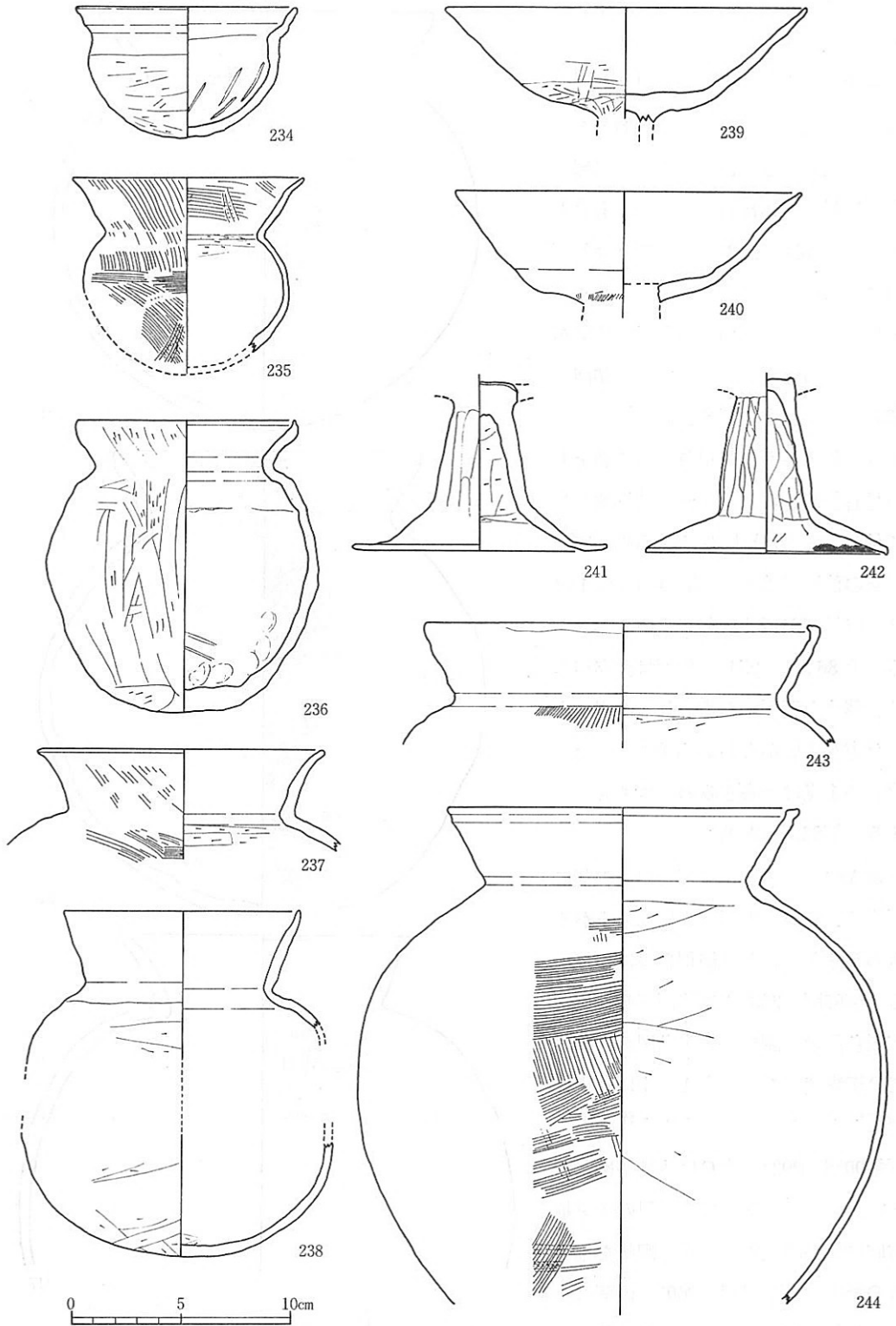
壺Bに分類した1点は外面全体に煤が付着する(第84図-238)。高杯脚A₂の1点の脚台部内面全体に布目圧痕がみられる(第84図-242)。甕はBよりC形態が多い。

包含層出土土器(第86図~第90図)

小型丸底壺A 4点、B 1点、C 2点、同不明1点、同(その他) 2点、計10点。壺A 4点、C 1点、同(その他) 2点、計7点。鉢A 3点、B 1点、C 1点、(その他) 1点、計6点。高杯杯A₂+脚A₂ 3点、A₁+A₁ 1点、A₂+B₂ 1点、杯A₁ 2点、A₂ 4点、A₃ 2点、杯B 1点、脚A₁ 2点、A₂ 4点、A₃ 1点、B₂ 1点、計22点。器台A₃ 1点。甕A 1点、B 1点、C₁ 2点、C₂ 1



第83図 Cトレンチ包含層中土器溜出土土器(2)

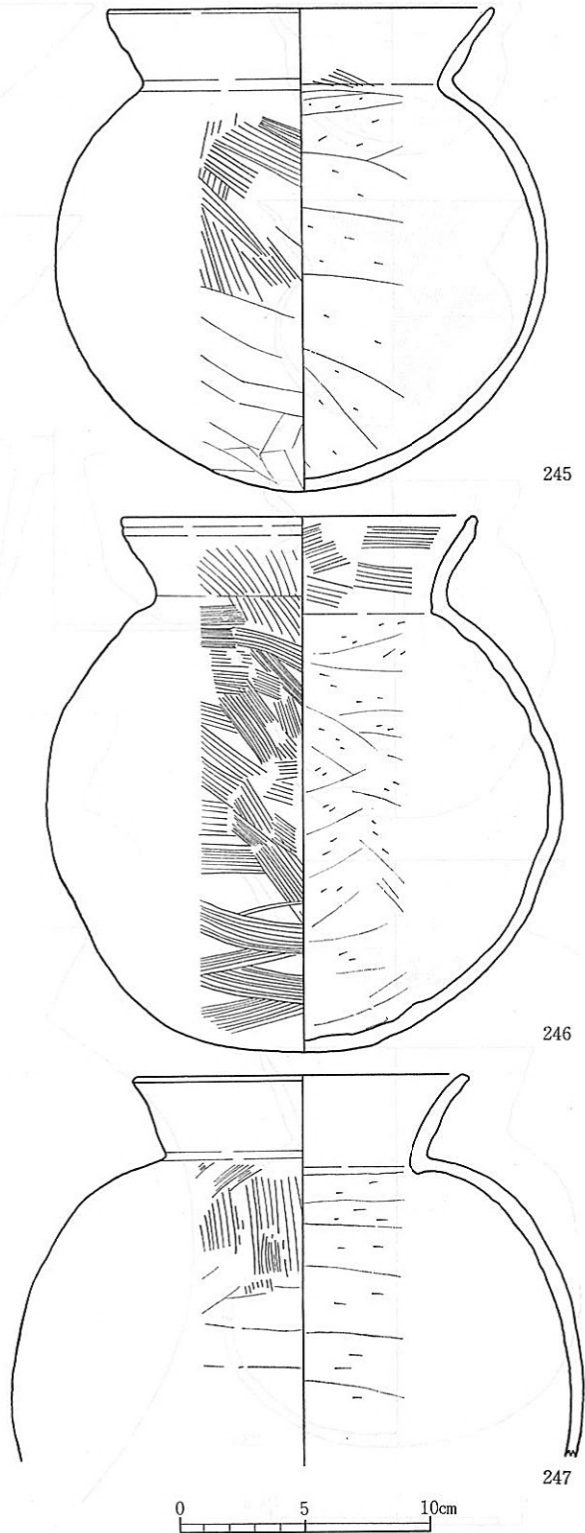


第84図 C'トレンチ包含層中土器溜出土土器(1)

点、計5点。製塩土器1点。全体合計52点を抽出する。

本遺跡出土小型丸底壺は口径と体部最大径の差が少ないのが一般的であるが、口径が大きく、しかも、口縁部の高さに対して体部の高さが低いものもある(第86図-252)。この1点は外面および口縁部内面を横方向の篋磨きで調整している。他のものと所属時期が異なるものかもわからない。第86図-255は器面保存が悪く、調整が不明である。体部外面に紫褐色系の色調をもつ付着物がみられ、これには指紋として付着した部分もある。小型丸底壺(その他)で含めたもののうち1点は、口縁部が短く体部が長いものである(第86図-254)。外面は保存が悪く、調整も不明である。むしろ壺に含めた方がよいかもわからない。(その他)の1点は平底ぎみのミニチュアである(第86図-250)。

壺Aのうち二重口縁部が口径の割に幅広く、しかも内傾ぎみに立ち上がるものがあり、他とは様相を異にしている(第87図-263)。生駒西麓産と似た茶褐色系の色調をもつが角閃石は肉眼では観察できない。壺Aの中には甕になるかもわからない1点も含めている(第90図-293)。壺Cは体部が図示できなかったが、外面は刷毛目の上を縦方向の粗い暗文風の篋磨き調整を施すものである(第87図-260)。内面はナデや指押えがみえる。壺(その他)に含めた1点は、内彎ぎみに短く立ち上



第85図 C'トレンチ包含層中土器溜出土土器(2)

がる口縁部と丸い体部をもつものである（第86図—258）。外面の刷毛目調整が目立ち、その上に黒色物質が塗布されていたようである。他の1点は、短く立ち上がる頸部と下方にのみ肥厚し、端面をつくる口縁部をもった壺である（第87図—264）。この時期の他の壺とは様相を異にする1点である。

鉢Aには小型品と大型品がある。前者は精製のものである（第88図—268、269）。後者については器壁が厚く、外面に煤あるいは黒色物質の付着がみられる（第88図—270）。鉢Cの底部は軽い篋削り調整がみうけられる（第88図—266）。鉢（その他）の1点は短く外反する口縁部をもった大型品である（第90図—294）。ただし、外面には煤の付着がみられる。

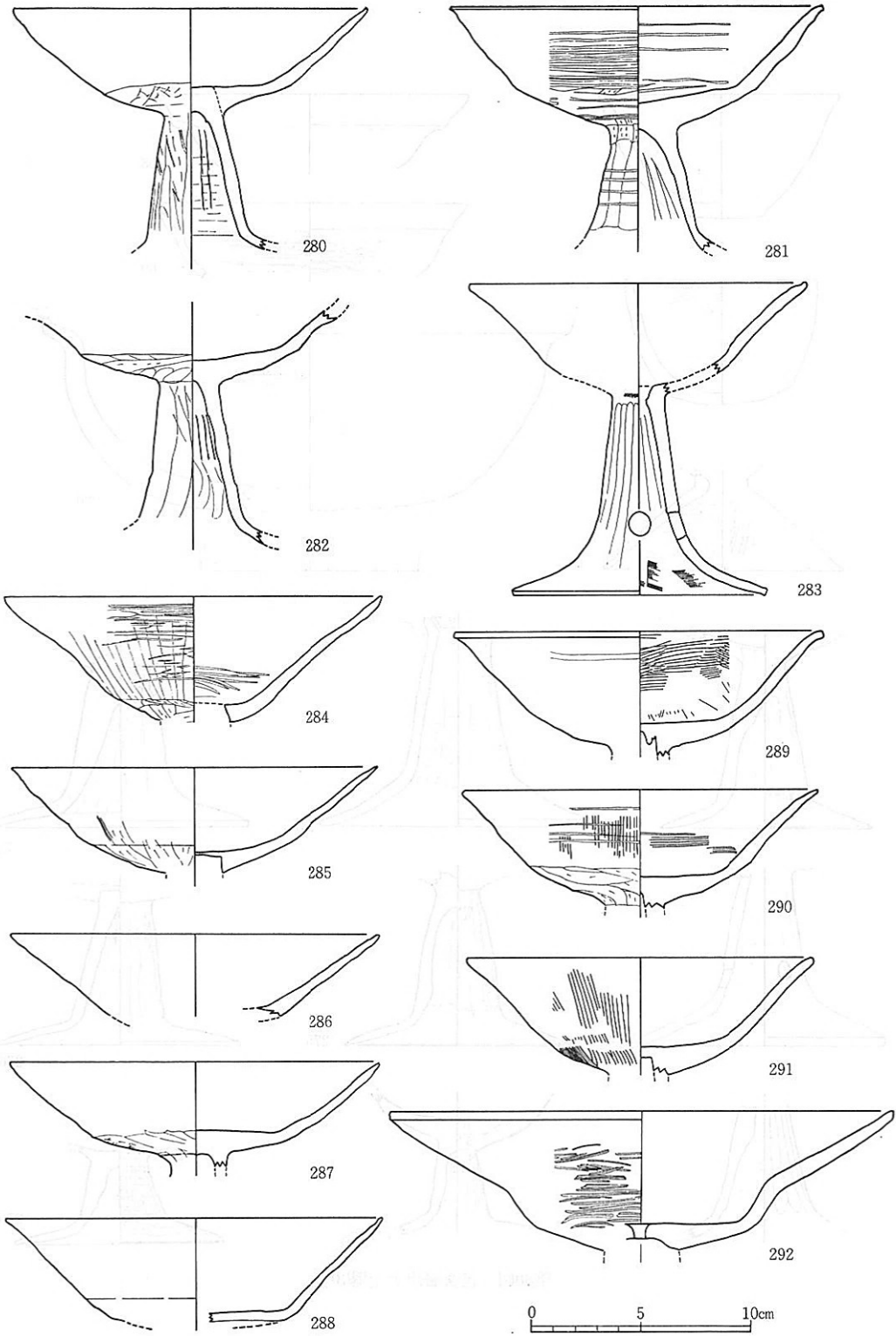
高杯杯部はA₂がやはり量的に多い。杯Bの1点は、杯底部の中央に脚部接合に関わる孔がある（第89図—292）。なお、確実に杯部と脚部が接合し同一個体と認められるとはいえないが作図で接合した1点がある（第89図—283）。

器台A₃の外面調整は刷毛目である（第88図—267）。

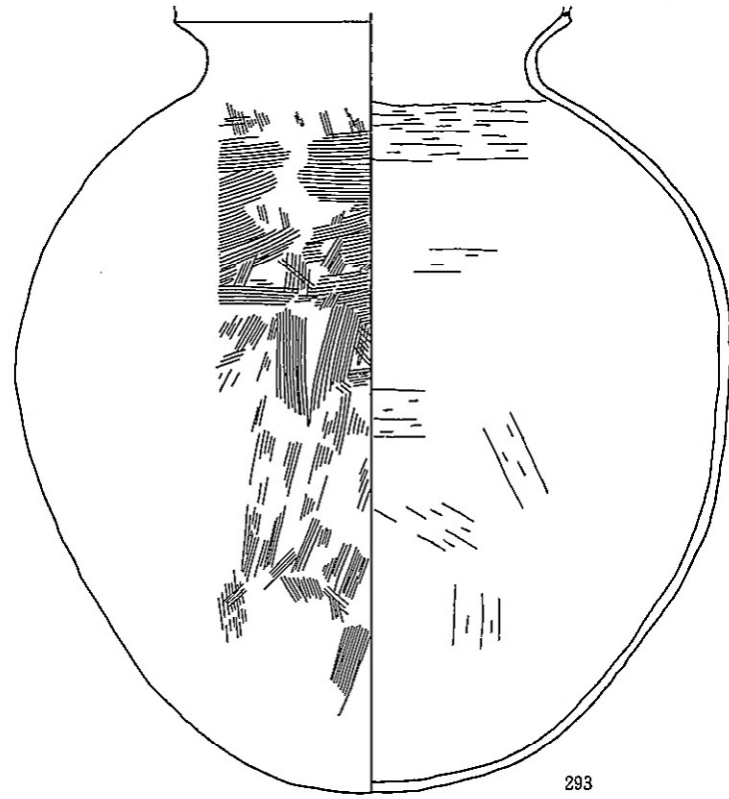
甕Aの1点は生駒西麓産である（第90図—295）。頸部から少し以下は叩き目調整の上を刷毛目調整で消している。



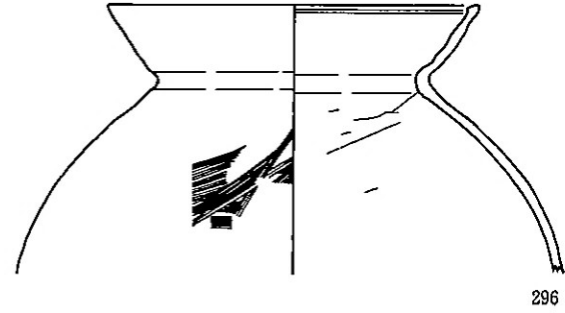
第86図 包含層出土土器(1)



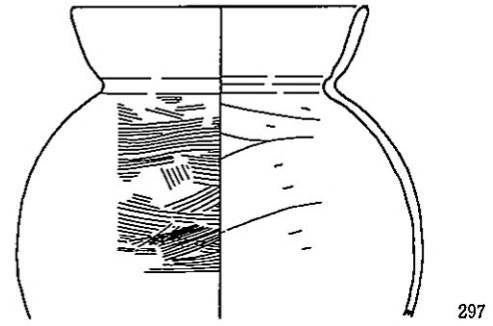
第89图 包含层出土土器(4)



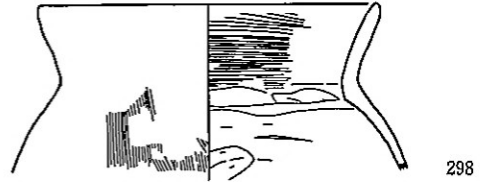
293



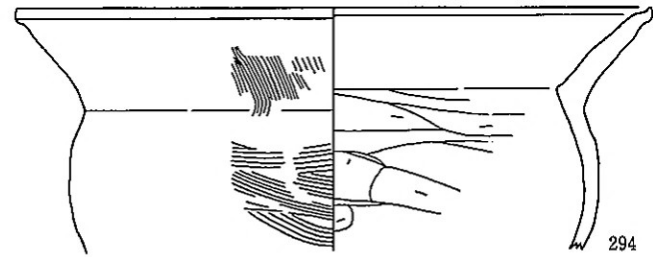
296



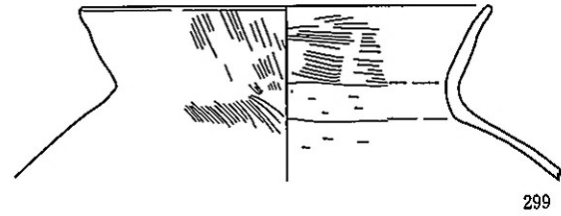
297



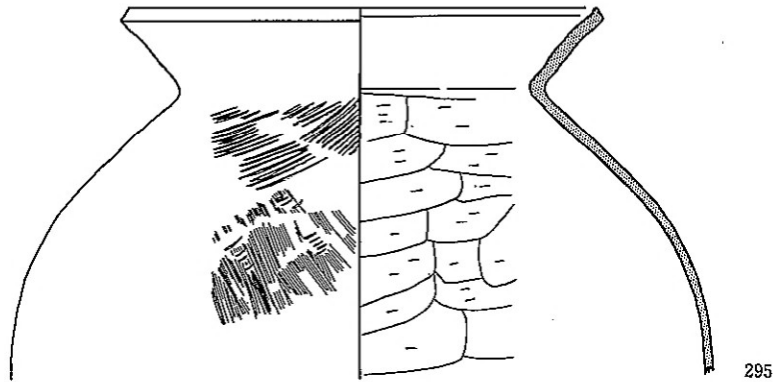
298



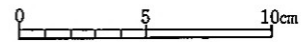
294



299



295



第90图 包含層出土土器(5)

第4節 古代 一水田の時代一

古墳時代前期の包含層を覆う粘土は、C・C'トレンチ北半では厚さ2m。Dトレンチでは中世長瀬川に削られて残っておらず、Eトレンチでは厚さ0.6m。Fトレンチでは古墳時代包含層が途切れるため、弥生時代中期遺構面上に0.6~1.0mの厚さで粘土が堆積している。この層中には足跡や畦畔が検出された面があり、水田であったことがわかる。花粉分析の結果でも、この粘土層は2層に大別でき、下層はイネ科の植物が優占し、水田として耕作されていたことを裏付けている。⁽³⁾

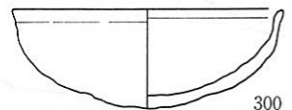
花粉分析によって水田と推定された層はC・C'トレンチでは上面がT. P. 5.4mで厚さ0.9m。E・Fトレンチでは、上面が中世長瀬川の河床となっており、T. P. 4.6~4.9m、厚さ0.6~1.0mである。

足跡・畦畔等から確認できる水田面は、C~Fトレンチまでを含め合計4面ある。C・C'トレンチで検出した水田面を下層より水田面1、同2、同3とし、E・Fトレンチの河床面で検出した水田面を同4とする。

水田面1

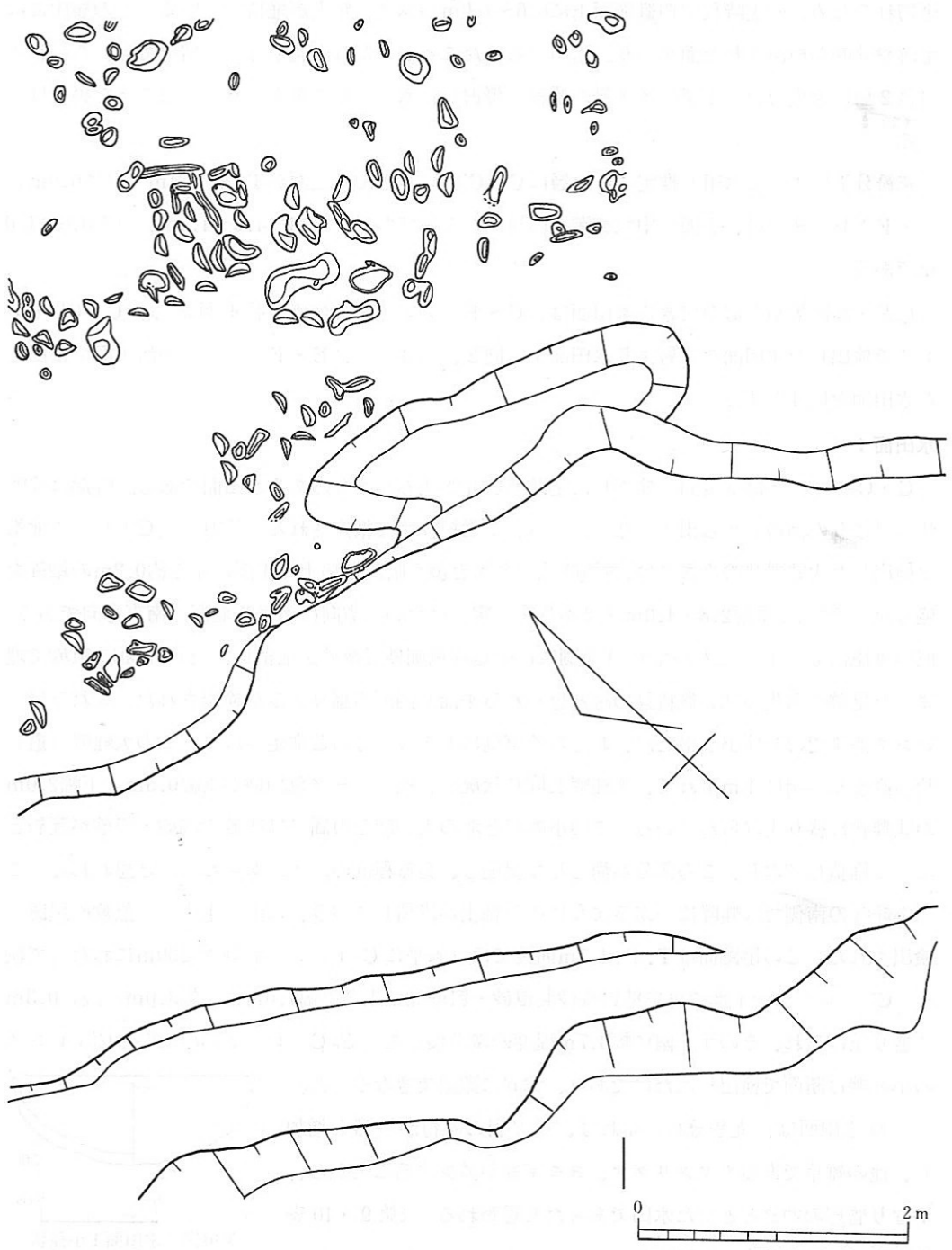
C・C'トレンチほぼ全面で検出した足跡及び畦畔状の高まりのある水田面である。時期は畦畔状の高まりの南の肩から出土した土器から、7世紀後半と推定される(第91図)。Cトレンチ北端で検出した大畦畔状の高まりは、古墳時代包含層を覆う暗灰色粘土の上面に厚さ約0.2mの細砂を盛ったもので、上端幅2.8~4.0mをはかるが一定ではない。方向はおよそ北西-南東方向である。道の可能性もある。この高まりの北側には暗緑灰色細砂混微砂が堆積し、その上面に粗砂で埋まった足跡や刃先の丸い農耕具の跡と思われる平面半円形の掘り込みが検出された。これらはトレンチ西側でのみ検出し得たが、おそらく東側にもあったものと推定される。この大畦畔(道)状の高まりの南に4m離れて、大畦畔と同じ状況で、灰オリーブ色細砂が上幅0.5m、下幅2.0mの畦畔状に盛り上げられている。この小畦畔と北の大畦畔との間には微砂や細砂・粗砂が互層となって堆積しており、この部分が溝として機能し、ある程度の流水があったものと思われる。この小畦畔の南側では畦畔にかぶるように灰色粘土が堆積しており、この粘土上面で無数の足跡が検出された。この足跡面はT. P. 4.7m前後ではほぼ水平にC'トレンチ北側まで50mにわたって続く。C'トレンチ南半部で再び粘質微砂混粗砂・粗砂混粘土が上幅1.0m、下幅3.0m、高さ0.3mに盛り上げられ、そのすぐ南に幅0.7m程度の溝が接している。Cトレンチの小畦畔・C'トレンチの小畦畔は断面で検出しただけであり、方向は確認できなかった。

この水田面は、花粉分析によれば、イネ科の花粉が一段と増加し、他の雑草であるカヤツリグサ、ヨモギ等が減少することから、かなり管理のゆきとどいた水田であったと思われる。(第9・10表 S T A. 107+40地点 No.20)

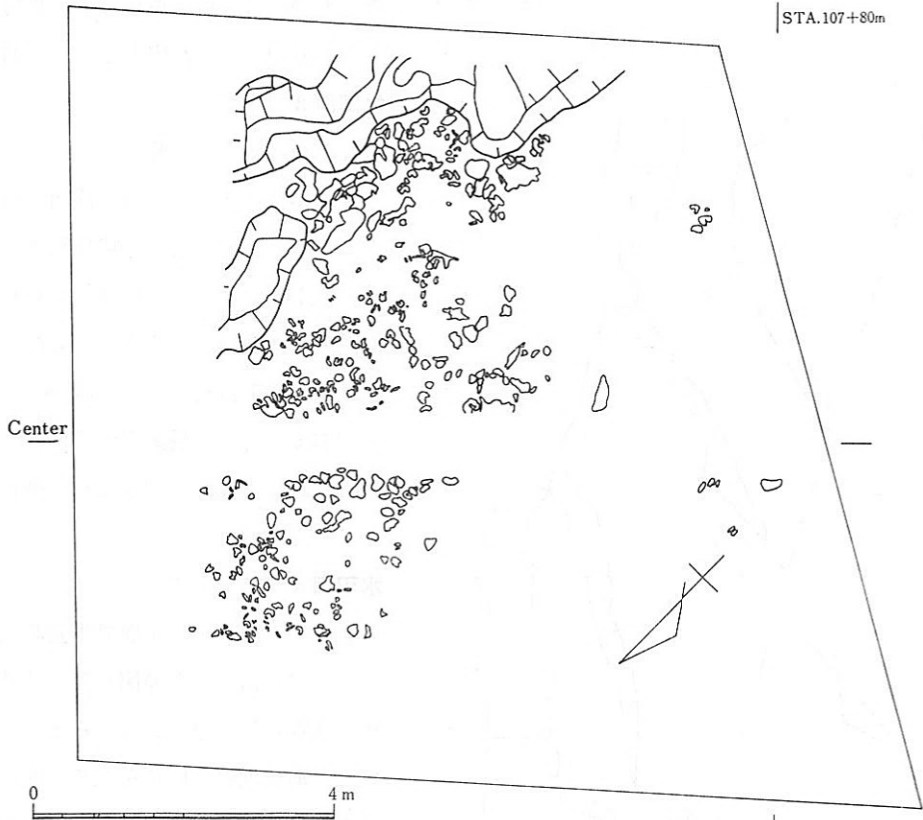


第91図 水田面1小畦状遺構出土土器

Center



第92図 C トレンチ水田面1大畦畔・鋤跡

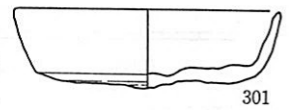


第93図 C'トレンチ中世長瀬川河床面足跡

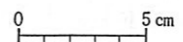
水田面 2

C' トレンチで粘土中に粗砂が挟在し、この粗砂を除去した面で足跡を検出した。粗砂中より内面黒色の黒色土器（第95図）が出土しており、9世紀後半頃の面と考えられる。この粗砂に対応する粗砂がC トレンチ南端で検出されており、足跡面と同一面と考えられる面とともに水田面 2 とする。この面はC トレンチでは T. P. 4.9m でまったく水平、C' トレンチから南に向かって少し高くなり、T. P. 5.0m となる。畦畔・溝等は検出できなかった。ベースは暗緑灰色粗砂混粘質微砂である。

層位から考えてこの水田面 2 に対応する面がD トレンチ北端で検出された。南は中世長瀬川によって削られているため、トレンチ北端に幅 3 m 程度しか残っていない。遺構のベース面は、暗緑灰色粗砂混粘質微砂で、この面は幅 1.2m、高さ 0.2m、N15°W 方向に小径状に高まりをもっている。この小径状の高まりの両側には暗緑灰色粘土が堆積していた。おそらくこの小径状の高まりが水田を区割する大畦畔状の遺構と思われるが、南の方では東に広がっていることから、完全な条里区画に

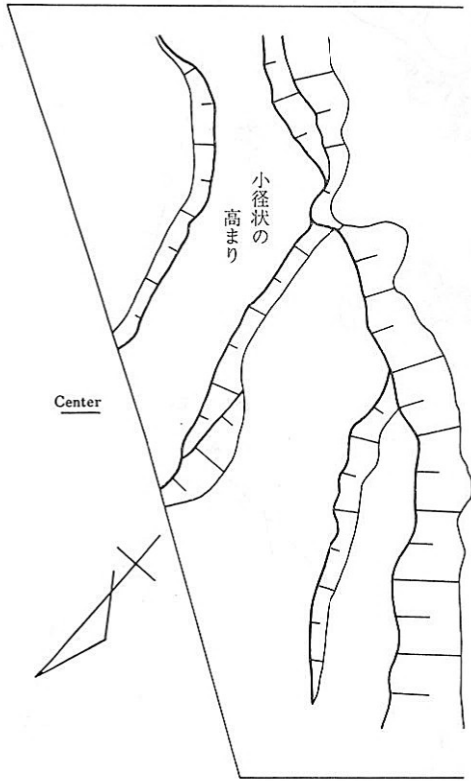


第94図 水田面 2 相当面出土土器



第95図 水田面 2 出土土器

STA.107+90



第96図 Dトレンチ水田面2相当面

そうものではないと思われる。遺構ベース土より須恵器杯が出土した（第94図）。

水田面 3

Cトレンチの花粉分析により、イネ科の花粉が優占する層の最上位面である。この層より上では均一の暗緑灰色粘土が厚さ0.7mにわたって堆積しており、人の活動の跡がまったくうかがえない。高さはT.P.5.2m、ベースは暗緑灰色粘土である。時期は長瀬川がこの位置を流

水田面 4

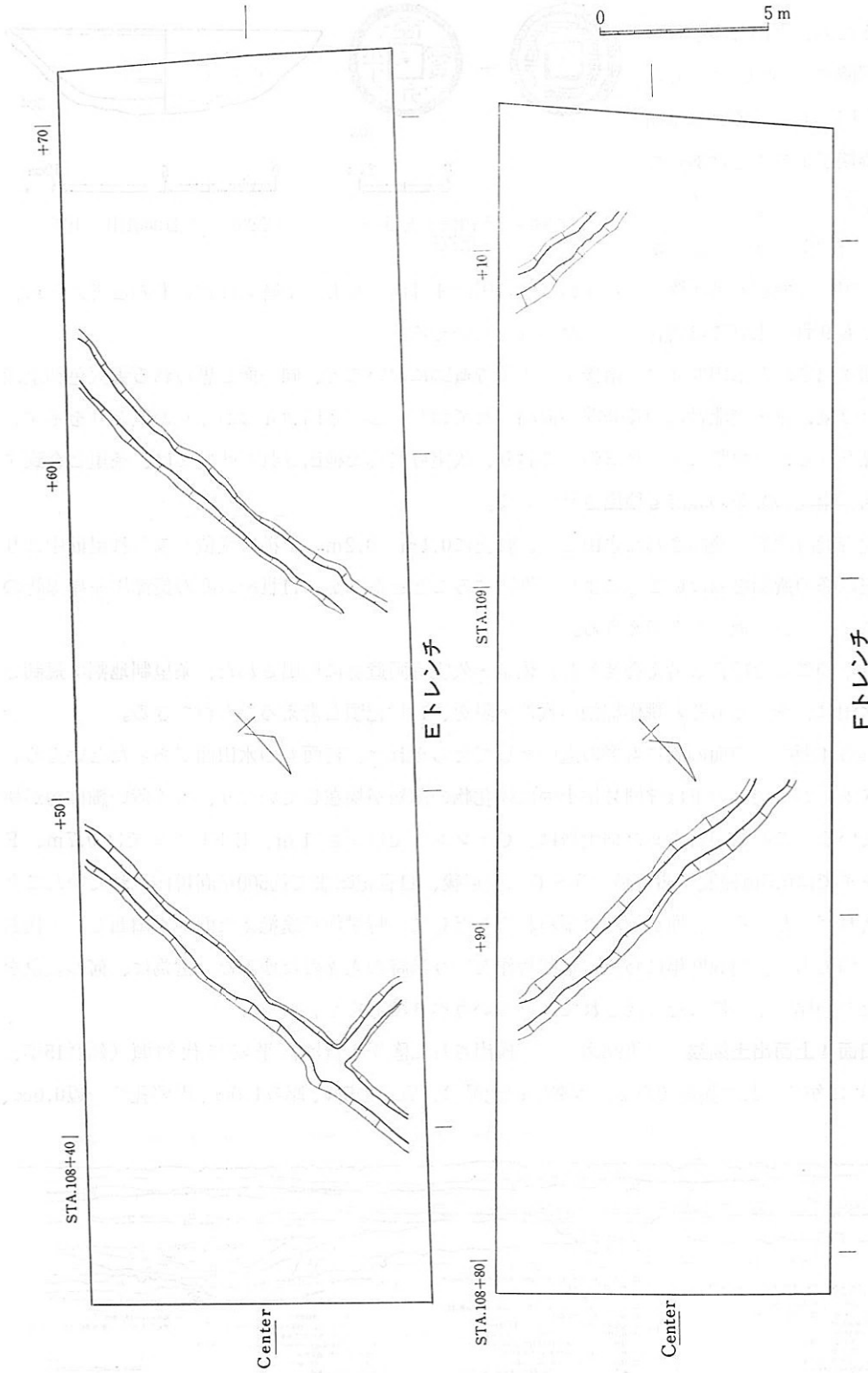
E・Fトレンチ河床面で平安時代の水田の畦畔と溝一条を検出した。畦畔は極めて遺存状態が悪く、ほとんど流失していた。河床面は青灰色粘土で一面に牛馬等の足跡が広がっており、畦畔はその青灰色粘土にわずかな高まりを見せる。畦畔は他の面より酸化が著しく早く、掘削後、2～3日で茶褐色に変色するので検

出が可能であった。畦畔の盛土の有無、耕土等は検証できなかった。

Eトレンチでは、ほぼ南北にのびる畦畔2条と、直交する東西の畦畔1条を検出した。畦畔の幅は南北畦畔で0.5m～0.8m、東西畦畔で0.3m～0.5mを測る。2条の南北畦畔の間隔は、畦畔の中心から計測すると約11mである。水田面直上で「隆平永寶」が出土した（第98図）。水田面4は中世長瀬川河床面とも同一であり、隆平永寶は水田面4の時期を決定する遺物にはなり得ない。

Fトレンチでは、2条のほぼ東西方向の畦畔を検出した。畦畔の幅は0.5m前後を測る。また、畦畔の間隔は約16mである。Eトレンチで検出された畦畔がほぼ東西軸・南北軸にのるのに対し、Fトレンチでは、北側の畦畔でN18°W、南側の畦畔でN77°Wを示し、真東西軸が若干ずれている。

また、Eトレンチ南側で、トレンチに直交する方向で、幅1.5m、深さ0.2mの溝1条（SD3001）を検出した。溝埋土は暗オリーブ灰色細砂に若干粗砂が混入し、埋土中より、9世紀末葉から10世紀初頭と思われる土師器杯が出土した（第99図）。水田面（河床）より切り込まれてい

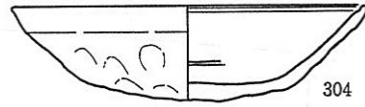


第97図 水田面4畦畔

るが、河流により削平を受けているため、水田との前後関係は明確にしえない。しかし、水田と共存あるいは水田より時期が下ることはあっても、上ることはない。また、畦畔と方向がずれることから、水田との並存も考え難い。とすれば、水田面4は溝よりも若干時期は古いものと考えられ、少なくとも9世紀末葉には耕作していなかったといえる。



第98図 水田面4上面出土銅銭



第99図 S D 3001出土土器

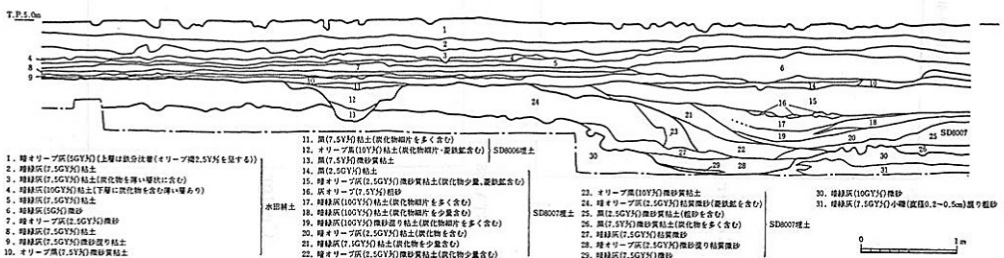
今回検出された水田面4は、南接する久宝寺遺跡においても、同一面と思われる青灰色粘土面からはほぼ東西軸・南北軸にのる畦畔が検出されており、この水田面4はかなりの広がりを示す。現在見うけられる地割にも、ほぼのっており、久宝寺遺跡で検出された畦畔では、条里と合致する東西、南北の2条の畦畔も検出されている。

久宝寺遺跡北側で検出された水田では、直上に0.1m~0.2mの粗砂の堆積がみられ粗砂中より11世紀以降の遺物をみないことにより、後述することとなるが、11世紀以降の長瀬川左岸堤防の決壊によって、廃絶したと考えうる。

これらのことを総合し考え合せると、佐堂・久宝寺両遺跡に検出された、条里制地割に規制された水田は、少なくともその耕作継続年代の下限を、11世紀頃と考えることができる。

これら4面の水田面の間にも層の違いとしてとらえれば、何面もの水田面があったといえる。E・Fトレンチでは上下ほぼ同じ粘土中に炭化物の薄層が挟在していたり、ごく薄い細砂層が挟在している。この水田と考えた粘土層は、Cトレンチでは厚さ1m、Eトレンチでは0.7m、Fトレンチでは0.5m程度であるが、5~6世紀以後、11世紀頃まで約500年間耕作されていたことを考えれば、むしろ、上面が粗砂で覆われるなどして一時耕作が途絶えた面が水田面として検証し得るのであり、約500年にわたる水田耕作という当時の人々のたゆみない営為は、何の表象をもたない厚い粘土にこそ表現されているというべきであろう。

水田面4上面出土銅銭 (第98図) 検出された隆平永寶は、平安時代初頭(延暦15年、796年)に初鑄された銅銭である。本遺跡出土品は、直径2.5cm、厚み1.6cm、内郭孔の一边0.6cm、



第100図 Fトレンチ南壁土層断面

重量3.25gを測る。

鑄型の型ずれは少しあり、裏面の外縁および内郭縁の幅が一方に太く、一方に細いという状況が見受けられる。鑄上がりが悪く気泡が多い。とくに側縁部に多い。平面の3ヶ所に、銅がまわらなかった透孔が生じている。外縁、内郭縁、側縁には研磨痕が認められる。いずれも同一方向の研磨痕である。文字は「平」の第一画と第四画の間隔が狭く、末画が長い。「永」は他文字よりも小さく扁平である。

なお、本品は保存状態が非常によく、錆などは見あたらない。

SD3001出土土器 (第99図) 口縁部内面直下に1本の沈線がめぐる杯である。底部からわずかに内彎ぎみに大きく広がる口縁部をもっている。平安時代初頭、9世紀末から10世紀初めに属するものであろう。

第5節 中世 —長瀬川の時代—

10世紀初頭以後、おそくとも13世紀初頭までに、調査区全体は長瀬川の河川敷となる。

調査では、粗砂を除去した時点で検出した微砂や粘土の面を河床面としてとらえたが、各時期の河床面はそれ以前に堆積した粗砂やあるいは粘土が河床面となり、そのある部分が流路となっていたわけであるから、ここでいう河床面とは、川が流れはじめてから1704年の付け替えまでの間に最も深く削られた川底の連続線というべきであろう。従って、当然それぞれの位置において、川底が形成された（最も深く削られた）時期は差があることと思われる。河床から出土する土器のうちで最も新しいものが、場所によって少し差があることも、上の想定を裏付けている。

河床面は第Ⅳ章で記したように、Dトレンチで崖状に深くなり、現地表下4.2mに達する。底から出土する土器で最も新しいものは13世紀初頭の瓦器椀や土師器小皿等である。FトレンチではDトレンチよりやや浅く現地表下2.8mで河床から14世紀頃の瓦器椀が出土している。また、Fトレンチ南端では10世紀末頃の土師器小皿数点が河床面から出土している。

河床面には河流によって刻まれたと思われる幾条もの溝状の窪みが検出された他には、Cトレンチ南端で2条の溝（S D2002・2003）と、おそらく円形にめぐる溝の東半分（S D2001）が検出されただけである。3条の溝は、人工的に掘削されたことが明らかであるが、埋土はこの面を厚く覆う粗砂と同じで遺物も出土していないため、性格は不明である。

C・C'トレンチにおいては第4節で述べた水田面の最上面（水田面3）と河床面との間に無遺物の粘土層が微砂の薄層を数層積みながら厚さ1.6m程度堆積している。この厚い粘土層は花粉分析によれば、樹木は少なくシダ類の繁茂するような特殊な植生と考えられ、また、珪藻分析からは池沼域の拡大、水深の増大、水域の安定という様相が考えられる。従ってこの粘土層は近辺に安定した流れがある状況のもとに堆積したもので、長瀬川がこの場所を流れはじめた時期を決める上で重要な意味をもつものと思われる。先に、10世紀初頭以後、遅くとも13世紀初頭までに川がこの位置を流れはじめたと述べた。その根拠はEトレンチの河床面で検出された溝から出土した土器によるものである。しかし、C'トレンチで黒色土器が出土した面（水田面2）がE・Fトレンチの水田面4にほぼ対応するであろうから少くともC・C'トレンチにおいては10世紀初頭以降、しばらく水田が維持されていたと推定される。その後、Cトレンチでは、厚さ1.6mもの粘土が堆積し、13世紀初頭に河床面が形成されるわけである。この粘土が近辺に流水のある状況での堆積とすれば川はおそらく11世紀に入ってからE・Fトレンチ付近を流れ始め、C・C'トレンチ付近では、上述の粘土が堆積していったのであろう。佐堂遺跡の北端（A地区）で検出された平安時代の長瀬川の堆積土の最上層に含まれる土器が10世紀末頃～11世紀初頭であり、この砂の上に形成される遺構が11世紀前半以後であることも上の推定を裏付けている。Cトレンチ中央部とEトレンチ北半部では、この河床面に堆積した粗砂の中間に、粘土や微砂の堆積がみられた。Cトレンチ中央部では、河床面が段状に下がった部分に暗緑灰色粘土・緑灰色粘土が中層

に黄褐色細砂を挟んで堆積していた。この黄褐色細砂を除去した面では多数の足跡（ヒト・ウシ）が検出された。また、粘土層自体も上下の粘土が交錯し、踏み込まれた状況を呈していた。この粘土は河原の一部にできた水溜りであろうと思われる。遺物は一片も出土していないが、Eトレンチの粗砂中の微砂堆積は、層の高さから考えてかなり古い時期のものと思われる。

E・Fトレンチの河床面で検出された足跡は、牛馬と思われるものが圧倒的に多く、人間のものほとんど見うけられなかった。足跡は、Fトレンチ南側、長瀬川左岸の護岸杭列の堤側に集中してみうけられる。また、水田上、畦畔上、Eトレンチ南側で検出された溝（SD3001）の底面からも多数検出されており、水田耕作時につくられたと考えるよりも、水田廃絶後、河床面になる時期を考えた方が妥当であろう。歩行の方向等は、不詳である。

Cトレンチにおける花粉分析では、河床面より上層は二次林のマツが激増し、モミ・ツガ・スギ等の一次林が減少している。従って中世以降、大規模な開発—一次森林の破壊が行なわれたようである。また、マツは堤防上に植えられたものであるかもしれない。⁽⁴⁾

畝状の起伏

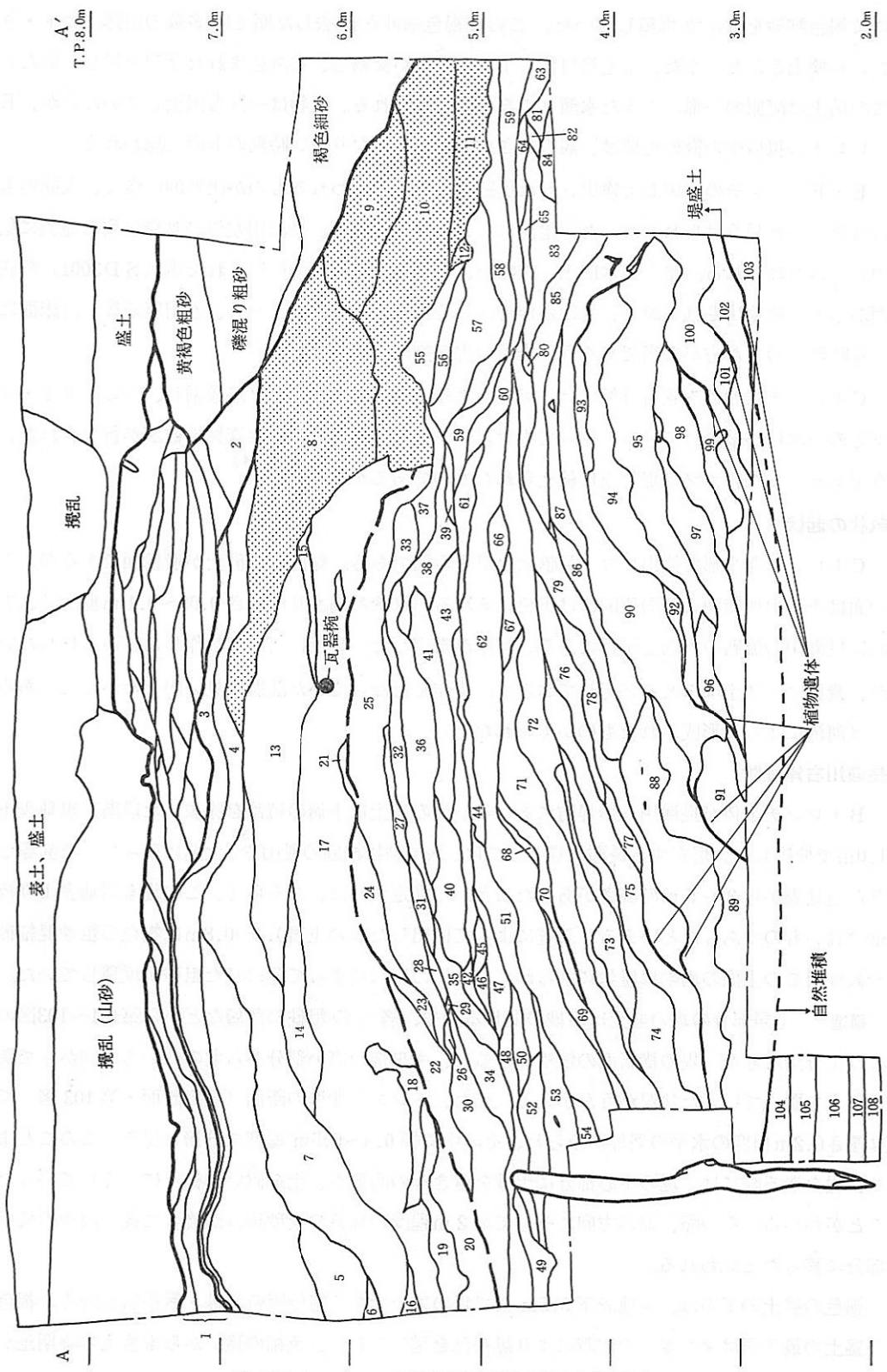
Cトレンチ北半部で検出した一見畝状を呈する面である。緑灰色微砂土が遺構面であるが、この面は上述の河床面より層位的には下位にあたる。畝状の高まりは高さ0.05~0.1m程度で、方向は長瀬川の流路の方向と平行である。河床が安定した一時期に河原で耕作した跡かもしれないが、遺構ベース土はほとんど汚れておらず、耕作を行っていた証拠は見い出せなかった。あるいは河流によって形成されたものかもしれない。

長瀬川右岸堤防

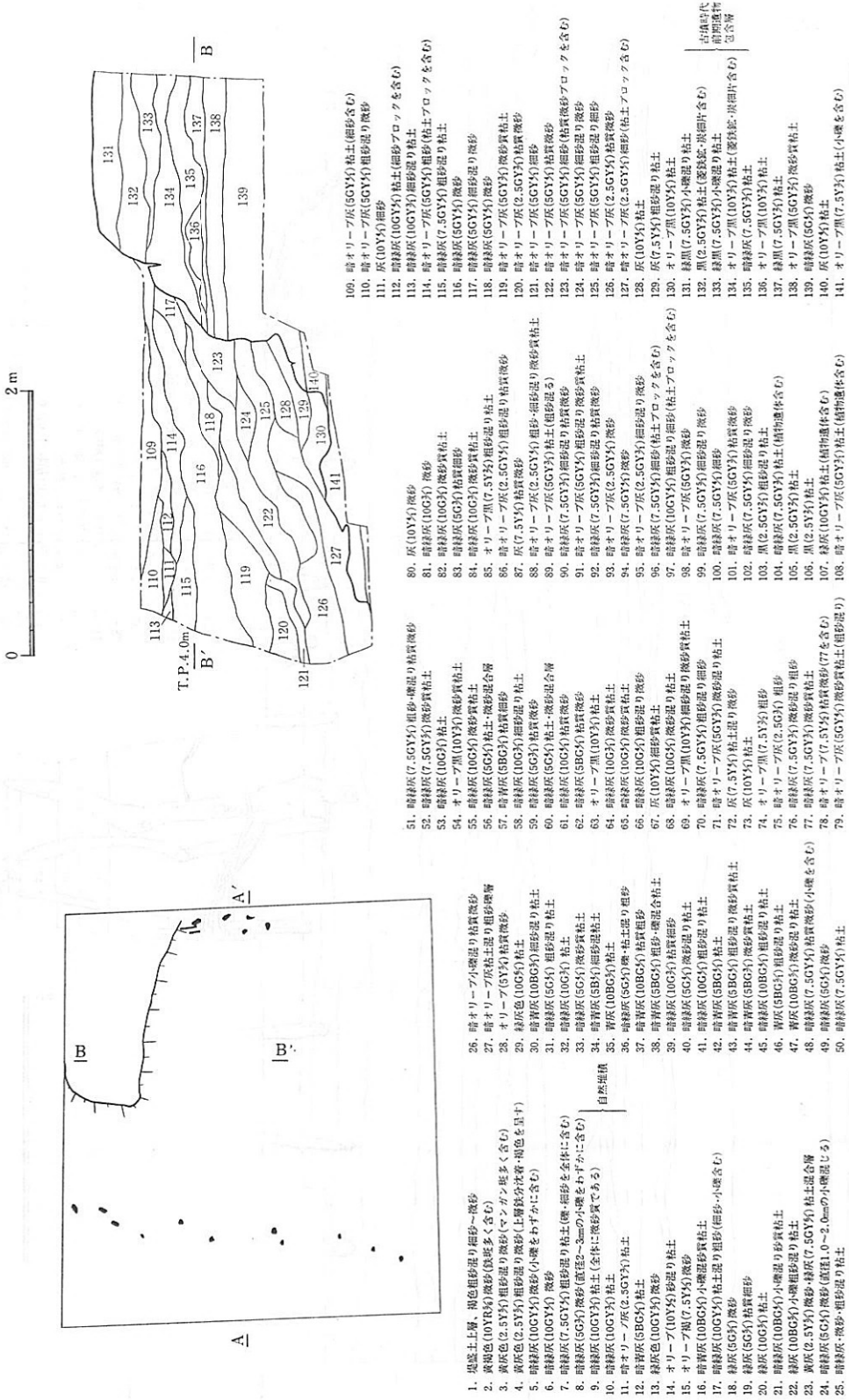
Bトレンチ全体が長瀬川右岸堤防にあたる。堤の盛土は上層の攪乱を除去した段階、現地表下1.0mで検出した。現存する長瀬川堤としては、八尾高校校庭の狐山や、大蓮に残っていた狐塚などが現地表から3~5mの高さがあったことから推定すれば、おそらく、この堤も現地表より数mは高いものであったといえる。調査によって検出した堤の上層0.4~0.8mは褐色の粗砂混細砂~微砂でこの上面の南端は崖状に削られており川の流れによって運ばれた粗砂が堆積していた。

構造 上層部分の堤の盛土は粗砂の混じる量や、層界の粗砂の薄層などから第101~103図のように分層できた。堤の横断面の観察によると、中央部の高い部分から北の低い方に向かって順々に土を置いていった状況がうかがえる。また、トレンチ北壁の断面（堤縦断面・第103図）では厚さ0.2m程度の水平の層界がみられ、その中で幅0.4~0.5m程度で分層し得る。このことより、堤を造る際には、堤の中心部分に土砂を置きその両側へ、土を置いて徐々に高くしていったことがわかる。その際、堤の方向にそって幅2m程度の部分の土砂積みが終わって後、両側の低い部分に移ったと思われる。

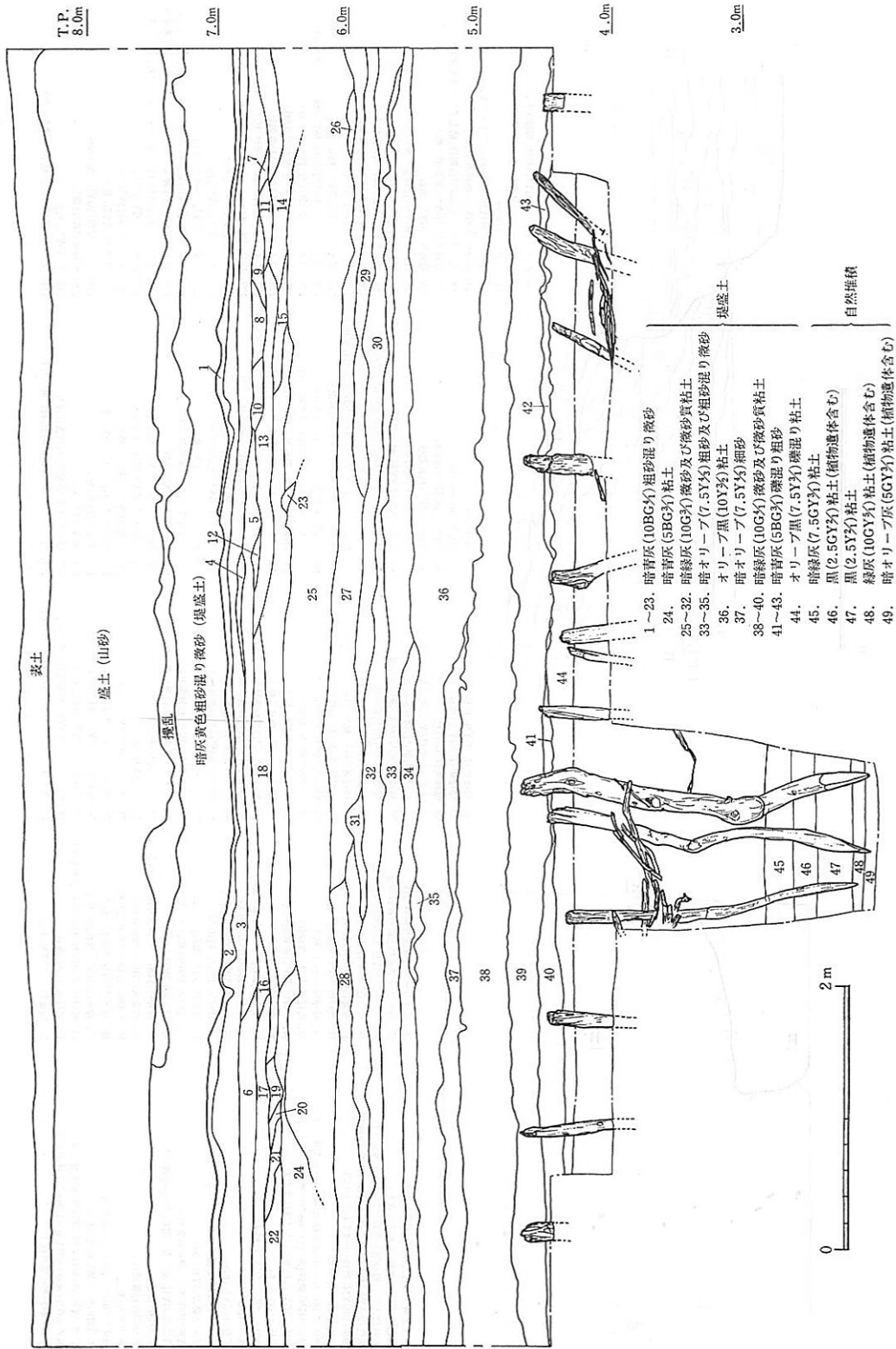
褐色の盛土の下層は、現地表下5.5mまで堤の盛土である暗緑灰色細砂・微砂層が続く。褐色の盛土の最下層はマンガンの沈着により黒褐色を呈しており、色相の違いからも盛土の時期差が考えられるが、遺物などからは確認できない。



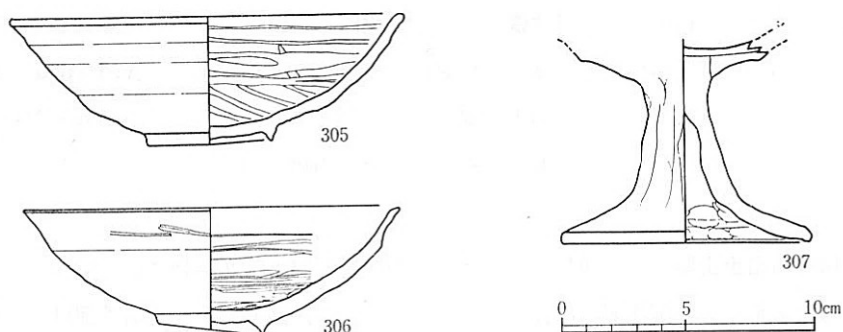
第101図 Bトレンチ長瀬川右岸堤防横断土層断面図



第102図 B トレンチ長瀬川右岸堤防縦断土層断面図(部分)



第103図 B トレンチ長瀬川右岸堤防基礎杭列立面図・堤盛土縦断面図



第104図 長瀬川右岸堤防盛土内出土土器

下層の堤盛土は、現地表下5.5~6.0m付近まで続く。この層中●印から完形の瓦器椀（第104図一305）が出土した。盛土は横断面でみると、下層ほど盛り上りの高い部分が南側（川の中心側）に寄っており、上層に移るに従って北側に寄っている。このことは、下層においては川寄りの部分を積んでから外側へ広げていったことを示している。層界には草・葉状の炭化植物遺体が検出された。

下層の堤盛土を現地表下4.0m（T. P. 4.5m）まで掘り下げた時点で、トレンチ北端と南端の一部で一列に並んだ杭列と段状に削り残された古墳時代前期の包含層を検出した。北側の杭列は一列にトレンチを少し斜めに横断する状況で検出された。この杭列の方向はこの地における中世長瀬川の流路の方向と一致している。杭は中央の3本のみ下端まで掘り下げた。それぞれの杭は長さ2.6m程度、直径0.1~0.15mの丸太で、枝を払っただけで樹皮を残したままの松材が使われていた。下端はT. P. 2mの深さまで打ち込まれており、弥生時代の層まで達している。このような丸太の他に、転用材と思われる角材を用いたものも1本あった。打ち込まれた杭の上半部には木の小枝を杭に交差させて絡みつけ、土留めとしている。トレンチ南端部で検出した杭は合計5本で、削り残された部分に接するように打ち込まれていた。北の杭列と同様に小枝を絡めて土留めとしている。方向は、ほぼ北の杭列に平行であるが、さらに西へ続くかどうかは不明である。

付図4の破線で示した部分が、先に述べた段状に削り残された遺物包含層の上面である。上面の高さはT. P. 4.75m程度である。この包含層及びそれ以下の堆積は水平の層順をもっており、縄文・弥生時代以来徐々に形成された土層である。この土層を削り取って堤が造られたわけで、しかも図示したように一部分は残したままである（第102図）。仮に「掘込地形」のような工法で堤の基底部を造ったとしても、部分的に掘り残すことは不自然であるし、また、連綿と堆積した安定した土層をわざわざ掘り取ることも自体が不自然である。とすれば、この掘り残された部分は、築堤の際に掘り残されたのではなく、洪水などによる水流によって削り残されたものであるのかもしれない。

時期 堤横断面図中、細かいトーンで示した部分は堤の盛土とは明らかに異なる暗緑灰色の粘土である。この粘土は、堤に接して湿地状の部分があったことを示している。そしてこの粘土を覆って上層の褐色の堤の盛土が行なわれていることは、築堤が少なくとも2時期に分かれるこ

とを示している。この粘土より下層は●印で示した位置より出土した瓦器椀より13世紀初頭と考えられる。しかし、最下層の堤の基礎杭の放射性炭素による年代測定ではA. D. 600 ± 10の数値が得られているため、かなり古い時期の築堤の可能性がある。ただ、この堤の基底部分を7世紀初頭とした場合、どの川に対する堤であるのか、または、川以外の施設としての杭列であるのかは判断し難い。

長瀬川右岸堤防出土土器 (第104図) 土師器高杯脚部および瓦器椀2点が出土した。高杯脚部は筒状の上半を絞った脚柱部から、低く短い裾部へと続くものである。脚裾端部は少し内方に突出する。杯部は底部が比較的小さい。内彎ぎみに大きく広がる口縁部が接合されるのであろう。器壁は全体的に厚みをもつ。奈良～平安時代のものであろう。

瓦器椀(第104図-305)は口径15.6cm・器高5.9cm・高台径5.1cm・器高指数37.8を測る。底部から斜め上方に直線的に体部がのび、口縁部でやや内彎する。口縁部外面は軽くヨコナデしている。体部外面の暗文はみられない。内面はやや間隔のあいた渦巻状、見込みには平行線状の暗文を施す。断面三角形の比較的安定した高台をもつ。

瓦器椀(第104図-306)は口径15.0cm・器高5.0cm・高台径4.2cm・器高指数33.3を測る。器高は305よりもやや低く、低部から斜め上方に直線的に体部がのび、口縁部は外面に強いヨコナデを施しやや外彎ぎみになる。口縁部外面はヨコナデの後に間隔のあいた暗文を施す。内面は渦巻状、見込みには平行線状の暗文を施す。高台は断面三角形の比較的安定した高台を持つ。306の方が、新しい要素を抽出し得るが、大きな時期差は考えられず、ともに13世紀前葉の時期が与えられよう。

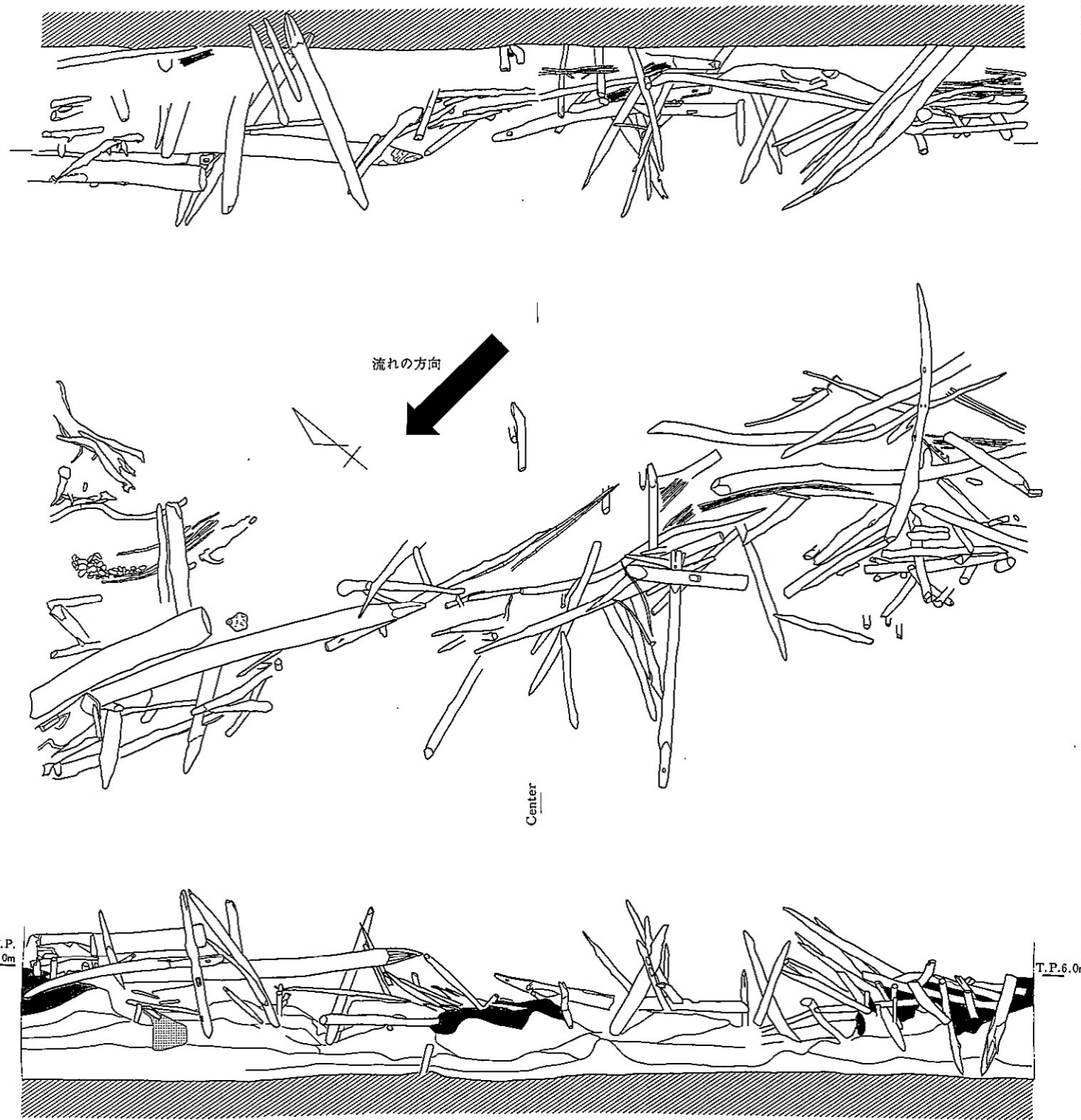
護岸杭列

Fトレンチ南端において、トレンチを横断するように、南東―北西にのびる柵状の杭列を検出した。本調査区は、旧大和川である長瀬川流路の中にあり、すぐ南側を現地割から読みとれる左岸堤防が南東―北西にのびている。検出された杭列は、この左岸堤防から15m～20m程北側に寄った所にあり、河流に対してほぼ平行に設置されていた。

長瀬川の流路には厚さ3m～4mの粗砂が堆積し、今回杭列の検出されたFトレンチ南半部でも、およそ3mの粗砂堆積がみられた。杭列は粗砂を1.5m程掘削した後T. P. 6.7mでその先端を検出した。杭先は河床面(T. P. 5m)の粘土中に打ち込んでいた。

その構造は河流によりかなり乱されており、復原するのは難しいが、およそ二段階の構築が考えられる。工程の概略を述べると以下ようになる。

1. 位置と方向を決定するための設定杭を予定した杭列両側位置に打ち込む。概して径5cm、長さ0.6m前後の細く短い杭で、河床面には0.2m～0.3m程度頭を出す。
2. 流心側と堤側にそれぞれ1列の杭を打ち込む。堤側の杭は流心側に杭先を向け、斜めに河床面から打ち込み、流心側の杭はほぼ直立する。杭は主旨径15cm程のもので長さは1.5mを超えるものが多い。



第105図 護岸杭列平面図・立面図
—109・110—

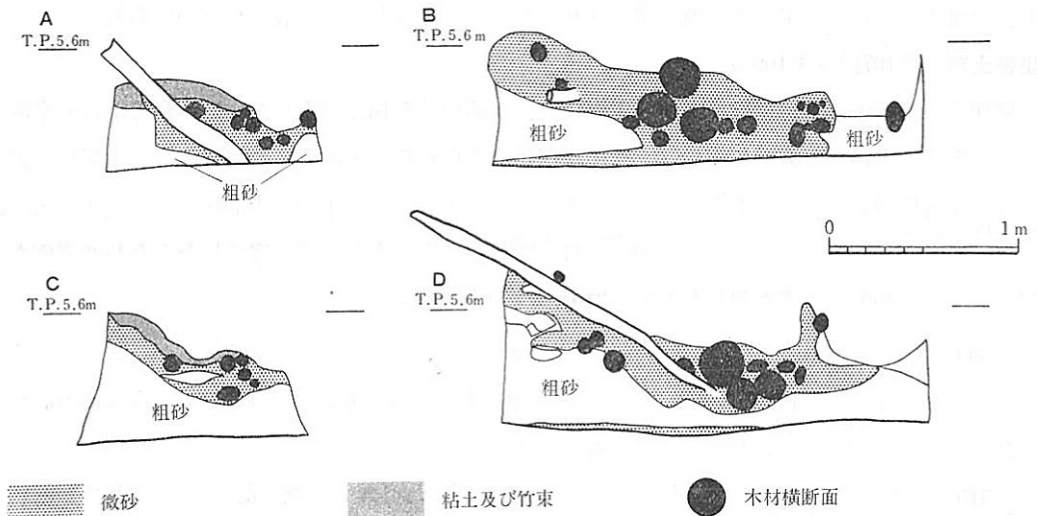
3. 堤側に斜めに打ち込んだ杭の上に横木を置き、縦杭によってとめる。横木は細いものから太いものまで種々あり、樹皮を残すものも多い。
4. 横木全面を覆うように微砂や粘土をかぶせ、中には、竹を束ねたものを杭列と平行におき、上に礫を積む。一般に、「粗朶沈床」、「根固め」と呼ばれるものである。

以上、1～4の基礎構造の上に、さらに長さ1m～2m前後の杭を「V字」に打ち込み、その間に横木を置いてかさあげをしている。この横木の中には、柄を切ったものや、柄穴を穿った材が数点検出された。その内の2点は、組み合わされた状態で検出されているが、廃材を転用したものであるのか否かは判断し難い。林野全孝氏の御教示によれば、建築材を転用したものと考えると、南北朝を上り得ない建築材である。柄穴を穿った材には、太さ0.2m前後、長さ3～5m前後の木材に樹皮を付けたままのものと、太さ0.15m前後、長さ1.8m前後の材との2種類があり、上部構造に何らかの木枠組みが設置されていた可能性もあながち打ち消し難い。

前述したように、杭列は推定される左岸堤防より約20m程流心側に寄り、堤と平行に検出された。また、現地表での地割から読みとれる旧長瀬川は、本調査区から金岡付近にかけて、若干北へ蛇行する地点であり、大蓮付近では氾濫の跡とも読みとれる地割の乱れがある。現に、本調査区に南接する久宝寺遺跡の北側では、平安時代の水田直上に20cm程の粗砂の堆積がみられ、近辺への氾濫の跡をうかがわせる。これらのことを考え合わせると、今回検出された杭列は、左岸の堤防を護るための杭列であると思われる。

護岸構築時期を明確に決定できる遺物は出土しなかったため、川自体の変遷及び周囲の発掘調査結果から、その時期について考えてみたい。

今回の調査によって、河床近くの粗砂中より出土した10世紀後半と思われる土師質小皿(第111図—348～350)は河流による磨滅をほとんど受けていない。従って長瀬川本流が当地点に変わった時期を10世紀後半から11世紀頃と考えて良い。従って護岸は、川の流路がこの位置に固定され



第106図 護岸杭列横断面図

た後であろうから、上限は10世紀後半と考えられるわけである。また、Bトレンチで検出された右岸堤防は、13世紀初頭には築かれていたことが確認された。しかし、護岸そのものの時期については二通りの解釈が可能である。

基礎構造の断面(第106図)を観察すると、断面A・Bでは微砂や粘土の上に竹束を重ねた「根固め」が、粘土面直上から設置されている。護岸杭列が粘土面直上に構築されたものであれば、その時期も流路の変更があって間もなくであろう。久宝寺遺跡の平安時代の水田面を覆うような氾濫のあった時期(11世紀以前)ともほとんど合致しよう。すなわち、護岸の下部の基礎構造を10世紀後半直後と考え、杭列上部構造と下部構造との間に時間的な隔りがあったものと解釈できるわけである。護岸は、何度となく打ち直し、かさあげがくり返されたのかもしれない。

一方、粘土面直上からの構築と考え難い点もある。断面C・Dでは粘土面と「根固め」との間に、粗砂堆積がみられ、また、断面A・Cにも河流反対側から粗砂の入り込む状況を示している。本来、粘土面上からの構築であり、「根固め」が河流によりえぐられ流失し、横木の周囲のみ残存したという考え方もできるが、礫群、墨書土器は粗砂中より一括して検出されたものである。ある程度粗砂の堆積した後、護岸設定部分のみ粘土面上に堆積した粗砂を取り除いてからの構築とも考えられる。間層に堆積した粗砂中から、15世紀初頭と思われる瓦質羽釜(第111図—359)が出土しており、護岸杭列の時期も15世紀以降と考えなければならない。これは、杭列上部の柄組材が南北朝を上り得ないという指摘とも矛盾しない。

河川内の構築物であり、その多くが流失あるいは原形を留めていないため、これ以上、時期を限定できない。

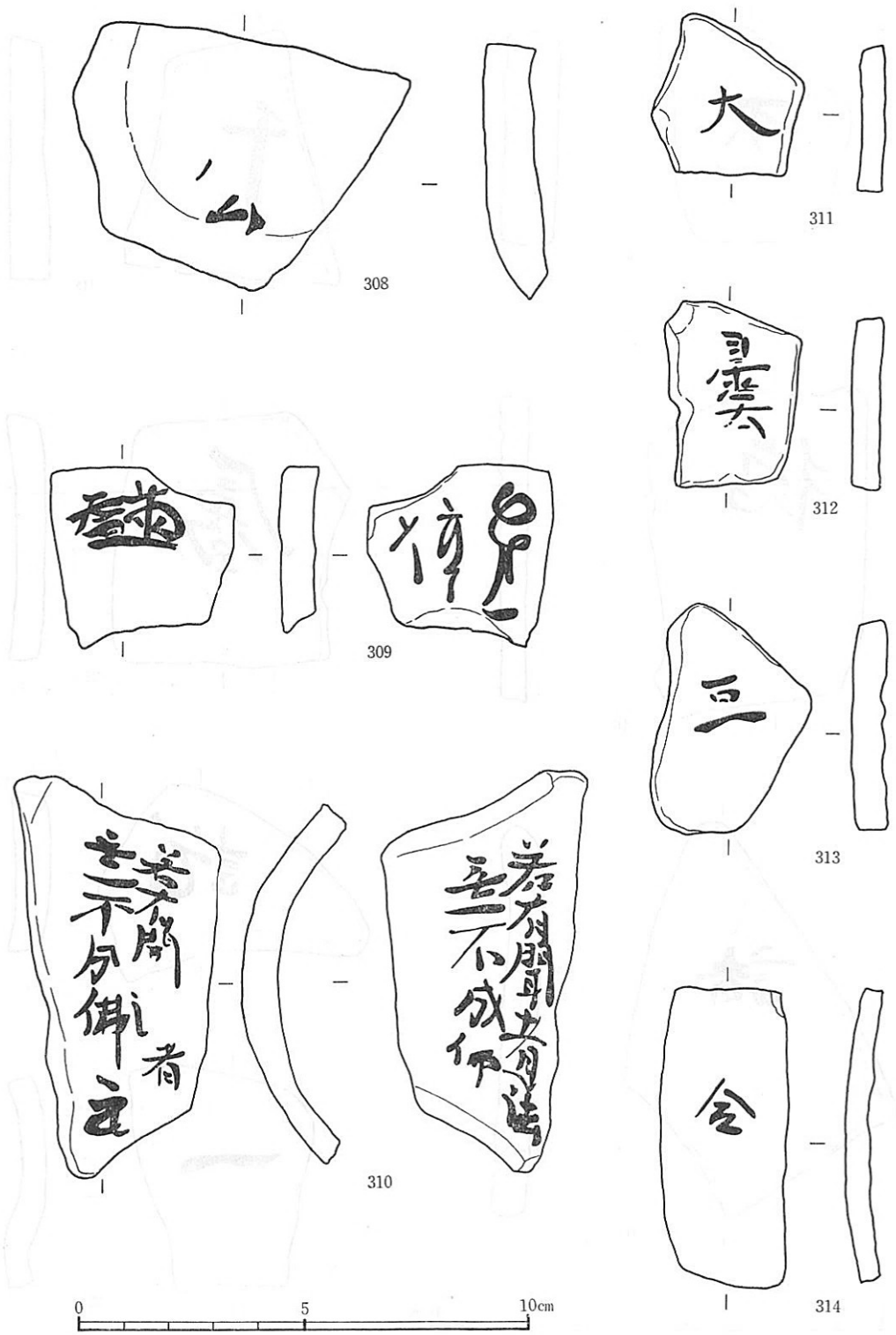
今回の調査で、この地点に長瀬川本流が流れ出したのが10世紀後半以降であること、右岸築堤が13世紀初頭であることが解明された。護岸杭列の時期は決し得なかったが、築堤工事等と軌を一にした動きがあったものと思われる。中世初期における大開発の波が、中世佐堂遺跡においても、大河川を固定し、集落や耕地を安定させようとする動きとなって表われたのであろう。

墨書土器(第107図～第109図)

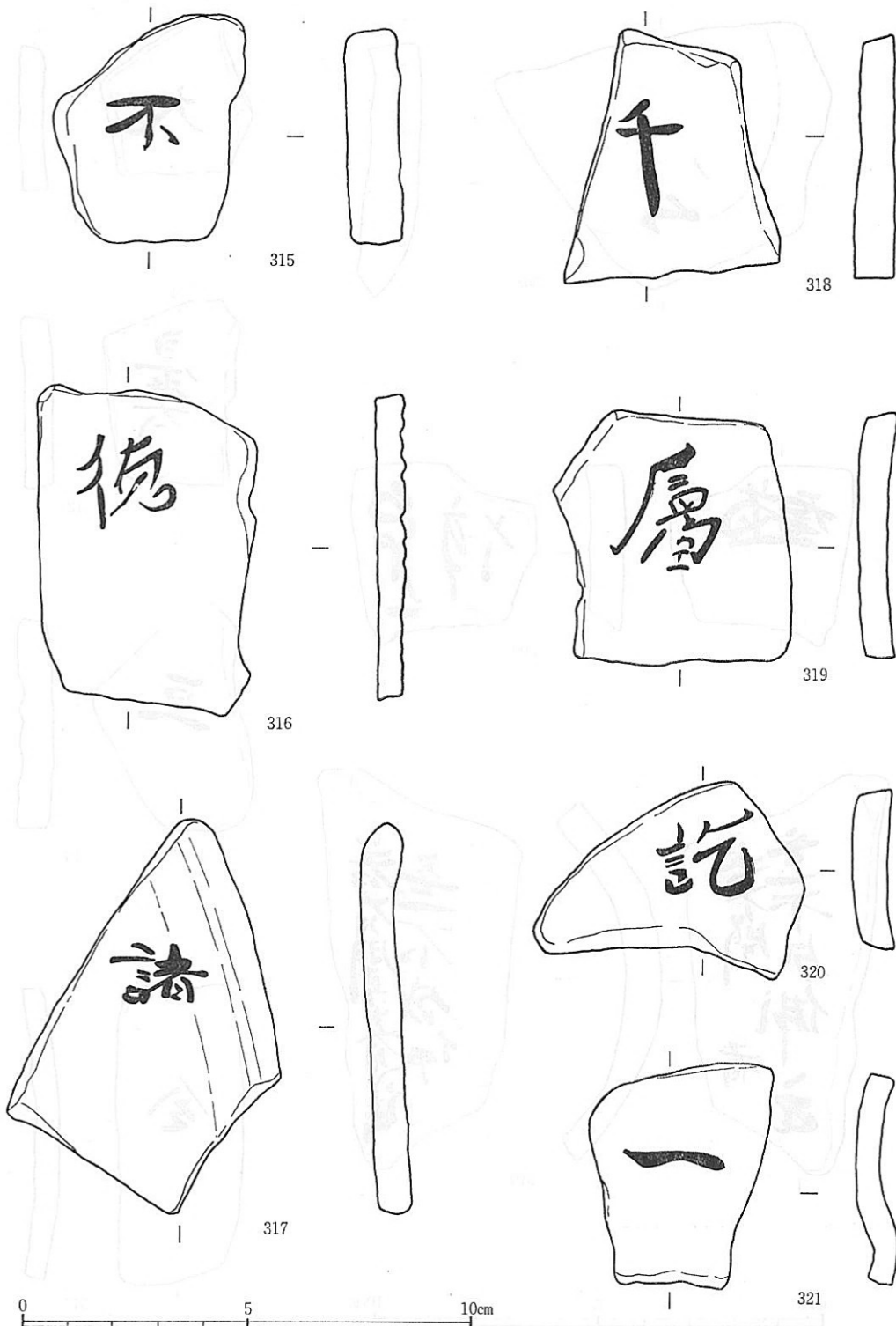
杭列内の粗砂中より、墨書のある須恵器片や、土師器片が16点出土した。いずれもかなり摩滅した土器片に書かれたものであり、土器に時期差がみられることから、河原で拾った土器片に書いて構築時に納めたものであろう。判読できるものも多くあり、1つの土器片に一字のみ記した、「一字一石経」のようなもの(308・311～324)、二字を合わせて一字にした、合わせ文字を記したもの(309)、一文を記したもの(310)等がある。

(309)は表裏両面に墨書がなされている。表は、一見して一字のようであるが、2つの文字を一字に合わせた、「合わせ文字」である。「益雨」もしくは「益菌」を合わせたようである。裏は意味不詳の文字であり、梵字のようにもみえる。

(310)は表裏に同様の文句を並べる。表は「若有聞□者 無一不成仏也」と記されており、裏には「若有聞者レ法 無一不成仏」と記されている。おそらく、裏面は語順を誤ったもので、誤



第107図 長瀬川左岸護岸杭列内出土墨書土器(1)



第108図 長瀬川左岸護岸杭列内出土墨書土器(2)

りを「レ」で修正したものに違いなく、従って梵字「𑖀」は記されていないのであろう。表面が正しく書き直されたもので、「□」には「法」の字が入るものと思われる。

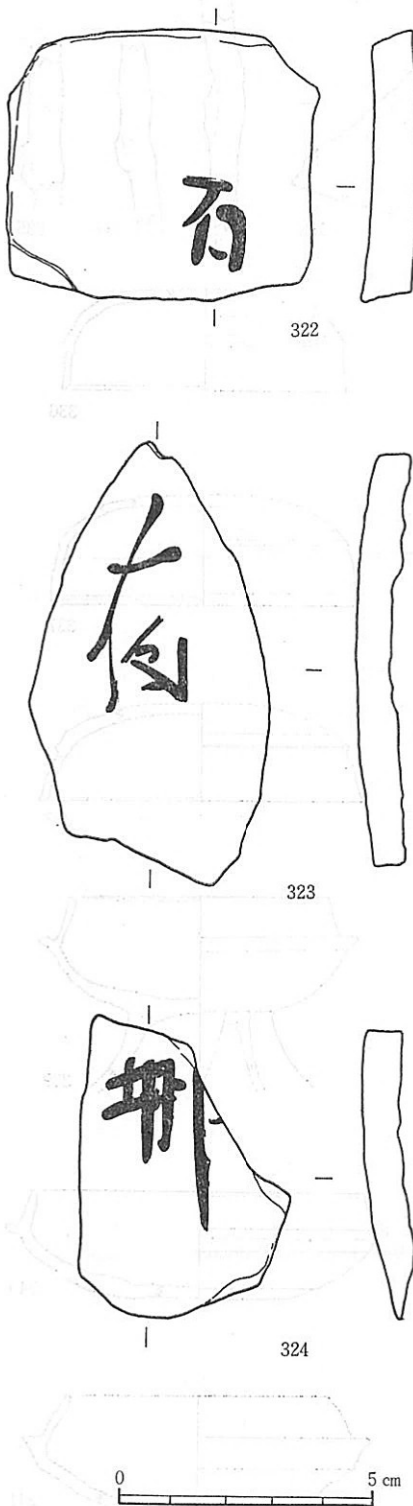
308・311～324は、一片の土器片に一字を記したものであり、判読できるものには、「大」(311)、「曇」(312)、「令」(313)、「不」(315)、「徳」(316)、「諸」(317)、「千」(318)、「属」(319)、「訖」(320)、「一」(321)、「有」(323)等がある。今回出土したものの中には石に墨書したものはみられなかったが、以後の調査ではあながち石といえども注意を怠ることは出来ない。

「若有聞法者、無一不成仏」は法華経方便品二の中に見られる一文である。書き下し文に直すと「若し法を聞くことあらん者は、一人として成仏せずということなけん」となる。伴出した他の資料も、法華経の中の一文字を抜書したものと考えてよいだろう。同じように、一石に一字ないしは数字を記したものは、磔石経、あるいは一字一石経と呼ばれるが、今回の出土例は石ではなく、川原で拾った土器片に記したもので、土器経というべきであろうか。いずれにしても、磔石経の類であろう。

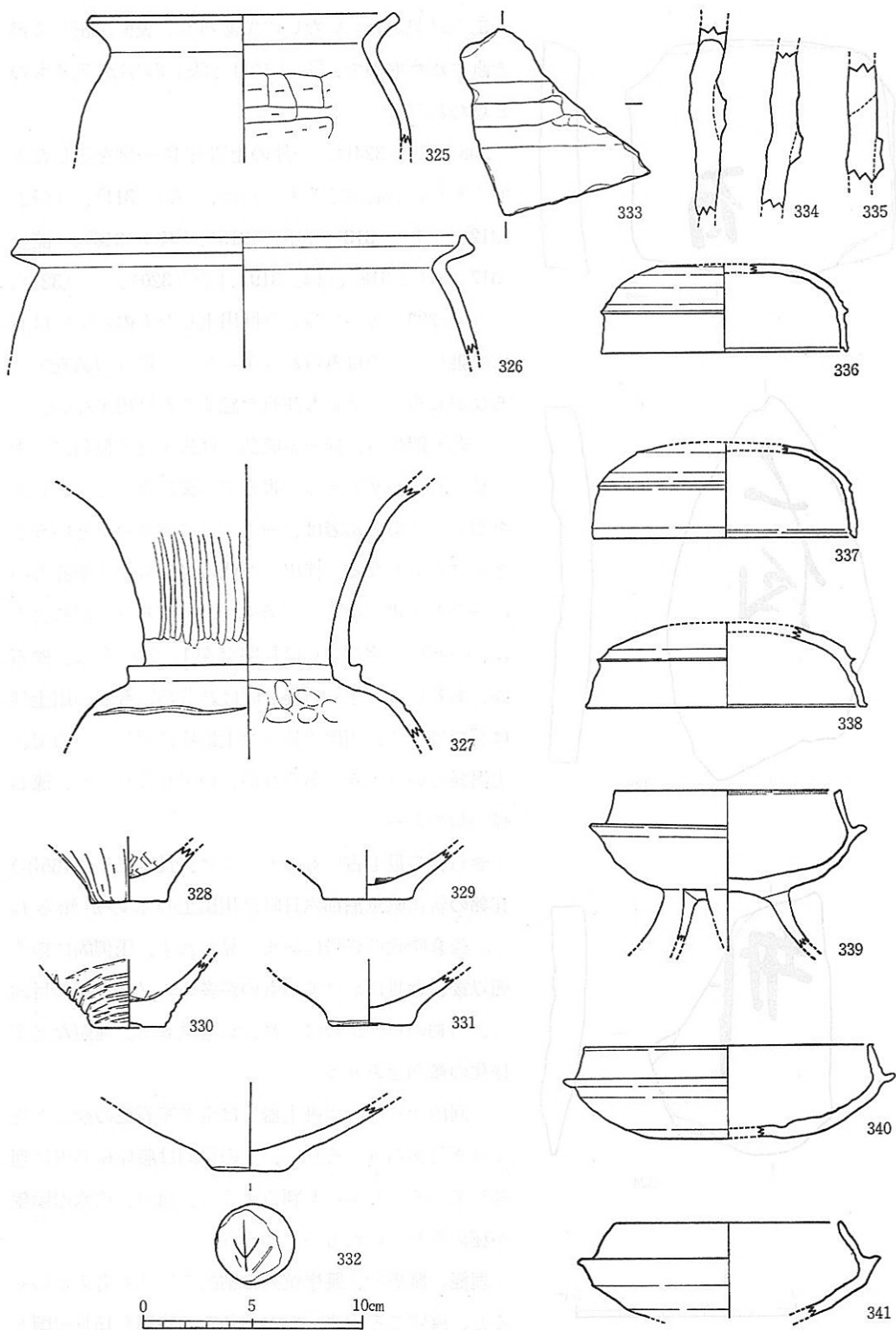
磔石経の最も古いものとしては、長寛三年(1165年)在銘の新潟県魚沼郡六日町余川出土のものが知られる。鎌倉時代の資料はあまり見られず、圧倒的に南北朝以後、近世にかけてのものが多し。又、埋経の目的も、当初の目的からはずれ、追善供養や、地鎮など多様化の傾向をみせる。

今回出土した、墨書土器片は全て磔石経の亜種と見るべきであろう。そして、その目的は護岸杭列内に埋経していることから判るように、地鎮、治水の願望が秘められていたものであろう。

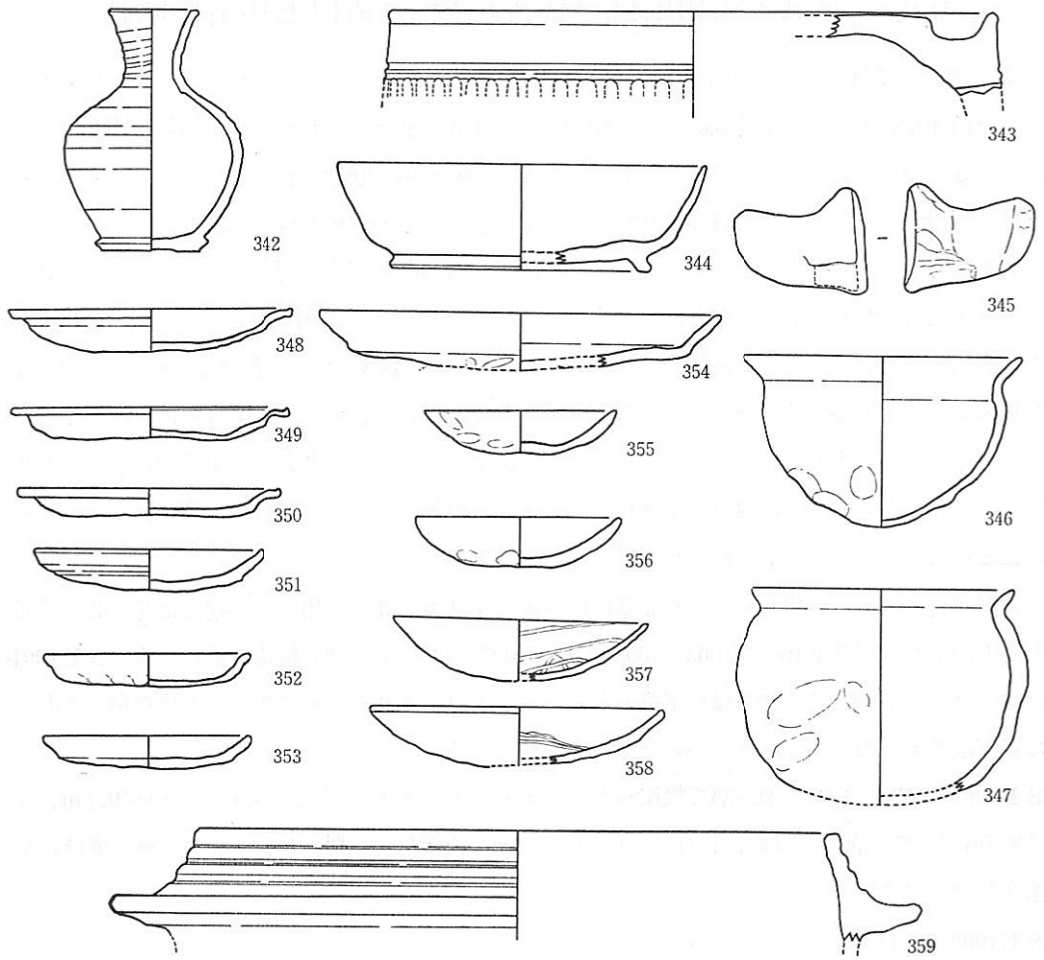
埋経の歴史や、護岸杭列の枘組の年代を考え合わせると、確定こそ出来ないが、凡その時期を15世紀頃と考えてよいのではないだろうか。



第109図 長瀬川左岸護岸杭列内出土墨書土器(3)



第110図 長瀬川堆積粗砂出土土器(1)



0 5 10cm

第111図 長瀬川堆積粗砂出土土器(2)

第6節 近世・大和川付け替え以後 一新田と集落の時代一

宝永元年（1704年）の大和川付け替え後、旧河川敷は新田として開発される。新田として開発された総面積は1,063町8段2畝、石高10,954石7斗5升9合といわれる⁽⁶⁾。この新田開発は付け替え後3年間ほどのうちに行なわれ、調査区一帯も金岡新田と呼称されるようになった。付け替え以降明治頃までは畑として耕作されていたようで、灌漑用の井戸も検出されている。

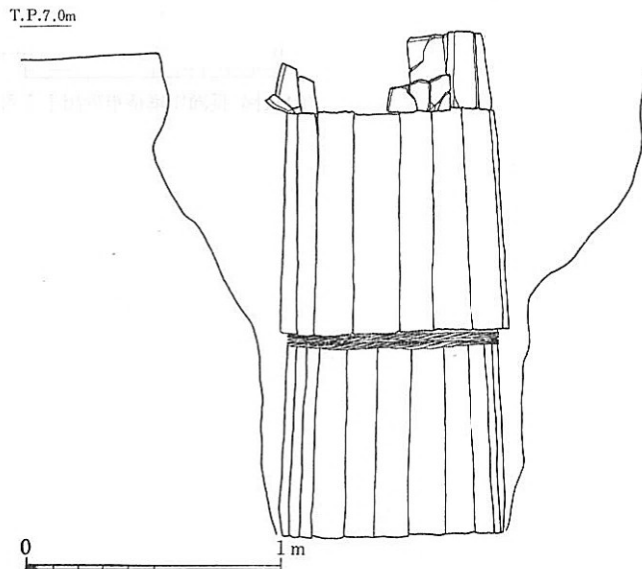
調査区付近は字「外島」といい、大正3年の陸軍演習の際に天皇が閲兵した場所である。Cトレンチ北端近くでその顕彰碑の基礎石が出土している（現在、碑は中央環状線の東側に移されている）。大阪府全志は「其の地は7畝6歩の広さを有し、曠漠たる平野に位置せるの高地なるを以て四方を展望するを得べし。」と記していることからも、大正末年頃までは、河内平野の中で一際高かったものであろう。明治18年の陸地測量部による仮製2万分の1地図においても集落は記されておらず、この地域の宅地化は、大正末年以降のことである。宅地化に伴ない、新たに掘られたコンクリート製井戸枠を用いた井戸も検出されている。

井戸は合計6カ所検出した。うち3基は桶状木枠を2段～3段に用い、上端には瓦を2段に重ねたものである（S E1002・1003・1006）。S E1005もおそらく同じ構造と思われる。S E1001はコンクリート枠、S E1004は最下段のみ木枠で上はコンクリート枠である。木枠を用いる井戸は最下段の木枠の下端部を外側から削って尖らせてある。

S E1001 C'トレンチ南西隅で検出したコンクリート枠井戸である。井戸枠の直径0.7m、深さ3.5m以上で、掘り方は直径1.1m程度である。居住に伴なって掘られ、中央環状線造成時に廃棄されたものである。

S E1002 Dトレンチ北寄り
現地表下2mで検出した木枠・
瓦枠井戸である。

木枠は2段で、それぞれ広い方の口を下にして重ねている。上段の木枠は幅12cm程度、厚さ2cm、長さ86cmの枠板材16枚を上下2カ所で竹のタガによって留めている。下段は、ほぼ同じ幅・厚さ・長さの19枚の板材をつないでいるが、下端は手斧様の工具で粗く削って楔状に尖らせてある。枠の板材には板目の杉材が用いられているが、すべ

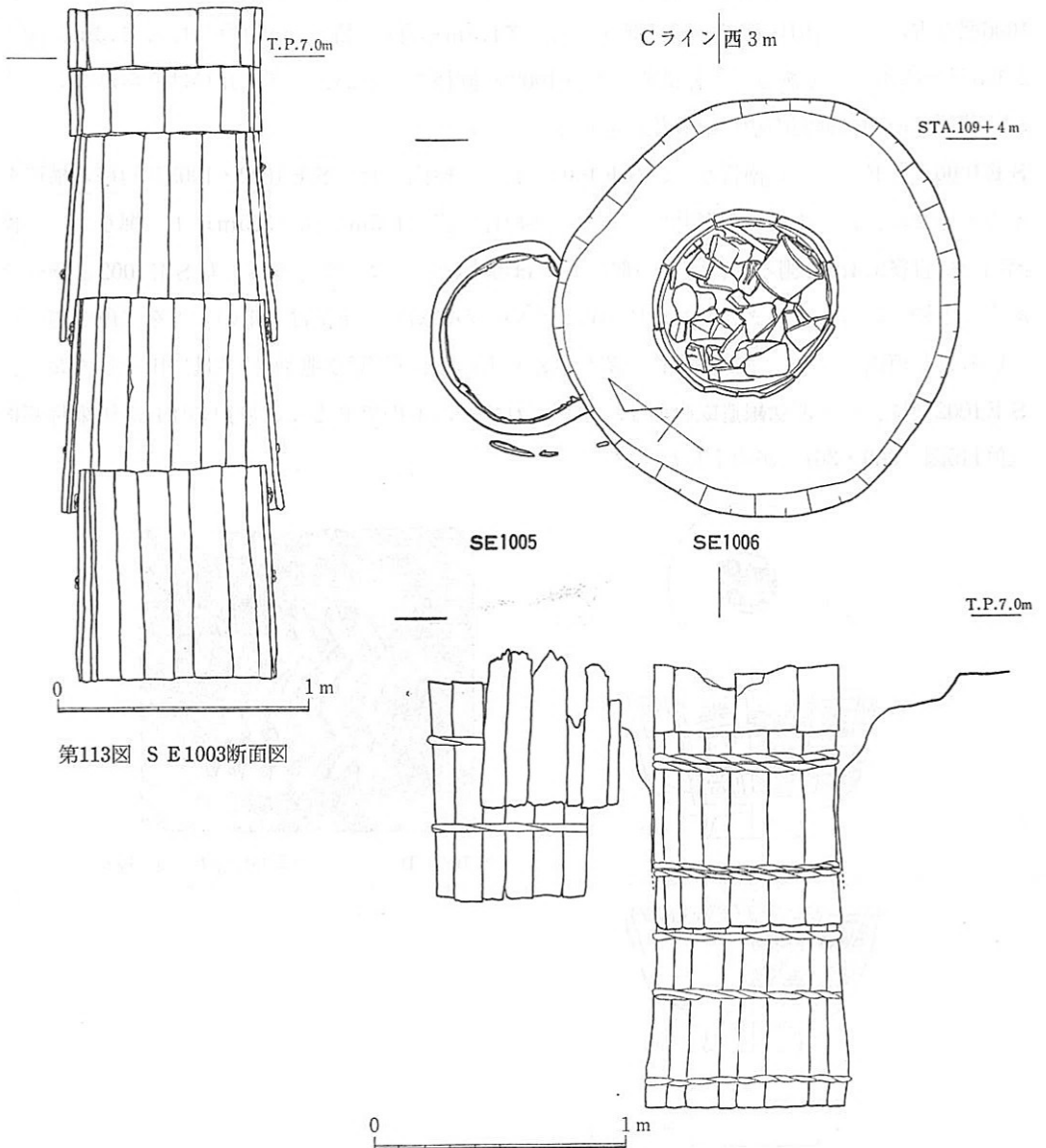


第112図 S E1002側面図

て、木芯側を外に向けて使っている。上段の下端は、下段の上端の外側にかぶせており、タガ留めの部分で止まっていた。

井戸検出面での掘り方は直径約2mの歪んだ円形であるが、下段の木枠の部分ではほぼ木枠いっぱいであることから、先を尖らした井戸枠下の土を徐々に掘りながら木枠を打ち込み、ある程度の深さに至って上段を継ぎ足して土留めとしながら掘っていったものと思われる。

最上段には瓦を用いている。S E1003の例から考えれば2段に積んであった可能性もあるが、ここでは一段しか検出されなかった。枠の瓦は外面に綾杉状のヘラ文様のあるもので厚さ4.0cm、幅26.0cm、高さ23.5cmである。



第113図 S E1003断面図

第114図 S E1005・1006平面図・側面図

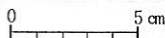
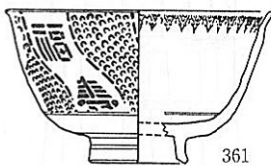
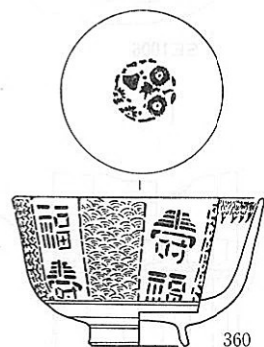
構造から見て江戸時代の掘削と考えられるが、埋土内からは現代の遺物が多く出土しており、農業用水・生活用水として使用された後、中央環状線造成時に廃棄されたものと思われる。

S E1003 Dトレンチ中央部西寄りで攪乱を除去した面で検出した木枠・瓦枠井戸である。構造はS E1002と同様であるが、木枠は3段、瓦枠は2段である。

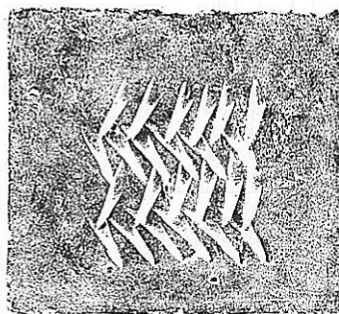
S E1004 S E1003の南2mで検出したコンクリート枠井戸で、最下段のみ木枠を用いている。コンクリート枠の最下段とその上段との境には破碎した瓦の小片がつめ込まれていた。木枠は長さ54cm程度で、S E1002・1003より小さく、先端の削り方も鉋を用いたようで平滑に仕上げられている。

S E1005 Fトレンチ南寄りで攪乱を掘削後、検出した木枠井戸である。井戸東半部はS E1006掘り方によって切られている。掘り方は直径1.6m程度の円形で、井戸枠は直径1.3m、深さ2.1m以上の1段枠である。木枠構造はS E1002と同様であるが、上部に瓦枠はみられない。また、井戸枠南側に補強の板材が6枚打ち込まれていた。

S E1006 Fトレンチ南寄りで、S E1005の東側で検出した。S E1002・1003と同様の構造をもつ木枠2段、瓦枠1段の円形井戸である。井戸枠は直径1.5m、深さ3.5m以上。掘り方は、検出面では直径3.4mを測るが、木枠の部分ではほぼ木枠いっぱいであることもS E1002と同様である。木枠上段は二重のタガを二段に廻らしているのに対し、下段は一重のタガを三段に廻らしている。井戸内からは、上部井戸枠の落ち込んだものや、現代の遺物が多量に出土しており、S E1002同様、中央環状線造成直前まで使用されていたものであろう。井戸枠内より染付茶碗（第115図—360・361）が出土した。



第115図 S E1006出土
染付茶碗



第116図 Dトレンチ出土井戸枠瓦拓影(1/6)

注(1) 家根祥多「縄文晩期の土器・近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 1981

(2) 大阪文化財センター調査

(3) 第Ⅶ章第2節参照

(4) 江戸時代の記録は、堤防に松苗を植えるよう土砂留役人の指図があったことを記している。このことから堤防には松などの樹木を植え、決壊などの際の杭に供するとともに、堤自体を補強したであろうと推測される。

「一、河州丹南郡北野田村領山方、今度被成御指図松苗植候通、相残ル崩所近々念を入松苗植可仕候、為其証文如件

元禄七年戌ノ二月廿日

岡部美濃守様御内

北野田村庄屋

近藤所左衛門様

吉左衛門

間下左右衛門様

年寄甚左衛門 (外二名略)

右ハ戌二月廿日御見分被成、証文被仰付候うつし

(河内丹南郡北野田村「御公儀様江上り写帳」より)

なお、江戸期の砂防制度に関しては、水本邦彦「土砂留役人と農民 一淀川・大和川流域における一」(『史林』64巻5号 1982)に詳しく論ぜられている。上記資料も同論文に依拠したものである。

(5) 山本博氏は、「決壊堤防の修造に準備した土砂備蓄場」と考えている。

(山本博『竜田越』学生社 1971)

(6) 大和川付替二百五十年記念顕彰事業委員会編『治水の誇里』1955

畑中友次『大和川付替工事史』大和川付替二百五十年記念顕彰事業委員会 1955

(7) 井上正雄『大阪府全志』巻4 1921 p.903

第Ⅶ章 遺構・遺物の検討

第1節 河内における布留式土器の一様相

1. はじめに

佐堂遺跡で検出した古墳時代前期の集落跡からは多量の土器が出土した。混入と考えられる須恵器の極小片1片、弥生式土器かと思われる底部破片1点を除いてすべて土師器である。小論は河内におけるこの時期の集落の形成や古墳の成立を考える上での基礎的作業として、この地域の布留式土器の様相を概観し、本遺跡出土の土器をその中で編年的に位置づけることを目標とするものである。

2. 研究史概観

昭和13年、末永雅雄・小林行雄両氏によって布留式土器の呼称がはじめて与えられた天理市布留遺跡出土の土師器は、若干の弥生式土器・須恵器を混じえるとはいえ「甕・壺・高杯・小型丸底土器を主とし、器台・鉢・甌を加えて一つの土器複合体の形成を見ることができるといふ点から藤原宮趾や平城宮趾の出土品と比較すれば、土師器の古い様相を代表するものとしてとらえられた。出土遺物の中には石製品等の祭祀的色彩をもつものもあるが、「住居趾と見做し得る遺跡」からの出土という特質こそ、今日なお「布留式」の呼称が意味を失なわない一つの理由であろう。⁽¹⁾

昭和31年、坪井清足氏によってこの布留式土器の最も純粋な形として出土した例として紹介されたのが東大阪市小若江北遺跡出土土器である。布留遺跡出土の布留式土器が弥生式土器・須恵器と併存したのに対し、小若江北遺跡出土の土器はこれらを含まず、また、須恵器を伴出する小若江南遺跡出土の土師器と比較すれば、両者の間に、甕の長胴化・小型丸底土器の口縁部の退化という形式変化を見い出せること等が明らかにされた。⁽²⁾ここに、須恵器を伴わない布留式土器の標式として小若江北遺跡出土土師器（以下小若江北式と呼ぶ）が一型式として認識されるわけである。

昭和30年代以後は、布留式土器の編年研究の時代といえるであろう。その中でも基礎的な資料として最初に提示されたのは柏原市船橋遺跡出土の土師器である。⁽³⁾須恵器の共伴を一つの目安として分類編年された。小若江北式との併行関係は、船橋O-Iがそれよりも新しい様相を示すと考えられた。

昭和40年、田中琢氏によって布留式土器に先行する型式として「庄内式」が提示された。⁽⁴⁾続いてこの庄内式の標式遺跡として層位的に発掘された松原市上田町遺跡が紹介され、土器セットとして上田町I層・II層出土土器が提示された。⁽⁵⁾その帰属時期を弥生時代とするか、古墳時代とするかの論争が現在でも続いている。その後の研究は、大和や飛鳥地域での土師器の編年研究や、⁽⁶⁾

各遺跡出土の土師器のその遺跡内での編年を主体とした研究が主流をしめるようになる。⁽⁷⁾ 一方、
 このような土器の変化を社会的に位置づける試みも精力的に行なわれている。⁽⁸⁾

しかし、河内における布留式土器の実態については、小若江北・船橋等の資料が古くから紹介されており、各地で布留式土器が出土しているにもかかわらず、全体的な編年研究は未だ不十分と言わざるを得ないであろう。⁽⁹⁾

布留式土器を須恵器出現後まで継続する型式として認めるか、あるいは須恵器出現以前に限るべきかについては現在も研究者によって見解が異なっている。筆者は後者の考えに立つのであるが、その理由は、学史的にみて、すでに須恵器を含まない布留式土器が小若江北式として提示されており、また、須恵器出現に伴い、土師器の形態・機能が大きく変質することである。この考えは、安達厚三氏・木下正史氏や置田雅昭氏のいう、須恵器出現以前の土師器という意味での「古式土師器」をそのまま布留式と呼ぶという考え方である。

3. 八尾市萱振遺跡出土土器

佐堂遺跡の遺物の検討をはじめ前に最近発掘調査された八尾市萱振遺跡出土の遺物をここに再掲しておきたい。⁽¹⁰⁾ 遺物は井戸 S E 03 及び土坑 S K 03 より一括して出土した。井戸出土の遺物は井戸が廃棄される時に埋納された状態で完形かそれに近い甕20点以上、壺10点以上が出土している。その他、小型丸底壺5点、小型器台1点、小型鉢2点が出土している。土坑からは壺・甕の他小型丸底壺・器台等が出土している。両遺構は共通する器種の形態の特徴からみて同時期と考えてよいであろう。ただ、両遺構の性格によるためか、器種が限られており、中でも高杯がほとんど出土していないことが標識資料とするには足りないのであるが、布留式の古相を示す一つの貴重な一括資料としての価値は失われないであろう。

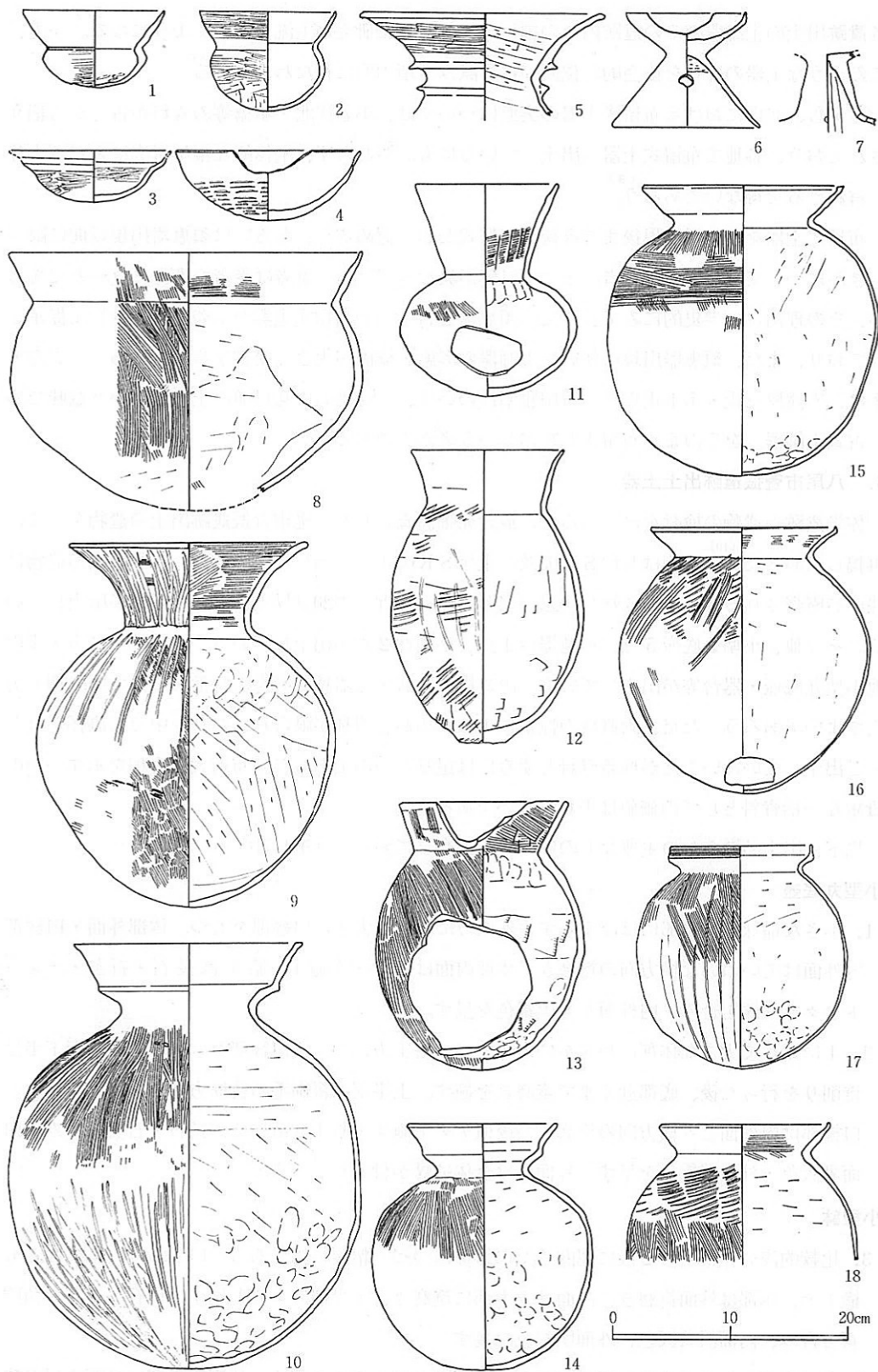
以下、出土品のうちの主要なものについて紹介しておこう（第117図）。

小型丸底壺

1. 小さな扁球形の胴部にはほまっすぐ外上方にのびる大きな口縁部をもつ。体部外面・口縁部内外面はていねいな横方向の筥磨き、体部内面は指ナデを施す。胎土は長石・石英・チャート・クサリ礫を含み、内外面とも灰褐色を呈す。
2. 1 に比べて大きな体部にわずかに内彎しつつ斜上方にのびる口縁部をもつ。体部外面下半は筥削りを行った後、底部近くまで筥磨きを施す。上半部は縦刷毛の後横方向の筥磨きを施す。口縁部は内外面とも横方向の筥磨きの後横ナデを施す。胎土は精良で、長石・石英を含み、内面乳灰色・外面暗褐色を呈す。外面には全体に煤が付着している。

小型鉢

3. 比較的浅い体部から2段に屈曲した口縁部につづく精製の鉢である。口縁部は内外面とも横ナデ、体部は外面筥磨き、内面は上半部に筥磨き、下半部はナデを施す。長石・石英・角閃石を含み、内面淡黄灰色、外面明褐色を呈す。
4. 丸い底部からそのまま口縁部に至り、端部はややつまみあげる。外面下半部には叩き目が残



第117图 萱振遺跡出土土器

り、口縁部及び内面はナデを施す。長石・石英・角閃石を含み、内面暗灰色、外面灰褐色を呈す。

鼓形器台

5. 脚部下端を欠く。口縁部と脚部との屈曲部に2条の突帯を廻らす。口縁部は外反し、端部は外側につまみ出し気味におさめる。口縁部外面は横方向の筥磨き、口縁端部及び突帯の上下には横ナデを施す。内面は筥削りの上にナデを施す。長石・石英・チャート・金雲母・クサリ礫を含み、内外面とも暗灰褐色を呈す。

小型器台

6. まっすぐ外に開く脚部に、短かく垂直にたちあがる口縁部をもつ体部がつく。脚部のやや上寄りに円形の四孔を穿つ。外面及び体部内面は摩耗著しいが、口縁部外面には筥磨きがみられる。脚部内面はナデ、円孔より上は横方向に筥削りを施す。長石・石英・クサリ礫を含み、淡赤褐色を呈す。口縁部を打ち欠いている。

高杯

7. 土坑からの出土品のうち唯一の高杯であるが、脚柱部のみの破片である。比較的短くて太い脚柱部から屈曲して裾部にうつる。裾部には円孔がある。摩滅が著しいが、脚柱部内面にはしほりの痕跡は認められない。上端には径4mm程の小孔がある。石英・長石・クサリ礫を含み淡赤褐色を呈す。

大型鉢

8. 平底気味の底部・胴のはった体部からく字状に屈曲し、まっすぐ外上方にのびる口縁部につづく。外面は口縁部に縦方向の刷毛目、体部は細かい叩きの上に縦方向の刷毛目を施す。底部は筥削りを施す。内面は体部に筥削り、口縁部に横方向の刷毛目を施す。石英・長石・角閃石・チャートを含み、淡黄褐色を呈す。

壺

9. やや肩のはった倒卵形の体部に外反する長い口縁部をもつ。体部外面はごく細かい縦方向の刷毛目で調整した後縦方向の太い筥磨きを粗く施すが、下半には左上がりの叩きのあとが残る。口縁部外面は横方向の刷毛目の上に下から上へ太く粗い筥磨きを施す。内面は体部下半に筥削り、上半は指押さえの跡が残る。口縁部は横方向の刷毛目状のヨコナデを施す。長石・石英・結晶片岩を含み、内面暗灰褐色・外面灰褐色を呈す。
10. やや長い球形の体部、強く外反する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部をもつ。口縁部上端は水平の面をなす。体部外面は縦方向の刷毛目が観察できるが、下半は筥磨き、上半はナデあるいは筥磨きを重ねる。体部内面は筥削りを施すが、下半部には指頭圧痕が残る。口縁部は、内外面ともなでて仕上げる。石英・長石・チャートを含み淡黄灰色を呈す。底部に焼成後穿孔がみられる。
11. 扁球形の胴部にわずかに外反する長い口縁部をもつ。体部外面は上半に斜めの刷毛目、下半

はやや粗い筥磨き、口縁部外面は細かい横方向の筥磨きを施したと思われるが、磨滅が著しい。内面は体部にナデ、口縁部下半に横方向の断続的な刷毛目、上半はなでて仕上げる。石英・長石・角閃石・クサリ礫を含み、淡赤褐色を呈す。

甃

12. 中央が小さく凹んだ平底の長い体部に弱く外反する比較的長い口縁部をもつ。体部外面はあらくなでるが、右上りの粗い叩きが残る。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はなでているが板状工具のあたった痕が残る。長石・石英・クサリ礫を含み、明黄褐色を呈す。

13. 丸底の長い体部に直線的に外上方にのびる口縁部をもつ。体部外面は刷毛目、口縁部はなでるが、全体に刷毛目が残る。体部内面は刷毛目のあとなでを施すが頸部直下と底部に指頭圧痕が残る。口縁部内面は横方向の刷毛目を施す。石英・長石・雲母の他、砂粒を多く含み、灰褐色を呈す。胴部・口縁部を打ち欠いている。

14. 形態は10とほとんど同様の小型品であるがやや肩がはる。体部外面は上半部に縦方向の刷毛目、下半はていねいなナデ、内面は筥削りを施すが、下半部には指頭圧痕を残す。頸部以上は横ナデを施す。長石・石英・輝石かと思われる黒色粒を含む。淡灰褐色を呈す。

15. 典型的な布留式甃である。球形の体部にやや内彎気味に大きく開く口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚し、上端はほぼ水平な面となる。体部外面は縦方向の刷毛目の上に肩部には横方向の刷毛目を施す。口縁部は横ナデ、頸部は強く横ナデする。体部内面は頸部少し下から筥削りを施すが底部には指頭圧痕が残る。長石・石英・角閃石を含み、内面は灰褐色、外面は全面に煤が付着している。

16. やや尖りぎみの底部、少し肩のはった体部から「く」の字状に屈曲し、外反ぎみの口縁部に至る。端部は内上方につまみあげる。体部外面は縦方向の刷毛目を施すが肩部より上には右上りの細かい叩き目が残る。底部は刷毛目の上をなでている。口縁部は横ナデ、頸部は強く横ナデを施す。内面は頸部直下から筥削りを施す。長石・石英・角閃石を含み、暗褐色を呈す。底部に穿孔がある。

17. やや尖り気味の底部、ほぼ球形の体部、外反して屈曲する頸部から内傾気味にたち上がる口縁部をもつ。体部外面は細かい縦方向の刷毛目、下半はなでて仕上げる。頸部以上は横ナデを施し、口縁部外面には櫛描きの直線文を施す。内面は頸部少し下から筥削りを施す。下半には指頭圧痕が残る。長石・石英・クサリ礫を含み、内面は暗灰褐色、外面は全面に煤が付着している。

18. おそらく尖底気味の球形と思われる体部に内彎気味に立ち上がる口縁部をもつ。端部はわずかに内側につまみ上げる。体部外面は肩部以上に右上りの細かい叩き目を残し、肩部以下はその上に刷毛目を施す。口縁部は横ナデを施すが外面頸部は強くなでる。内面は頸部わずかに下から筥削りを施し、内面の屈曲部はなでるため丸みをもつ。長石・石英・角閃石・金雲母を含み、淡褐色を呈す。外面肩部以下には煤が付着する。

4. 佐堂遺跡出土土器の特徴

佐堂遺跡出土の布留式土器は、残念ながら一括遺物として把握できる状況で出土したものは少ない。井戸S E 6001や土坑S K 6013・6014からは完形の鉢や壺が1点だけ出土したり、逆に出土遺物の量の多い溝S D 6003などは中層に炭を多く含む微砂層が挟在したため分層発掘が可能ではあったものの、その埋没過程は掘削当初の掘り込み面の周辺に遺物包含層が形成される過程と軌を一にしており、その扱いについては慎重な型式学的操作を必要としている。ただわずかにS K 6010だけは土坑の底にはほぼ接して小形丸底壺・高杯・鉢等が比較的多く出土しているものの、器種は供膳形態のものがほとんどで壺・甕などは少ないという遺構自体の特徴がある。このような状況の中で本遺跡出土資料を布留式土器の編年の資料とするには躊躇するところであるが、河内における布留式土器の一つの様相を示すものとして以下その特徴を記し、先学による編年研究に導かれて、その位置づけを試みよう。なお器種分類は第Ⅴ章第3節に記したとおりである。

小型丸底壺 体部外面を横方向に篋削りするBが最も多く、体部や口縁部内面に刷毛目を施すCがこれに次ぐ。篋磨きを施す精製土器Aは少ない。Bの胎土は細かい砂粒を含むがCほど砂粒は大きくなく均一である。Cは径1～2mm程度の砂粒を含み、粗製とも言い得るような胎土である。

遺構別にみるとS D 6003ではBが9割をしめる。S K 6010ではB、C各1点の他、ナデ調整のDや、小型の体部に中実の小さな脚部をつけたもの（第53図-140）もある。

小型鉢 完形品はS K 6013から1点出土しただけである。小型手捏ねの鉢がS D 6003より出土している他はすべて破片ばかりである。S K 6013出土品（第57図-175）は外面底部にヘラ削りを施した後刷毛目状のナデを一方向に向けて施しており、外面上半部及び内面は篋磨きがなされている。外面に煤、内面に焼けこげがある。口縁部の発達は顕著ではない。C'トレンチ包含層出土の鉢は口径が小さく、外面は篋削りを残している。

小型器台 出土量自体が極めて少なく、全出土遺物のうち実測した5点の他には出土していない。出土したものは受け部と脚部が貫通したAが多く、受け部も脚部も漏斗状に開くもので、内外面とも刷毛目調整を施す。S D 6003下層出土の1点（第27図-44）は小型鉢を模したように受け部の中央が二段に屈曲している。まっすぐ漏斗状に開く脚部に直立した口縁部をもつ受け部のついた器台は出土していない。S K 6026出土の器台脚部は、内鱗気味で器高の低いものである。

以上、布留式土器の指標といわれる小型精製三種を概観すれば、小型丸底壺では篋磨きを施した精製のAが極めて少なく、鉢では火を受けて実用された状況が見られ、器台では受け部が脚部と貫通しないものがわずか1点でしかも器高が低いことなど小型精製三種の土器セットとしてはかなり崩壊した様相を示しているといえる。

壺 器形はバラエティに富んでいる。更に、大型・中型・小型、口縁部の形状・調整手法等の要素を加味して分類すれば、一器種1点～数点程度となるほどである。中で比較的出土点数の多い壺は扁平な球形の体部にまっすぐ外側に開く口縁部をもつB類（第36図-119等）であるが、

これは外面に煤が付着したものが多く、機能的には甕の範疇に入れるべきものかもしれない。強く外反する頸部から内傾して垂直に立ち上がる長い口縁部をもち、口縁部と体部肩に竹管円形文をもつ超大型の壺（第24図—15）や、やはり口縁部が2段に屈曲し、上端がすぼまってわずかに外側に開く壺などは、西部瀬戸内沿岸からの移入品であろう。

甕 布留式古相の土器と伴出することの多い庄内型甕Aが全遺物中5点しかみられず、布留式の典型とされる口縁端部が内面に肥厚するB、内縷気味にたちあがるが肥厚しないC₁、口縁部が外縷して丸くおわるC₂が遺跡全体でみればほぼ同じ程度の比率で出土している。遺構別で見ればB・C₁・C₂は層位的にみて古いS D6003やS B6002では共伴しているが、上層の包含層中土器溜及び包含層中出土のものでは実測した17点中A—1点、B—2点、C₁—7点、C₂—7点とC₁、C₂の比率が高くなり全般的な傾向からも、C₁・C₂が新しい相を示すといえる。

高杯 杯部が2段に屈曲する1点（第89図—292）を除き、他はすべて杯底部からなだらかに口縁部に移行し比較的浅いものである。杯部外面下半は篋削りを施し、その界線がかすかな稜となる。内外面ともにナデ調整で仕上げるA₂類が多く（実測38個体中23個体）、比較的粗い刷毛目調整を施すA₃類がこれに次ぐ（同11個体）。A₃類は胎土に砂粒を多く含み粗製である。横方向の篋磨きを施すものはわずか2点で、放射状の暗文を施すものは1点も出土していない。脚部は円錐台状の中空の脚柱部から屈曲して裾部につながり、端部は篋状の工具で裁断した面を持つA₂類が約3分の2を占める。A₁・A₂・A₃ともに杯底部外面を篋削りしている。A₂類の脚柱部は絞り痕を残し、脚部裾部内面には布目圧痕を残すものが多い。この傾向は遺構出土の高杯では特に顕著で、S D6003出土高杯脚部21点中布目圧痕をとどめるものが17点を占める。完形の高杯及び杯部、脚部の出土の比率から考えて、杯部A₂+脚部A₂のものが6割程度を占めているものと思われる。脚部裾部に布目圧痕が残ることは何らかの台作りが考えられる。この布目圧痕をもつ高杯は包含層中からも出土しているが、特にS D6003に集中し、同じく高杯脚部が15点出土したS K6010ではわずか1点のみである。このことから、この手法、正確に言えば布目を残したままでその上になでや刷毛目等の調整を施さない手法は、佐堂遺跡の中でもある一時期に限られるものであると考え得る。

鉢 先述の口縁部が二段に屈曲する小型精製の鉢以外に多くの器種がある。大型で器壁も厚く平らな底部から内縷気味にたち上がり、口縁端部付近で小さく二段に屈曲するもの（第88図—270）、ほぼまっすぐ大きく外上方に開く口縁部に深い体部をもつ大型のもの（第53図—145・第90図—294）、小型で底を削って平底に近づけたコップ型のもの（第88図—266）、これより口縁部がやや外側に開くもの（第88図—265）、しっかりした平底で外側に開き口縁部が擬口縁状をなすもの（第66図—192）、比較的大きな平底にやや外反気味の口縁部がつくもの（第45図—130）、丸底で内外面を削るもの（第27図—46・47）、小型手捏ねのもの（第27図—48）等である。

5. 佐堂遺跡出土土器の編年の位置付け

次に佐堂遺跡出土の布留式土器の編年上の位置づけを考えてみたい。全体的様相として概観すれば、先に紹介した萱振遺跡井戸S E 03、土坑S K 03出土の土器より新しい様相を呈しているといえよう。小型丸底壺は萱振遺跡では内外面に篋磨きを施したものがほとんどで、底部外面に篋削りの痕跡をとどめるものが一点だけであるのに対し、佐堂遺跡の例では、外面肩部より下を横方向に篋削りするBがS D 6003では9割をしめ、萱振遺跡で見られない刷毛目調整のCが出現している。萱振遺跡で小型丸底壺Cが出土していないことは、CがAより後出のもの⁽¹¹⁾とらえられるのか、あるいは遺構の性格によるものなのかは検討が必要である。東大阪市馬場川遺跡T地点出土の小型丸底壺は小さな扁球形の体部に大きく開く口縁部をもつもので体部外面、口縁部内外面にいいねいな篋磨きを行った後、口縁部内面には放射状の暗文を施したものである。この資料は包含層出土のものであるが、AのみでB、Cは出土しておらず、形態調整も萱振遺跡出土のものと同様である。数少ない出土例ではあるが、小型丸底土器はAが先行し、他が出現していない時期があると思われる。この時期の土器出土例の多い大和での資料を参考にしよう。坂田寺跡下層出土のものもAに限られる。纏向辻地区土壙4ではAとともに横ナデのDが出土している。平城宮下層溝S D 6030出土のものは口縁部内面に放射状暗文を施している。体部下半を横方向に篋削りするBは、Aのうちで底部外面に篋削りを残すものがあり、また、口縁部内外面に横方向の篋磨きを施している小若江北遺跡出土品も、篋磨き以前に肩部以下は横方向に篋削りを施していることから考えて、小型丸底壺Bは篋磨き調整を省略し、篋削りを調整に代えて多用したものであり、時期が下るに従って量的に多くなるのであろう。外面に刷毛目を施す小型丸底壺Cは、佐堂遺跡では同Bより少ないが、全体の4分の1程度を占めており、遺構別でもS D 6003ではBが多数を占める中ですでに出現しており、S K 6010でもB・Dと共伴している。小若江北遺跡ではAのみでB、Cはみられないが、須恵器が伴出する船橋O-Ⅱやそれに先行するO-Ⅰでは小型丸底壺のすべてがこのCである。以上から、Cは、Bが盛行し、Aがほとんど消滅してくる頃に出現し、その後小型丸底壺の主流を占める器種といえる。口縁部が二段に屈曲する小型精製の鉢は佐堂遺跡では土坑より完形品一点が出土した他、包含層中から破片が数点出土しているのみである。S D 6003ではこれを模したと思われる小型手捏ねの鉢が出土しているが、それを除いて破片すら出土していない。このことは佐堂遺跡S D 6003の段階ですでに小型精製土器3種のセット関係がすでに崩壊していることを示すものといえよう。小型器台は佐堂遺跡では出土量自体が少ないが、受け部と脚部が貫通したBが多い。小若江北遺跡でもBが多くAは公表された限りでは出土していないが、貫通孔は佐堂遺跡出土品より小さく、受け部が内彎し、外面及び受部内面、裾部内面下端にまでいいねいな篋磨きを施していることから、佐堂遺跡出土品より古い様相といえる。又、「漢式系」とよばれる陶質土器が共伴する八尾南遺跡S E 21やこれに先行すると考えられている同S E 26では小型器台そのものがすでに消滅している。

甕は従来から言われるように口縁端部が内面に肥厚したり、内傾する面をもつ典型的な布留式

甕が馬場川T地点の段階から八尾南SE21の段階まで、長胴化という全体的傾向はあるものほとんど変わりなく製作され続けてきたといえる。この中で変化を示すものは、馬場川T地点・萱振井戸・小若江北などにみられ、とくに萱振井戸では典型的な布留式甕と同数出土している庄内甕Aが、佐堂遺跡では出土土器全体のうち数点しかみられず、逆に小若江北式でみられない口縁部が外反して口縁部内面にも刷毛目をもつようなC類が佐堂遺跡では出現し、布留式甕Bとほぼ同じ程度の割合をしめしている。

壺は口縁部が二段に屈曲して外側に開くA類が佐堂遺跡でもみられる。尖底気味の倒卵形の体部に外反した長い口縁をもつ壺Cは、萱振SE03や小若江北・八尾南SE26・SE21にも見られ、各時期を通じて製作される器形の一つである。佐堂SD6030や八尾南SE26・SE21では強く外反する頸部から内傾気味に立ち上がる長い口縁部をもつ大型壺が出土しており、西部瀬戸内地方との交流が考えられる。

高杯は深い杯部の内外面にていねいな筥磨きを行ったものや杯部内面に暗文を施すものは佐堂遺跡でみられず、ナデ調整のものが圧倒的多数をしめ、他に杯部内外面に粗い刷毛目を施す精製のものもある。SD6003に特徴的な脚裾部内面に布目圧痕を残す例は高槻市上牧遺跡・奈良県明日香村上ノ井手遺跡溝出土品⁽¹²⁾などに類例があるが、一般的ではないようである。⁽¹³⁾

6. 編年試案

以上のことから、河内における布留式土器は以下の4段階に分けることが可能と考える。

第1期 馬場川T地点出土土器・萱振遺跡SE03・SK03出土土器を標式とする。小型精製3種の土器が盛行し、甕はBの他庄内系のAが多く製作されている。概して甕以外の各器種とも筥磨きを施した精製品が多い。

第2期 小若江北遺跡出土土器を標式とする。小型丸底壺はAがひきつづき製作される。小型器台は受部と脚部の貫通したBが出現し主流となる。

第3期 佐堂遺跡SD6003出土土器を標式とする。小型丸底壺はAが消滅し、Bが盛行するが、Cも出現する。小型器台はBが製作されているが、小型鉢が消滅し、小型精製3種土器のセット関係が崩壊する。甕はBの他にCが出現し併用される。高杯はA₂が盛行するが刷毛目調整の粗製A₃が出現し、筥磨きを施すA₁類はほとんど消滅し、中でも暗文を施すものはみられなくなる。鉢に器形の多様化がみられる。

第4期 前半は八尾南遺跡SE26出土土器・後半は同SE21出土土器を標式とする。小型丸底壺はCのみとなり、器台も消滅する。二重口縁の壺Aも消滅し、後半では渡来系陶質土器や、把手つきの深い甌や平底の小型鉢が出現する。

この河内における布留式土器の編年試案は安達・木下両氏による飛鳥地域の古式土師器の編年とはほぼ一致し、第1期から第4期までがそれぞれ両氏による坂田寺下層・上ノ井手溝・上ノ井手井戸下層・同上層にあたる。各器種の消長など全体的な傾向は両者ほぼ同じであるが、庄内型の甕の消滅や渡来系土器の影響のうけ方に関しては差があるものと思われる。⁽¹⁴⁾ また、第1期と第2

期との間には、小型精製3種土器の盛行などから考えて、それほど大きな時間差はないように思われるのに対し、第2期と第3期の間には若干の開きがあるようである。なぜなら、小型丸底壺Bが出現し、Aとともに製作され、Cの出現していない段階を想定し得るからである。しかしこの開きは、時間的な開きととらえるよりも、むしろ、小型精製3種土器セットの崩壊が、背後の大きな社会的変化を反映したものと捉えるべきかもしれない。

以上、浅学を顧ず、過誤多きを承知の上で河内における布留式土器の編年を試みたが、大筋においては上述のような変化をたどるものと考えている。諸先学の御批判を仰ぎたい。

第3表 布留式土器の器種の消長

時期	器種 標式遺跡	小型丸底壺			小型器台		壺			甕				高杯					その他	
		A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C ₁	C ₂	A ₁	A ₂	A ₃	B	C		
	上田町	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
第1期	馬場川T 萱振	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
第2期	小若江北 佐堂SK6013 SK6014	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
第3期	佐堂 佐堂SD6003 SK6010	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
第4期	八尾南 SE26 SE21	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	漢式土器 大型把手付甗 須恵器
	船橋O-II	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

※高杯Cは2段に鋭く屈曲した深い杯部を有するもので杯部内外面に横方向の鈍磨きを施し、内面には放射状の暗文を施すもの。

〔注〕

- (1) 末永雅雄・小林行雄「大和に於ける土師器住居跡の新例」(『考古学』第9巻第10号) 1938
- (2) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 1956
- (3) 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真「河内船橋遺跡出土遺物の研究(2)」 1962
- (4) 田中 琢「布留式以前」(『考古学研究』第12巻第2号) 1964
- (5) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」(『大阪府立島上高校研究紀要』3) 1968
- (6) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60号第2巻) 1974
置田雅昭「大和における古式土師器の実態——天理市布留遺跡出土資料——」(『古代文化』第26巻第2号) 1974
- (7) 石野博信・関川尚功『纏向』1976
藤井利章他「大和郡山市発志院遺跡」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊) 1980
- (8) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号) 1974
酒井龍一「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」(『考古学研究』第24巻第2号) 1977
都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻第3号) 1979
- (9) この中にあって、八尾南遺跡出土の遺物から、庄内期の土器の細分・古墳時代中期土器の編年の試みがなされている。
米田敏幸「古墳時代前期の土器について」「古墳時代中期の土器について～須恵器出現と布留式の終焉～」(八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』) 1981
また樋口吉文氏は堺市百舌鳥陵南遺跡出土資料をもとに和泉地方における編年案を発表されている。
樋口吉文「堺市における土師器の編年的細分」(『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第6回)資料』) 1982
- (10) 大阪府教育委員会「萱振遺跡発掘調査概要 I」 1983
- (11) 東大阪市教育委員会「馬場川遺跡発掘調査概要 IV」 1976
- (12) 高槻市教育委員会「上牧遺跡発掘調査報告書」 1980
- (13) 安達・木下(注6)
- (14) 米田敏幸氏は「須恵器の出現期には、それぞれの集落によって様相の差が歴然としている。すなわち、当遺跡(八尾南遺跡)においては、須恵器の出現とともに新しい生活様式としての土師器の新器種を受容できる先進性をもっている。一方、前述の平城京下層遺跡においては、須恵器を受容して行くにもかかわらず、新たな生活様式を受容は遅れ、依然として伝統的な布留式の土器群の使用を踏襲しているのである。これらのことは、南河内地方の開発に活躍した、渡来系氏族とも深いかわりを示すものであらうと思われる。」と指摘している。(前掲注(9))

第2節 河内平野における古墳時代前期集落の成立と変遷

1. 佐堂遺跡の古墳時代前期集落

今回の調査は結果的には古墳時代前期の集落の中心を通過して幅10mのトレンチ調査を行なったことになった。その結果、集落全体の様相をある程度解明する資料を得ることができた。以下、集落の立地と構成・その変遷について予察的に考えてみたい。

(1) 集落の時期

遺構に伴う土器・包含層中の土器はすべて土師器で、布留式土器の範疇に含まれるものである。前節で述べたように、須恵器出現前の布留式土器を4期に分けた場合、第3期を中心とする時期の集落である。

遺構から見た場合、遺構相互の切り合い関係及び掘り込み面の層位差から3段階～4段階に分けることが可能であり、古いものは土器でいえば第2段階に属するものもある。

(2) 集落の立地

集落はいうまでもなく、沖積地に立地しているわけであるが、佐堂遺跡において、集落が営まれる条件が整ったのは古墳時代に入ってからのことである。弥生時代中期（第Ⅲ様式期）にはFトレンチ南端で遺構が検出され、D・E・Fトレンチ全体にかけて包含層が形成されたのであるが、この遺構・包含層上には厚さ0.3～0.5mの微砂や粘質微砂がほぼ水平に堆積する。又、調査区北半C～Dトレンチにかけては、弥生時代中期末の遺物が、自然流路の埋まる過程で堆積した粗砂中から出土している。又、Cトレンチ北端の古墳時代遺構面下1.5mまでの筋掘りにおいても、この時期直前（層位的に）の自然流路が検出されている。従って、古墳時代の集落は弥生時代中期以後、中小の自然流路によって運ばれ堆積した微砂上に形成されたといえる。この面は美園遺跡の古墳時代前期（庄内式と同一面及び一層上から掘り込まれた布留式古相の遺構）とはほぼ同じレベルである。この集落で溝が多数掘られており、それらの方向が概ね、南北方向に向いていることは、この時期の全体的な地形が北に向かって下がっており、集落を営みはじめるには周辺の排水を図る必要があったことを示している。集落はCトレンチではT.P.4.2m～4.3m、C'トレンチでは4.1m（下層遺構）、Dトレンチでは4.6mの高さに形成されている。住居址をはじめ生活に関連した遺構が多数検出されたCトレンチ中央部が、墓などが検出され生活のにおいの少ないDトレンチより0.4m程度低いことは、当時の集落では、必ずしも、住居がより高い場所につくられるものではないことを示している。美園遺跡の古墳も遺構面がわずかに高くなっていく部分に築かれている。同時期の遺構面は友井東遺跡ではT.P.4.2m、美園遺跡では集落は4.3m（時期は佐堂遺跡より古く、一部の遺構は庄内期の遺構と同一面で検出されている。）、美園古墳は4.7m（周濠外側の掘り込み面）、久宝寺遺跡Aトレンチでは包含層上面で5.0～5.2m、Cトレンチでは4.2～4.4mと、遺構面の削平を考慮しても約1kmの間でほとんど水平とってよい。久宝寺遺跡で検出された古墳時代の大河川の南Fトレンチでは5.2～5.4mと高く、ここで大

きな段差がある。沖積地における集落立地は自然堤防状の微高地であろうと推測されてきた。しかし、今回の調査ではこの時期の集落は自然堤防と呼べる程の大きな比高差どころか微高地とも言えないような位置に立地していることが明らかになった。集落は当然湿地のような場所には立地し得ないであろうから、その場所がある程度乾燥していることが必要条件である。すなわち水はけの良悪の問題であるが、これは主にその場所の高低によるものではなく、別の要因であろうと推測される。美園遺跡の住居址が検出された下層には弥生時代中期の川（幅22m、深さ2m）があり厚く粗砂を堆積している。佐堂遺跡においても幾条かの自然流路が検出されている。おそらくこれらの粗砂は、自然の暗渠的役割を果たしたものと思われ、集落はこのような水はけのよい地を選んで営まれたものであろう。

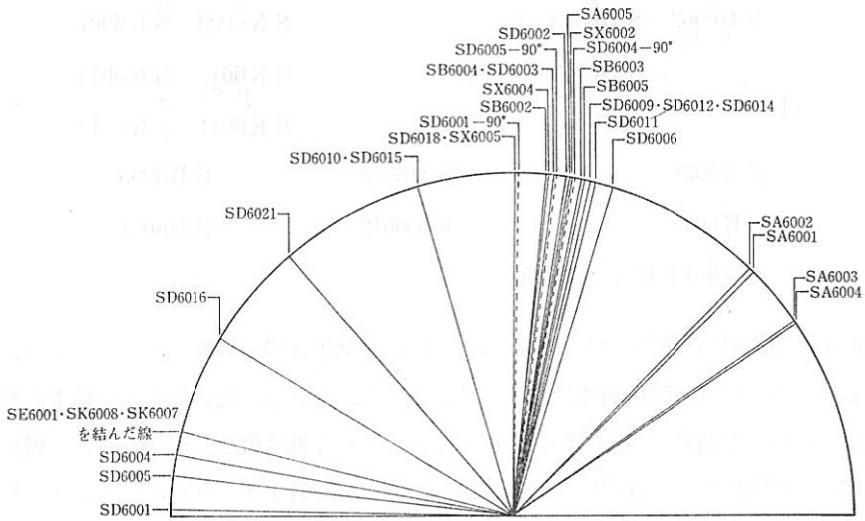
友井東遺跡の調査で検出された弥生時代中期の大河川は幅100m以上、深さ3m以上の大きなものであった。流心に近い下層では粗砂に混り直径2～5cmの礫を多量に含み、水流の激しかったことを示している。この川はおそらくこの周辺一帯を襲った洪水の流心であろう。この川は弥生時代後期には流れを止め、周辺に遺構が形成されはじめるのは弥生時代後期中葉以後である。美園遺跡で集落が形成されはじめるのは庄内期である。そしてやや遅れて佐堂遺跡でも集落が形成される。この頃の川はおそらく南の久宝寺遺跡C～Eトレンチを流れていたものと思われる。従って南の川に近づくに従って付近の土地は湿地状になっていたと思われる。佐堂遺跡での集落形成が美園遺跡より遅れるのはこのような地理的理由（即ち美園に比べ居住可能となるような乾いた状況になるのが遅れたこと）によるのかもしれない。

2. 集落の構成

佐堂遺跡ではこの時期の集落を構成する要素のほとんどが検出されている。切り合い等から考えられる時期差を捨象して列挙すれば以下のとおりである。

- ① 住居跡 堅穴式住居跡で確実なものはS B 6002のみである。床面積は22.5㎡で屋内には主柱穴4本の他、南北中心軸にそって、中心部やや北寄りから南辺に向かって1列に並ぶ3カ所の柱穴がある。焼土・炭・炉などはみられない。
- ② 倉庫 掘立柱で高床式。S B 6004は床面積約8㎡、S B 6005は約9㎡、S B 6003も倉庫と思われる。
- ③ 貯蔵穴 土坑として記述したもののうち平面円形で径1m前後、深さ0.7m程度の土坑は、おそらく貯蔵穴と考えられる。S K 6014は底部から木葉とともにイガのついたままの栗の実やモモの種核が出土している。堅果類などを貯蔵したものと推定される。S K 6006・6007・6008・6009・6013・6014
- ④ 溝 生活排水に不可欠であると共に沖積地の低地においては集落成立の前提となるものである。直線的に掘られた溝（S D 6001・6002・6003・6015・6016・6017）の他、地形に沿って走るやや蛇行する溝（S D 6009・6013等）、性格不明の細く浅い溝（S D 6011・6012）がある。

第4表 古墳時代遺構方位表

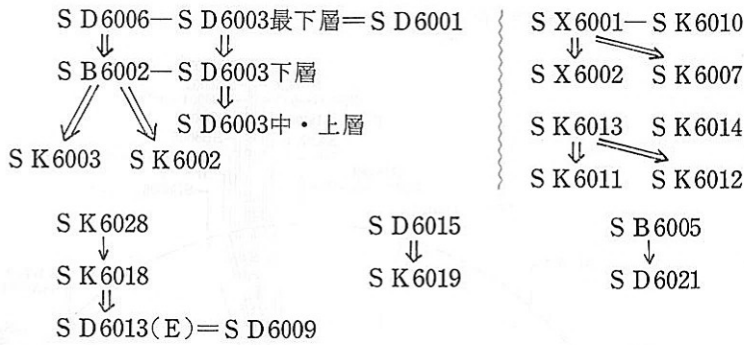


- ⑤ 厨 少し大胆な言い方であるが、Cトレンチ中央部からやや南寄りにかけての部分で遺構としてはS X 6001・6002・S K 6010及び周辺の土坑（貯蔵穴や炭が多く検出された浅い円形土坑）を含む一角である。このような概念を考えるに至った理由は、① 住居址内に焼土・炭等火を使った痕跡がないこと。② S K 6010は甕がほとんどなく供膳形態の高杯・小型丸底壺・鉢が出土し、又、モモの種核・ヒョウタンの種子などが出土していることから、供膳に関係する食器食物置場の性格が考えられること。③ S X 6002には焼土が認められ、2本の柱穴で支えられた簡単な上屋が想定されること。④ 上記の遺構がこの周辺に集中していること、などである。
- ⑥ 井戸 S E 6001・6002・6003、S E 6002・6003は発掘中にもかなりの湧水があった。
- ⑦ 墓 Dトレンチで2基並んで検出された土壙墓S X 6004・6005。古墳出現以後の集落の構成員の一般的な墓制であろう。S K 6017は乳児か嬰兒の墓と考えられる。成人の墓と別に住居に近接してつくられていることが注意される。
- ⑧ 祭祀 S K 6020・S K 6022がある。墓に近接して掘られた土坑で、前者は土器が、後者は滑石が納められたような状況で出土している。墓に伴う祭祀と考えられる。

3. 集落の変遷

遺構の切り合い関係及び掘り込み面の層位差から3段階～4段階に分けることが可能である。

下図はその関係を示したものである。図中→は掘り込み層位差による古→新、⇒は切り合い関係による古⇒新、一は掘り込み層が同一、＝は同時並存を示す。



集落の終末は須恵器出現以前である。遺構面上には遺物包含層が形成されることから、集落の廃絶は洪水などによって一時に消滅したのではないことがわかる。包含層上には粘土が堆積し、集落廃絶後この粘土を基盤に水田が経営されたことが花粉分析結果などからわかる。居住地が生産地に転化した要因については明らかではないが、粘土が堆積するようなゆっくりとした水域の拡大に伴って徐々に集落が移動し、かつての集落が水田となったものである。これは、珪藻分析の結果によっても裏付けられている。(第Ⅶ章第2節参照)

4. 河内平野における古墳時代前期の集落

次に河内平野における古墳時代の集落を概観し、あわせて佐堂遺跡の集落の位置づけを試みたい。

河内平野における集落はその立地から①生駒西麓、②羽曳野丘陵の北端の台地上及びその縁辺、③沖積低地の三つの類型に分けることができる。①・②は旧石器時代・縄文時代以来、比較的継続して集落が形成されている遺跡が多い。これに対し、③は弥生時代に農耕文化の成立とともに形成される遺跡も多いが、古墳時代への展開は一律ではない。上町台地の東縁辺も集落の存在した可能性が考えられるが、今のところ実態は明らかでない。あるいは、台地縁辺まで入り込む谷のため、可耕地が少なく集落が成立し得なかったのであろうか。以下、現在までに知られている遺跡を簡単に紹介し、その成立と変遷を追ってみたい。

① 生駒西麓に立地する遺跡

鬼塚遺跡

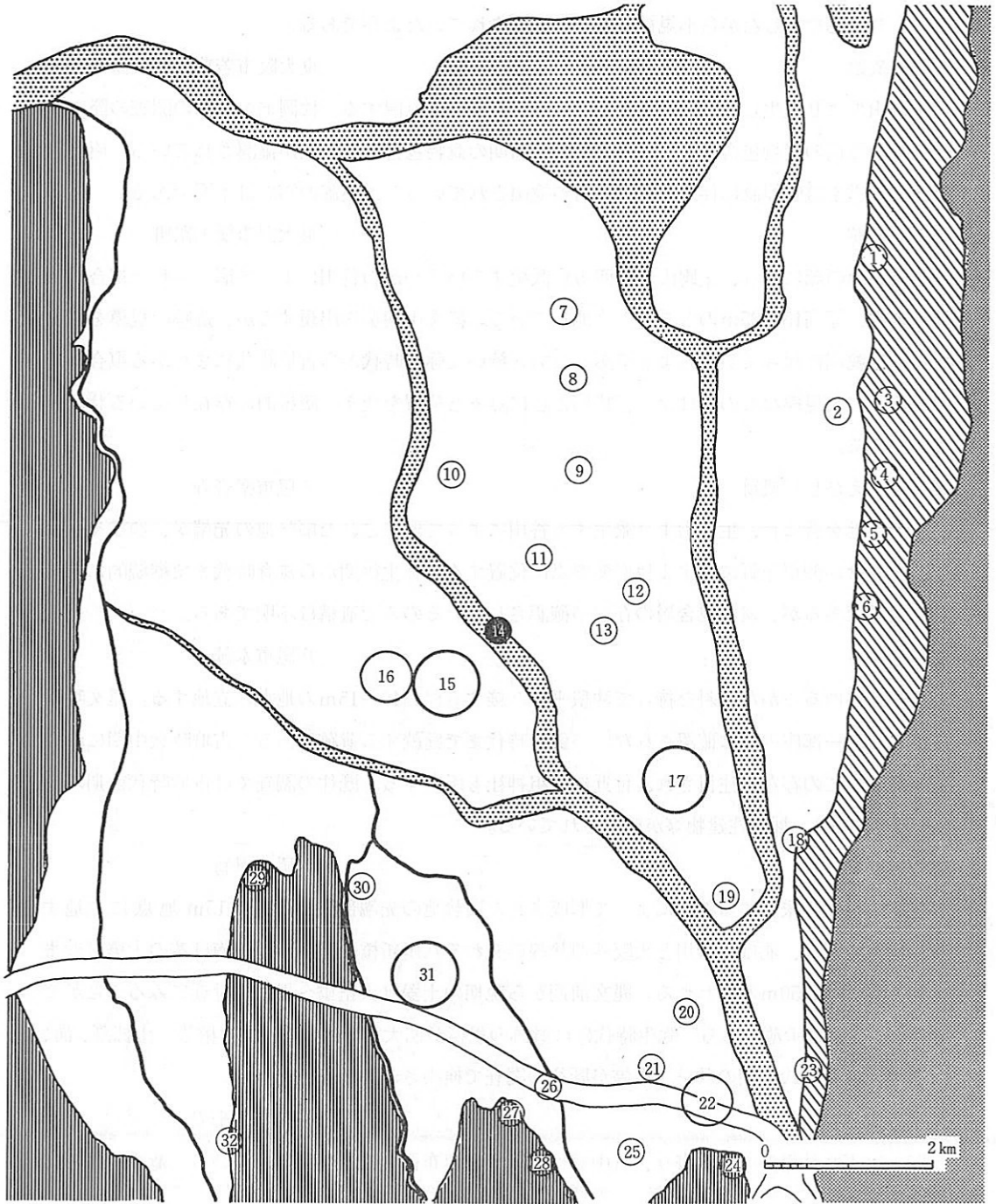
東大阪市箱殿町・新町・室町

生駒山地から流れる長尾川によって形成された扇状地上、標高20～30mに位置する。縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が共伴して出土している他、弥生時代後期の竪穴式住居跡・壺棺墓、古墳時代前期の土壇、平安時代の掘立柱柱穴が検出されている。縄文時代晩期以後、ほぼ継続的に営まれる遺跡である。

縄手遺跡

東大阪市南四条町

鳴川谷の谷口扇状地の末端に立地する縄文時代中期から古墳時代にかけての複合遺跡である。縄文時代の遺跡として著名で、中・後期の竪穴式住居跡・石組炉・土壇墓などが検出されているが、弥生時代・古墳時代は遺物包含層の存在が確認されているのみで、遺構は未確認である。時



- | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 鬼塚遺跡 | 7. 西岩田遺跡 | 13. 東郷遺跡 | 19. 東弓削遺跡 | 25. 西大井遺跡 | 31. 八尾南遺跡 |
| 2. 北鳥池遺跡 | 8. 瓜生堂遺跡 | 14. 佐堂遺跡 | 20. 本郷遺跡 | 26. 大正橋遺跡 | 32. 上田町遺跡 |
| 3. 縄手遺跡 | 9. 山賀遺跡 | 15. 久宝寺遺跡 | 21. 川北遺跡 | 27. 津堂遺跡 | |
| 4. 馬場川遺跡 | 10. 小若江遺跡 | 16. 加美遺跡 | 22. 船橋遺跡 | 28. 北岡遺跡 | |
| 5. 楽音寺遺跡 | 11. 美園遺跡 | 17. 中田遺跡 | 23. 太平寺遺跡 | 29. 瓜破北遺跡 | |
| 6. 水越遺跡 | 12. 萱振遺跡 | 18. 恩智遺跡 | 24. 国府遺跡 | 30. 長原遺跡 | |

第118図 古墳時代前期遺跡分布図

期により中心を移しながら小規模な集落が営まれていたようである。

北島池遺跡

東大阪市若草町・池島町

生駒山地より派生した扇状地が平地部に接する末端に位置する。枚岡ポンプ場の調査の際に、弥生時代後期の遺物包含層の上層に古墳時代前期の遺物包含層の存在が確認されている。昭和54年度の府営水道管埋設に伴う調査では溝が検出されているが、集落の実態は不明である。

馬場川遺跡

東大阪市横大路町

生駒山地の麓にあり、生駒山から西方に派生するいくつかの谷川によって形成された複合扇状地の末端、標高15～25mのところ立地している。縄文中期から出現するが、遺跡の規模を拡大するのは晩期になってからのようである。引き続いて弥生時代から古墳時代にまたがる複合遺跡であるが、大規模なものではなく、時期ごとに点々と位置を変え、断続的に存在している状態がうかがえる。

楽音寺（えびじ）遺跡

八尾市楽音寺

生駒山地を背にし、生駒山より派生する谷川によって形成された扇状地の先端が、ゆるやかな傾斜をみせ、沖積平野に接する地形変換点に位置する。弥生後期から鎌倉時代まで継続的に営まれた遺跡であるが、遺物包含層の存在が確認されているのみで遺構は不明である。

水越遺跡

八尾市水越

扇状地がゆるやかな傾斜を持って沖積平野と接する標高10～15mの地点に立地する。縄文晩期に出現し、一部庄内期は確認されないが鎌倉時代まで継続する遺跡である。古墳時代中期には玉造工房としての存在が注目され、付近に玉祖神社も所在する。既往の調査では古墳時代前期の方墳（1辺10m）、掘立柱建物等が検出されている。

恩智遺跡

八尾市恩智

生駒山地より派生する谷川によって形成された扇状地の先端部、標高10～15mの地点に立地する。遺跡範囲は、北は恩智川と大阪外環状線の交わる八尾新橋の南50mから南は茶の木橋付近まで800m、東西350mといわれる。縄文前期から晩期の土器は大正橋～恩智橋付近にみることができるが、遺構は希薄である。弥生時代には遺跡の規模が拡大し、弥生時代の木棺墓・土塚墓、溝、河道等、古墳時代前期の井戸、溝等が既往の調査で検出されている。

太平寺遺跡

柏原市太平寺

旧国道170号線沿いの東寄り、日中製作所敷地内で布留式土器が出土している。遺構等詳細は不明である。

② 羽曳野丘陵より派生する台地上及びその縁辺に立地する遺跡

国府遺跡

藤井寺市国府・惣社

志貴県主神社の北方は傾斜の急な段丘崖となる。段丘上には旧石器・縄文・弥生時代の遺構が分布するのであるが、古墳時代前期の遺構はこの斜面上や、斜面から数十メートルのところ分布する。斜面上には堅穴式住居址・土壇・木樋を設けた溝などが検出され、多量の土器が出土し

ている。段丘崖より北70mの地点では溝・井戸・土壇などが検出されている。報告では船橋遺跡とされているが、両者は一連の遺構と考えてよいであろう。南の船橋遺跡との間は低地であったようであるが、藤井寺市北条地区の一画で弥生時代後期の遺構が検出されていることから考えれば、断続的に微高地が存在したのであろうか。

船橋遺跡

藤井寺市船橋・柏原市古町

大和川河床を中心に縄文時代～中世の遺構が重複して検出されているが、その範囲は柏原堰堤から河内橋西方にかけて東西約1Km、北は川を越えた柏原警察署付近まで遺構が存在する。古墳時代前期の遺物包含層はK・H・O地区に分布しているが、河流による浸蝕を考えればかなり広い区域に分布していたようである。縄文時代晩期から弥生時代・古墳時代を通じて中世に至るまで継続的に営まれる遺跡として注意すべきである。

川北遺跡

藤井寺市川北

船橋遺跡の北西に位置する。藤井寺養護学校敷地内の調査で弥生中期の土器群、壺棺・土壇・後期の方形周溝墓・溝が検出されており、古墳時代前期では竪穴住居3棟・井戸・溝等が検出されている。又、6世紀～8世紀の溝や杭列も検出されている。

西大井遺跡

藤井寺市西大井

大井下水処理場予定地内で古墳時代前期後半の竪穴式住居址が1棟検出されている。

北岡遺跡

藤井寺市北岡

藤井寺小学校の西約200mの地点で土坑が1カ所検出されている。周辺にも遺物包含層はなく、土坑出土の土器も高杯・小型丸底土器に限られており、集落としては把えがたい。土器は本書の編年によるⅡ～Ⅲ期のものである。須恵器は伴出していない。

津堂遺跡

藤井寺市津堂

藤井寺工業高校付近で小土坑・落ち込みが検出されているが遺跡の性格は明らかではない。

大正橋遺跡

八尾市太田

大和川河床、大正橋より少し上流で古墳時代前期の住居址が検出されている。

八尾南遺跡

八尾市木ノ本

塚ノ本古墳や小方墳群が検出された長原遺跡の東方に隣接する。弥生時代後期には井戸・土壇が、庄内式の時期では墳墓・井戸・土器溜などが、ほとんどこれに続いて布留式(古)の時期の遺構(方形墳・井戸等)が形成される。布留式(新)の遺構は井戸等が検出しているが、布留式(古)の時期との間には若干の時間的空白があると考えられている。5世紀中頃にかけては日本における須恵器生産に先行するいわゆる「漢式系」とよばれている渡来系土器が多く検出され、掘立柱建物等の遺構も密集して形成される。5世紀末～6世紀にかけて集落は急速に衰退し、消滅する。弥生時代後期から出現し、庄内～布留(古)に拡大し、その後の若干の空白の後5世紀代に再び拡大する遺跡として長原遺跡の古墳群との密接な関係が想定される。ただし、八尾南遺跡で塚ノ本古墳に並行するような時期の遺構が少ないことは、古墳時代前期後半における集落の

移動を考えねばならないであろう。

長原遺跡

大阪市平野区长原

塚ノ本古墳が4世紀末頃と推定されているが、それに伴う時期の集落は明らかになっていない。長吉六反住宅付近の最近の調査で須恵器を伴う5世紀代の土器や石製品が出土している。

瓜破北遺跡

大阪市平野区瓜破

上町台地と西除川が流れる谷をはさんで東側の丘陵の北端に位置する。弥生時代前期(新)の遺構も検出されているが、中期には環壕が掘削され集落が営まれる弥生時代後期には竪穴式住居址・高床倉庫・井戸・溝・土坑等の遺構が環壕を越えて拡大してゆく。ほぼ途切れることなく古墳時代に続くが、かつての住居区が墓域となり、方形周溝墓・木棺墓・土壙墓等が検出されている。なかでも方形周溝墓を覆う包含層中より垂下用の加工が施された方格規矩鏡・内行花文鏡の鏡片が出土したことが注目される。土器は庄内式～布留式までほぼ全時期のものが出土している。

③ 低地部に立地する遺跡

西岩田遺跡

東大阪市西岩田

近畿自動車道関連の調査では、庄内期の溝から吉備・山陰の土器が出土しており、当時の流通の一端がうかがわれる。古墳時代前期の土坑・落ち込みが検出されている。東大阪市意岐部中学校東約100mの地点では竪穴式住居址が1棟検出されている。庄内期以後に河内湾の汀線が後退するに伴って形成された遺跡であるが、さほど大きな集落ではないと思われる。

瓜生堂遺跡

東大阪市瓜生堂・若江西新町

弥生時代中期の遺構(主に方形周溝墓)の稠密さに対し、古墳時代の遺構は極めて少ない。近畿道関係の調査ではBトレンチで井戸が1基検出されているのみで集落の存在を窺わせる事実は確認されていない。これに対し、庄内期から古墳時代前期の水田面が多く検出されていることから考えれば、集落が水没した後、生産地となっていたのであろう。集落自体は他の場所へ移動したのであろうが、実態は不明である。

山賀遺跡

八尾市山賀町・新家町

弥生時代前期中頃～中期中葉まで続く大集落であるが、古墳時代前期の遺構としては遺跡東寄りの若江中学校体育館敷地内の調査において井戸・土坑が検出されている程度で、その実態は明らかではない。

小若江遺跡

東大阪市小若江

布留式土器の標式となった遺跡である。多量の土器が出土していることから周辺に集落の存在が想定されるが、実態は明らかではない。土器からみれば、少なくとも、布留式中期～5世紀末までは継続して営まれているようである。

美園遺跡

八尾市美園町

弥生時代前期の集落が検出されている。弥生中期の遺構は遺跡中央部やや南よりで検出されて

いる。弥生後期の遺構はほとんど検出されていない。庄内期には遺跡南半部に集落が営まれており、住居址が1棟検出された他に、溝・土坑・井戸等の遺構が検出されている。引き続き布留式（Ⅰ期～Ⅱ期）の竪穴式住居址・土坑・溝等が検出されている。北接する友井東遺跡南端の墓域は美園の集落の墓域と考えられる。佐堂遺跡集落とほぼ同時期には家形埴輪、壺形埴輪が多量に出土した美園古墳が遺跡のやや南寄りに築造され、周辺には同時期の溝・井戸・土坑等が検出されている。

萱振遺跡

八尾市萱振・緑ヶ丘

萱振住宅中央の公園及びその西北方に広がる遺跡である。公園内の調査では井戸・土坑等が検出され、多量の布留式土器とともに吉備・和歌山・山陰の土器が出土している。加津良神社西北方では弥生時代後期の遺物包含層が検出されている。

東郷遺跡

八尾市本町・東本町・北本町

庄内期の大型方形周溝墓が八尾電報電話局予定地内で検出されている。集落はその東北方、現近鉄八尾駅付近と考えられている。井戸・土坑等が検出されている。

佐堂遺跡

八尾市佐堂町・東大阪市金岡町

布留式Ⅲ期を中心とする時期の集落跡。竪穴式住居址・掘立柱倉庫・井戸・土坑・溝等を検出している。須恵器出現以前に廃絶する。本文参照。

久宝寺遺跡

八尾市西久宝寺・北久宝寺・神武町

縄文時代晩期・弥生時代前期から中世に至るまで継続する大規模集落である。古墳時代前期には遺跡を横切って北西方向に流れる大きな自然流路がある。古墳時代前期では布留式古段階の溝・土坑などが遺跡南半部に、布留式中段階以後6世紀頃までは遺跡中央部に、それ以後については再び遺跡南半部が集落の中心となるようである。

加美遺跡

大阪市平野区加美・加美東

久宝寺遺跡の北西にはほぼ接するように営まれた弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落跡である。加美小学校分校建設に伴う調査では、この時期の竪穴式住居跡5棟、井戸・土坑（土坑墓）が検出されている。加美遺跡としては、時期が限られているようであり、遺跡そのものは久宝寺遺跡と一体のもので、時期毎に集落の中心が移動しているものかもしれない。

中田遺跡

八尾市中田・刑部

長瀬川と玉串川に挟まれた低地に位置する大集落址である。弥生時代後期から遺構が検出されるが、集落は5世紀後半まで引き続き営まれる。庄内期には吉備産の土器が多量に移入されており、この時期の活発な交流が窺える。古墳時代前期は継続的に集落が営まれるが、5世紀後半に拡大するようである。以後、中世まで連綿と続く大遺跡である。

東弓削遺跡

八尾市東弓削・八尾木

長瀬川と玉串川が分岐する地点のすぐ北に位置する。5世紀以前の数条の自然流路が検出された他、一地点では弥生時代中期の遺物包含層、古墳時代前期の土坑及び遺物包含層が検出されて

第5表 古墳時代前期遺跡の消長

遺跡名	時期	縄文時代					弥生時代			古墳時代			飛鳥・奈良時代	平安時代	鎌倉時代	
		早	前	中	後	晩	前	中	後	庄内	前	中				後
生駒西麓	鬼塚															
	榎手															
	北鳥池															
	馬場川															
	楽音寺															
	水越															
段丘上及び段丘縁辺部	恩智															
	太平寺															
	国府															
	橋北															
	川西															
	大井															
	北岡															
	津堂															
	大正橋															
	八尾南															
低地部	長原															
	瓜破北															
	西岩田															
	瓜生堂															
	山賀															
	小若江															
	美園															
	萱振															
	東郷															
	佐堂															
東弓削本郷	久宝寺															
	加美															
	中田															
	東弓削															
	本郷															

いる。周辺に集落の存在が予想されるが、住居跡等は検出されていない。

本郷遺跡

柏原市本郷

旧大和川の形成した自然堤防の西約200mの沖積地に位置する。最近の調査でようやく遺跡の実態の一端が明らかになった。縄文時代晩期の「埋甕」、弥生時代中期の方形周溝墓、後期の土坑、庄内期の溝、古墳時代前期の井戸の他、形象埴輪、朝顔形埴輪、須恵器、土師器など15世紀頃までの各時代の遺物が出土している。低地部における継続的な大集落である可能性があるものとして注意すべきである。

以上の遺跡の成立と変遷を表で示すと第5表のようになる。収集した資料は古墳時代前期の遺構及び遺物が確認されている遺跡に限っており、また、ここにあげた遺跡のすべてが発掘調査等によってその実態を解明されたわけではないので今この資料から分析するのは早計かもしれないが、ごく大雑把にとらえても、いくつかの特徴を指摘することができる。

生駒西麓の古墳時代集落は、遺物包含層は認められるが遺構が検出される例が少ない。このことは、縄文時代以来ほぼ継続的に営まれてきた遺跡が、古墳時代になっても、集落を突如拡大したりするような質的な転換をとげず、低地部に比べて小規模な集落が時期毎に中心を移動しながら営まれているという状況を示すと思われる。

羽曳野丘陵及びその縁辺に立地する遺跡及び低地部に立地する遺跡の中では、弥生時代以来継

統的に営まれる大規模集落の存在が特徴的である。前者の中では国府・船橋両遺跡、八尾南・長原遺跡、後者では加美・久宝寺遺跡、中田遺跡である。

国府遺跡は段丘上にあつて縄文時代前期以来継続して営まれた集落で、縄文時代晩期になって低地部に進出して形成した集落が船橋遺跡と考えられる。国府遺跡自体は弥生時代以後も継続しているので、低地部へ進出はするものの段丘上の安定した居住区は維持されており、集落自体の移動ではない。縄文時代晩期に沖積低地に集落が営まれていたことは、新家・若江北・山賀・友井東・美園・久宝寺・亀井・長原・八尾南・本郷等の諸遺跡から土器が出土していることから確実である。

長原・八尾南遺跡は古墳時代においては前者が墓域、後者が居住区という関係であつたものと思われる。居住区の標高はT. P. 10~11mで、船橋・西大井・川北等の遺跡の標高とはほぼ同じである。八尾南遺跡は庄内期から出現する点で船橋遺跡とは性格が異なるが、この北約2 Kmにある亀井遺跡が弥生時代後期で途切れることと対照的である。

久宝寺遺跡は縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が伴出し、晩期土器に靱圧痕が残っていることから、河内平野における弥生文化の接点の一つとして注目されている。弥生時代前期・中期の遺物・遺構は散見されるが、集落としてはとらえがたい。確実に集落が形成されるのは弥生時代後期に至ってからである。後期の遺構は遺跡南半部に集中しており、西方に接する加美遺跡が庄内期から出現することと考えあわせれば、この時期の両遺跡は同一遺跡ととらえてもよいと思われる。久宝寺遺跡はその後、古墳時代前期には遺跡南寄り、5世紀代には久宝寺緑地より少し北側、その後、奈良時代以後も遺跡南半部に中心を移しながら継続する大集落址である。

中田遺跡で庄内期に多量の吉備産の土器が出土していることは、この遺跡が以後継続的に営まれる集落であることのみならず、河内平野の古墳出現前後の政治関係を考える上でも興味深い。

以上のような拠点的ともいえる継続的な大集落は、生駒西麓の扇状地上にはみられず、低地部か、低地部に接した段丘縁辺にあるところに河内における古墳時代集落の一つの特徴であろう。

佐堂遺跡の集落はこのような継続的大集落の中にあつて、西岩田遺跡・美園遺跡・萱振遺跡などとともに庄内期以後のある一時期に営まれる遺跡の一つととらえられよう。このような一時的な遺跡の中でも、古墳時代前期後半になって出現するものが佐堂遺跡の他、山賀・小若江・西大井・北岡・津堂・大正橋等いくつかみられる。古墳時代前期後半に遺跡数が増加する傾向は石川流域においても認められるようであり、河内における前期古墳出現が4世紀後半を待たねばならないことと考えあわせて示唆的である。ただし、このことは古墳の成立に生産基盤—集落の存在が必要条件ではあつても、政治的モニュメントとしての古墳そのものの成立は、その中心である大和と各地方、ここでは河内との政治的関係の総体として体现されたものであろうから、集落の増加と、古墳の成立とを短絡的に結びつけることができないのは言うまでもない。

筆者はかつて生駒西麓の前方後円墳から追える首長系列と対比して、低地部の古墳の特殊性を
(2)
解釈しようとしたことがある。低地部の古墳が発見される以前には、生駒西麓の前方後円墳の被

葬者が河内平野低地部をも支配した首長であると考えられてきた。しかし低地部で塚の本古墳・美園古墳等の古墳が発見されている現在では、低地部の集落を統括する首長の系譜を山麓部とは別に考える必要があることは誰もが認めることであろう。先の試論では低地部の集落は生産力の高さ故に王権力に直接的に支配され、古墳も強く規制を受けたために前方後円墳という墳形をとりえなかったものと解釈した。

今は先の試論以上に論を進展させ得ないが、集落の様相をみた限りでも、生駒西麓の前方後円墳の系列は、扇状地上の集落を統括した首長の系譜を示すものにとらえてよいと思われる。ただ玉串川が4世紀の段階で存在していなかったことが証明されれば、長瀬川以東の諸集落も生駒西麓の首長の支配下にあったものと考え得るかもしれない。しかし、玉串川が存在しなかったにしろ、現玉串川縁辺はこの時期の集落が認められず、又、長瀬川以東の美園遺跡では家形埴輪や壺形埴輪をもつ方墳が築かれていることから考えれば、やはり、生駒西麓の前方後円墳は扇状地の集落を統括する首長の墓域と考えた方がよいであろう。低地部の集落に対応する古墳は調査が進むにつれ、その実態をますます明らかにしてくるであろうが、小方墳や大型円墳という古墳の様相は経済的先進地域として、大王権力に直接支配された状況を示しているのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 中川寿代「石川下流域の布留式土器」(羽曳野市教育委員会『西浦銅鐸』1979)
- (2) 亀島重則・阪田育功「地域集団の成立・展開と河内平野開発の諸段階」((財)大阪文化財センター『友井東』に掲載の予定)

〔参考文献〕

- (財)大阪文化財センター『河内平野を掘る』1981
東大阪市遺跡保護調査会『東大阪遺跡ガイド』1978
- 鬼塚遺跡 ●芋本隆裕「鬼塚遺跡」(東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』) 1975
●東大阪市教育委員会「鬼塚遺跡発掘調査概要Ⅰ」1978
- 縄手遺跡 ●縄手遺跡調査会「縄手遺跡1」1971
●東大阪市遺跡保護調査会「縄手遺跡2」1976
●藤井直正・都出比呂志他『原始・古代の枚岡』1967
- 北鳥池遺跡 ●花園高校地歴部「北鳥池遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970
●阿部嗣治・上野利明「北鳥池遺跡・池島遺跡発掘調査概報」(東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度』) 1981
- 馬場川遺跡 ●東大阪市教育委員会「馬場川遺跡Ⅰ～Ⅳ」1970～1976
●東大阪市遺跡保護調査会「馬場川遺跡発掘調査報告」1977
- 恩智遺跡 ●瓜生堂遺跡調査会「恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」1980・1981
- 国府遺跡 ●大阪府教育委員会「国府遺跡発掘調査概要Ⅹ・Ⅺ」1980・1982
- 船橋遺跡 ●原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真「河内船橋遺跡出土遺物の研究Ⅱ」1962

- (財)大阪文化財センター「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書」 1976
- 大阪府教育委員会「船橋遺跡発掘調査概要」 1980
- 川北遺跡 • 大阪府教育委員会「川北遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ」 1981・1982
- 八尾南遺跡 • 八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」 1981
- 長原遺跡 • (財)大阪市文化財協会「長原遺跡発掘調査報告Ⅱ」 1982
- 瓜破北遺跡 • (財)大阪市文化財協会「瓜破北遺跡」 1980
- 瓜生堂遺跡 • 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 1971 1973 1981
- (財)大阪文化財センター「瓜生堂」 1980
- 山賀遺跡 • 東大阪市遺跡保護調査会「山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市 遺跡保護調査会 発掘調査概報集1980年度』 1981
- 東大阪市遺跡保護調査会「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」同上
- 小若江遺跡 • 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 1956
- 原田 修・奥井哲秀・村上敏明「小若江遺跡の出土遺物」(河内考古学研究会『河内考古学』2) 1968
- 中田遺跡 • 八尾市教育委員会「昭和53・54年度 埋蔵文化財発掘調査年報」 1981
- 東弓削遺跡 • 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」 1976
- 本郷遺跡 • 柏原市教育委員会「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1981年度」 1982

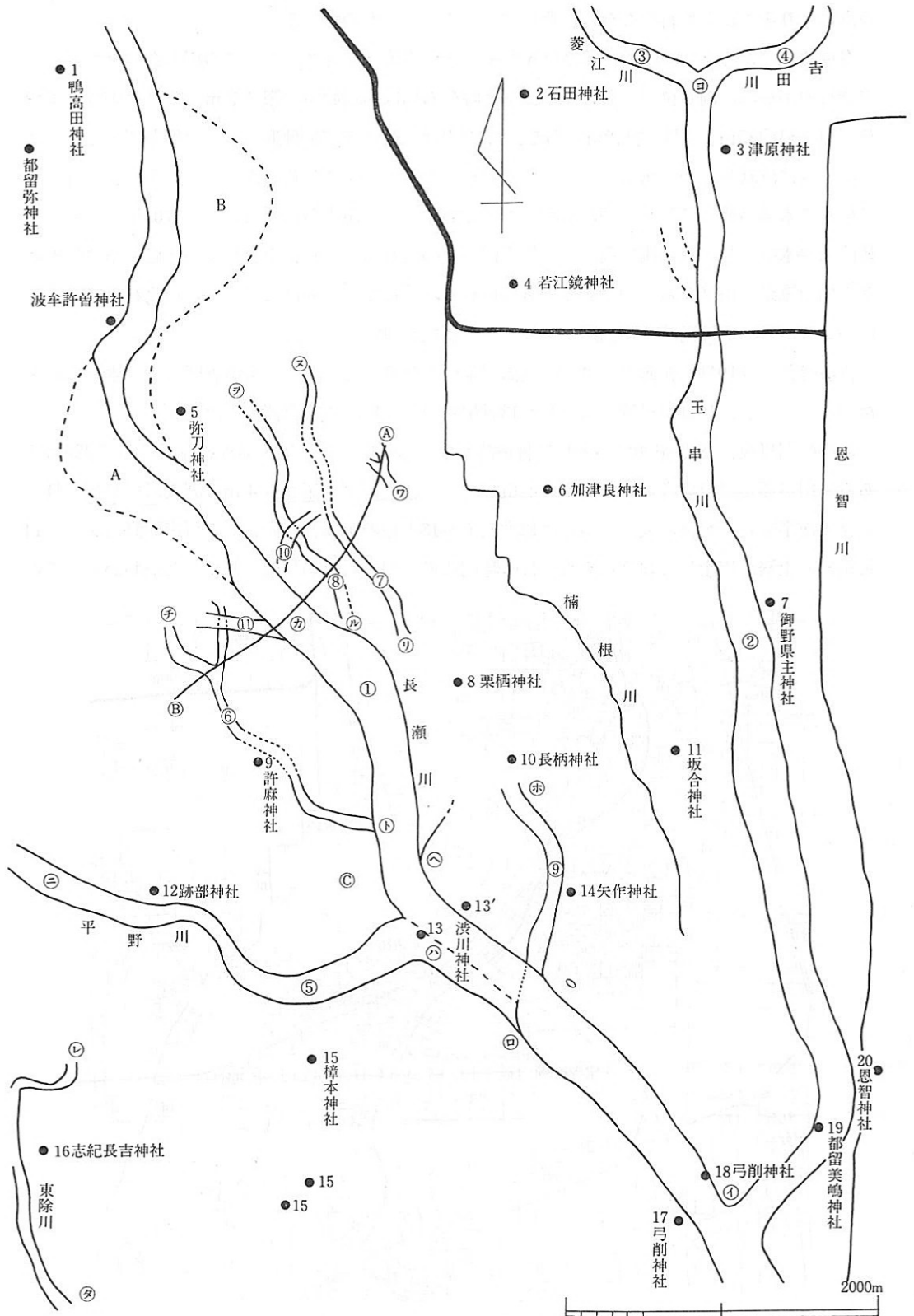
第3節 河内平野の形成と河川の変遷—長瀬川流域を中心に—

佐堂遺跡における今回の調査は旧大和川の本流の一つであった長瀬川の河川敷を横断する形となり、現地表下4.3~6.0mまで掘り下げた為、川の変遷を知る上での重要な知見が得られた。それは、

- ① 右岸においては13世紀初頭に築造された堤防が検出されたこと。
- ② 左岸の堤推定位置から約15m流心寄りに15世紀頃の護岸杭列が検出されたこと。
- ③ 河床となっていた粘土面上に条里制地割に規制された畦畔の痕跡と10世紀初頭の溝が検出されたこと。

等である。以上のことから、長瀬川の本流がこの地点を流れるようになったのは10世紀以後であり、13世紀以降には堤防によって流路が固定されていたことが確認された。ここで最近の発掘調査の成果をふまえ、旧長瀬川の変遷を追ってみよう。第119図は、日下雅義氏の御教示を得て筆者が作成したもので調査区付近の旧流路及び自然堤防を示している。①が長瀬川、②が玉串川であるが、この本流の他に数多くの自然堤防や旧流路が存在する(⑤~⑨)。又、堤防決壊による洪水跡もある(⑩、⑪)。一見して長瀬川の流路①から派生する自然堤防・旧流路が多いのに対し、玉串川からのそれはほとんどみられないという特徴がある。このことは長瀬川の方が玉串川より流量が多かったことを示唆するようであるが、それはさておき、これらの自然堤防こそかつてのある時期に川がその位置を流れていたことの証左に他ならない。従って、それぞれの自然堤防、旧流路の時期を確定できれば大まかながらも川の変遷を追うことが可能となる。

付図6は府道大阪中央環状線にそった土層断面模式図で、その範囲は第119図の④—⑧の部分で、北端が友井東遺跡、南端が久宝寺遺跡の北半部である。この図で明らかのように最近の調査によって⑥⑦⑧の旧河道に対応する川⁽¹⁾の流路が検出されている。⑥は古墳時代前期~中期、⑦が飛鳥~奈良時代前半、⑧が奈良時代の川とそれを切る平安時代の川である。⑥は川幅100m以上、最深部の深さ2.6mの大きな流れで、左岸に粗砂を多く、右岸は微砂から徐々に粘土にかわり、右岸の肩は明瞭ではない。左岸近くには堰あるいは護岸の杭列が検出されているが、5世紀中頃には廃絶してしまうようである。この時期には他に大きな流れは存在しないことからこの流路が古墳時代中期(5世紀)以前の長瀬川本流であるといってさしつかえないものである。これは、八尾市安中町の八尾警察署付近(⑬)で長瀬川①より分流し、久宝寺町頭証寺の東を北西に流れ、火葬場を通過して北西に流れたものである。⑥の流路が途絶えたのち、流路は約1km北へ移動し、⑦が本流となった。川幅約50m、深さ2mで出土遺物のうち最も新しいものは奈良時代初頭のものである。ここに流路をもった時期については明らかではないが、少なくとも7世紀頃には流れがあったようである。これとはほぼ同時期の川が約50m南で検出されている。川幅や砂の堆積の規模は⑥ほどではないが、この流路⑦が飛鳥~奈良時代初頭の本流であったと思われる。この流路の上流における痕跡は明瞭でないが、①から分流し、穴太神社(⑭)から北西に流れて、佐堂交



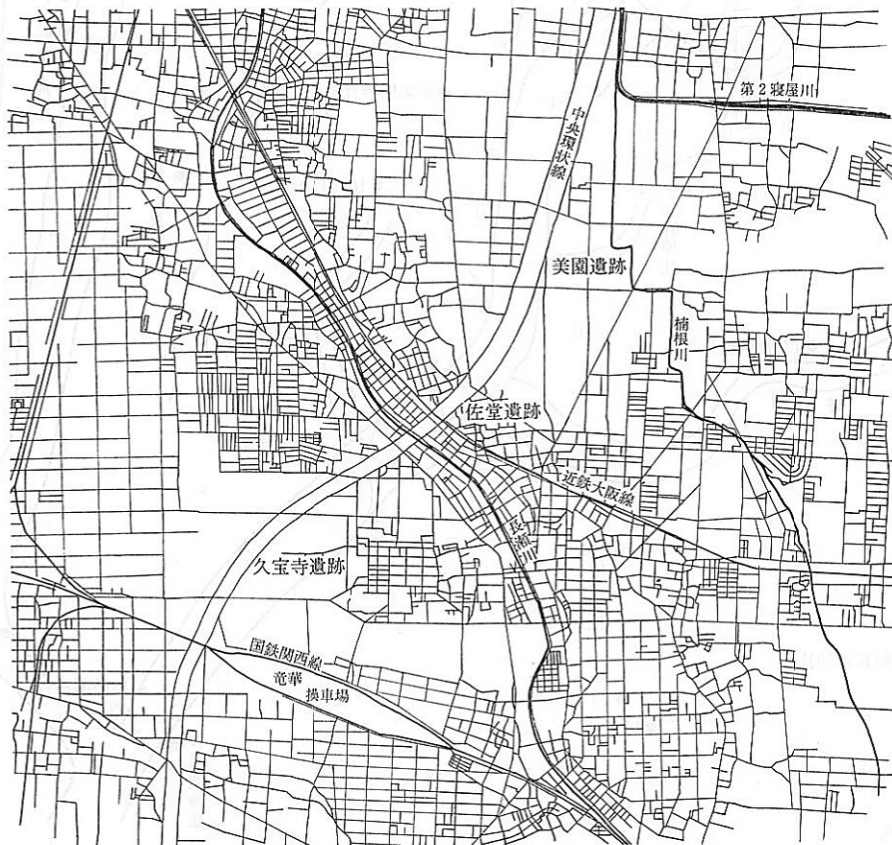
第119図 調査区周辺における旧流路及び自然堤防

差点に至りそこから蛇行しながら、北に向かって流下するものである。

奈良時代になると⑦より南へ約200m移動し⑧が流路となっていた。この川の右岸を切って平安時代の川がほぼ同じ位置を流れるが、奈良時代の川は幅約40m、深さ2m、それを切る平安時代の川は幅約35m、深さ約1.2mである。この川は八尾市末広町付近(㊄)で長瀬川①と分かれて北北西に流れるものである。さらにこの流路に重複して鎌倉時代の溝が掘り込まれ、現在も同じ位置に水路が残っており、耕作に利用されている。この用水路は後に述べる1704年の大和川付替時に取水樋として長瀬川に残された佐堂樋からの用水路であり、中世以後の灌漑体系はこの時期の川の流路に由来するものであると考えられる。ただし、⑦⑧はともに川幅がそれほど大きくないことから、別に同時期の流路が存在した可能性が想定される。

古墳時代以後10世紀初頭以前までは長瀬川本流部分のうち少なくとも調査区付近は水田であったわけであるが、10世紀以後、遅くとも13世紀初頭までにはこの位置が本流となる。

この時期以後、18世紀初頭の大和川付替時までに形成された河川敷幅は調査区付近で220mである。川が運んだ粗砂は左岸側に厚く堆積しており、最深部の深さは4m、調査区中央部(Dトレンチ南半部)の粗砂の最下層からは12世紀末～13世紀の土器、左岸寄りの河床面直上からは14世紀頃の土器が出土しており、それぞれの時期に最も深く河床が浸蝕されたことがわかる。この



第120図 地割からみた旧長瀬川流路

流路①は調査区Bトレンチでの所見から、基礎に杭を打ち込み、これに小枝をからめて土溜めしながら細砂や粗砂を盛土する工法で造られた堤によって固定されており、1704年の付替時に至るまで、何回かの決壊はあったものの流路自体は変化しなかったものと思われる。

以上、古墳時代から18世紀の付替に至るまでの長瀬川を中心とする調査区周辺の限られた範囲での調査知見から流路の変遷をみたわけであるが、現地表に痕跡をとどめない自然流路については考察の対象とはなっていない。

次に、最近の発掘調査の成果に花粉分析等自然科学の成果をまじえて、河内平野低地部全体の様相を推察してみよう。

那須孝悌・樽野博幸両氏はボーリングデータによって洪積世低位段丘相当層の上面を切って流れる幅約350 m⁽²⁾、深さ約10m⁽³⁾の古長瀬川を復原している。位置は大阪中央環状線にそった断面では近鉄大阪線のやや北側である。流路の方向は不明であるが、川はおそらく北西～北北西に流れていたものと推定される。この川の他に現平野川と国鉄関西線との間に古長瀬川よりは小さいが1つの流路がある。ウルム氷河期当時の景観はこれらの川が現在よりも北に傾斜の強い当時の地表を大きく削り谷をつくりながら流れていたものであろう。同データによる断面図では現玉串川流域がカバーされていない為、古長瀬川の他に大きな流路があるのかどうかは不明であり、河内平野を東西に横断するボーリング資料の収集と検討が今後の課題であらう。

同氏は、この低位段丘相当層より5 m～2 m上に楠根川付近で厚さ約8 m、佐堂遺跡付近で4 m、亀井遺跡付近でとぎれる海成層の存在を指摘している。この海成層は「縄文海進最高頂期の短い期間に堆積したもの」と考えられており、河内湾の最高海面がT. P. 2 mを越えるものであったとしている。梶山彦太郎、市原実両氏による河内湾の時代に相当するものである⁽⁴⁾。

我々が問題にしてきたのはこの海進が終息し、河内湾が徐々に陸化し、この河内平野低地部が集落発生条件の整う段階に至るまでの川の変化と人々との関係である。すなわちこの低地部においては現在のところ縄文時代の遺跡が確認されていないことから考えて、それは縄文時代晩期から弥生前期以降のことといえよう。

石川と合流した大和川が河内平野に堆積をすすめた当初は、鳥趾状に砂洲を形成していったようである。安田喜憲氏はボーリングデータから弥生時代前期～中期の遺構面となる砂層の上面高度⁽⁵⁾から当時の地形を復原している⁽⁶⁾(第121図)。安田氏は、弥生前期の遺跡が、前面あるいは側面に水田に好適な低湿地をひかえた鳥趾状砂堆の先端か、埋積浅谷に比定される凹地や谷頭に立地すると述べている。この図の等高線は、川が運んだ砂の分布、即ちこの時期の河川の流路の概要を示したものと理解するべきであらう。ただこの時期の河川は長期にわたり固定した流路をもつものはほとんどなく、現地表にその痕跡をとどめないものが多い。楠根川から長瀬川流域についてみれば若江北遺跡の南半部で幅60～70mの流路、山賀遺跡では釜の出土した幅約50m、深さ3 mの河川が検出されている他は流路とよべるものはなく、低地全体が断続的に砂で覆われるという状況がみられる。例えば、若江北遺跡南半部の弥生前期の水田面は厚さ1 mもの粗砂で覆われる

し、友井東遺跡の水田面もシルトによって覆われていた。従ってこの時期の川の様相は幾条もの川が北北西に流下し、洪水の度に周辺を土砂で覆いながら、川自身が流路を変えていったというものであろう。

弥生時代中期にはそれまでみられなかったような大規模な自然河川が友井東遺跡で検出されている。この川は幅約100m、深さ2m以上、2方向に分かれて北西に流れ、川の肩をこえて粗砂を堆積する大きな河川である。堆積砂層中には2～5cm大の礫を多く含み、かなりの流速であったことがわかる。次の弥生時代後期には氾濫による堆積は終るが、旧流路の一部は三日月湖状の湿地となって6世紀まで残る。美園遺跡では幅10m～20mの川が検出され、また山賀遺跡(その2)の中期遺構面は分厚い砂層で覆われるなど、従来から指摘されているような弥生中期末～後期初頭にかけての遺跡の埋没に対応するような様相が認められる。ただ瓜生堂遺跡や巨摩廃寺遺跡の花粉分析結果によればA～H地区までは居住に不適な湿地草原状に変わるがF地区以南は森林が残り一部には居住可能な比較的乾燥した草原が広がっており、河内平野全域が一気に水没したということはないようである⁽⁶⁾。しかし、瓜生堂遺跡において居住域が500mも南へ後退したことは水面の上昇が想定されるわけであり、その原因については今後に残された検討課題である。

弥生時代後期は中期末に比べてかなりおだやかな安定した様相を呈する。瓜生堂遺跡では前代に広がった湿地ないしは草原状台地からカシ・シイの樹林が再生するような状況へと変化し、自然流路としては、山賀遺跡で堰によって水量をコントロールされた流路が検出されている程度で、大きな洪水はみられない。後期末には山賀遺跡で厚さ1mもの砂が堆積するような洪水があったようである。

庄内期には瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡で水田が検出されるなど安定した自然環境の下での生産活動の展開がみられる。同時に美園遺跡では集落が、友井東遺跡では墓域が形成されはじめる。

この時期の自然流路には、山賀遺跡以南ではおそらく久宝寺遺跡を北西に流れる幅200m以上、深さ3mの川⁽⁸⁾に収束されてゆくのではないだろうか。この川は古墳時代中期まで流れるのであるが、護岸やシガラミ等で流れをコントロールする努力が見られ、布留期初頭から5世紀中頃まで流れていた川である。

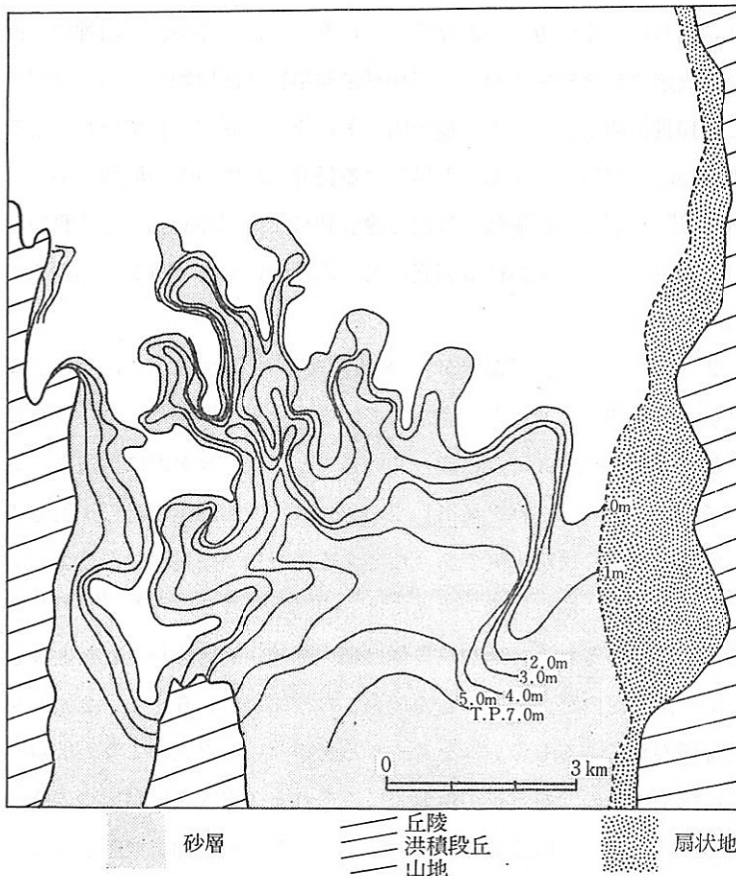
以上、大阪中央環状線にそった調査結果により楠根川～長瀬川流域における河川の変遷を追ってみたが、次に河内平野低地部全域についてみてみよう。⁽⁹⁾

服部昌之氏は航空写真や古地図等から大阪平野低地部全域にわたる古代からの景観を復原している⁽¹⁰⁾。この大和川下流の考察で、氏は八尾市植松付近で長瀬川①から分かれる平野川⑤を古代における大和川の本流であるとし、9世紀中頃に大和川から分離したと推定している。又、氏は④から北へのびて八尾市萱振・西郡・東大阪市若江北・横枕へつづく自然堤防(6-4-2)が8世紀以前にすでに大和川本流と切り離されていた長期的な河道である可能性を示している。更に玉串川②そのものを9世紀中頃以降に固定化した流路であろうと推定している。氏の根拠は航空写真による河道の検出と、条里制地割と旧河道との関係、及び、文献資料による考察である。全

体として優れた考察であるが、発掘調査によれば現地表面に遺存せる条里制「的」地割の中には中世（12～13世紀）にまでしか遡らないものも多く、氏が条里制地割の施行時を奈良時代（8世紀頃）と推定されていることは今少し検証しておく必要があると思われる。又、各流路は、流れはじめた時期を推定するのが困難であり、又、現地表面に痕跡を留めないものについての考察は不可能であるという方法的限界があるのは仕方のないことであろう。

ここで問題となるのは、(1)八尾市植松町④で長瀬川①より南西に分かれた後、北西にのびて平野川の流路となる⑤の自然堤防と、(2)⑨の旧流路、(3)八尾市萱振から横枕へつづく自然堤防列、(4)二俣④で分かれて北流する現在の玉串川②である。

(1)については、かつて6～7世紀頃に本流と切断されたと推測されたが、服部昌之氏は、⁽¹¹⁾「このコースが8世紀後半における大和川筋の本流、ないしは長瀬川コースに匹敵する河流である。この河川が大和川から分離したのは9世紀中頃ではないか」と推定している。その根拠としては、文献等にみえる渋川堤、伎人堤を平野川上流・下流の堤の意と解し、長瀬川堤にみられる長瀬川コースと併存する平野川コースが考えられること、又、和気清磨が開削しようとした四天王寺、荒陵南の掘川は平野川以外にないということ、又、平野川を隔てて北と南で明白に条里地割系統が異なり、平野川が地割施行に大きく影響していたという点である。



第121図 河内平野における粗砂堆積の広がり

長瀬川と平野川に囲まれ、⁽¹²⁾古くから橋嶋とよばれた三角洲状の微高地は長瀬川が運んだ砂によって形成されたものであり、この微高地が形成されるに従って長瀬川自体が、平野川筋⑤と長瀬川筋①に分れたものと思われる。その後、平野川筋⑤が①から切り離された（人為的か自然によるかは不明）のであるが、その時期については考古学的には検証されていない。ただ、続日本紀の記載の一つに平野川が存在を考え得るような資料がある。それは、称徳天皇

神護景雲三年冬十月辛亥条の「進幸由義官……（中略）……乙卯權建肆廓於龜華寺以西川上而駢河内市人以居之……」という記事である。龜華寺を◎付近と考えれば、⁽¹³⁾西の川とは平野川筋としか考えられないからである。もしこの時期に平野川があったとすれば先の飛鳥・奈良の川⑥⑦が本流としては小さいことも説明し得るかもしれない。

次に(2)の問題、すなわち⑨の自然堤防である。この流路は地形図や航空写真から明瞭に読みとれるのであるが、未だその時期についての論考はないようである。この旧流路が、(3)の自然堤防列につながるのかどうかは不明であるが、この自然堤防上には式内矢作神社14、同長柄神社10が存在する。この両座が創祀以来移動したという記録がないことから、この自然堤防を形成した流れはかなり古い時期に廃川となったものと思われる。この川の時期を考えるにあたって、平野川筋⑤が①と分岐する点、八尾市植松④に位置する渋川神社13が延喜式神名帳では渋川郡ではなく若江郡にあるとされていることが問題となる。渋川神社は天文2年（1533）5月の洪水で流失した為、元の御旅所であった現在地に元亀3年（1572）に遷されたという記録があり、旧地は長瀬川①の東岸の安中町東部付近13'にあったとされている。⁽¹⁴⁾この旧地13'は⑨の流路の左岸にあると推定される。渋川神社がはじめて祀られた頃に渋川郡に属していたことは間違いないであろうから、渋川神社創祀時の郡界は神社旧地の東にあったといえるわけである。一般的に川が郡界となっていたことは、8～9世紀の伎人堤周辺での郡界紛争からもうかがえるが、渋川神社の旧地が1533年まで変化なかったと仮定すれば延喜式編纂時（10世紀前半）に渋川神社のある地が若江郡に属していたということは10世紀前半にはすでに長瀬川が①の流路に固定されていたことを示すものであり、渋川神社創祀時の渋川郡と若江郡の郡界となる長瀬川流路が⑨の流路であった可能性が強い。従ってこの自然堤防を形成した流れの時期を律令制による国郡制施行時7世紀から8世紀頃のものとして推定することができ、⑦における調査結果と時期的に対応することからこの自然流路⑦につながるものとみてよいものである。

(3)の自然堤防列（6—4—2）については、服部氏が、「8世紀後半段階ではすでに大和川本流から切り離されていたそれ以前の長期的な河道」と想定している。その根拠として、これを境にして条里の東西地割線がズレ、里区割が約3町食い違っていること、又、数ヶ所に河道らしい痕跡が認められたことを上げている。確かにこれを境にしてのズレは、昭和28年当時の1万分の1の地形図からも読みとれるのであるが、氏が本流であったとする平野川で条里区画が途切れる現象とは質的な差異を認めざるを得ない。単純に不可耕地には条里施行が及ばなかったとしても、地割は郡単位での地割の施行を認めるなら、⁽¹⁵⁾地割線自体は郡内で統一的に施行されたと推定されるから、このズレは若江郡と東の河内郡、高安郡との境をこの自然堤防（6—4—2）の線上に考えるか、あるいは施行時期の差によるものか等を考えざるを得ない。以上のような問題がこの自然堤防の時期の問題から派生するのであるが、現地表にみられる条里区割線がいつの時期まで遡れるのかという問題とあわせて、この自然堤防の時期と実態とを考古学的に検証することを、今後の課題とした⁽¹⁶⁾。

次に長瀬川とならぶ本流と一般的に考えられている玉串川の時期について考えてみよう。⁽¹⁷⁾

山本博氏は「由義宮」に関する考察の中で、玉串川が長瀬川と分岐したのは「元正太上天皇当時より遙かに古くへさかのぼる」と考え、『続日本紀』神護景雲4年7月22日の「修志紀・波川・茨田等隄・単功三万余人」という記載を、通常の洪水記事→堤防修築記事という記載でなく、堤の修造記事のみが見えるところから、由義宮、由義寺等を水害から守る為の工事であったと推定した。⁽¹⁸⁾

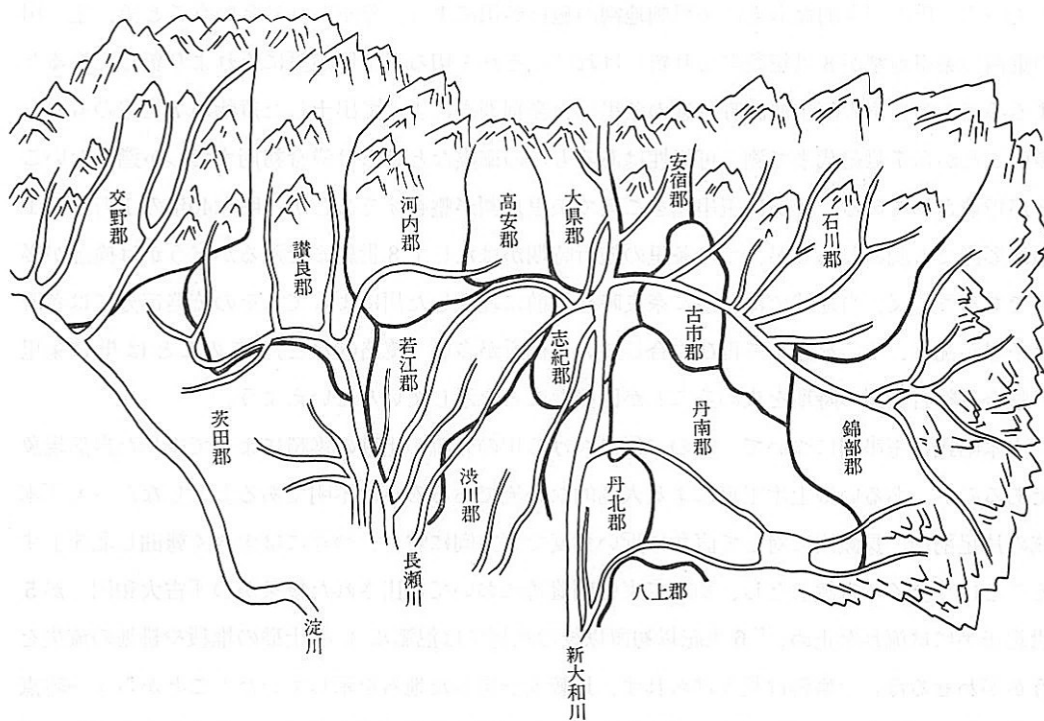
このような考えに対し、服部昌之氏は玉串川は9世紀中頃以降に形成されたと考えた。その根拠は玉串川の東西で条里地割が整合しているということである。又、奈良時代の洪水記事に玉串川流域の記載がみられないこともこの時期に玉串川ルートが存在しなかった可能性を示すものとしている。氏の基本的な考えは条里制地割の施行が川によって分断されるということ、玉串川の東西の条里地割が8世紀段階より新しければ、それを切る玉串川が更にそれより新しくなるとする論である。東大阪市池島町付近の条里は、発掘調査によって出土した遺物が7世紀のものが多いことから7世紀代まで遡る可能性はあるものの確実なところは鎌倉初期までしか遡らないことが指摘されている。⁽¹⁹⁾確かに玉串川をこえて条里地割が整合することが、昭和40年の1万分の1の地形図でも読みとれるが、この条里の施行時期がはたして8世紀まで遡るかどうかは検証が必要であろう。又、当地域では、逆に奈良時代以前に埋没した川によってもその流路部分では各所で条里が乱れ、そこを越えて再び整合している個所が多い（流路⑤など）。このことは単に条里の整合不整合で川の時期を決めることが困難なことを示しているといえよう。

山本昭氏は玉串川について「この二俣における川の分流が土砂の堆積によって生じた自然現象であるのか、あるいは土木工事による人為的な分流であるのかは不明である」としながらも「本流の片足羽川、長瀬川に対して直角に近い角度で東方向に岐れ、つぎには大きく彎曲し北流」することは「全く不自然」とし、加えて東弓削遺跡において検出された幾条かの「古大和川」が5世紀後半には流れを止め、「6世紀以初頭以後の地層には氾濫による土砂の堆積や耕地の流失をうかがわせるほどの痕跡は見うけられず、比較的安定した地層を示していた」ことから「一時点で洪水氾濫が停止」し『仁徳紀』等にみられる河内王権の積極的な開拓と一連の土木工事と「志紀県主や御野県主等による開拓とを二俣の二河川分岐工事にあてることができるかもしれない」と述べている。⁽²⁰⁾

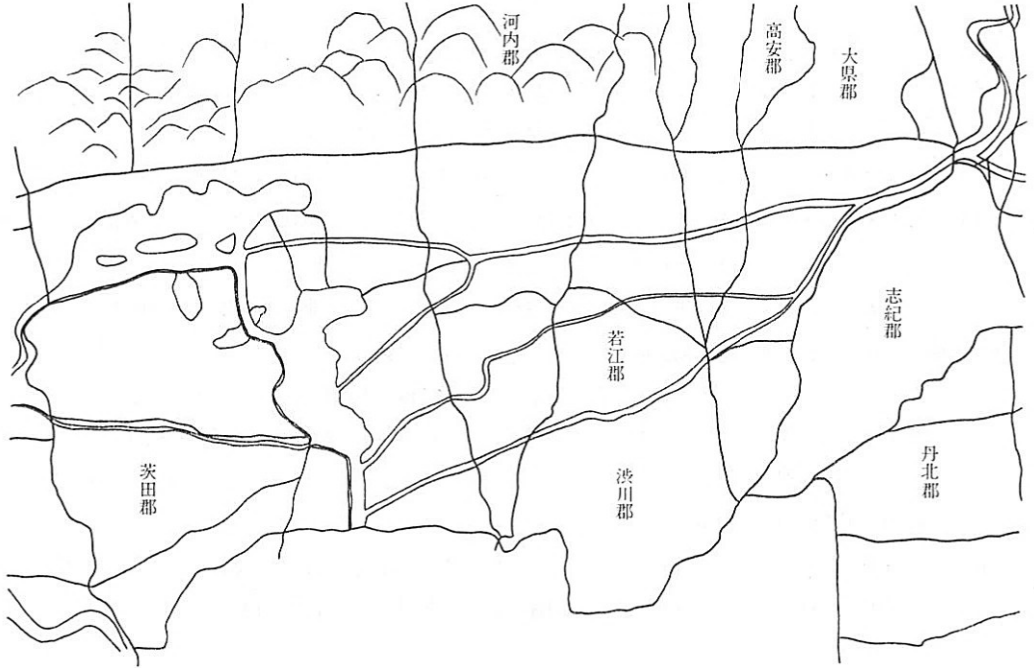
二俣での分岐の時期が考古学的に検証されていない現在では、筆者は定見を持ち得ないのであるが、東弓削遺跡での調査結果からみて、6世紀頃には玉串川はすでに流路を持っていたのではないかと考えている。

以上、河内平野低地部について概観してきたが、狭山・羽曳野丘陵から北流する大乘川・東除川・西除川などの諸河川については本論では考察が及んでいない。これら諸河川も河内平野形成に大和川ほどではないにしても重要な役割を果たしたであろうし、又、これら諸河川自体も何度か流路を変えたことも考えられる。平野川以南については今後の検討課題である。

以上、考古学、地理学、花粉分析等、自然科学の成果をまじえて河内平野低地部における現長瀬川を中心として河川の変遷を推察しさらに、中央環状線における最近の発掘調査の成果を資料として、弥生時代から大和川付替までに至る現長瀬川の流路変遷に対して大まかながら追求を試みた。この中には現地表に痕跡をとどめず地理学的方法では捉えられない河川も含まれるし、又、地形図や航空写真から読みとれる旧流路のいくつかは、その時期をおさえることもできた。地下に埋没している未知の河川については、発掘調査という、考古学的方法による検証を経なければ論証が不可能であり、今後の資料の増加を期待し、検討課題としておきたい。



第122図 河州図 (『日本輿地通志』)



第123図 河内国絵図（部分）寛文12年（1672年）卯月（『布施市史』第1巻）

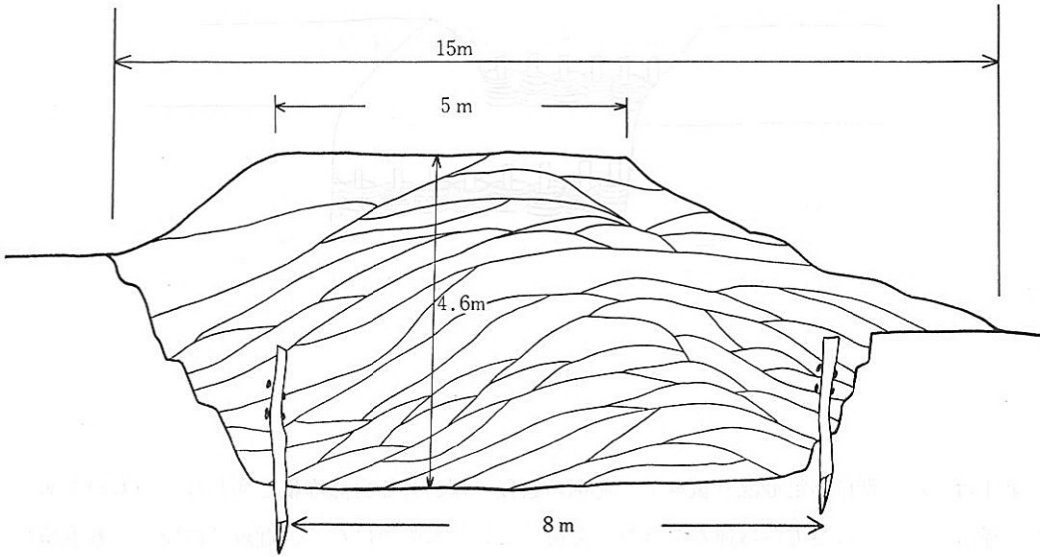


第124図 元禄16年大和川河内国志紀郡字築留ヨリ末流泉川壩浦江川邊図（1703）（『治水の誇里』）

〔注〕

- (1) ただ河流堆積内の遺物から川の上限を決定するのは困難であり、又、同じ位置に古い時期の川が存在したとしても、新しい川がより大きく深く削ってそこを流ればその存在は確認できない。従って、厳密に言えば発掘調査によっても完全に復原できるとはいえないわけである。
- (2) 中央環状線にそった断面に現れた幅であり、流路方向が不明である為に幅は正確ではない。
- (3) 「亀井・城山・寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書」財団法人大阪文化財センター 1980
- (4) 梶山彦太郎・市原実「大阪平野の発達史—14Cデータからみた」『地質学論集』7 1972
- (5) 弥生時代前期、中期の遺構面が砂層に限られないことは、発掘調査経験者ならば誰もが承知していることであろう。又、安田氏は弥生時代前・中期の遺構を覆う黒色有機質粘土をカギとして、ボーリング発掘データによる資料に年代を与えているが、この時期の遺構を覆う土が黒色有機質粘土のみではないことも発掘調査によって確かめられている。従ってボーリングデータによる旧地形復原に際しては時期決定については慎重であるべきであろう。
- (6) 安田喜憲「花粉分析等による河内平野の自然環境の変遷（弥生時代、古墳時代を中心に）」（財）大阪文化財センター「近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡、第一次発掘調査報告書」1975
安田喜憲「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析Ⅱ」（財）大阪文化財センター「瓜生堂、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」1980
- (7) 安田喜憲「瓜生堂・巨摩廃寺遺跡の泥土の花粉分析」（大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター「巨摩・瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」）1981
- (8) 河床面上からは庄内式土器しか出土しないことから、庄内期から流れはじめた可能性もある。大阪文化財センター調査中。
- (9) 近畿自動車道に関連する遺跡の発掘調査成果の一部は、（財）大阪文化財センター「考古展 河内平野を掘る 近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として」1981）に紹介されている。
- (10) 服部昌之「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地域研究と都市研究』大明堂 1978
- (11) 建設省国土地理院「土地条件調査報告書（大阪平野）」1965
- (12) 橘嶋を長瀬川と玉串川とが分岐する八尾市二俣に考える説もあった。例えば『河内名所図会』は「橘嶋は若江郡東弓削の内也」と記しているが、現在では八尾市植松付近から北西に広がる微高地を指すと考えられている。
- (13) 龍華寺の位置に関しては山本昭氏の説に従った。（山本昭「河内竜華寺と淡川寺」『藤沢一夫先生古稀記念論集』）1983
- (14) 『林家文書』天文二年五月五日暁ノ水害ニ竜華堤字大門ト称スル處ヨリ切込民屋ノ流失イフモ更ナリ氏神社モ流失シテ二柱ノ神体水下ヨリ水上ニ袂クレニ流レ上ルヲ氏人ノ一族漸クニシテ抱エ揚ゲ奉護ヲナセリカクテ度々ノ水災ニ村里ノ人々悲歎限リナケレバ元龜三申年時ノ官庁ニ訴ヘ川西ノ御旅所ニ社殿ヲ遷シ同所ニツク官持ノ平山ヲ切り開キココニ村里ヲ移サシメテ従ツテ水害ヲ遁ルルコトヲ得タリ云々
- (15) 同氏の作成による条里遺構分析図においても河内国の中での郡単位の施行が描かれている。服部昌之「畿内における条里制遺構」『日本歴史地図』原始・古代編(下) 1982 p.148～152

- (16) 大阪府教育委員会が1983年6月より発掘調査を行なっている萱振集落北西の高校用地での所見では現地表下1.0～2.5m付近に砂層の堆積がみられることから、この付近がかつての流路であったことは確実であるが、服部氏のいうように(11-6-4)と続くものかどうかは不明である。
- (17) 藤岡謙次郎氏は、現地表での等高線のはり出し方から「本流たる長瀬川よりも玉串川の方が過去における土砂の運搬・堆積作用がより強大であった」と推定したが筆者は長瀬川が本流であると考えている。(藤岡謙次郎『大和川』学生社 1972 P.180)
- (18) 山本博『竜田越』学生社 1971
- (19) 『池島町の糸里遺構 調査概報』東大阪市遺跡保護調査会 1973
- (20) 山本昭他『東弓削遺跡』八尾市教育委員会 1976

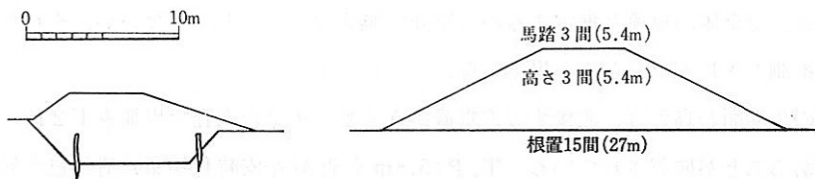


第126図 長瀬川右岸堤防横断面図推定模式図

盛土の基底部はT. P. 2.8m程度である。従って生活面との差は3.2m以上あり、この部分が削り取られたことになる。瓦器の出土した層は中世のものであることが確実だから、中世の堤の上端は先述の堤下層（暗緑灰色粗砂混微砂）の最上面（T. P. 7.4m）を越えるものである。従って基底部からの高さは4.6m以上はあったものと推定される。堤の幅は、確実ではないが、基底部の杭列の間隔が8mであるのでそれを越えて土を盛ったとして基底部の幅（根置）を15m前後と推定した場合、堤の上面幅（馬踏）を約5mとして復原される堤の横断面が、第126図である。第127図は新大和川付替工事による堤の横断面との比較図である。⁽²⁾

この図における左側は居住地、右側が川である。この図から算定した堤盛土部分の断面積は40㎡となる。従って単純に堤の断面がすべてこのようなものであったと仮定すると、堤の長さ1mあたりの盛土量は40㎡となるわけである。このようにして築いた堤の延長が何m程であったかは想像の域を出ないが、今仮に1Kmの堤をつくったとしたら、必要な土量は $40\text{㎡} \times 1000\text{m} = 4\text{万㎡}$ となる。

ここで1人1日あたりの掘削・運搬土量を推定してみよう。大和川付け替え時の築堤労働は新川筋の土を掘り堤を盛るもので、中世のこの築堤とほぼ同様の工法によるものと思われる。大和



第127図 長瀬川中世堤防（左）、新大和川堤防（右）規模比較図

川付替工事の計画案では一坪（5.832m³）につき3人～7人掛とし、平均5人掛けとして積算している。⁽³⁾これによれば1人1日1.16m³程となり、現在とほとんど変わらない。中世の1人1日あたりの労働量も大差ないものとするれば、延長1Kmの堤を築くには40000m³÷1.16m³/人日=34483人日となる。1日1000人を投入しても34日程かかったわけである。

いずれにしても長瀬川の堤を固定するには大規模な労働を必要としたのである。柏原市の築留から大阪市森河内付近までの長瀬川の総延長は約14.5Kmあるので、兩岸に堤を築けば延長29Km、しかも大和川付け替え時までに築かれた堤の高さは今試算した高さの2倍以上あったであろうから、川を固定し生産を維持する為の労働は、まさに計り知れないものと言わざるを得ない。

(4) 築堤における労働編成

さて、以上のような築堤労働はいかなる形態で編成されたのであろうか。この問題を地下と荘園領主・国衙との支配関係から考えてみたい。

若江郡・渋川郡は長瀬川を境にしているわけであるが、この川をはさんで若江荘・渋川荘という醍醐寺領荘園があったことが記録されている。両荘は、『醍醐雑事記』にみえる寛仁4年（1020年）が初見である。このうち若江荘は保元3年（1158年）には石清水八幡領として『辨官符』にみえるので堤が築かれた12世紀頃には若江荘すべてか、その一部かは不明だが石清水八幡領になっていたものと思われる。⁽⁴⁾

若江荘・渋川荘の所在地自体がどこであったのかは明確ではないが、11世紀には長瀬川を挟んで両荘が存在していたことは確実であろう。第Ⅴ章で推定したように11世紀以後、長瀬川がこの位置を流れはじめ、その後、流路が固定されるのは、荘園としてのこの地域の開発に符合するものと思われる。長瀬川は両荘にとって農業用水源でもあったわけであるから、その治水には地下のみならず、荘園領主、国衙も生産の基本問題として認識し、対応していたであろうと思われる。このことは次の資料の存在からも裏付けられる。

官宣旨案

左辨官下河内國

應早免除醍醐寺所領庄五箇所、宛課防河堤并臨時夫役等事、

在河内郡 志紀南條 同北條 若江郡 澁河郡右、得彼國去年八月廿日解狀備、今月十九日宣旨備、彼寺去六月廿六日奏狀備、謹檢案内、とこと巴下依狀多略之了、者、權中納言源朝臣資綱宣、奉 勅、國司陳狀申狀理不分明、宣仰彼國、早任先例、令免除件等役者、國宣承知、依宣行之、

承保四年二月廿日 大史小槻宿禰在判 中辨藤原朝臣在判 (『醍醐雑事記』12『平安遺文』1143)

この資料は、左弁官が醍醐寺所領の五箇所の荘園に防河堤并臨時夫役を宛課することを免除するよう河内國に指示したものである。ここでいう「河」とは長瀬川以外に考えられない。醍醐寺は「先例」に任じて夫役を免除するように奏上した。又、国衙もこの問題に関して、解状を送っ

ている。その回答がこの下文である。資料では寺や国衙が奏上した解文の内容が略されている為、内容は不明であるが、おそらく、寺は夫役を免除された先例を挙げて免除を請うたものであろう。国衙が荘園に対しても防河堤并臨時夫役を宛課そうとしたわけであるから、国衙が治水に関する職務を行っていたことは明らかである。

11世紀頃の堤防修築の労働がこのように国衙によって編成された夫役という形の労働であったことが先の資料から窺うことができる。この夫役がどのような内容、編成の労働であったかどうかは資料からは明らかでない。又、これが当時の一般的な形態であったかという問題についてはなお検討が必要である。

中世の灌漑全般について詳細な検討を行なった宝月圭吾氏は、東大寺領大和国榛庄・清澄庄の例や春日神社領摂津国榎坂郷・東寺領山城国上野庄等の例を引いて、中世の灌漑労働が有償労働であったことを詳細に指摘した。⁽⁵⁾ 春の勸農の頃には埋まった溝の再掘削など用水路の整備や堰の補修が行われるのであるが、それらの労働には荘園領主から「食料」「井料」が給付されるのが通例であった。これらには庄田の官物が下行されたり、その用にあてる田地を「井田」「井料田」として毎年の耕作地の中に確保されるものであった。⁽⁶⁾ このような労働は12～13世紀においては、荘園領主による勸農の一部として種子肥料の下行・散田とともに年毎に行なわれる通常の労働といえよう。

このような例年の耕作に伴う労働に対し、水害等で堤や溝が破損埋没した場合はどうであろうか。保安3年(1122年)の伊勢国大国庄の田堵は、「雖遇水損 於堰溝少破之時者、乍敷不言上本家、田堵致修固之勤」⁽⁷⁾とのべている。これは、小規模な水損に対しては在地で修築したことを示しており、そのような力を貯えてきている在地勢力の成長を示しているものといえよう。しかし、「不言上本家」から逆に窺えるように、大規模な工事については本所が堰料を給付するのが通常であったと思われる。同解文は、櫛田川の洪水による田地、溝の埋没に際し、再掘削に必要な堰料を給付するよう本家の東寺に申し入れている。東寺がこれに応じない為、専当の藤原時光、菅原武道が一定の予備的作業をした上で再び東寺に対し注進している。⁽⁸⁾ 大山氏の試算によればその工事に必要な労働量は合計6万3000人となり、とうてい大国庄だけではまかなえないであろうから、近隣の諸庄の農民も動員(食料給付して)⁽⁹⁾したと想像されている。先に試算した長瀬川堤の構築が1Kmの築堤に対し3万4000余人必要であったとすれば、本地域における築堤労働も一箇荘を越えた規模で編成されていたであろう。以上、溝改掘や築堤等の労働を、荘園領主による勸農の面からみてきたわけであるが、一箇所の庄園をこえる規模の労働はいかなる形で編成されたのであろうか。

永暦元年(1160年)、紀ノ川流域500余町を灌漑していた綾井堰が洪水によって破損した。この復旧(新堰の設置・溝の掘削)に際しては国衙が重要な役割を果たしている。⁽¹⁰⁾ 国衙による労働の編成は国衙領のみならず近隣の荘園にも及んでいたことがわかる。この国衙の活動に対し、大伝法院の所司等は「……引率数多軍兵人夫等、乱入御願寺領山崎庄内……」と非難し、これに対し

て国衙は「農業之輩以鋤鋤為最、池溝之計弓箭向帶哉」と反駁している。12世紀に至っても国衙が生産活動に直結する用水の管理に積極的役割を果たしていた一面が窺えるのである。

正治2年(1200年)東大寺領美濃国大井庄の解案は「当国防河之堤、連々雖損壞、国衙修固之時、当庄全不動其役、(以下略)」⁽¹¹⁾とあり、防河役は国衙が行なっていたことがわかる。これは東大寺領大井庄がその夫役を免れるよう請うたものであるが、永暦元年の資料とともに先に挙げた河内国醍醐寺領に国衙が防河堤并臨時夫役を宛課そうとした動きに共通するものである。近年、中世における国衙の機能が再評価されているが、荘園と国衙領が混在する中で、これを総括して行なう必要のある大規模な築堤、用水掘削工事などについては12世紀末頃でも国衙が重要な役割を果たしていたであろう。⁽¹²⁾

長瀬川が河内国における主流河川であることを思えば、当時の国衙がその治水に大きな関心を払い、相応の対策をたて、周辺の諸庄に対しても夫役を課して治水工事を行なっていたことが上述の考察からも推測されるわけである。今回の調査で検出した堤の構築は13世紀初頭であるので、ほぼ正治2年の資料の時期と合致している。美濃国と畿内河内国における国衙の役割を同じとは即断できないにしろ、国衙が何らかの役割を果たしていたことまでは否定できないであろう。従って、長瀬川堤の構築は、国衙による割り宛にそって、各庄の田堵農民らが食料を給付されながら、自ら工事をすすめていったという有様を想定しておきたい。⁽¹³⁾

(5)小結

中世における開発は従来言われてきたような小規模なものだけでは決してないことが今回の調査における成果からも明らかにされた。中世における長瀬川の固定化という大土木工事は、一時期に完成されたものではないにせよ、中世にその端緒となるような大工事が行なわれ、これ以後何回もの堤決壊はありながらも本流路自体は維持されてきたわけである。花粉分析によっても中世に松などの二次林の花粉が激増することが認められ、この時期に調査区近辺でも大きな開発があったことが推測されるのである。

室月圭吾氏は、『中世灌漑史の研究』で、「中世における灌漑は先ず第一にそれが荘園領主の私的統制・支配下におかれ、その引水権は私権として発達し、特に排他的な性格が強かったこと、及び領主の私的経営という制約のもとに、量的というよりもむしろ質的な発達を遂げ、即ち新しい大規模な灌漑工事、特に治水工事の施行は、あまり行なわれなかったのに対し、専ら既存の施設の能率的な利用、或いはまた水車の如き灌漑用具の使用が、あらゆる方面に盛になった点に、その特質が認められたと謂ってよいであろう。」と述べた。この考えは律令制下に行なわれた大規模土木工事に對比したものである。実際、律令制下での大土木工事の記録は『続日本紀』等にも見えるのであるが、これらの工事は国家主導的にしか成し得なかったところに古代大規模工事の特色がある。律令制下の用水灌漑設備は基本理念としての「公水主義」をとっていたとされている。⁽¹⁴⁾ 亀田氏は、律令的用水支配の変質の過程の中に「公水主義」の崩壊をみるのである。

古代に比較しても、中世の開発がかなり大規模なものであったことは戸田芳美、⁽¹⁵⁾ 稻垣泰彦、⁽¹⁶⁾ 大

(17) 山喬平氏らによって指摘されており、佐堂遺跡における実例もそれを証明しているものである。とすれば、宝月氏の指摘した灌漑技術の質的な発展は、開発規模の縮小を補うものでなく、先にみたような大規模開発と相俟って生産力を飛躍的に発展させていったのであろう。このような発展をもたらした原動力は「力田輩」「殷富富豪の輩」などと呼ばれる水田経営のエキスパート動産の所有者に代表される農民層が田堵、名主として地下で生産を担っていくまでに成長してゆく過程にこそ見いささねばならない。農民は古代においては律令制的搾取の中で、庄園制下では本所やその地域における預所などの在地領主層、更には国衙、後には武士勢力の代表である地頭などの支配をうけていた。灌漑・開発の面から見れば、その主導権をどの勢力が握るかという争いをくり広げていたのが中世であり、その中で自主的に生産を担う主体として、「田堵致修固之勤」というように成長してきた農民層にこそ、歴史の発展を見るべきであろう。まさに中世は農村から始まったのである。我々は長瀬川の築堤工事に従事した当時の人々の姿をこの中に見出すのである。

〔注〕

- (1) 放射性炭素による年代測定については、第Ⅶ章第3節に報告されている。
- (2) 畑中友次『大和川付替工事史』大和川付替二百五十年記念顕彰事業委員会 1955
- (3) 同上書 p.44～54
- (4) 石清水文書（『平安遺文』2959号）
- (5) 宝月圭吾『中世灌漑史の研究』1943
- (6) 宝月氏の掲げた大和椽庄清澄庄、摂津榎坂郷、山城国上野庄（1447年）

などの資料は時期が新しいが、12～13世紀においても同様のことが次の資料から窺える。

① 左弁官下 元興寺

扨_下停_止末寺豊良寺妨_レ、平均令_令充行_上、東大寺訴申寺領清澄庄字富河上津堰下津堰水事右、得_レ東大寺今月二日奏状_レ、徧_レ彼庄解状云、件兩井者、已_レ為_レ寺領_レ所_レ職_レ繪_レ図_レ也、仍_レ毎年春時、以_レ官物内_レ、充_レ其用途_レ、所_レ塞_レ上_レ也、而_レ今年彼寺末寺字豊良寺庄民、始_レ所_レ押_レ妨_レ也、仍_レ触_レ示_レ彼寺_レ之_レ處、返答云、件水從_レ豊良寺庄中_レ、依_レ流_レ下_レ、可_レ有_レ分_レ水_レ也者、所_レ申_レ無_レ謂_レ、若_レ然_レ者、先_レ触_レ本_レ寺_レ可_レ隨_レ進_レ止_レ、而_レ猥_レ遣_レ惡_レ僧_レ、何_レ致_レ濫_レ吹_レ哉、加_レ之_レ興_レ福_レ寺_レ夏_レ衆_レ同_レ始_レ所_レ押_レ妨_レ也、無_レ他_レ所_レ之_レ異_レ論_レ、已_レ歷_レ三_レ百_レ余_レ歲_レ者、早_レ被_レ下_レ宣_レ旨_レ、同_レ欲_レ被_レ停_レ止_レ彼_レ妨_レ者、權_レ大_レ納_レ言_レ源_レ朝_レ臣_レ雅_レ俊_レ宣_レ、奉_レ勅_レ、宣_レ停_レ止_レ彼_レ妨_レ、平均令_令充行_上者、寺宣_レ承_レ知_レ、依_レ宣_レ行_レ之

永久5年7月7日（1117年）

大史小槻宿祿（花押）

少弁藤原朝臣（花押）

（『平安遺文』1875号）

② 東大寺

官省符庄領井河水押妨事

一、椽庄 大和字高橋河一井

右件一井水、自_レ往_レ古_レ為_レ床_レ領_レ、以_レ庄_レ田_レ官_レ物_レ下_レ司_レ分_レ二_レ溜_レ上_レ食物_レ、^{庄民}所_レ溜_レ上_レ也、庄_レ結_レ解_レ之_レ時、号_レ井_レ料_レ是_レ也、而_レ興_レ福_レ寺_レ東_レ西_レ堂_レ夏_レ衆_レ并_レ僧_レ等_レ恣_レ不_レ触_レ寺_レ家_レ、^{進々}所_レ押_レ漑_レ也（下略）

一、清澄庄大和^富河上津井・下津井

右件両井者、往古寺領所_レ載_レ繪_レ図_レ也、而依_レ之、每年下_レ行_レ庄田官物_レ、至_レ于_レ今年_レ所_レ溜_レ上_レ也、而始自_レ今年_レ元興福寺末寺字豊良寺住人等号_レ分水_レ所_レ押_レ妨_レ也、触_レ尋_レ彼寺_レ于_レ子細_レ之_レ處、返_レ事_レ云、件井水從_レ豊良寺庄領之中_レ依_レ流_レ下_レ、可_レ有_レ分水_レ之_レ由、所_レ申_レ返_レ也、若以_レ其理_レ可_レ然_レ者、先于_レ触_レ申_レ寺家_レ可_レ隨_レ裁_レ許_レ、恣_レ下_レ遣_レ惡_レ僧_レ可_レ、致_レ濫_レ吹_レ哉、凡_レ路_レ途_レ溝_レ者、任_レ先_レ例_レ始_レ也、經_レ三_レ百_レ余_レ歲_レ之後、今年始_レ所_レ異_レ論_レ也、又興福寺夏衆同今年始_レ所_レ押_レ妨_レ也、同被_レ下_レ、宣_レ旨_レ、所_レ々_レ之_レ妨_レ永_レ欲_レ被_レ停止_レ。

一、玉井水事 見_レ庄解_レ (後欠)

東大寺文書23 1、11、15 (永久5年)

大山喬平氏は①②の資料を春の勸農の実態を表わすものとして取り上げている。(大山喬平「中世における灌漑と開発の労働編成」)

又、同氏は天福元年(1233年)の例として神護寺領播磨国福井庄の資料をあげて、13世紀初頭における食料給付の実態を述べている。

③一、井料田一町一段事

右、如_レ覚_レ殿_レ法_レ眼_レ申_レ者、件_レ田_レ者、勸_レ農_レ之_レ時、百_レ姓_レ并_レ行_レ事_レ人_レ等_レ之_レ食_レ料_レ也。為_レ公_レ文_レ代_レ之_レ沙_レ汰_レ、所_レ徵_レ納_レ也云々。如_レ經_レ光_レ法_レ師_レ申_レ者、当_レ時_レ者、徵_レ納_レ地_レ頭_レ方_レ、勸_レ農_レ之_レ時、任_レ先_レ例_レ、所_レ下_レ行_レ也。然_レ而_レ非_レ地_レ頭_レ之_レ依_レ估_レ、何_レ方_レ被_レ徵_レ納_レ之_レ条_レ勿_レ論_レ也_{云々}者_レ守_レ東_レ保_レ、可_レ存_レ知_レ矣。

(天福元年9月17日六波羅下知状「神護寺文書」2)

(7) 保安3年1月28日伊勢国大國庄田堵等解(『平安遺文』1950号)

(8) 伊勢国大國莊專当解

大國御庄專当時光武道等解 申重請 本家 政所裁事

言上三箇条雜事

一以先日田堵住人等訴申、当御庄田糞料堰溝破壊改掘并埋田可開発人夫功劳、依無御裁免、或愁叶堰溝役、或偏棄旧作田、令荒廢事、

右、謹察事情、件堰溝加実檢之_レ處、今新令掘溝十町、広深各八尺、令掘此人夫、甲所老段切五六十人、乙所者四五十人也、又古_レ改掘溝十余町也、而老段切改掘人夫一倍_レ、但件溝、庄所当分新旧六町也、因茲御庄司加力所被令掘也、然則為蒙裁下、所注進如件

一理由令実檢之_レ處、砂洲高埋置者也、爰件石洲土等、擬曳棄之間、以二三十人_レ乃_レ夫令曳之_レ處、僅十余束代、然則老段_レ内、_レ人夫可及二三百人哉、件埋田作人等申云、私入若干人夫_レ功勞、雖令開作、無功勞裁免者、無益之由訴申、不隨所勘、抑為慰田堵等愁吟、願令言上者、且有恐不愁者、御庄司令荒廢哉、仍為蒙御定、注進如件、

一他庄并公郷料始新掘溝二所_レ一_レ所_レ令_レ掘_レ之間、庄田損失一段余歩、雖不幾、依為田數之内、所注進也、一所為字稻木村刀禰住人等、乍置以往溝口、御庄司在京之間、訴大神宮司、從当御庄田字八段長中心五町許大溝押掘之間、令損失庄田一町三段、敢不可寄作者也、如此令損失、兼又為去年八月洪水、且埋且流失田八町余歩也、於流失田者、非当庄_レ愁_レ、部内皆同前也、抑為上件刀禰住人等、恣所押掘溝令停止、如元從古溝可令掘充之由、度_レ雖_レ雖_レ訴_レ於_レ司_レ、不_レ裁_レ定_レ左_レ右_レ、京上已了、因茲、申文所副進也、大神宮司在京之間、遣此申文於彼大神_レ司_レ之_レ許、任道理、可掘直之由、召外題、為被下遣、言上如件、

以前三ヶ条訴状、為蒙能治御裁下、勒在状言上如件、以解、

保安三年三月十一日

藤原武道

藤原時光

〔平安遺文〕1959号

- (9) 大山喬平「中世における灌漑と開発の労働編成」『日本中世農村史の研究』1978

(『日本中世の労働編成』『日本史研究』56号 1961 改稿) p. 204~206

- (10) 永暦2年5月紀伊国在庁官人陳状案

件綾堰者、去年八月為大風洪水、被押流、穿堰口己如淵、其流難登得、而彼流之末、澗養作田并五百余町也、堰溝無可堀融之方上、動失治術、仍雖令触子細於衙庄、作田五百余町之苗代、無水便不蒔種子之間、在庁等情廻計略之处、乍置有限不水便、点而令荒廢田地者、綸言抱恐、參期有限之事也、今口掘流堰口存不幾之由、本堰ヨリ上へ登テ口一段長二町余也、本堰ノ跡二所掘落也、所被損失畠地仮令二段余許也、自件堰辺庄内也、前司季範任中、彼堰掘早、而被損失在家十余宇、被損失作田十余町也、然而不及訴訟、以之思之、損失分不及九牛之一毛。

(〔平安遺文〕3153号)

- (11) 正治2年4月 日美濃国在庁官人等言上状

美濃国在庁官人等

重言上、為東大寺領大井庄乍懸当庄水難笠縫堤請取所課地、雖築始、致對捍、令訴申本寺、申下免除、院宣、無謂子細状

副進 水難所々絵図一帖

右、件在様見于彼絵図之面、而大井庄乍懸彼水難、為彼堤不合力之由、命訴申本寺、申下免除、院宣之条、無極不当也。凡者、懸流末所請用水庄々、皆依便宜、往昔以来、所令動仕所々井堤役也。随又、懸彼堤國領地者、僅十余町、大井庄数百余町也。設雖無國衙結構、彼庄尤可令發起之处、以國衙之勤、偏為立衙庄之要上、背國宣、柱致訴訟、擬通其役之条、未曾有所行也。如此互為力、不成提与力、毎事於令違背國宣者、彼庄之甲乙人、昼夜乱入國領、刈草萱取葦荻之条、早加制止、永可令停止、永可令停止者也。為何國領地者、為彼庄悉免山野木草、又立水難之面、可築彼堤哉。為何大井庄者、乍懸若干水難、不合力堤、申下、院宣哉。以爰有御推察、為有重御沙汰、勤在状、言上、如件

正治二年四月 日

(署判略)

(京都大学国史研究室所藏東大寺文書卷1-4 大山喬平 前掲注9所収)

- (12) 国衙の機能をこのように重要視できないとの批判があるかもしれない。即ち、9世紀段階ですでに堤防修理を「仮令、給一町之地、修理一丈之堤」というように「不加公勞」によって「令堤防全之術」とする官符があること等である(天長3年5月2日官符=元慶3年7月9日太政官符引用『類聚三代格』)。亀田隆之氏はこの動向を「公水主義の後退」と理解し、在地の田堵農民層による築堤・溝渠開削労働を評価している。(亀田隆之『日本古代用水史の研究』1973)

又、同氏は12世紀以降、国衙が用水問題に積極的であった例については、「公地が国衙の私領化する情勢の中にあつて所当官物の徴収をより効果あるものにする為」のものであり、在地豪族で行なえる工事の範囲をこえる大規模工事については、国衙が大量の労働力を集中的に行使し得る権力として必

要であったと解釈している。(前掲書p.301)

- (13) 国司が庄園領も含めて人夫を雇う例は、永治2年(1142年)醍醐寺領越前国牛原庄で「件鳴川堤料人夫、可雇庄園……」(永治2年3月14日越前国牛原庄住人等解案『平安遺文』2461号等)とあることから推測される。
- (14) 亀田隆之「律令制確立期の灌漑用水」『日本古代用水史の研究』1973
- (15) 戸田芳実「中世文化形成の前提」『講座日本文化史』第2巻 1962
氏はこの論文で、農村こそが中世における「歴史の場面」となるというマルクスのテーゼを日本中世農村の開発の中に具体的に示している。又、国衙在庁官人らが9世紀頃以降の農村の開発において、その儒教的開明性をもってこれを指導したことを評価し、この意義づけの必要性を提起している。
- (16) 「封建社会の成立期である中世初期は、規模の差こそあれ「大開墾の時代」にも比定すべき積極的な開発の時代であり、国衙領においては在庁官人、郡司等の在地土豪が別名、保の制度を通じて荒野・荒廃田の開発を進め、それに対応して庄園領主も荘域の拡大を行ない、領域支配の確立につとめた。その前提として開発の労働力となり、開発後の経営の維持にあたる農民の定住化と村落組織の成立が存在したのである。」
稲垣泰彦「中世の農業経営と収取形態」岩波講座『日本歴史』6 1975
- (17) 大山喬平氏は美濃国大井庄伊勢国大國荘等での大規模灌漑設備の整備に対する国衙の役割を指摘している。又、各地における堤・溝の開発をあげて「中世の灌漑用水路は古代に対して必ずしも規模が貧弱であったとは解し難い。中世は古代に比して、自然との闘いの面で着実な進歩をみせていたにちがいないのである。」と述べている。(前掲注9)

第Ⅶ章 自然科学的方法による分析

第1節 古墳時代土坑出土の多孔質黒色物質の化学的調査

はじめに

今回の調査において、古墳時代布留式土器（小若江北式よりも少し新しく、須恵器出現直前のもの。）の遺構面の土坑内から多孔質黒色物質が塊状のもの（ 6×4.5 cm）1個、（ 3.5×3 cm）3個、板状のもの（ 3×2 cm）6個、小さいかけら（ 1×1 cm）10個、計20個検出された。この物質の検出された土層は、炭灰の混じる層で、小型の短頸壺の口縁部破片1点が伴出するのみである。

さて、この物質を概観すると無機物で成り立っているものか、有機物で成り立っているものか判断に苦しむ。この物質は非常に軽く感じられ、海綿状に発泡した状態が観察される。なお、表面には木質らしい小片が一部付着している。

そこで、これらの物質が有機物か無機物かを判断すると同時に、どのような成分から成り立つものであるかということを追求するために、化学的調査を行なったので以下に報告する。

方法

(1) 有機化合物の確認法

一般に出土品としての有機化合物の構成元素は、炭素・水素・酸素・窒素・ハロゲン・イオウ・リンなどである。まれにヒ素・水銀などが含まれ、また塩類としては、ナトリウム・カリウム・カルシウムなどがある。

そこで、有機化合物の性質を調べるために燃焼試験を行なった。この燃焼試験を行なうことによって融解するか、昇華するか、爆発するかなどの現象を観察した。燃焼試験の結果、燃焼残留物があればその無機元素を検出する。燃焼試験の試料としては、多孔質黒色物質より0.3gを採取した。その試料を磁製のつぼに入れ、バーナーで熱した。また、補足的に溶媒による溶解試験も行なった。

(2) 無機化合物の確認法

無機化合物の確認については、非破壊で行なう蛍光X線分析による方法を用いた。また、X線回折分析、赤外吸収分析などを判断の補助手段として用いた。表面の観察には、走査型電子顕微鏡を用いた。

蛍光X線分析とX線回折分析および赤外吸収分析の測定条件は、次の通りである。

a. 蛍光X線分析 理学電機製蛍光X線分析装置（大型試料台付）を使用。

X線管球

対陰極：クロム(Cr)

印加電圧：40KV

印加電流：20mA

分光結晶：フッ化リチウム(LiF)

検出器：シンチレーションカウンター

b. X線回折分析 理学電機製ガイガーフレックス型を使用。

X線管球

対陰極：銅(Cu)、鉄(Fe)

フィルター：ニッケル(Ni)、マンガン(Mn)

印加電圧：30KV

印加電流：10mA

検出器：プロポーショナルカウンター

スリット系：1°-0.3mm-1°

走査範囲：5°~90° (2θ)

c. 赤外吸収分析 日本分光製IRA-1型赤外分光光度計を使用。

波長校正用ポリスチレンフィルムにより測定条件を決定した。赤外吸収分析用試料はあらかじめ、めのう乳鉢を用いてよく粉碎し、200メッシュの乾燥粉末にした多孔質黒色物質を用いた。同粉末試料を重量比200倍程度の乾燥臭化カリウム(200メッシュの粉末剤)と混合、これを錠剤形に加圧成型し測定した。

結果と考察

燃焼試験の結果、次のことが判明した。

800℃以下では、有機物の性質である融解、昇華、爆発、蒸発等との現象は見られず、重量の変化も殆んどなかった。わずかに蒸気が発生したので、その蒸気をpH試験紙で調べた。その結果、酸性を示した。

その燃焼残留物を電気炉に入れて1000℃まで温度を上げ、焼成変化を観察した。焼成後、燃焼残留物が1%減量した。なお、焼成後の表面を観察してみると、黒色のガラス光沢を示す物質が生じていた。

溶解試験においては、多孔質黒色物質0.1g採取し、粉末にして試料とした。この溶解試験は、種々の溶媒に対する溶解性を調べることにより、試料がどのような有機化合物群に属するか見当をつけるための補足試験である。その結果、水(蒸留水を使用する。)に対しても、5%水酸化ナトリウムに対しても、5%塩酸に対しても、濃硫酸に対しても不溶であった。以上の結果から、無機化合物と判断した。

一方、蛍光X線分析の結果、検出した元素は、鉄(Fe)、チタン(Ti)が多く、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)も検出した。その他、痕跡程度の銅(Cu)も検出している。

X線回折分析では、アルミナケイ酸塩である斜長石[Plagioclase]($\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$)および石英

Quartz] (SiO_2) を検出した。

〔1000℃で燃焼した残留物からは、鉄カンラン石 [Fayalite] (Fe_2SiO_4) が検出された。このカンラン石は、塩基性火山岩中に含まれたり、黒曜石の中に含まれるものであるが、人為的には(加熱した場合)ケイ素と鉄が反応して生成する。

赤外吸収分析においては、 1000cm^{-1} を中心とした幅広い吸収帯を測定した。これは、多孔質黒色物質に含有している吸着水および結晶水による吸収帯に起因するものと判断した。

なお、走査型電子顕微鏡による表面観察によれば、多孔質の黒色物質の表面はガラス質のものが高温焼成されて発泡したような状態が認められた。この物質に付着していた木質部分を調べた結果、木材組織特有の膜孔が観察できた(図版75)。

この多孔質黒色物質は蛍光X線分析の結果、鉄とチタンが検出されており、製鉄のさいに出産する鉄滓(slag)のようなものであると考えられる。

終りに、今回の調査にあたり、分析装置をお貸し下さった奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理室 室長沢田正昭氏、秋山隆保氏、(財)元興寺文化財研究所保存科学研究室 室長増澤文武氏、松田隆嗣氏、および電子顕微鏡写真について御協力下さった大阪市立大学大学院生 南木陸彦氏に深く感謝の意を表わす次第である。

〔参考文献〕

- (1) 木下亀城「鉱物鑑定ハンドブック」ラテイス刊 1969
- (2) EDWARDS DANA, WILLIAMS FORD "A Textbook of MINERALOGY" Modern Asi^a Edition 1972
- (3) 吉木文平「鉱物工学」技報堂 1978
- (4) 高橋恒夫「茨城県八千代町尾崎前山の古代製鉄遺跡鉄滓の金属組織学」東京工業大学 人文論叢 No. 6 1980 p.305~324
- (5) 桂 敬・北山憲三・宗 秀彦「古代製鉄の化学的研究 (その1)」東京工業大学 人文論叢 No. 6 1980 p.249~267
- (6) 道家達将他「前近代製鉄遺構、遺物に関する材質・技法の研究」文部省科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和56年度年次報告書」1982

第2節 花粉・珪藻分析

はじめに

佐堂遺跡（その2）においては発掘調査中各地点・各層位毎に適宜花粉・珪藻分析用の土壌サンプルを採取している。今回報告するのは、その一部、S T A. 107+40地点（Cトレンチ中央部）、108地点（Dトレンチ中央部）の分析結果である。108地点は層順から見れば107地点の下層にあたるので、採取地点は異なるが、遺跡の変遷を示す資料として一括して考察する。資料の時期は弥生時代中期以前（おそらく縄文時代晩期も含む）から中世（13世紀頃）までのものである。

分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告を得たものである。次項以下の報告は、同社による報告を掲載するもので植物学名を日本語に直した他はほぼ原文通りであり、総合考察のみ調査者が調査所見ともあわせて再構成・執筆したものである。

試料

分析試料は108地点が6点、107+40地点が16点の計22点であって、花粉および珪藻分析の共通試料である。分析にあたっては、これらの試料を2分して供試した。試料内容については、下記試料表に記述する。

第6表 試料表

採取地点	試料番号	土 質	微化石差出傾向 ※	
			花粉・胞子	珪藻
108地点	No. 16	暗オリーブ灰色粘土	A	C
	No. 17	灰オリーブ砂質粘土	A	A
	No. 18	灰色粘土	A	A
	No. 19	黒色粘土（含植物片）	C	RR
	No. 20	暗オリーブ灰色砂質粘土	R	RR
	No. 21	〃	C	RR
107+40 地 点	No. 3	鈍い橙黄色細砂	RR	RR
	No. 5	鈍い橙黄色粘土	RR	RR
	No. 7	黄褐色粘土	A	RR
	No. 8	灰オリーブ色粘土	C	RR
	No. 9	オリーブ褐色砂質粘土	C	C
	No. 12	暗緑灰色粘土	R	R
	No. 14	灰オリーブ色粘土まじり砂	R	C
	No. 15	灰オリーブ色粘土	R	C
	No. 17	オリーブ灰色粘土	R	A
	No. 18	暗オリーブシルト質砂	RR	R
	No. 19	オリーブ灰色粘土	A	A
	No. 20	暗オリーブ砂質粘土	R	RR
	No. 21	暗オリーブ粘土まじり砂	C	R
	No. 22	オリーブ灰色粘土	A	C
No. 23	暗オリーブ色粘土	A	R	
No. 24	灰オリーブ色粘土	A	C	

※ A; Abundant 多い C; Common 普通 R; Rare 少ない RR; Rare Rare ごく少ない

<花粉分析>

1. 分析方法

試料秤量 (10~100 g) → HCl 処理 → HF 処理 → 重液分離 → アセトリシス処理 → KOH 処理 → 封入 (グリセリンゼリー)

なお植物片の多かった108地区のNo.18については149 μ の節で節分した。また検鏡に際しては200倍~400倍で200または250個体を鑑定した。

2. 分析結果及び考察

分析結果は、各試料ごとに検出された花粉・胞子化石の総数を基数とする百分率で各種検出化石の割合を出し第9・10表として後掲した。また樹木花粉のみの総数を基数とする百分率で各樹木花粉の割合を表わしたものを第11表として同じく後掲した。この2つの検出割合の中で主要な花粉化石、胞子化石についてはダイアグラムを作成し、それぞれ第14表として同じく後掲した。更に主要なものについては写真図版76・77を作成したので参照されたい。

今回の分析で検出された花粉・胞子化石は下記のものである。

《AP-1 (針葉樹花粉)》

Abies (モミ属)、*Tsuga* (ツガ属)、*Picea* (トウヒ属)、*Pinus Haploxyylon* (五葉型松)、*Pinus Diploxyylon* (二葉型松)、*Pinus* (マツ属)、*Sciadopitys* (コウヤマキ属)、*Podocarpus* (マキ属)、*Cryptomeria* (スギ属)、*T. C. T.* [Taxaceae (イチイ科)、Cupressaceae (ヒノキ科)、Taxodiaceae (スギ科) の3つの中の何れか1つであるが、鑑定判別の困難のもの]

《AP-2 (広葉樹花粉)》

Myrica (ヤマモモ属)、*Carya* (ベカン属)、*Juglans* (クルミ属)、*Pterocarya* (サワグルミ属)、*Salix* (ヤナギ属)、*Alnus* (ハンノキ属)、*Betula* (カバノキ属)、*Carpinus* (クマシデ属)、*Corylus* (ハシバミ属)、*Castanea* (クリ属)、*Castanopsis* (シイノキ属)、*Fagus* (ブナ属)、*Lepidobalanus* (コナラ亜属)、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属)、*Celtis* (エノキ属)、*Aphananthe* (ムクノキ属)、*Ulmus* (ニレ属)、*Zelkova* (ケヤキ属)、*Moraceae* (クワ科)、*Euptelea* (フサザクラ属)、*Camellia* (ツバキ属)、*Mallotus* (アカメガシワ属)、*Acer* (カエデ属)、*Aesculus* (トチノキ属)、*Ilex* (モチノキ属)、*Parthenocissus* (ツタ属)、*Vitis* (ブドウ属)、*Elaeagnus* (グミ属)、*Lagerstroemia* (サルスベリ属)、*Araliaceae* (ウコギ科)、*Styrax* (エゴノキ属)、*Symplocos* (ハイノキ属)、*Ligustrum* (イボタノキ属)、*Lonicera* (スイカズラ属)、*Viburnum* (ガマズミ属)、*Weigela* (タニウツギ属)

《NAP (草本花粉)》

Fagepyrum (ソバ属)、*Persicaria* (サナエタデ節)、*Polygonum* (タデ属)、*Rumex* (スイバ属)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Thalictrum* (カラマツソウ属)、*Ranunculaceae* (キンボウゲ科)、*Cruciferae* (アブラナ科)、*Rosaceae* (バラ科)、*Geranium* (フウロソウ属)、*Impatiens* (ツリフネソウ属)、*Actinostemma* (ゴキヅル

属)、*Rotala* (キカシグサ属)、*Halorayis* (アリノトウグサ属)、*Umbelliferae* (セリ科)、*Galium* (ヤエムグラ属)、*Labiatae* (シソ科)、*Plantago* (オオバニ属)、*Campanula* (イワキキヨラ属)、*Adenophora* (ツリガネニンジン属)、*Artemisia* (ヨモギ属)、*Carduoideae* (キク亜科)、*Cichorioideae* (タンポポ亜科)、*Alisma* (ヘラオモダカ属)、*Sagittaria* (オモダカ属)、*Potamogeton* (ヒルムシロ属)、*Monochoria* (ミズアオイ属)、*Aneilema* (イボクサ属)、*Typha* (ガマ属)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科)、*Legminosae* (マメ科)

《F P (形態分類花粉)》

Trizonoporate pollen (三孔型花粉)、*Trizonocolpate pollen* (三溝型花粉)、*Trizonocolporate pollen* (三溝孔型花粉)、*Polypanoporate pollen* (多孔型花粉)

《F S (羊歯類孢子)》

Lycopodium (ヒカゲノカズラ属)、*Pteris* (イノモトソウ属)、*Ceralopteris* (ミズワラビ属)、*Polypodiaceae* (ウラボシ科)、*Salvinia natans* (サンショウモ)、*Azolla* (アカウキクサ属)、*Monolete spore* (単条溝型孢子)、*Trilete spore* (三条溝型孢子)

《その他の微化石》

Pseudoschizaea, *Botryococcus*, *Dinoflagellate* 分析結果によって以下に考察を行う。

当遺跡試料は層準的に108地点の方が107+40地点よりも下位に位置するため、考察に際してはこれら上下関係を考慮して述べる。

佐堂遺跡は両地点の結果をあわせると、花粉・孢子構成の特徴から、下部よりS-I、S-II、S-III、S-IV、S-V、S-VIの6つの花粉帯に分帯することが出来る。次にこれらの花粉帯の特徴ならびに古植生、古気候等について述べる。

S-I帯 (108地点のNo.21) 弥生時代前期以前

アカガシ亜属に加えてハンノキ属、コナラ亜属、ケヤキ属、トチノキ属などの広葉樹類やコウヤマキ属 (針葉樹) が高率で検出されることが特徴である。また羊歯類孢子的割合も非常に高かった。

従ってS-I帯はアカガシ亜属、ハンノキ属、コナラ亜属、ケヤキ属、トチノキ属などの広葉樹類の生育する古植生が推定される。またコウヤマキ属も共に生育していたであろう。

古気候は、古植生からみて温帯に相当すると考えられる。

S-II帯 (108地点のNo.20、No.19) 弥生時代前期～中期遺物包含層

この花粉帯は樹木花粉の産出が非常に少ないことが特徴である。反面羊歯類や草本花粉が優位を占め、No.20では単条溝型孢子、イノモトソウ属、ウラボシ科、No.19ではヨモギ属が優占する。

従ってS-II帯はS-I帯とは構成要素は異なるものの、共に草地の古植生が優占的に示される。

S-III帯 (108地点のNo.18～No.16、107+40地区のNo.24～No.19) 107+40地点No.24—古墳時代前期

算出し、第12・13表として後掲した。この中で主要な珪藻種についてはダイアグラムを作成し、第14表として同じく後掲した。更に主要種について写真図版78・79を作成したので参照されたい。

今回の分析で検出された珪藻化石種は次のものである。

《海水棲種 (M)》

Coscinodiscus sp.

Diploneis suborbiculavis, *D. interrupta*

Thalassiosira decipens

Actinocyclus curvatulus

《海水～汽水棲種 (M～B)》

Cyclotella stylorum

《汽水棲種 (B)》

Achnanthes brevipes var. *intermedia*

Navicula peregrina

Nitzschia granulata

Synedra pulchella

《汽水～淡水棲種 (B～F)》

Anomoeoneis sphaerophora

Amphora ovalis, *A. O.* var. *Pediculus*, *A. holsatica*

Caloneis silicula

Coscinodiscus lacustris

Diploneis sp., *D. ovalis*

Epithemia turgida

Gyrosigma amphioxys

Hantzschia amphioxys

Navicula viridula, *N. cryptocephala*, *N. gothlandica*

Nitzschia amphibia, *N. obtusa*, *N. tryblionella*, *N.t.* var. *victoriae*, *N.t.* var. *debilis*, *N. hungarica*, *N. Lorenziana* var. *subtilis*, *N. palea*

Bacillaria paradoxa

Rhoicosphenia curvata

Rhopalodia gibberula, *R. musculus*

《淡水棲種 (F)》

Achnanthes lanceolata, *A. l.* var. *elliptica*, *A. Peragallii*, *A. inflata*, *A. exiyua*,
A. coarctata var. *ellipitica*

Caloneis bacillum, *C. Schroederi*, *C. sp.*

- Cocconeis Placentula*, *C. p.* var. *euglypta*, *C. p.* var. *lineata*
Cyclotella Meneghiniana, *C. Kutzingiana*, *C. operculata*, *C. sp.*
Cymbella lanceolata, *C. cuspidata*, *C. naviculiformis*, *C. hybrida*, *C. sp.* *C. tumida*,
C. ventricosa, *C. turgidula*, *C. cymbiformis*, *C. sinuata*, *C. cistula*, *C. cistula*
Diploneis elliptica, *D. puella*
Epithemia zebra var. *saxonica*, *E. intermedia*
Eunotia praerupta, *E. p.* var. *bidens*, *E. p.* var. *inflata*, *E. pectinalis*, *E. p.* var.
minor, *E. p.* var. *undulata*, *E. arcus* var. *bidens*, *E. robusta*, *E. braciensis*,
E. tenella, *E. lunaris*, *E. kocheliensis*
Fragilaria construens, *F. pinnata*
Frustulia vulgaris
Gomphonema acuminatum var. *coronata*, *G. a.* var. *turris*, *G. longiceps* var. *sub-*
clavata *G. olivaceum*, *G. o.* var. *calcareo*, *G. gracile*, *G. parvulum*, *G. intricatum*,
G. angustatum var. *producta*. *G. abbreviatum*, *G. lingulatum*, *G. tergestinum*,
G. bohemicum, *G. sphaerophorum*, *G. constrictum*
Gyrosigma kützingii, *G. attenuatum*, *G. scalproides*, *G. distortum*
Melosira italica, *M. granulata*, *M. varians*, *M. sp.*
Meridion circulae var. *constricta*
Navicula Grimmei, *N. dicephala*, *N. d.* var. *neglecta*, *N. anglica*, *N. exigua*, *N.*
pupula, *N. p.* var. *rectangularis*, *N. bacillum*, *N. americana*, *N. radiosa*, *N.*
hungarica, *N. h.* var. *capitata*, *N. menisculus*, *N. placenta*, *N. confervacea*, *N.*
confervacea, *N. contenta*, *N. mutica*, *N. m.* var. *N. cuspidata*, *N. c.* var. *ambigua*,
N. contenta, *N. gastrum*, *N. cari*, *N. sp.*
Neidium iridis, *N. dubium*, *N. productum*, *N. bisulcatum*, *N. sp.*
Nitzschia linearis, *N. parvula*, *N. heidinii* var. *minor*
Pinnularia maior, *P. macilenta*, *P. streptoraphe*, *P. hemiptera*, *P. acrosphaeria*, *P.*
gibba, *P. g.* var. *linearis*, *P. stomatophora*, *P. alpina*, *P. borealis*, *P. divergens*,
P. d. var. *undulata*, *P. subsolaris*, *P. episcopalis*, *P. microstauron*, *P. m.* var.
Breissonii, *P. interrupta*, *P. mesolepta*, *P. subcapitata*, *P. molaris*, *P. letosoma*,
P. sp.
Rhopalodia gibba, *R. g.* var. *ventricosa*
Stauroneis phoenicenteron, *S. anceps*, *S. alabamiae* var. *angulata*, *S. acuta*, *S.*
smithii *S. sp.*
Surirella angustata, *S. tenera*, *S. elegans*, *S. ovata*, *S. o.* var. *pinnata*

Synedra ulna, *S. u.* var. *imperssa*, *S. rumpens*, *S. Vaucheriae*

Tabllaria fenestrata, *T. flocculosa*

Stephanodiscus astraea

以上の分析結果に基づいて以下に考察をする。

当珪藻についても花粉分析と同じく上下関係を考慮したうえで下位から順に述べる。

今回の遺跡は、珪藻群集の特徴から、下部よりS—A、S—B、S—C、S—Dの4帯に分帯することができる。次にこれらの珪藻群集帯の特徴ならびに堆積環境について述べる。

S—A帯 (108地点のNo.21~No.19)

珪藻化石の含有数が非常に少ない貧珪藻帯である。よって堆積環境を推定するには不十分な試料といえるが、少ないながらも検出された化石は総て淡水域に生息する種であった。従って、あえて推定するなら陸水成の堆積物と考えられる。

このように珪藻化石が少なかった原因としては、土質が砂質であり化石が保存される機会が少なかったこと、生息する環境として不適當であったこと、などが考えられる。

S—B帯 (108地点のNo.18~16, 107+40地点のNo.24~21)

好湿地・好酸性の *Eunotia arcus* var. *bidens*, *E. praerupta* var. *bidens*, *E. pectinalis* var. *minor*, *E. pectinalis* var. *undulata*. 好流水・好アルカリ性の *Caloneis Schroederi*, *C. bacillum*, *Cymbella ventricosa*, *Achnanthes lanceolata*, *Navicula viridula*, *N. dicephala*, *N. dicephala* var. *neglecta*. それに好沼池・好アルカリ性の *Cymbella turgidula*, *C. lanceolata*, *Synedra ulna* 等、各水域に特徴的に生息する種が混じって検出されることが特徴である。

また不定棲・好アルカリ性の *Navicula mutica*, *Amphora ovalis* も高率で検出された。

よってS—B帯の堆積環境は沼池域と推定され、周辺には湿地や河川等の流水域も存在していたことが考えられる。

S—C帯 (107+40地点のNo.19~5)

この群集帯は好沼池・好アルカリ性の *Cymbella turgidula* が非常に多く、No.15をピークとする凸型の消長がみられることが特徴である。また上部のNo.5では一度減少して再び急増する。

またS—B帯では湿地棲の種がかなり出現したが、当帯では殆ど検出されなくなるということも特徴である。これに対して好流水棲の種は比較的多く検出された。主なものとして *Cymbella ventricosa*, *Gomphonema parvulum* 等があげられる。

不定棲の種も比較的多く、S—B帯に引続き *Navicula mutica*, *Amphora ovalis* 等が検出された。またこの帯では比較的低い水温に生息するとされる *Hantzschia amphioxys* が多かった。

以上のことから堆積環境について述べると、S—B帯に比較してこの帯は沼池域が拡大もしくは水深が増大して水域が安定したことがうかがわれる。

S—D帯 (107+40地点のNo.3)

比較的低い水温に生息するとされる好アルカリ性の *Hantzschia amphioxys* が優占して検出されることが特徴である。またS—C帯で多産した *Cymbella turgidula* 等の好沼池棲の種が急減することも特徴となろう。

従って沼池域の縮小と低水温化が考えられる。

以上述べた内容をまとめると、次記表「珪藻群集帯と堆積環境」の如くなるろう。

第8表 珪藻群集帯と堆積環境

試料番号	珪藻群集帯	優占珪藻種	特徴珪藻種	堆積環境
107+40地点 No. 3	S—D	<i>Hantzschia amphioxys</i>		池沼域の縮小 水温低下?
107+40地点 No. 5、7、9、 12、14、15、 17、18、19	S—C	<i>Cymbella turgidula</i>	<i>Hantzschia amphioxys</i> <i>Cymbella ventricosa</i> <i>Gomphonema parvulum</i>	池沼域 S—B帯よりも水深が増加 し安定水域が存在したと考 えられる。
197+40地点 No.21~24 108地点 No.16~18	S—B		<i>Cymbella turgidula</i> <i>Caloneis Schraederi</i> <i>Cymbella ventricosa</i> <i>Eunotia arcus</i> var. <i>bidens</i> <i>E. praerupta</i> var. <i>bidens</i>	池沼域 ただし周囲には湿地や流水 域が存在していたと考えら れる。
108地点 No.19~21	S—A	貧珪藻群集帯		

注) 107+40地点のNo. 8、No.20は珪藻帯に分帯するだけの連続性に欠けるので除外した。

総合考察

花粉分析と珪藻分析の結果から佐堂遺跡の環境の変遷をたどってみると以下のようである。

弥生時代前期～中期の遺物包含層より下層、おそらく縄文時代晩期にあたる層では広葉樹・針葉樹が検出されることから、周辺は森林の環境であったといえる。ただ、当地ではシダ類が優占する環境であった(108地点—No.21)。珪藻には海水棲種のものは見られず、海水面が、T. P. 2.1m以上には及んだことがわかる。

弥生時代前期～中期に至っては、森林が減少し、まずシダ類が、次にヨモギが優占する草地の環境となる。森林の減少という現象は、山賀遺跡や美園遺跡などに住みはじめた弥生人が耕地を拡大し、集落を拡大してゆく過程で人為的に森林が伐採された結果であろうと思われる。巨摩庵寺遺跡においても、集落が形成される以前(弥生時代前期以前)森林であったのが、中期に至って比較的小乾燥した草原と変化している。⁽¹⁾ただ、佐堂遺跡においてはイネ科の花粉が僅少であるこ

とから、この時期に至ってもなお近辺に水田耕作が及んでいないことがわかる。

弥生時代中期以後、ようやくイネ科の花粉が多く検出されるようになる（S—Ⅲ帯）。花粉分析及び珪藻分析による分帯では集落の形成される古墳時代前期を含めた分帯がなされているが、考古学的にはここで一時期を画するべきである（107+40地点—No.23）。

弥生時代～古墳時代前期ではヨモギ属が激減しイネ科が急増することが特徴である。又、スギ属、シノキ属、アカガシ亜属等の樹木花粉も増加し、森林が周辺近くにまで広がってきていたと推定される。周辺には水田が存在したようである。弥生時代中期末以降、幾条もの小流路が存在したことが発掘調査で確認されている。珪藻分析による好流水性の珪藻の存在もこれを裏付けている。このように流水によって堆積した微砂が乾燥し後述の古墳時代集落の遺構面となるわけである。

古墳時代前期には佐堂遺跡は集落となる。人々の生活とともに形成された遺物包含層（107+40地点—No.24）は分析結果から見れば上下の層と大きな差はない。

古墳時代遺物包含層の上層は粘土がCトレンチでは厚さ2m以上にわたって堆積する。この粘土は花粉分析によって2帯に明瞭に区別できた（S—Ⅲ帯・S—Ⅳ帯）。S—Ⅲ帯はイネ科が優占し、中でも上面で足跡を多数検出した7世紀後半の試料（107+40地点—No.20）はイネ科花粉が70%を越える高率で検出され、同時にヨモギ・カヤツリグサなどの水田雑草が減少していることから管理の行き届いた水田であったことがわかる。S—Ⅲ帯のうち古墳時代後（107+40地点—No.23～No.18）は佐堂遺跡が水田となっていたことを示している。又、この層からは少量ながら栽培植物と思われるソバ属の花粉も検出されている。S—Ⅲ帯の最上位は11世紀頃と推定される。⁽²⁾

11世紀以降、13世紀初頭以前にあたる層はイネ科が減少し、かわってシダ類が優占する特殊な植生となる（S—Ⅳ帯）。この特殊な植生は、長瀬川が調査区南半部（E・Fトレンチ部分）を流れるはじめたことによるものであると考えられる。107+40地点（Cトレンチ中央部）は、川の彎曲した内側で水流が弱いかあるいは滞水していた部分である為、このような植生が表われたのであろう。珪藻分析による好沼池性珪藻の増加・好流水棲の種の増加もこの規定を裏付けている。

13世紀以降はマツが激増することが特徴である（S—Ⅱ帯）。この層は長瀬川が固定された後の河床の堆積であり、中世に大規模な一次林の破壊＝開発が行なわれたことを示唆している。マツは、堤防に植えられたものであるかもしれない。Fトレンチで検出した護岸の杭列に使われていた材のほとんどがマツであったことを考えれば、周辺に多くのマツが存在していたことは確実であろう。

珪藻分析によるS—D帯（107+40地点—No.3）は又、低水温棲種が激増し、好沼池性種が減少することから、中世以後において、低水温化、沼池域の縮小が推定されるが、時期は確定できない。

(1) 安田喜憲「瓜生堂・巨摩鹿寺遺跡の泥土の花粉分析」大阪府教育委員会 大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』1982

(2) 第Ⅴ章第3節参照

第9表 佐堂遺跡花粉分析結果(1)

Pollen and Spores	Sample No.		地点																										
	107+40	3	5	7	8	9	12	14	15	17	18	19	20	21	22	23	24	108	16	17	18	19	20	21					
AP1	<i>Abies</i>			1.2	0.4	0.4				0.5	1.1	2.4	1.9	0.7	3.6	2.4	4.0	2.0	2.0										
	<i>Tsuga</i>			0.4	+	0.8						3.3	0.4	1.1	+	1.6	0.4	1.2	1.2	2.0				0.8					
	<i>Picea</i>			+		0.4										0.4													
	<i>Pinus(Haploxyton)</i>												+																
	(<i>Diploxyton</i>)				30.8	23.2	9.2	0.5			0.5	5.4	2.0	1.5	2.6	2.0	1.2	2.0	0.4	1.6									
	(<i>Unknown</i>)	1			5.2	1.6	2.4	5	0.6				0.7	0.8	+	0.7	0.8	0.4	0.4	1.6						0.4			
	<i>Sciadopitys</i>		1					0.5	0.6	8.0	6.0	3	1.1	0.8	4.1	3.0	3.2	6.0	2.8	0.8	2.0			0.7	4.4				
	<i>Podocarpus</i>															+	0.4				+								
	<i>Cryptomeria</i>	1	4	1.6	1.2	0.4		4.6	3.4	0.5	1	10.6	4.0	6.7	10.9	22.0	18.8	12.0	7.6	11.6				0.7	1.6				
	<i>T. C. T.</i>	1			+			1.3					1.1		+		0.4	+		0.4	0.4								
AP2	<i>Myrica</i>											+	0.4	+	0.4														
	<i>Carya</i>								1.1																				
	<i>Juglans</i>				0.8	0.4			1.1			0.4	+					0.4	0.4	+						0.4			
	<i>Pterocarya</i>		1		0.4								+		0.4							0.4				0.4			
	<i>Salix</i>				0.4	0.4								0.4	0.4		+	0.4	0.4	0.4								0.4	
	<i>Alnus</i>	2	4	2.8	9.2	2.8	0.5	2.0	1.1	1.0		1.8		0.7	0.4	0.8	0.4	1.2	0.8						0.7	3.2			
	<i>Betula</i>			+	2.0	0.4		0.6	1.1	0.5		0.4	+		0.4	0.4				0.4	0.4								
	<i>Carpinus</i>			0.8	2.4		0.5	0.6		0.5	1	1.4	+		0.4	1.2	+	+	+	0.4							1.2		
	<i>Corylus</i>		1		0.4				1.1			0.4		+						+	+								
	<i>Castanea</i>			0.8	0.4	0.4						0.4		0.4	0.4		+	2.8	3.2	3.6								0.8	
	<i>Castanopsis</i>				1.2	+	0.6					1.8	1.2	7.6	12.5	4.4	11.2	7.2	5.6	3.6	1.0						1.2		
	<i>Fagus</i>				0.4			2.0	2.3	1.0		0.7	+	0.4														0.4	
	<i>Lepidobalanus</i>	2	8	2.4	4.0	0.8	1.0	0.6	11.4	1.0	3	2.2	3.6	1.1	2.2	0.4	1.6	2.4	1.2	2.8					0.7	4.0			
	<i>Cyclobalanopsis</i>	1		3.2	4.0	1.6	0.5	2.0	4.7	1.5	3	9.1	6.0	6.7	6.6	9.2	5.2	9.2	14.4	12.8	1.0			0.7	6.4				
	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	1	+	0.4		1.0		2.3	1.0	1	0.7	0.4	0.7	0.7				0.4	1.2	0.4								
	<i>Ulmus</i>																					0.4							
	<i>Zelkova</i>	3	3	0.4	1.2	1.2	0.5	1.3	3.4	1.0	2	0.4	0.8	0.7	0.7	0.4	0.4	0.8	0.4	0.8	2.0	0.7			3.2				
	<i>Moraceae</i>											0.7	0.8			0.4		0.4	0.4										
	<i>Euptelea</i>													+															
	<i>Camellia</i>												+		0.4														
	<i>Mallotus</i>					0.4													2										
	<i>Acer</i>			0.4												0.7												0.4	
	<i>Aesculus</i>						0.5								0.4	1.1	0.8		2.0	2.4	1.2						2.8		
	<i>Ilex</i>		1	0.8	0.8	0.4	0.5			0.5											0.4								
	<i>Parthenocissus</i>					+																							
	<i>Vitis</i>					+											0.8											+	
	<i>Elaeagnus</i>					0.4																							
	<i>Lagerstroemia</i>								1.1																				
	<i>Araliaceae</i>					+				0.5																			
	<i>Styrax</i>																											0.4	
<i>Symplocos</i>																+													
<i>Ligustrum</i>												+															0.4		
<i>Lonicera</i>			2																		0.4								
<i>Viburnum</i>					+																0.4								
<i>Weigela</i>						+																							
NPA	<i>Fagopyrum</i>				0.8	0.4							0.7																
	<i>Persicaria</i>			+		+	0.5	0.6	4.5	0.5		0.4	+	0.4	0.7		2.4	0.4		0.4				0.7	1.2				
	<i>Polygonum</i>			1.2		19.2	1.0						+			0.4					+	+							

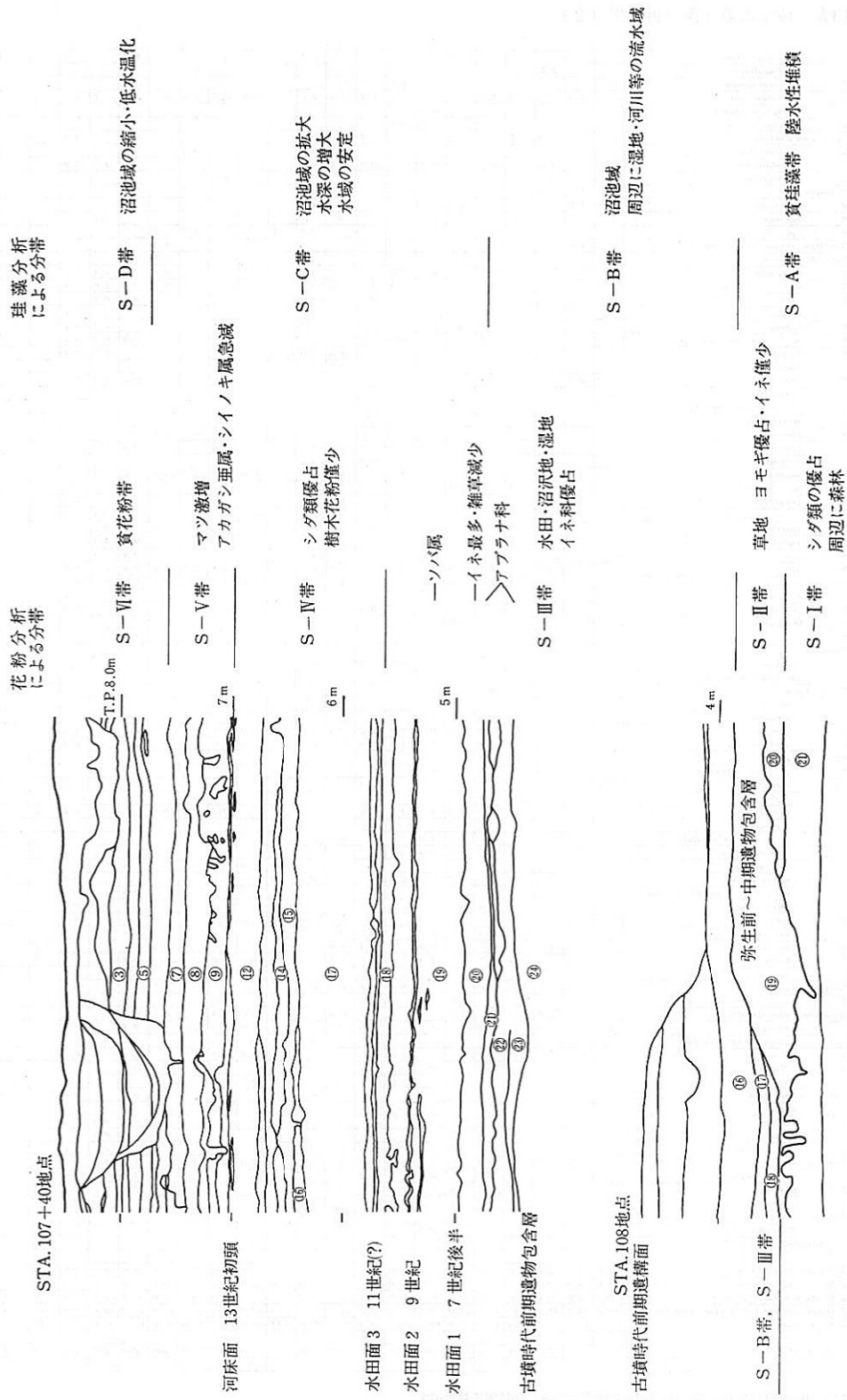
第11表 佐堂遺跡花粉分析結果(樹木)(3)

Pollen and Spores		Sample No.	地点											
		107+40 7	8	9	19	20	21	22	23	24	108 16	17	18	21
AP1	<i>Abies</i>	2.5	0.55	1.6	3.5	5.5	4.5	2.0	6.0	6.0	9.5	5.0	4.0	
	<i>Tsuga</i>	1.5	0.5	4.0	7.0	4.0	3.5	1.5	2.0	2.5	1.5	2.0	3.5	2.0
	<i>Picea</i>	0.5		1.6					0.5					
	<i>Pinus(Haploxyton)</i>					0.5								
	(<i>Diploxyton</i>)	64.0	44.0	49.6	12.5	7.5	5.5	5.0	5.0	3.0	3.0	0.5	4.0	
	(<i>Unknown</i>)	10.5	4.0	8.8	2.5	3.0	1.5	1.0	1.0	2.0	1.0	3.0		1.0
	<i>Sciadopitys</i>				5.0	5.5	9.0	5.0	5.0	14.5	5.5	3.0	3.5	13.0
	<i>Podocarpus</i>							0.5	0.5			0.5		
	<i>Cryptomeria</i>	2.0	3.5	1.6	21.5	18.5	19.5	20.0	38.5	32.5	22.5	15.0	27.5	5.0
	T. C. T.		0.5		1.5		1.5		0.5	0.5		1.5	0.5	
AP2	<i>Myrica</i>				0.5	0.5	0.5	0.5						
	<i>Juglans</i>		1.0	0.8	0.5	0.5				0.5	0.5	0.5	0.5	1.0
	<i>Pterocarya</i>		0.5			0.5		0.5					0.5	
	<i>Salix</i>		0.5	0.8		0.5		0.5		0.5	0.5	0.5	0.5	2.0
	<i>Alnus</i>	4.5	13.5	8.8	2.5		2.0	1.5	1.5	0.5	3.0	1.5		11.0
	<i>Betula</i>	0.5	4.5	0.8	1.0	0.5		1.0	0.5			1.5	1.0	
	<i>CarpinusCorylus</i>	1.0	4.0		3.0	2.0		1.0	2.0	0.5	0.5	0.5	0.5	3.0
	<i>Corylus</i>		1.0		1.0		0.5				0.5	0.5		
	<i>Castanea</i>	1.0	0.5	3.2	0.5		1.5	0.5	0.5	1.0	5.0	6.5	6.0	3.0
	<i>Castanopsis</i>		2.0	0.8	3.5	7.0	24.0	29.5	10.5	18.5	13.5	13.0	8.0	4.0
	<i>Fagus</i>		1.5		1.5	0.5	0.5							0.5
	<i>Lepidobalanus</i>	4.0	7.5	4.0	4.5	9.5	6.0	5.0	4.0	4.5	6.5	6.0	5.5	13.0
	<i>Cyclobalanopsis</i>	5.0	5.5	4.8	24.0	28.0	16.5	18.0	18.5	12.0	21.0	29.5	29.0	20.0
	<i>Celtis-Aphanathe</i>		1.0		1.5	2.0	1.0	1.0			0.5	1.5	1.0	
	<i>Ulmus</i>											0.5		
	<i>Zelkova</i>	1.0	2.0	2.4	1.0	3.0	1.5	2.0	0.5	1.0	1.5	1.0	2.0	9.0
	<i>Moraceae</i>				1.0	1.0			0.5		0.5	1.0		
	<i>Euptelea</i>						0.5							
	<i>Camellia</i>				0.5			0.5						
	<i>Mallotus</i>		0.5											
	<i>Acer</i>	0.5						1.0						1.0
	<i>Aesculus</i>						0.5	2.0	1.5		3.5	3.5	1.5	10.0
	<i>Ilex</i>	1.5	1.0	1.6								0.5		
	<i>Parthenocissus</i>			0.8										
	<i>Vitis</i>			0.8					1.0				0.5	
<i>Elaeagnus</i>			0.8											
<i>Araliaceae</i>			1.6											
<i>Styrax</i>													1.0	
<i>Symplocos</i>							0.5							
<i>Ligustrum</i>													1.0	
<i>Lonicera</i>											0.5			
<i>Viburnum</i>		0.5									0.5			
<i>Weigela</i>			0.8											
Σ AP-1		81.0	53.0	67.0	53.5	44.5	45.0	35.0	59.0	61.0	43.0	31.0	43.0	21.0
Σ AP-2		19.0	47.0	32.8	46.5	55.5	55.0	65.0	41.0	39.0	57.0	69.9	57.0	79.0
Σ AP(N)		200	200	125	200	200	200	200	200	200	200	200	200	100

単位：%

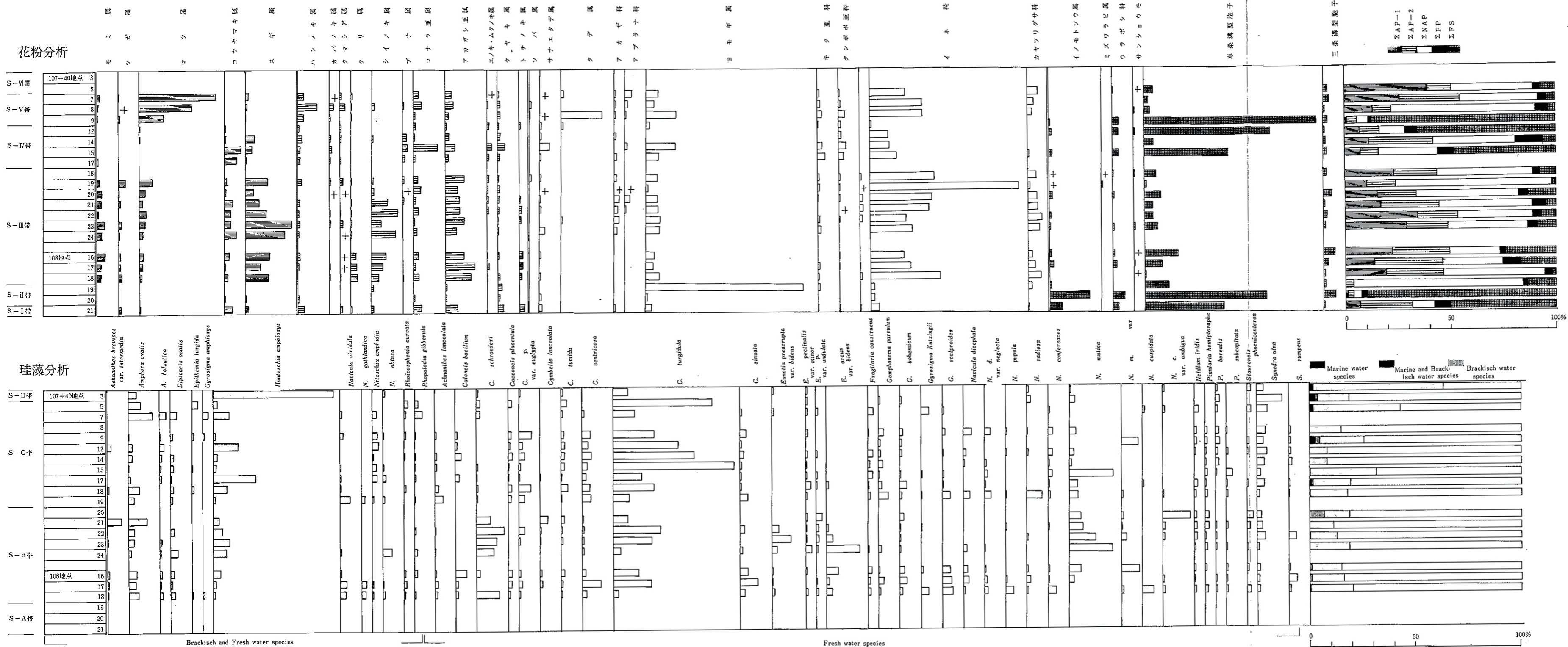
第12表 佐堂遺跡珪藻分析結果(1)

DIATOMS		Sample No.		107+40 地点																						
		3	5	7	8	9	12	14	15	17	18	19	20	21	22	23	24	108	16	17	18	19	20	21		
M	<i>Coscinodiscus</i> sp. 破片	1.0	2.0																							
	<i>Diploneis suborbicularis</i>			1.0																						
	<i>D. interrupta</i>		1.0				3.0																			
	<i>Thalassiosira decipiens</i>			1.0																						
	<i>Actinocyclus curvatulus</i>									0.5																
M	<i>Cyclotella stylorum</i>		1.0							0.5																
B	<i>Achnanthes brevipes</i> var. <i>intermedia</i>							2.0			1.0							0.8	0.7	0.4		1	5			
	<i>Navicula peregrina</i>										0.3			7.0		0.5		0.8	0.7	0.4						
	<i>Nitzschia granulata</i>		1.0									0.4														
	<i>Synedra pulchella</i>																				0.3					
F	<i>Anomoeoneis sphaerophora</i>			2.9						0.5								0.4		0.4						
	<i>Amphora ovalis</i>	4.0	6.0	11.8	1	0.5	2.0	2.0	0.5	1.2	5.5	3.0	1	9.0	3.0	3.0	1.5	4.0	3.3	4.8	1	1	1			
	<i>A. o.</i> var. <i>pediculus</i>					1.0				0.4		1.0														
	<i>A. holsatica</i>		2.0	1	0.5	2.0	1.0	0.5	0.8						+	1.0	0.5	0.8	0.3	1.1						
	<i>Caloneis silicula</i>		2.0	1.0	1.0					1.2	0.5	0.3						1.0		0.7						
	<i>Coscinodiscus lacustris</i>											0.7				0.5	0.5		0.4	0.3						
	<i>Diploneis</i> sp.			2.9	7	1.0			1.5	1.5	0.4	1.5	1.0					0.4								
	<i>D. ovalis</i>			3.0			1.0		0.5		1.0							1.5	3.5	1.6	0.7	2.0	1			
	<i>Epithemia turgida</i>			2.9			1.0															0.4				
	<i>Cyrtosigma amplicoxys</i>			2.9			1.0															0.7				
	<i>Hantzschia amphioxys</i>	57.0	2.0	7.8	4	1.0	12.0	2.0	1.5	20.4	6.5	1.0	1	3.0	4.5	8.0	6.5	3.2	1.0	0.7		8	2			
	<i>Navicula vitridula</i>			1.0			1.5		0.5	0.4	0.5	4.7					0.5	0.4	2.8	2.4						
	<i>N. cryptocephala</i>			4			0.5					0.7									0.7					
	<i>N. gothlandica</i>					1						1.7									2.0	1.8				
	<i>Nitzschia amphibia</i>				2.0		2.5	3.0	0.5	2.0	2.4	0.7									0.3	0.4				
	<i>N. obtusa</i>	1.0					0.5			0.5	1.6	1.0						4.5		0.3	0.7					
	<i>N. tryblionella</i>																	0.5			0.4	0.8				
	<i>N. t.</i> var. <i>victorica</i>						0.5			0.4	1.0	0.3									0.3	1.8				
	<i>N. t.</i> var. <i>debilis</i>						0.5														0.4	0.7				
	<i>N. hungarica</i>											0.3											0.4			
	<i>N. Lorenziana</i> var. <i>subtilis</i>																				0.8					
	<i>N. palea</i>											0.3														
	<i>Bacillaria paradoxa</i>																					0.7				
	<i>Rhoicosphenia curvata</i>	2.0	1.0		1.0		0.5		0.5	0.5	0.8	1.0							0.4	1.0	0.4					
<i>Rhopalodia gibberula</i>	2.0	3.0	1	0.5		0.5	0.5	0.8			0.3			1.0		1.5	1.2			0.4						
<i>R. musculus</i>				0.5	1.0	0.5		1.2			0.7									0.3	0.4					
F	<i>Achnanthes lanceolata</i>					0.5		1.0	1.0		2.0	4.0				0.5		0.5	0.4	1.4	1.1					
	<i>A. l.</i> var. <i>elliptica</i>							0.5			1.0	1.3														
	<i>A. Peragallii</i>																				0.3					
	<i>A. inflata</i>										0.7					1.0	0.5	0.8		0.4						
	<i>A. exigua</i>																			0.4	0.7	0.4				
	<i>A. coarctata</i> var. <i>elliptica</i>																				0.3					
	<i>Caloneis bacilla</i>					1.0	1.0	3.0		2.0			1						5.2	1.0	1.1	2				
	<i>C. Schroederi</i>	1.0	2.0	2.0					1.0	0.4	1.0	0.7		7.0	13.5	10.0	8.5	1.6			10.5	6				
	<i>C. sp.</i>						0.5																			
	<i>Cocconeis placentula</i>		2.0		1.5	1.0	2.5	0.5	0.4	2.0	1.7				0.5		0.5	1.6	1.7	0.7				1		
	<i>C. p.</i> var. <i>rugulata</i>	1.0			6.5	2.0	3.0	1.0	0.8	6.0	3.0				3.0	1.0		0.8	1.7	0.4						
	<i>C. p.</i> var. <i>lineata</i>				1.0		1.0	0.4	2.5								0.5			0.3	0.4					
	<i>Cyclotella Meneghiniana</i>						0.5					0.3							0.5		0.4					
	<i>C. Kulzingiana</i>												0.3													
	<i>C. operculata</i>		1.0																							
	<i>C. sp.</i>		1.0																							
	<i>Cymbella lanceolata</i>									0.4				1	4.0	1.0	0.5		0.8	1.0					1	
	<i>C. cuspidata</i>								0.5			0.3			1.0	0.5	0.5				0.7					
	<i>C. naviculiformis</i>						1.0														1.6	0.7	0.4			
	<i>C. hybrida</i>			1.0		1.0						0.5									0.3	1.8				
	<i>C. sp.</i>														5.0											
	<i>C. tumida</i>	1.0	3.0	1.0	1.5	2.0	2.0	2.0	0.4	3.5	0.7			2.0	1.0	1.0			1.6	0.7	0.4			1		
	<i>C. ventricosa</i>	1.0		4.0	3.0	4.5	2.5	2.0	4.0	4.3				1.0	1.5	1.0	1.0	1.6	8.9	2.1	1					
	<i>C. turgidula</i>	7.0	47.0	10.2	4	19.5	31.0	38.5	57.5	13.6	19.5	7.7		7.0	22.5	18.5	3.5	12.0	17.8	2.1				1		
<i>C. cyndiformis</i>						1.0		0.5			0.7			1.0	1.5					0.3						
<i>C. sinuata</i>		1.0		3.0	1.0	2.0	1.0	0.8	1.0	4.0						2.0		1.5	3.6	8.1	2.1					
<i>C. cistula</i>				1.0				0.5												0.4	0.3					
<i>Diploneis elliptica</i>						0.5																				
<i>D. puella</i>						0.5																				
<i>Epithemia zebra</i> var. <i>saxonica</i>																					0.4					
<i>E. intermedia</i>																					0.4					
<i>Emotia praerupta</i>																1.0		0.5					1			
<i>E. p.</i> var. <i>bidens</i>	1.0			1.0													3.0	9.0	2.5	0.4	0.3	1.1				
<i>E. p.</i> var. <i>inflata</i>								0.5																		
<i>E. pectinalis</i>	1.0			1.0							1.0							0.5								
<i>E. p.</i> var. <i>minor</i>	1.0	1.0	1.0		1.0		1.0	0.5	0.4	2.5	0.7			1.0	0.5	0.5	3.0	0.4		1.1						
<i>E. p.</i> var. <i>undulata</i>				1.0				0.5	0.4	0.5				3.0	1.5	1.5	1.0			0.3						



第128図 花粉・珪藻分析試料採取層位・分析結果による分帯と各帯の特徴

第14表 佐登遺跡主要花粉・珪藻ダイアグラム



第3節 ^{14}C 年代測定結果

京都産業大学 山 田 治

試料名	佐堂遺跡No. 1 ~ No. 4		
試料採取地点	No. 1	B トレンチ長瀬川右岸堤防基礎杭列No. 4 ……	K S U 521
	No. 2	同	No. 5 …… K S U 526
	No. 3	同	No. 6 …… K S U 575
	No. 4	同	横木 …… K S U 577
測定結果	試料No. 1 (K S U 521)	1390 ± 15 Y. B. P.	(炭素量 8.82 g 4500分測定)
	No. 2 (K S U 526)	1500 ± 15 Y. B. P.	(炭素量 8.97 g 4000分測定)
	No. 3 (K S U 575)	1360 ± 20 Y. B. P.	(炭素量 12.32 g 2000分測定)
	No. 4 (K S U 577)	1410 ± 20 Y. B. P.	(炭素量 11.19 g 2000分測定)
	荷重平均	1390 ± 10 Y. B. P.	(ただし No. 2 は 4σ を越えるので除く)

注1 ^{14}C の半減期は5568年を用いている。

Yは Year, B. P. は Before Present の略(ただし Present は A. D. 1950に固定)。ゆえに ^{14}C 年代では A. D. 560であるがこれを下記のように絶対年代に換算する。

年輪年代による補正結果

No. 1 A. D. 600 ± 15

No. 2 A. D. 485 ± 20

No. 3 A. D. 650 ± 20

No. 4 A. D. 570 ± 20

荷重平均 A. D. 600 ± 10

注2 補正は E. K. Ralph らによって与えられた年輪年代に依拠した。

[H. N. Michael, E. K. Ralph, RADIOCARBON 1974]

注3 KSU は京都産業大学の測定によることを示す記号である。測定装置は、低バックグラウンド大容量の Aloka 800 型液体シンチレーションカウンタが使用された。

考察

杭等の年輪はすべて20年以下であったので測定値に与える影響はすべて10年を越えない。No. 2の杭が100年以上差があるのは、標準偏差の4倍を越えるので測定者の目では明らかに他の3点と異なるものと判定される。なお歴史上の記録で上述の結果に近いものとして、A. D. 607に法隆寺の建立と共に河内・山城に池溝を作るという記載があるが、これと直接の関係があるかどうかは今後の研究にまちたい。

第Ⅷ章 課題と展望

佐堂遺跡における今回の発掘調査の成果は発掘当初の目標を十分ではないにしろ達成できたと考える。当初目標にあげた4つの点について検討する。

1. 長瀬川の変遷については、右岸の堤防を検出し、その構造もある程度解明することができた。左岸寄りには護岸杭列も検出され、流路固定のための営為の実態の一端を明らかにすることができた。又、周辺の近畿自動車道関連の最近の発掘調査の成果ともあわせて、長瀬川流域における河川の変遷もある程度解明できたと考えている。しかし右岸堤防の構築法は、第Ⅵ章第4節でも述べたように、ある面から掘り込んで築造したのか、堤防決壊個所の修築であるのかは確認できず、二次調査以後の課題として残された。又、左岸の堤防については、調査区F地区で検出されなかったためその位置をほぼ府道大阪八尾線と推定することができたが、構築法については今後の課題である。又、右岸堤防の基礎杭列の¹⁴C年代と出土遺物による時期との差約700年はあまりにもかけはなれており、その解釈については先に述べた堤の性格（決壊個所か否か）の問題が解決されれば、合理的な解釈が可能となるかもしれない。
2. 新田開発の実態を示す資料としては、近世に、おそらく新田開発に伴って掘削されたと考えられる井戸が検出されたのみで、耕作そのものを裏付けるような証拠は得られなかった。
3. 和同開珎の出土から予想された奈良時代の遺構面は予想に反して水田面であったことが、粘土面に残された足跡や、畦畔、花粉分析の結果から証明された。この水田面は少なくとも7世紀後半から10世紀後半までは継続していたものであり、その範囲は佐堂遺跡の南に接する久宝寺遺跡の北端にまで広がっていることが確認された。
4. 奈良時代の層の下層からは、調査者がまったく予想していなかった古墳時代前期の集落跡が検出された。竪穴式住居址を含む遺構群は河内平野低地部におけるこの時期の集落の実態を示すものとして貴重な資料であり、出土した土器は、河内における須恵器出現以前の布留式土器の一つの様相を示すものとして重要な資料である。

さらに下層からは、F地区南端で弥生時代中期の方形周溝墓状遺構を含む遺構が検出されたことは、今後の調査で墓域であることが裏付けられれば久宝寺遺跡で検出されている同時期の遺構や佐堂遺跡A地区で検出された水田面と対比して、弥生時代中期における集落、墓、生産基盤（水田）の広がり方を示す資料として興味深いものである。C地区については古墳時代前期遺構面を保護するため弥生時代中期面までは掘削していない。A地区の水田面とF地区の墓域とのつながりは二次調査の一つの課題となろう。

今回の調査を概観すれば、以上のような成果と課題を残したと言える。さて、ここで再び、佐堂遺跡の変遷時代を追って述べ、今後の調査、研究の課題と展望に対する私見を述べてまとめにかえたいと思う。

弥生時代 弥生時代前期（第Ⅰ様式中段階か）の土器が佐堂遺跡の南約100mの地点で、縄文時代晩期の土器と共伴して出土している。そしてその縄文式土器に靱圧痕が残っていたことは、弥生文化の伝播と河内における定着の実態を示す資料として重要である。佐堂遺跡においても縄文式土器こそ出土してはいないが、前期の土器が包含層より出土している。

いずれにせよ、佐堂遺跡周辺が縄文文化と弥生文化の接触の一つの舞台となっていたわけであり、東大阪市鬼塚遺跡や大阪市長原遺跡の例などとあわせ、今後検討されるべき重要な課題であろう。

中期の大集落が瓜生堂遺跡や山賀遺跡、亀井遺跡などで検出されているが、佐堂遺跡南端で検出した方形周溝墓状遺構を含む遺構はおそらく久宝寺遺跡の同時期の遺構と一連のものと考えられる。が、この遺構が墓域であるかどうか確認することが今後の調査の一つの課題である。久宝寺遺跡における弥生時代中期の集落实態は未だ明らかではないが、その居住区の位置と範囲が確認されれば、佐堂遺跡F地区の墓域、A地区の水田＝生産の場との関連もある程度解明できるであろう。

中期末に河内平野が一気に水没するような洪水があったかどうかは、安田喜憲氏の指摘以来注目されてきた。佐堂遺跡C'地区で検出した自然流路もこの時期であり、それ以前の安定的な水平堆積を切って流れている。瓜生堂、巨摩廃寺遺跡の花粉分析から、この時期に汀線が500m前進し、かつての墓域が水没することが明らかにされている。植生に変化をきたすような環境の変化は、ある程度の期間、水没した状態が続いていたことを示している。瓜生堂遺跡でみられた変化に対応するような変化が、他の遺跡でみられるのかどうか、中期末と時期を限ることができる洪水の証拠＝粗砂、微砂の堆積、それまで存続していた集落の廃絶などを示す資料を総合し、河内全体の様相から判断する必要があると思われる。もし、この時期に大洪水があったことが検証されれば、後期以後、古墳時代への展開も含めて、河内平野における生産力の発展と政治勢力の成長の問題、いいかえれば古墳出現の問題に大きくかかわっているものと思われる。

古墳時代 佐堂遺跡の古墳時代前期の集落は、河内で前方後円墳が築かれはじめる頃になって出現する集落である。この時期の集落については第Ⅱ章で概観し、生駒西麓で一連の首長系列がとらえ得る西ノ山、花岡山、心合寺山、群川西塚、東塚などの前方後円墳と塚ノ本古墳や美園古墳などの低地部の古墳との関係、またそれぞれに対する集落との関連については今後の研究課題である。

古代 佐堂遺跡B～F地区が水田となっていた7世紀～10世紀後半までの遺跡は、生駒西麓や国府、羽曳野の段丘上では数多く分布しているが、低地部においては、限られているようである。一つは若江寺が建立され、後に若江城となる東大阪市若江付近と、他の一つは物部守屋の阿刀別業の地、後に龍華寺、渋川廃寺が建立される八尾市植松、太子堂付近の地域である。わずかに低地部においては、今までのところこの二地域の他には古代寺院は発見されておらず、両地がともに若江郡、渋川郡の郡衙のおかれた場所と推定されることから河内低地部の中心であるこ

とには間違いはない。式内社の分布をみると、低地部でも自然堤防や、微高地上に比較的散在して分布しているから、この分布をほぼ、10世紀頃の集落の分布とみてよいのであろうが考古学的な検証はほとんどされていない。

中世 文献史学の研究から大開発の時代と考えられているが、長瀬川が現在の流路に固定されるのもこの時期であり、開発の実態の一端が考古学的に検証された。この時期には生産力の発展に伴ない集落も増加したものと推定される。佐堂遺跡（その1）A地区で検出された集落は、この一環として考えられよう。河内平野低地部における中世集落については、佐堂遺跡（その1）A地区の概要報告書で論ぜられる予定である。